

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第67集

北^{きた}道^{どう}手^て遺跡

1996

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



朱をといた鉢(112)



線刻絵画土器(395)

序

濃尾平野は全国でも有数な穀倉地帯であります。こうした安定した生産基盤を背景に、この地では縄文時代以降現代に至るまでそれぞれの時代ごとに文化の花を開かせてきたことでしょう。私たちは今こうした歴史の大きな流れのなかで、その恵みを感じながら生活しています。

このたび愛知県一宮市と富山県小矢部市とを結ぶ東海北陸自動車道の建設事業が、濃尾平野部を縦貫することになりまして、わたしども(財)愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会より委託を受けまして平成2年度より一宮市内におきまして発掘調査を実施してきました。調査成果はそれぞれの発掘調査遺跡ごとに現地説明会を行ってきましたが、ここに平成5年・6年度に実施しました北道手遺跡の報告書を刊行いたしました。今後とも広く皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成8年8月

(財)愛知県埋蔵文化財センター

理事長 安 部 功

例言

- 1 北道手遺跡は、愛知県一宮市大字光明寺字北道手地内に所在する古墳時代前期を中心とする弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である。
- 2 本報告書は、平成5年4月～10月、平成6年12月にかけて実施した東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査の記録である。調査総面積は5,887㎡に及んだ。
- 3 調査は東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として、日本道路公団・愛知県土木部より愛知県教育員会を通じて委託を受け、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 北道手遺跡は、平成4年に開始された田所遺跡の最も北に位置する地点として調査を開始した。平成5年度の年報では田所遺跡A～D区として報告してきたが、調査の結果、田所遺跡とは時代の異なる調査成果を得られた。その結果、田所遺跡から切り放して北道手遺跡として報告する。
- 5 調査を進めるにあたっては、本センターの理事および各専門員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、一宮市教育委員会、日本道路公団名古屋建設局、日本道路公団一宮事務所、愛知県土木部一宮事務所ほか関係諸機関のご協力を得た。
- 6 本報告書をまとめるに下記のあたり多くの方々から御助言・御指導を戴いた。記して感謝する次第です。
赤羽一郎・遠藤才文・大熊茂弘・尾野善裕・金子健一・久保禎子・柴垣勇夫・城ヶ谷和広・鈴木元高田康成・土本典生・中野晴久・藤沢良介・北条献示・渡辺博人（順不同・敬称略）
- 7 報告書作成の過程で以下の方々の協力を得た。
八木佳素実・安藤豊子・中馬妙子・小桧山洋子・深川進（写真撮影）
- 8 本書の執筆は第4章第1節を鬼頭剛 第2節を服部俊之 第3節をバリノ・サーヴェイ株式会社が
が行い、その他は高橋信明が担当し、編集も高橋が担当した。
- 9 調査担当者は以下の通りである。
93年度の調査：太田芳巳（主査）西原正佳・鬼頭剛・高橋信明（調査研究員）
94年度の調査：小澤一弘・増沢徹（調査研究員）・高橋信明（主査）
- 10 発掘調査に係わる記録類・出土遺物は財団法人愛知県埋蔵文化財センターにて保管している。

目 次

第1章 はじめに

第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の概要	2
第3節	周辺の環境 (1)地理環境 (2)歴史環境	2

第2章 遺 構

第1節	基本層序	6
第2節	検出遺構	7～27

第3章 遺 物

第1節	土 器	28～65
第2節	その他	66～71

第4章 科学分析

第1節	地 形 (鬼頭)	72～74
第2節	地震痕 (服部)	75～79
第3節	胎土分析 (パリノ・サーベ)	80～86

第5章 考 察

第1節	北道手遺跡の位置づけ	87～91
第2節	着飾った土器	92～99
第3節	まとめ	100～103

挿 図 目 次

図 1 調査区位置図……………	3	図32 II期土器実測図A区 S D34・37・38・	44・64・65…46
図 2 周辺の遺跡分布……………	5	図33 II期土器実測図A区 S K59・68・99…47	
図 3 基本土層図……………	6	図34 II期土器実測図B区 S D91・103・	104 ……48
図 4 遺構全体図(1)……………	7	図35 II期土器実測図B区 S K103・104・121・	126・149 ……49
図 5 遺構全体図(2)……………	8	図36 II期土器実測図B区 S K174・186・	201・202…50
図 6 遺構全体図(3)……………	9	図37 II期土器実測図C区 S D10……………	51
図 7 遺構全体図(4)……………	10	図38 II期土器実測図C区 S D10	D区 S D10……………52
図 8 遺構全体図(5)……………	11	図39 II期土器実測図C区 S D67・S K68・174	D区 S D03・09・15・16・
図 9 遺構図A区 S K22・23……………	13		18・20・21…53
図10 遺構図A区 S D19・S K16・18……………	15	図40 II期土器実測図C区 S D87……………	54
図11 遺構図A区 S K19……………	17	図41 II期土器実測図D区 S K01・02・	S D25・43…55
図12 遺構図A区 S K24・28……………	18	図42 II期土器実測図D区 S K16・21・22・	25……………56
図13 遺構図D区 S K01……………	22	図43 II期土器実測図D区 S K26・28……………	57
図14 遺構図D区 S K22・26・29……………	23	図44 II期土器実測図D区 S K29・38・39・	40・41…58
図15 遺構図D区 S K28……………	24	図45 II期土器実測図包含層出土……………	59
図16 畝状遺構図……………	25	図46 III期土器実測図……………	61
図17 III期遺構・遺物分布図……………	26	図47 III期土器実測図……………	63
図18 IV期遺構・遺物分布図……………	27	図48 墨書土器実測図……………	65
図19 I期土器実測図……………	28	図49 石製品実測図(1)……………	66
図20 北陸系土器……………	33	図50 石製品実測図(2)……………	67
図21 高坏A 1分類図……………	34	図51 石製品実測図(3)……………	68
図22 II期土器実測図A区 S D05……………	36	図52 石製品・土製品・木製品分布図……………	69
図23 II期土器実測図A区 S D19・25・27・	36・S K14…37	図53 土製品実測図……………	70
図24 II期土器実測図A区 S K16・18……………	38	図54 木製品実測図……………	71
図25 II期土器実測図A区 S K19……………	39		
図26 II期土器実測図A区 S K24……………	40		
図27 II期土器実測図A区 S K27……………	41		
図28 II期土器実測図A区 S K28・33・34・	48・49…42		
図29 II期土器実測図A区 S K55……………	43		
図30 II期土器実測図A区 S K56……………	44		
図31 II期土器実測図A区 S K58……………	45		

図55	北道手遺跡の位置と周辺の地形	73
図56	旧河川堆積物にみられる異常堆積構造	74
図57	砂脈の産状	74
図58	地震痕観察地点図	75
図59	93B区断層の産状	77
図60	北道手遺跡93B区断面スケッチ	77
図61	断層運動と砂脈の変位	77
図62	中世土坑中の地層の液動化	78
図63	93D区断層の産状	78
図64	北道手遺跡93D区南壁断層スケッチ	79

図65	試料の胎土重鉍物組成	83
図66	古墳時代前期の遺跡分布	87
図67	土坑相関図	88
図68	北道手遺跡概念図	90
図69	S字形口縁台付甕の分布	93
図70	高坏形土器の分布	94
図71	器台形土器の分布	95
図72	鉢形土器の分布	96
図73	壺形土器の分布	97
図74	線刻絵画土器	103

写真図版目次

図版1	A (93A a) 区	118
図版2	A (93A b) 区	120
図版3	B (93B) 区	122
図版4	C (93C) 区	124
図版5	D (93D a) 区	126
図版6	D (93D b) 区	128
図版7	E (94C) 区	130
図版8	出土土器(1)	132
図版9	出土土器(2)	133

図版10	出土土器(3)	134
図版11	出土土器(4)	135
図版12	出土土器(5)	136
図版13	出土土器(6)	137
図版14	出土土器(7)	138
図版15	出土土器(8)	139
図版16	出土遺物(9)	140
図版17	出土遺物(10)	141
図版18	胎土中の重鉍物	142

別表

出土遺物一覧表	108
遺構一覧表	113

表目次

第1表	調査工程表	1
第2表	主な遺構時期	12
第3表	墨書土器积文一覧	64
第4表	胎土重鉍物分析結果	82
第5表	土坑土器カウントグラフ	89
第6表	遺物カウント土坑一覧	89
第7表	土坑出土土器カウント一覧	91
第8表	S字甕・加飾土器出土土器	99

第 1 章 はじめに

第 1 節 調査の経過

北道手遺跡 愛知県一宮市と富山県小矢部市を結ぶ東海北陸自動車道の建設が日本道路公団により計画され建設工事が愛知県側に及んだ時、尾張平野に分布する遺跡が路線上に存在する事が平成 3 ～ 4 年度にかけて実施した遺跡分布調査によって明らかにされた。木曽川以南から東名高速道路までの 8.5km 間に縄文時代～戦国時代の 11 遺跡が確認された。

北道手遺跡は、分布調査の結果東海北陸自動車道関連の遺跡の中で最も北に位置し、北に流れる木曽川から 1 km しかはなれていない。発掘調査の当初は、南に位置する田所遺跡の一部と考えていたが、検出遺構・遺物からして田所遺跡とは個別な遺跡であることが明らかになった。つまり古墳時代前期の時代を中心に営まれた遺跡である。

発掘調査は平成 4 年 4 月から 10 月末までの 10 ヶ月間に 5,387㎡と平成 5 年 12 月に 500㎡の合計 5887㎡に及んだ。調査は、93 年に A 区～D 区の 4 調査区の調査工程で行い、94 年に E 区を調査した。下記に調査工程進捗とそれぞれの年度の担当者を表化した。

工程 ／月	1993 4	5	6	7	8	9	10	11	12	1994 11	12
事前準備	*** A-D									** E	
表土掘削	*** Da	*** Aa	*** Db	*** Ab		*** BC					** E
発掘調査	*** Da	***** Aa	***** Db	***** Ab	*****	***** BC	*****				**** E
埋め戻し		** Da	** Aa	** Db		** Ab		** BC			** E

第 1 表 調査工程表

【A～D区】

担当調査員：太田芳巳
高橋信明
西原正佳
鬼頭剛

【E区】

担当調査員：高橋信明
小澤一弘
増沢徹

第2節 調査の概要

試掘結果 平成4年度に実施した試掘調査の結果、県道木曽川停車場線以北の地点で古墳時代初頭と思われる遺構・遺物を確認し一部に弥生中期に遡ると考えられる遺物も確認した。この試掘結果をもとにして、これまで知られていない新たな遺跡として平成5年4月より田所遺跡の名称で調査を開始した。しかし、一部に未収去部分があったためとりあえずこの未収去は平成6年度に先送ることとし、2カ年にまたがって調査にはいった。

発掘調査は現地表である水田の耕作土（面）を取り除くと黒色したやや細粒砂を含む土が一面に広がっており古墳時代初頭の土師器を包蔵する包含層が確認できた。黒色を呈する包含層は93A～D区で全面に94E区では一部に広がっていることが判明した。しかしA区の西側からB区の東側にかけては極めて薄く耕作土を剥ぐと直ちに基盤層である中粒砂からなる砂層が表出してしまう。更に、D区の東南部やC区の南半は同様な砂層でも鉄分を多く含む基盤層であった。包含層は20～30cmほど堆積しており南西方向に向かって緩く傾斜していた。このことは、遺跡の西端部に近い事をしめしている。

調査はこの黒色土の上面・下面での遺構検出に努めたが、上面遺構として一部で畝状遺構を確認できたにすぎず、むしろ下面で砂層を掘り込んだ遺構が圧倒した。上・下面遺構を確認できたのは、調査区の中央部に限定された。94E区は他の調査区に比べて一段高く住居跡を期待したが、中世期に改変されており古墳時代の遺構はことごとく削られていた。

第3節 周辺の環境

(1) 地理環境

扇状地形 北道手遺跡の所在する標高は、現地表で10mを示しており、遺跡検出遺構面では9.5mを計る。この標高は木曽川水系の河川が作り上げた扇状地形の扇端部分にあったている。そもそも、尾張平野部の地形は大きく3つの地形環境が認められる。1つは東部に展開する台地地形とこの台地の北側をかくめるようにして木曽川が美濃山系から解き放たれたように一気に東南部地域に多量の土砂を運び込んで、犬山市扇頂とし標高9～10mを扇端部とする犬山扇状地を形成している。そして、その南には肥沃で豊穡な沖積平野を形成している。

遺跡の位置 北道手遺跡はまさに扇状地形から沖積平野部に移行しようとする地形環境に位置している。今回調査した範囲は現況地形からも東に高く現光明寺集落が営まれており、この集落の西即ち一段低位な位置関係を示している。こうした周辺地形からして北道手遺跡の集落中心は、現光明寺の集落がまさに古墳時代前期でも集落の中心地であったと考えられる。北道手遺跡をとりまく地理環境は、古墳時代から何ら改変されていなのである。木曽川の南わずか1kmほどしかはなれていなくもかかわらずその影響は中近世に限定されるようである。

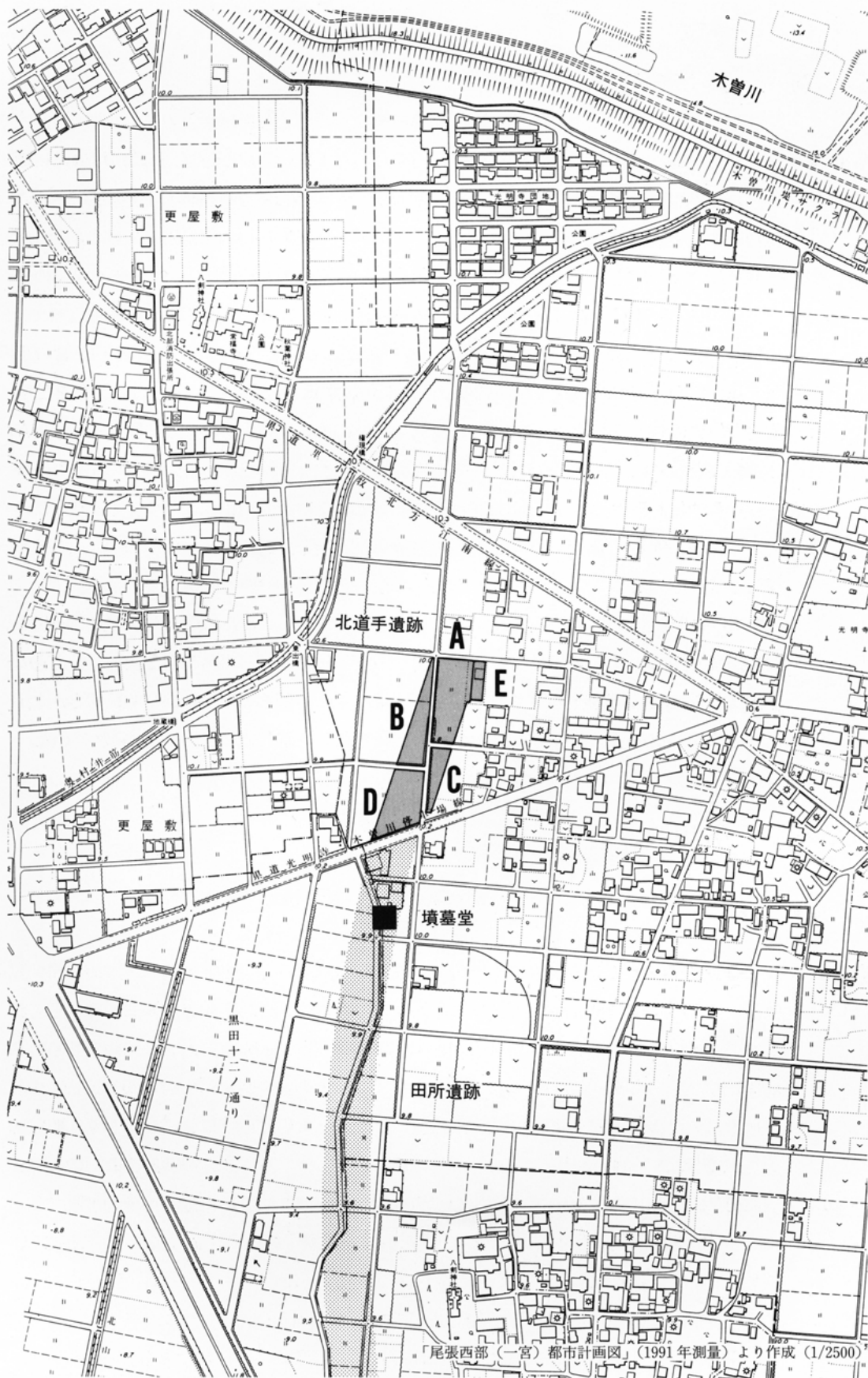


図1 調査区位置図

(2) 歴史環境

尾張北部は、南部に比べて海からの影響は少なく、むしろ河川によるその運搬作用あるいはその開析作用による影響を多く受けたものと考えられる。今日言う木曽川は信濃の鉢森山系を水源として、南アルプス沿いを悠々と流れ木曽谷となり幾多の小河川の水量を集め美濃の東濃高原を西へと山塊を運んでくる。そして、愛知県の犬山市から解き放たれた矢のように一気に尾張平野部に流れ込んでくる。平野部の人間にとって、恵みの河川であり、ある時は恐怖の河川と成り得た存在であった。こうした、生活環境から尾張北部では縄文時代の遺跡は、東部の台地上では確認されてはいるものの、いわゆる沖積平野部では古い段階の遺跡は知られていない。これらは、木曽川水系の動態を抜きにしては語れないことを意味している。

縄文時代 縄文時代の遺跡として今日確認できる遺跡は大変少ない。なかでも織田井戸遺跡（小牧市）が知られている。押形文土器が出土していることから前期に属する数少ない遺跡の一つである。しかし、遺跡の継続性と拡張性は認められない。そのに続く時期の遺跡は遺物としては散在するものもいたって少ない。中期の遺跡は平野部への進出が認められ、中でも佐野遺跡（一宮市）が知られている。こうした、南部への進出は低地部の地形的な安定が考えられる。佐野遺跡からは、土器に混じって打製石斧が多く出土しており、これらの一部は土掘り具として使用されたものと考えられる。打製石斧の出土は続く後・晩期の遺である、馬見塚遺跡（一宮市）においても同様な傾向を示している。馬見塚遺跡自体は複合であり、晩期の甕棺から弥生時代前期の土器も少量ではあるが認められ、その後の若干の空白期はあるものの古墳時代の祭祀遺跡としても著名である。

**北部の
歴史時代** 尾張北部地域（東部の扇状地を除く）で人間の営みが本格するのは古墳時代以降となる。そのさきがけとなるのが北道手遺跡となる。古墳時代前期の極く短期間痕跡を留める遺跡として、下渡遺跡（一宮市）・藤掛遺跡（笠松町）・弥兵衛島遺跡（川島町）が知られている。藤掛遺跡などは、現在の木曽川の川底にあることから、古代段階の木曽川流路問題や河川による影響下にあったことが考えられる。同時に、この河川は肥沃なる沖積をもたらしたのである。それが、今伊勢古墳群の形成であり、埋葬に家形石棺を用いる特色のある浅井古墳群が広範囲に形成されてくる。更に、最近の調査例から一宮市大毛地区・木曽川町門間地区にかけて、古墳時代前期段階の水田跡が広い範囲で確認されており、以後古代～中世にかけて連綿と継続しているようである。しかし、これらの遺跡において例外なく旧流路や人工の溝が認められる。こうした、居住空間としての土地利用は近世までのことであり、以後水田開発の浪の中に埋没し、水田下にその姿を保存することになる。

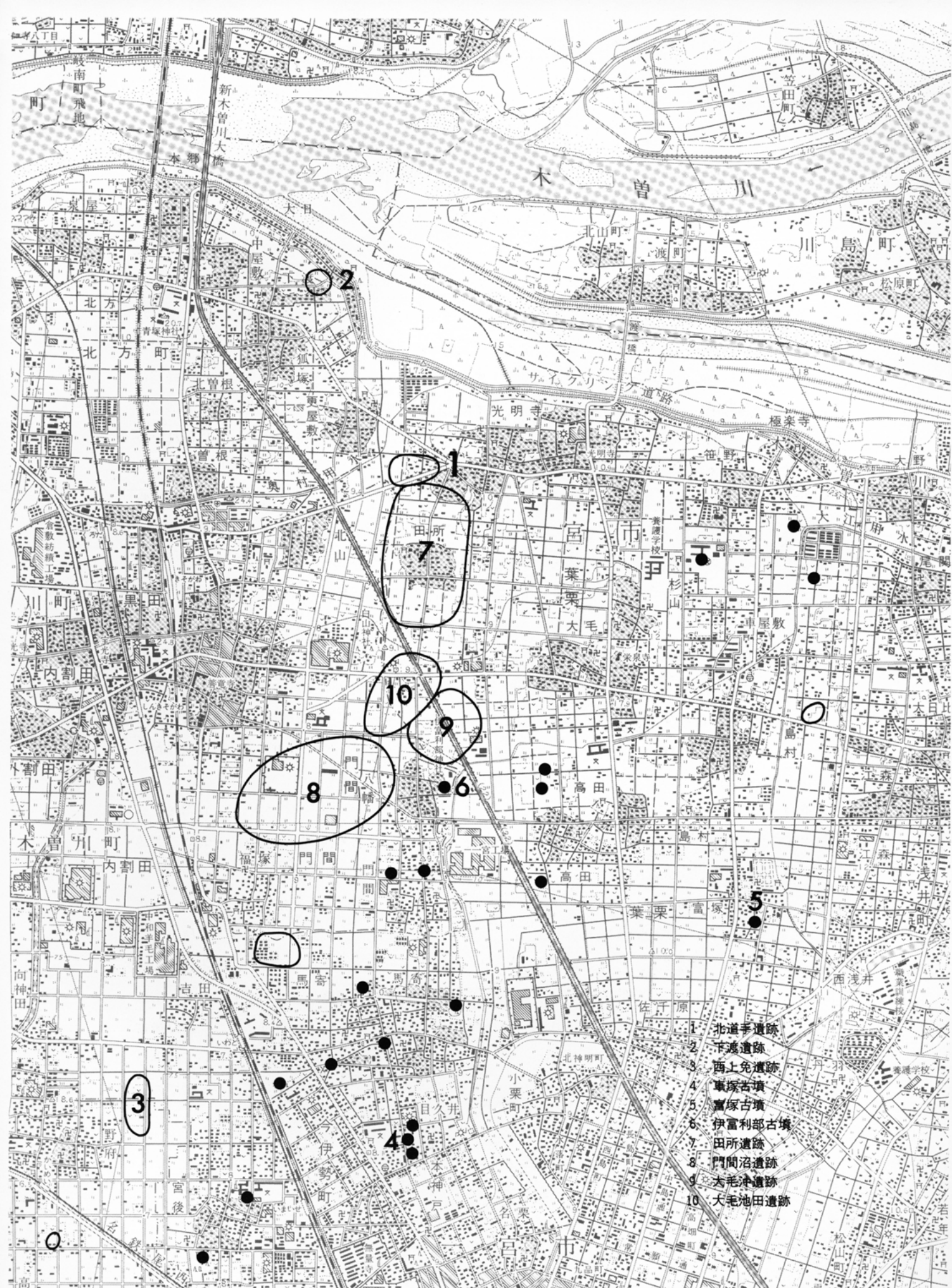


図2 周辺の遺跡分布

国土地理院発行「2万5千分の1地形図」より作成

第2章 遺構

第1節 基本層序

北道手遺跡は、すでに触れたように犬山市を扇頂とする半径12kmの扇端部から低地部の沖積平野に移行する、地形的な変換地域に分布する遺跡である。扇端部の標高は10mを測る。現水田面の標高は10m前後で古墳時代の遺構面は約9.5mとなる。この標高は、調査区の北東部最も高く西もしくは西南部に緩やかに傾斜する。

北道手遺跡での基盤層は木曽川がその運搬・浸食作業によってもたらした洪水性の堆積層である。河川の安定期が弥生中期以降訪れ高燥化する過程でこの地に人の手が入ったものと考えられる。中粒砂からなる基盤層は調査区全般に広がっているが、93A区から東の94E区などは遺跡の形成時はすでに安定化した地域であったため、中粒砂からなる砂層は見られず、黄褐シルト層をベース面としている。その砂層の堆積以降に若干砂の混じる黒色を呈する腐植土層が平均的に20～30cm程堆積する。こうした堆積土の変化は人の手による開発の活発化した現れであり、古墳時代の遺構はこの堆積過程で展開されている。下位面遺構は砂層を深く掘削しており、遺構によってはさらに下層の荒い砂まで達している。上面遺構はこうした遺構が完全に埋没したのちに残されたものである。この変化は容易に識別でき、やや灰色化した黒色土で高燥化した結果であろう。古代から中世以降の遺構が展開する地点では、灰色化した褐色土が地点により粘質土であったりシルトであったりする。しかし、中世前半期には遺跡の北部から西部にかけて洪水性の堆積（NR）が北東から南西方向に認められる。

(1)

証

(1) 本調査区内（北西部）で確認したNRは、現黒田川に比定でき、流路の不安定期の洪水性の痕跡と考えられる。

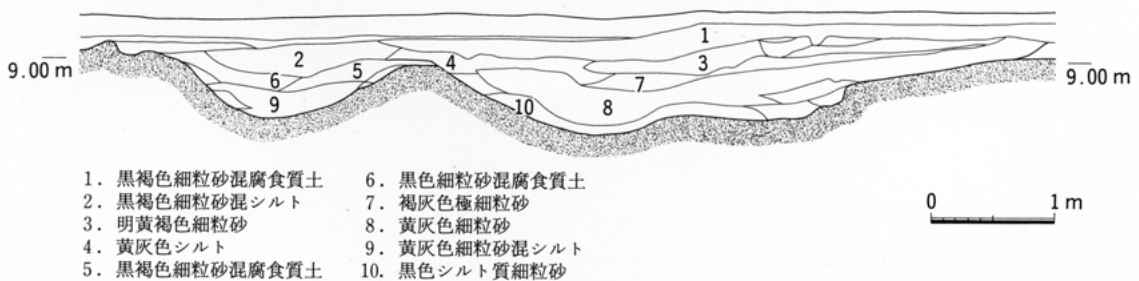


図3 基本土層図

X = -71.945

Y = -33.550

Y = -33.545

X = -71.950

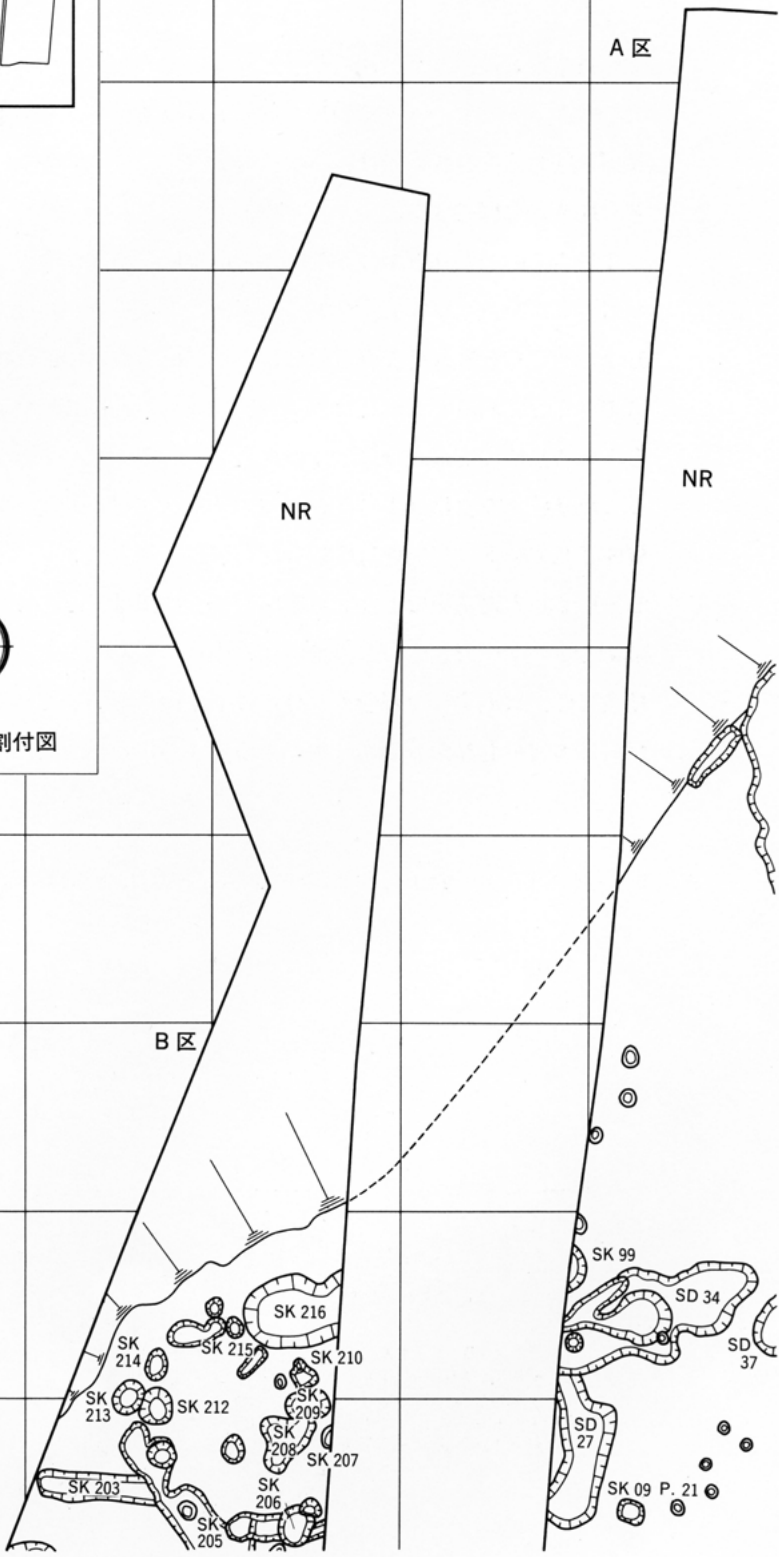
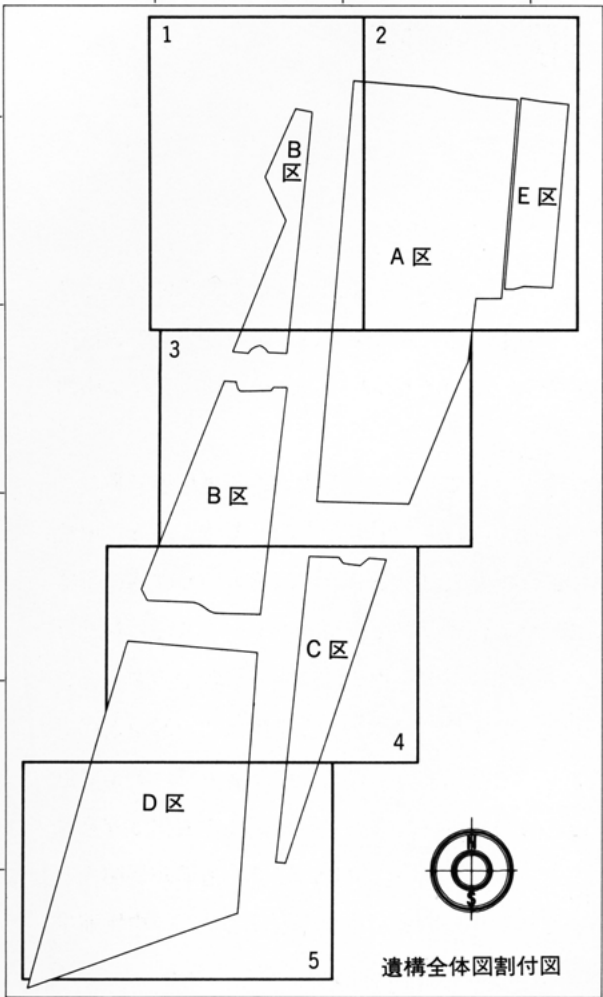


図 4 遺構全体図(1)

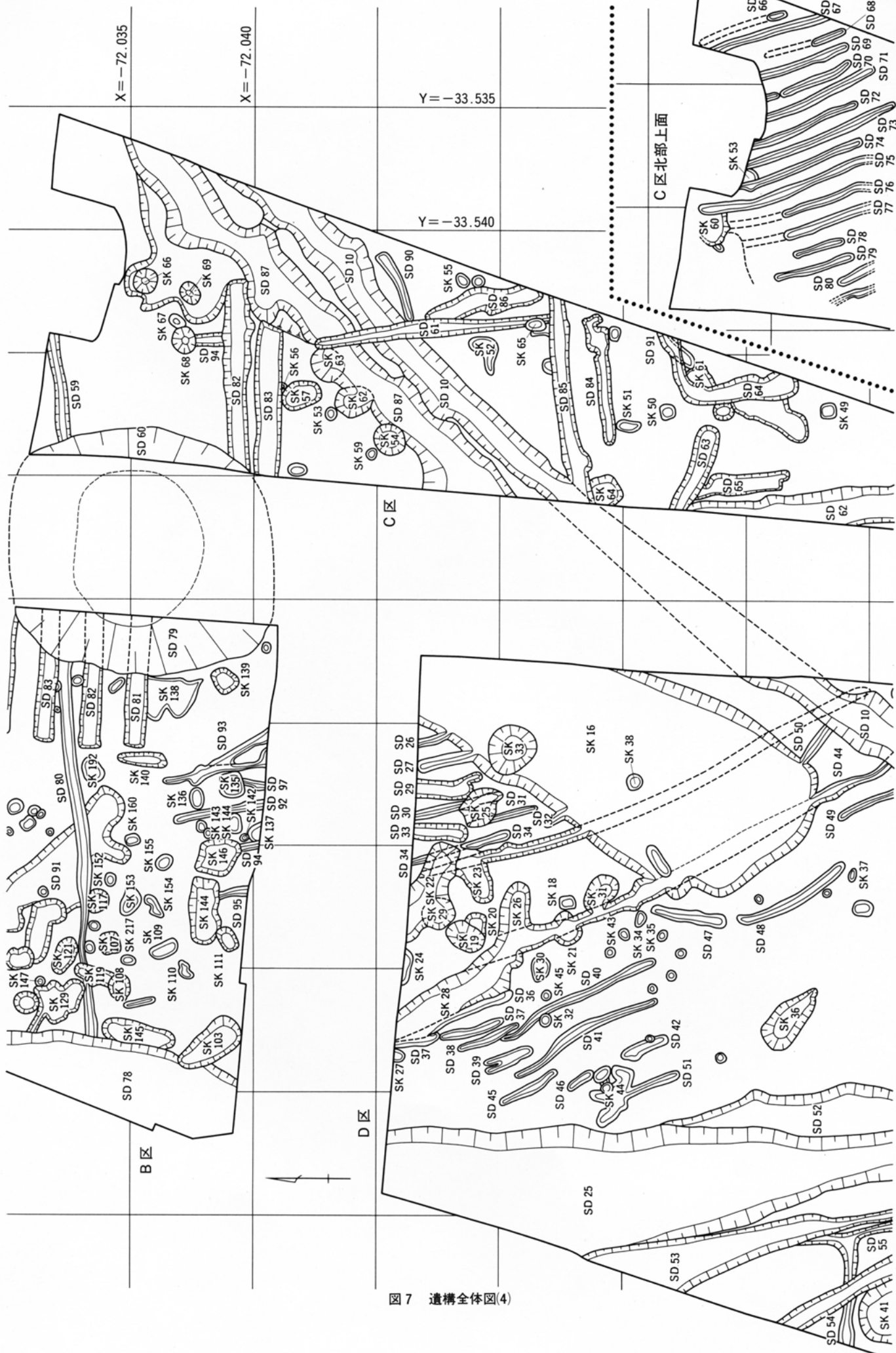


图7 遺構全体図(4)

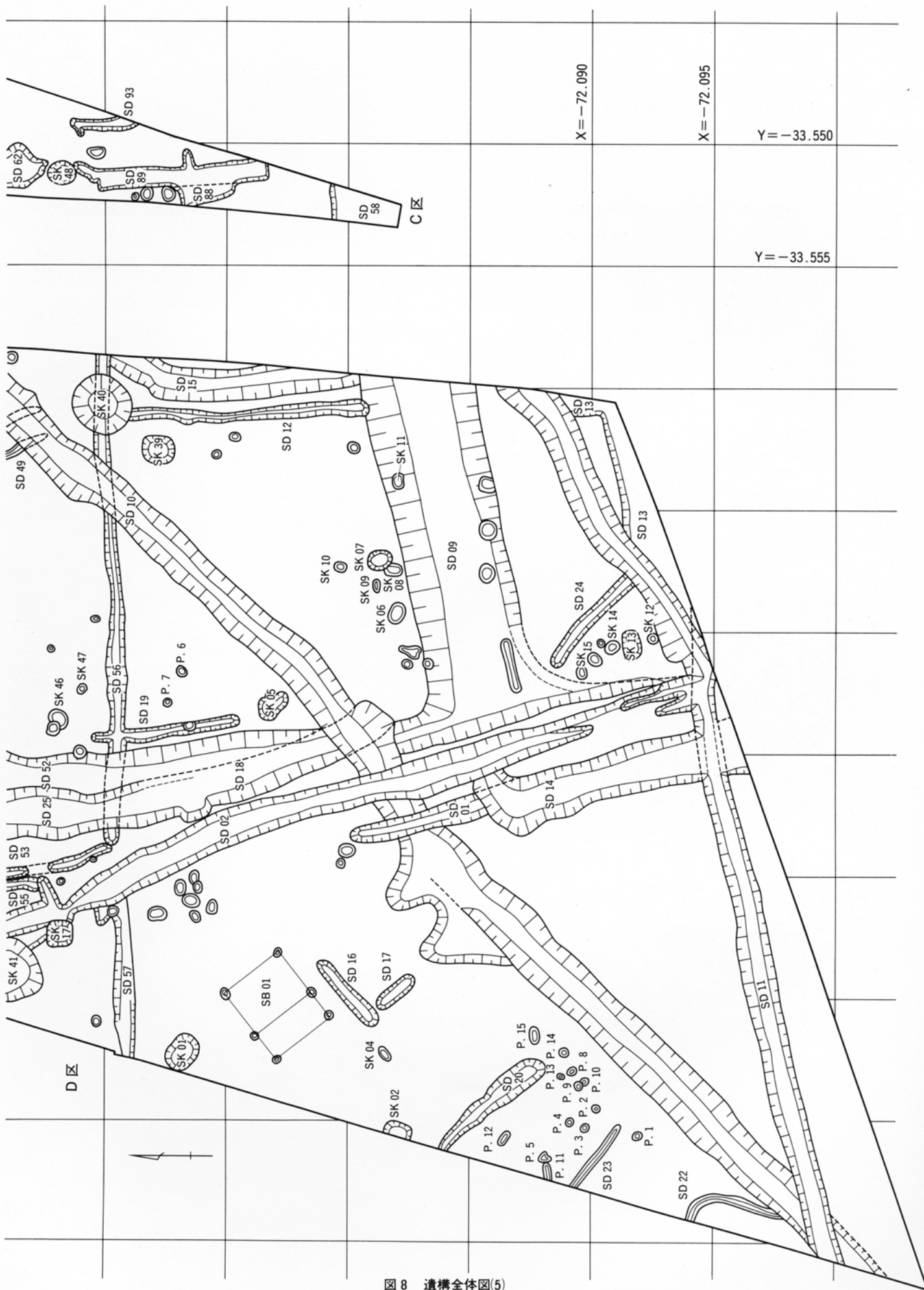


図 8 遺構全体図(5)

第2節 検出遺構

検出遺構 北道手遺跡では、ある程度時期幅のある遺構・遺物を検出している。しかし、その大半は古墳時代前期の極く短い期間に集中することが明らかになった。最も特色ある遺構は、平面プランが一般的な円形に混じり方形状の土坑が数基認められた。しかもそれらの土坑が単独に存在するのではなく集中する傾向にある。検出したこうした土坑（SKの略記号を使用）のほかに溝（SDとする）や掘立柱建物である。これらの時間的把握のために便宜上、ここではⅠ期～Ⅴ期の5段階に時期区分をして、検出遺構の説明を加える。

時期区分 Ⅰ期は北道手遺跡の開始時期となる弥生時代中期、Ⅱ期は遺跡の中心時期と考えられる古墳時代初頭の時期で上・下面遺構が確認できた。上面をⅡ－b期・下面をⅡ－a期とする。Ⅲ期は調査範囲の南半に集中する奈良時代から平安時代前半の時期、Ⅳ期は調査区の北東部で特徴的な出土状況を示した鎌倉時代に区分できる。Ⅴ期はそれ以降とする。

報告する際、便宜上93A区とD区をそれぞれ分割し、各南半をAa・Da区とし北半をAb区・Db区とした。

時 期	主 な 遺 構
Ⅰ 期	93A : SK22・23
Ⅱ－a 期	93A : SD05・19・25・27・36 SK16・18・19・24・27・28・33・34 48・49・55・56・58・ 93A : SD34・37・38・44・64 SK59・65・ 93B : SD80・91・102・103 SK103・104・121・126・149・174 186・201・202 93C : SD10・67・87 SK68・174 93D : SD03・09・10・15・16・20・21 SK01・02 93D : SD10・25・43 SK16・21・22・25・26・28・29・38 39・40・41
Ⅱ－b 期	93A : SD01～02・07～09・11～18・21・26 93B : SD92～97 93C : SD66～80 93D : SD26～34・36～42・44
Ⅲ 期	93C : SD85・89 SK64 93D : SD11 93D : SD25 SK28
Ⅳ 期	94E区
Ⅴ 期	遺構は認められない

第2表 主な遺構時期

I 期

I 期の明確な遺構としては、93A 区で検出した 2 基の土坑に留まる。出土遺物から弥生中期に属すると考えられる。

SK 22 (図 9) 93A 区南西部

土坑の平面プランは、東西にやや不定形な円形を呈する。東西の長辺 224cm、南北の短辺 181cm、深さ 70cm を測る。西にテラス状の張り出しをもつ。堆積は 4 層となるが、極細粒砂の混じる腐植土で黒色土が中心となる。遺物はテラス寄りの下位から弥生中期の細頸形壺片・条痕の深鉢形土器 2 個体が出土している。この土坑の埋没後 II 期の溝である SD 21 が南北を貫いている。

SK 23 (図 9) 93A 区南西部

SK 22 の南西 4 m の所にある。この平面プランは 229cm × 214cm の方形を呈する。SK 23 は平成 4 年度の試掘の際検出した遺構である。そのとき、SK 22 同様に弥生中期の土器片を確認している。近接する同期の遺構でありながら、50cm と浅く断面形は箱形となる。

I 期全般

I 期の遺構は、土坑 2 基を確認したにすぎない。本遺跡の開始時期を示すが、単発的かつ散在的分布である。しかし、遺物は A 区全般で出土しており、この時期の中心地は東部のより高位に広がるのであろう。

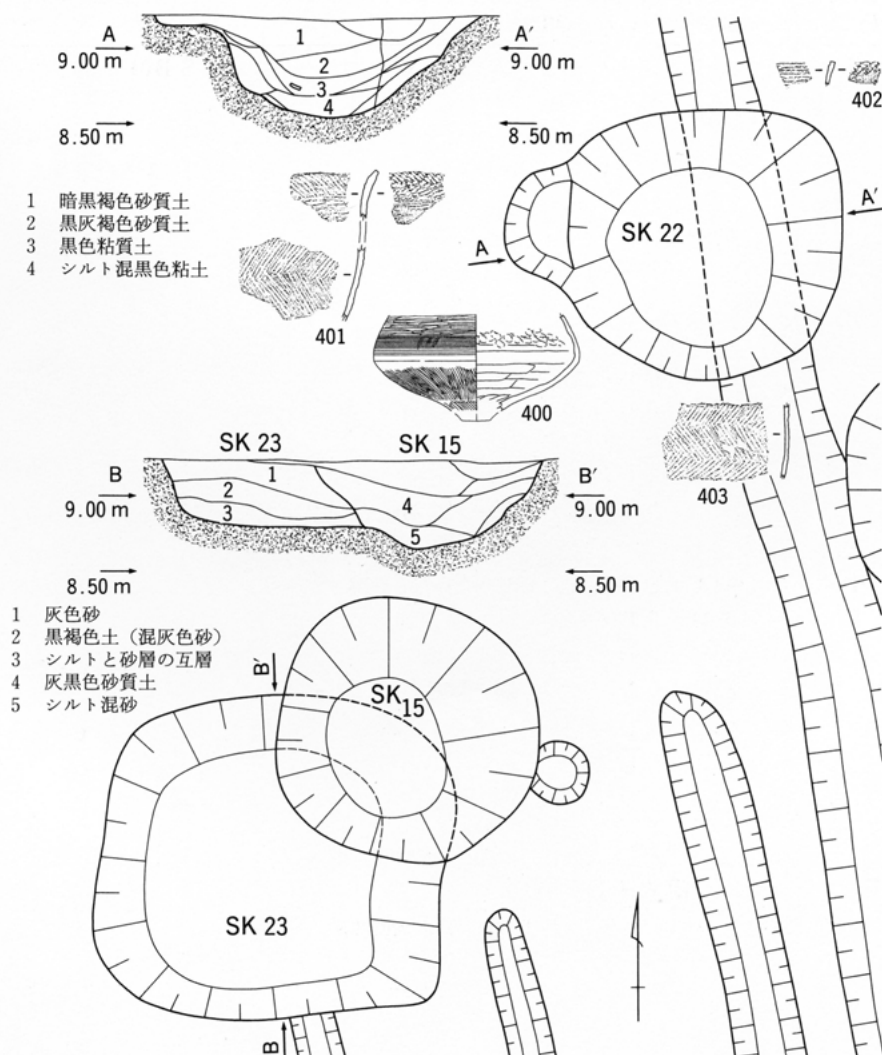


図 9 遺構図 A 区 SK 22・23

II期

II期が北道手遺跡の中心時期となる。II期の遺構として大小の溝・土坑・掘立柱建物・円形状に巡る周溝（住居跡か）・畝状遺構が検出できた。遺構の切り合い関係から畝状遺構は、溝・土坑等の埋没後の掘削された遺構であることが明らかになった。II期は遺跡の中心時期であるII-a期と畝状遺構に象徴されるII-b期の2時期に分けられる。

II期の遺構は特色ある分布のあり方をしている。93A区ではその南半に2群に分類できる土坑が列をなし全体的に集中する傾向がある。93B区でも土坑は分布するが、いずれもその深度は浅いことに共通する。一方、93C区～D区にかけて北東から南西に延びるSD10やSD87に代表されるように遺構としてはむしろ稀薄となる。こうした遺構の分布様相は遺跡を知る上で重要な手がかりとなろう。

ここでは、主遺構（遺物の出土した）を中心に周辺の遺構を取り込んで記述する。

SD19（図10）93A区南

V字状に掘られた南側の溝である。幅70cm・深さ33cm・長さは620cmを測る。埋土は極細粒砂の混じった腐植土からなり、黒色を呈する。屈曲部近くで土器を検出。高坏2個体（高坏A1の17・A3の18）とパレス壺片であった。

SK03（図6）93A区西

この周辺では大小の土坑あるいはPit群を検出した。なかでもSK01やSK02などは長径で100cm未満で短径で60～80cmといずれも小型な土坑群である。これらを総合して何らかの建物跡を想定しうるかも知れない。SK03の規模は97×85×19cmと計測できた。

SK16（図10）93A区南

SK22と23の間にある。121cm×109cm・深さ43cmを測る。遺物のありかたは、細片が多く上位な程量を増した。やや古いS字形口縁の甕形土器（甕C1・甕C2）を伴っている。甕Aを欠くことは特徴的である。

SK18（図10）93A区

調査区の南で検出する。土坑の平面プランは160cm×（100）cmと東西に扁平な楕円形となる。その掘り方は下位で垂直気味となりフラットな底部につづき、70cmと深い底部に拳大より一回り大きい自然石が5個置かれていた。出土した土器の大半は土坑の上位部分に集中しており、いずれも細片化されており短期的な投棄を窺わせる。これらの土器に混じって底で見られたような石が配されていた。S字形口縁の甕形土器は見られなかった。このほかに加工円盤（514）も出土している。

SD10との関係は、SK18が先行する遺構であり、SD10はII期-bに属する遺構である。

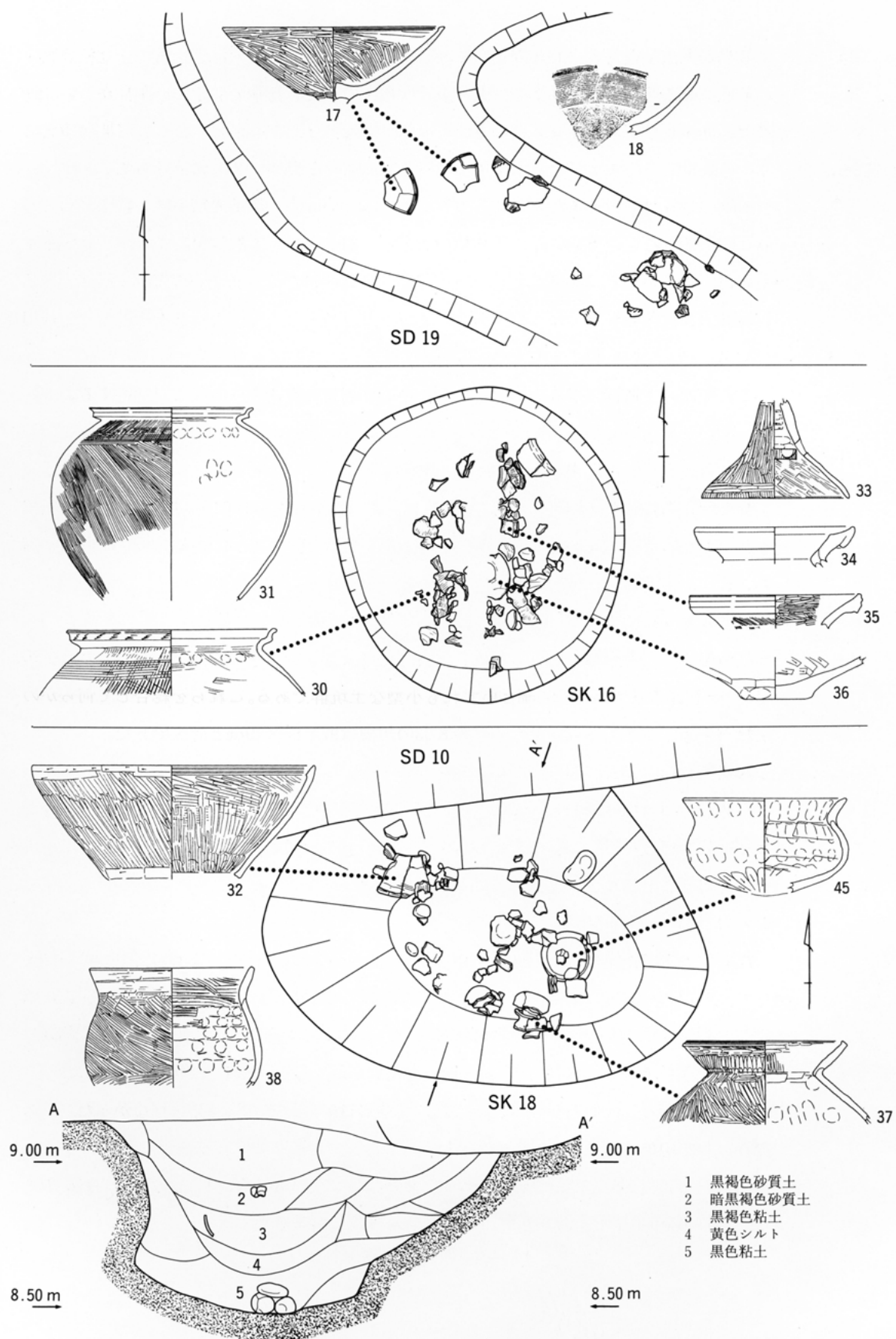


図10 遺構図A区 SD19・SK16・18

周辺の遺構

S D10に代表されるⅡ期－bの遺構は、93A a区の南に集中しており、規則性をもつ配置がなされている。東西方向に大きめなS D10があり、これに直口するようにS D01～18までの幅30cmから70cmまでの比較的狭くしかもいずれも20cmと浅い溝群が確認できた。これらは、Ⅱ期－aの埋没後に掘削されており、C区・B区・D区へと広がっている。これらを畝状遺構群として捉える。

S K19 (図11) 93A区南半

S D10を挟んでS K18と対峙する北側に位置する。S K18と同様にS D10にその南の一部を切られている。土坑の平面プランは東西方向にやや長く244cmを測り、南北に207cmを測る大形の土坑である。深さは68cmとなる。砂を含む黒色の腐植土層なることは他の遺構と大差ない。ここでは、炭化物が顕著にみられこれらに混じり多量の土器が検出できた。土坑の上面で遺物量の多さは他の土坑と同様であったが、土坑の中程に(54)の大型壺が正立した状態でおかれており、土器内部には炭化物がみられ、当時はこの大型壺(54)を中心にすえ、これを覆い隠すようにその後の土器投棄がなされたのであろう。(54)にはカゴ目跡が残っていた。(60)は外面をヘラミガキし、特徴的口縁形態は尾張部に類例がない。

S K14 (図6) 93A区西中央

A a区の調査区からすれば少し離れた位置にある。平面プランは不定形で326cm194cmを測り、深さは他の土坑に比べて37cmと浅い。土器は土坑の中央部から出土したが、いずれも細片であった。わずかにS字甕の台部(27)が出土している。

S K30 (図6) 93A区中央

平面プランはやや隅丸気味だが方形を呈している。規模は180cm×138cm、深さは14cmを測っただけである。

S D05 (図6) 93A区南東

溝と考えたがあるいは土坑の可能性が高い。その東半は調査区外のため規模を知り得ない。S K18・S K19と同様にS D10に先行する遺構でⅡ期－aに属する。土坑であるとするならば、径が500cmを越す規模で調査区最大の土坑になってしまう。埋土は上位ほど極細粒砂を含むが下位になるにつれて細粒砂となり底部近くで粘土層の堆積を見る。ここからも、土器を中心に多量の遺物が出土している。いずれも細片が多く取り分けS字状口縁の甕形土器が目立つ。(1～16)で16は唯一の壺形土器で、煮沸具である甕形土器が圧倒している。これらは、溝(土坑)の西側より投棄されたようで東に向かって傾斜しつつ検出された。S字口縁の甕形土器から判断すると概ねB類に収まるのではないだろうか。

SK 33 (図6) 93A区中央

平面プランは南北に長く138×117×64cmを測る。規模は小形に属するが土坑の中央部が70cmの径をもって下位の砂層に達する程に垂直に掘られていた。出土遺物は(93)の柳ヶ坪形壺の口縁部に留まった。

SD 25 (図6) 93A区中央

SK 33とSK 27の中間にある。L字状の溝の一部である。不定形に完結している。S字襷のB類と口縁部短く立ち上がる特徴的な襷(19)を伴っている。(19)は内面をヘラケズリで外面は荒いハケ調整となり、北陸系土器製作の影響を受けている。

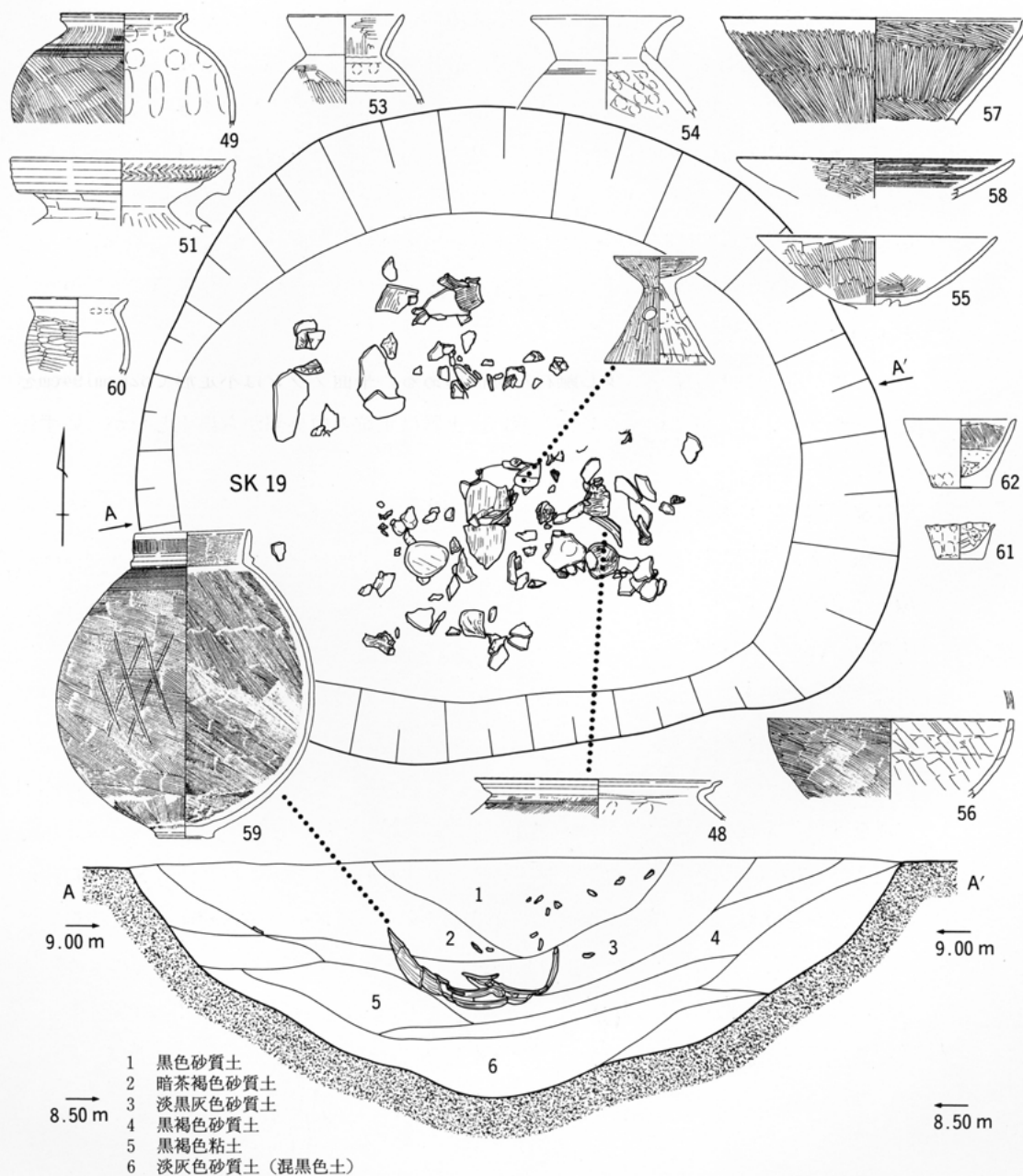


図11 遺構図A区 SK 19

S D27 (図4) 93A区北西

93A区の西半の遺構は、土坑分布は稀薄で溝にせよ大形の遺構はない。S D27なども南北に延びる小規模な遺構である。長さも約400cm・幅100cm・深さ30cmに満たない。84は畿内系の高坏である。

S K24 (図12) 93A区中央東

大形土坑S K34・56に隣接する小形の土坑である。平面プランは、不定形ながらも157×127×44cmの規模をもつ。底からS字甕C類(63~65)や壺A(66)が出土している。

S K28 (図12) 93A区中央

平面プランは楕円形で71×53×30cmの規模の小形土坑である。土坑からはS字甕b類が1点正立した状態で出土した。大型土坑に近接して小型土坑のこうしたありかたは土坑群の構成上重要である。

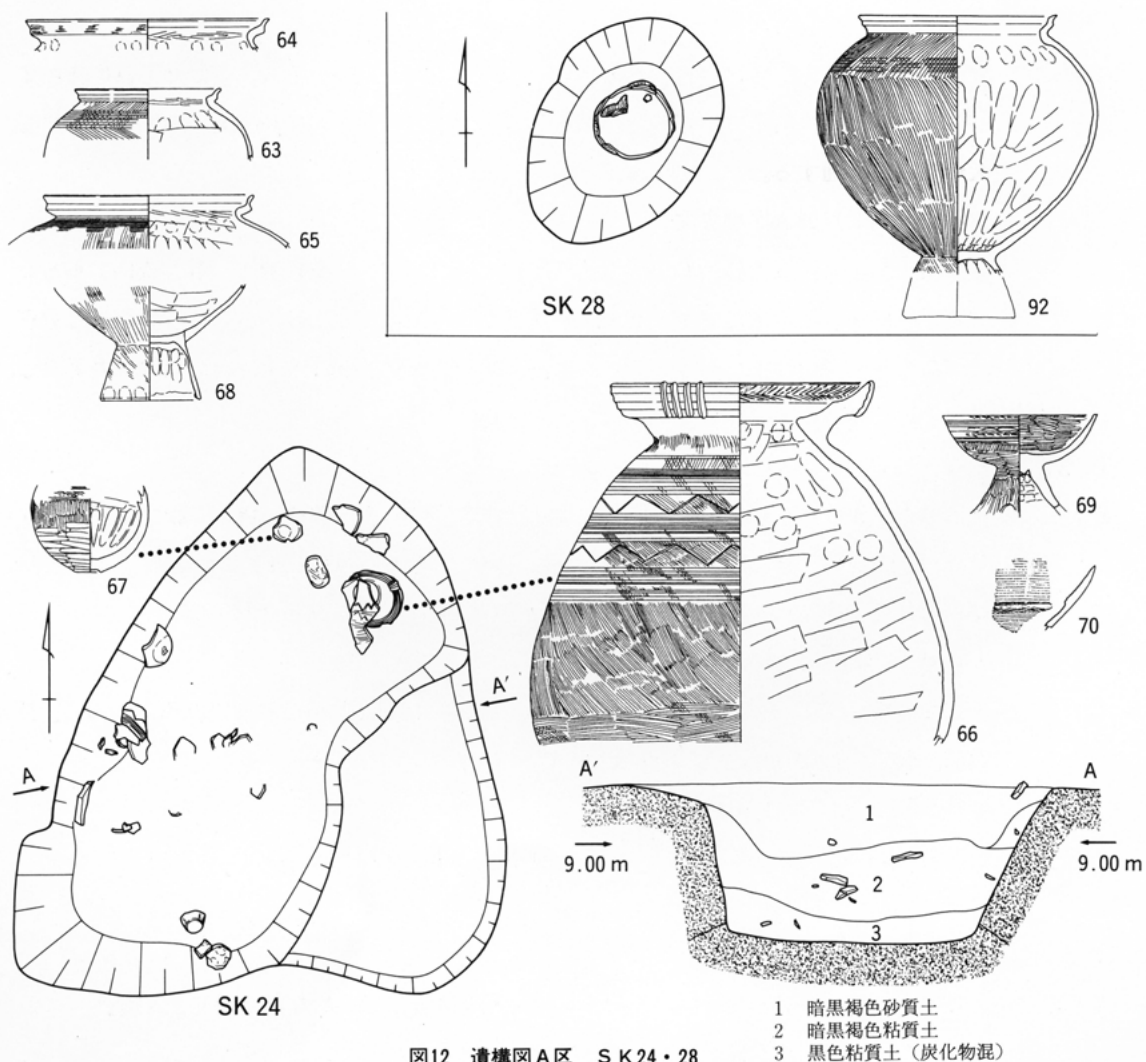


図12 遺構図A区 SK24・28

S K 27 (図 6) 93A区中央東

3基の大形土坑が列をなす1基である。当初方形プランから住居跡かと考えたが、深さが79cmとなり土坑と判断した。271×247cmの不定形な方形状のプランである細片ながら多くの土器(71~91)が出土した。

S K 34 (図 6) 93A区中央東

列をなす3基の大形土坑の1基である。平面プランは不定形な方形状で253×263cmで88cmの深さを測る。他の土坑ひ比べて遺物量は少ない。S字甕C類(94・95)が出土しやや後出する。

S K 55 (図 6) 93A区中央東

S K 55と切り合い関係にある。S K 56の使用時に併行的に掘削され同時に使用されている2基の土坑は全体として方形プランとなる。煮沸具はS字甕(106・107・109)のみ出土。109には焼成後に底部を穿孔している。(112)は内面が丁寧なヘラミガキ調整がなされており、所々に水銀朱が付着しており、注ぎ口にも付着していた。263×164×76cmの規模である。

S K 56 (図 6) 93A区中央

S K 55と切りあう。検出時は方形プランで247×233×87cmを測る。遺物は上位に集中するのではなく土坑内全体から多く出土した。煮沸具としてS字甕が圧倒(114~121)する。大形土坑に共通する。

S K 58 (図 6) 93A区中央北

平面プランが円形状呈する大形土坑である。398×333×87cmを測る。西に隣接するS D 28の周溝は建物跡を想定できるが、同時併用された関係と考えられる。多量の遺物は完形品がなくすべて細片化されており、S字甕(141~156)16点の出土は大形土坑に共通する。最底部より膝柄鍬(図54-2)が1点出土した。

**周辺の
遺構**

S D 28 (図 6) 93A区北中央

隅丸方形状に巡る溝である。S K 58に隣接するが切り合い関係にない。幅20cmで長軸が570cm・短軸が520cmを測るが西部で開放している。内側には径30cm深さ20cmのPitが4ヶ所認められる。開口部にはS K 45がある。何らかの建物跡の周溝と考えられる。

S K 45 (図 6) 93A区北中央

SD28の開口部にある。平面プランは161×119cmの楕円形を呈し35cmの深さであった。口頸部を欠く台付甕(100)が1点出土している。

S K 48 (図 5) 93A区北中央

平面プランは不定型ながら354×99cmを測り深さは25cmと浅い。遺物として(98・99・101・102)が出土している。

93

S D 34 (図 4) 93A区南西

A b 区

L字に屈曲する溝でS D 27に連続する。長軸が450cm・短軸274cmを測る。中央部が一段深くなり両側はテラス状に浅くなる。遺物として(178・179)が出土している。

S D 37 (図 5) 93A 区南

S 字状に湾曲する溝で S D 40につながる。南東部側には同様な遺構は認められなかった。あるいは、後世の削平の結果かもしれない。一部に深くなる個所もあるが 18cm と浅い。遺物は多くなく、(180・181) が検出できた。

S D 38 (図 5) 93A 区東南

A 区の北東部は後世の削平のない本来の高燥地で全体の残りは良い。北東—南西に延びる溝で南西端で終結する。箱形に掘削されており、43cm の深さを測った。

S K 59 (図 5) 93A 区西

不定形な長方形の平面プランを土坑である。上面は削平又は北の一部は N R 01 により削り取られており、N R 01 は古墳時代以降であることが明らかである。そのため、深さは 20cm と浅いが、多くの土器廃棄 (191~205) が認められた。195 の底部に焼成前の穿孔が 4 孔認められた。

周辺の遺構

S D 38 がある北東部は掘削を免れた地で遺構等依存状態は良好であった。地形的に南や西の調査区に比べて一段高い所であったが、遺構の展開状況は他と同様で II—b 期と a 期の遺構が展開していた。さらに、13C 以降の中世期の遺構は顕著に認められた。

II—a 期の遺構は、土坑と溝に至っては軸を北東から南西に延びる特徴があり他の時期遺構とは異なる (S D 38・S K 65)。II—b 期の遺構は小溝からなる。軸はほぼ南北方向の規則性を保って展開する (S D 42~49)。13C 以降は S K 60 の様に東西方向やこれに直交する形で展開する。

93B 区 この調査区の北半は中世期以降の洪水性流路 (= N R) により深く削り取れている。それより南半に中・小規模の土坑群と若干の大形土坑と溝を検出した。特徴は炭化物を伴う土坑や地震跡の認められる遺構が多い事にある。

炭化物を伴う 炭化物を伴う遺構は、S D 91・S K 112・113・114・126・149・17・3・186 であった。なかでも S D 91 の西半では厚さ 3cm 程に一面炭化物が認められた。地震跡を確認した遺構としては S D 78 (図版 3—1)・79・S K 107・115 (図版 3—6)・117・133 であった。幾度かの地震にさらされているようで、中でも S D 78 での地震跡は古く古墳時代に遡る。

S D 91・103・104・S K 103・104・121・126・149 から実測にたえうる遺物が出土している。

93C 区 本調査区内での南西に当たり、遺跡の南部分を画すると考えられていた。遺構全体の展開は中央部を北東から南西に延びる S D 10 あるいはそれに併行する S D 87 を境にして大きくことなる。以北では基盤層はシルトもしくはシルト混の砂層に対して、以南では中粒砂の砂層であるが、たぶんに鉄分を含んでいた。又、遺構の軸方向が以北では S D 10 に規制されているのに対して、以南では東西・南北方向に主軸をとる。これらは、93A b の東部と同じ状況である。以北では II—b 期の遺構も明瞭 (図版 4—6・7) に検出している。

ここでは、S D 10 あるいは S D 87 を中心に記述する。

区画溝 S D10 (図7・8)

S D10とした溝は、調査区の北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、93C区から93D区に延びている。93C区での溝規模は、幅が140cm程で70cmの深さに掘削されている。この規模はD区ではもう少し大きくなる。この溝内の堆積は基本的に3層からなる。下層の細粒砂の混じるシルト層が堆積し、中層に細粒砂を含みながらも黒色の腐植土層が20cm程堆積した後、ふたたび細粒砂混じりのシルト層となる。このことは、掘削されたのちある期間水流が認められるが、安定期を経たのち再び大きな水流があったこと物語っている。遺物もこれに対応するかのようには中層に完形品を含む土器が多く出土している。この安定期に再度の掘削は認められない。しかし、C区ではD区等ではなかった併行するS D87が北側に掘削されている。C区の東壁の断面を観察すると東方に向かって浅くなる。一方S D87は同じ深度を保ちながら東へと延びている。S D10の溝機能としての代換わりしているようである。出土遺物からS D10もS D87も時間的に大差はなく両溝が短期間だけ機能していたことを示唆する。S D87が機能している段階ではS D10は凹地状を呈してしまっている。埋没後の遺物に(250~270)が出土した。265の壺には朱彩されている。265は焼成前の穿孔が認められる。

S D87 (図7)

S D10に並行する溝で幅190cmを測る。S D10の掘削後にC区の所でその機能を受け継ぐように掘削されているが、脆弱な砂層を掘り込んでいるため、北肩では掘り方に不安定感があり、長期的使用は考えにくい。西側のD区では、この溝に相当する溝は検出されていない。土器として(301~324)が出土している。(316)は壺の口縁と思われるが類例がない。(320)は手焙形土器である。

93D区 93C区同様に中央部北東から南西にSD10が掘削されており、SD10以南と以北では遺構等の様相を異にしている。さらにこの区では東よりに南北方向に中世の溝がありこれに直交する東西溝が南で検出している。II期の遺構の展開としては中央部に遺構の空白地域がありそれを囲むよう北東に土坑群が分布する。

SD10 (図8)

C区に比べるとやや規模が大きくなる。最大幅200cmを越し下層の砂層まで達しているため、一部に掘削間もない頃の崩落部分のあったことが認められる。D区の西南端で中世期の洪水性の流れで切り取られている。遺物はC区に比べて少量であった。

SD10 SD15 (図8)

以南遺構 東壁沿いに逆L字に屈曲する形で検出された。方形状に巡るとも考えられる。

SK40 (図8)

SD15の北屈曲部に位置する。平面プランは252×221cmの円形状を呈し、深さは59cmを測る。

SD10 SK01 (図8)

以北遺構 西壁際で確認した。方形プランで154×114×19cmを測った。炭化物が認められる中に327の上に326が逆さまに置かれた状態で検出できた。327は口縁部のみで逆さにのるS字甕は完形であったと思われる。

SK16 (図7)

北東隅にある方形状の土坑である。SD10に並行し長軸は17m以上、短軸は785cmの大形であるが33cmと浅い。住居跡とも考えたが、これを補強する資料は得られなかった。内側に2基(SK33・38)がある。

SK36 (図7)

D区の空白地域にあるプランを洋梨形を呈す土坑である。

SK41 (図7・8)

円形状のプランを持つ。290×265×44cmを測る。

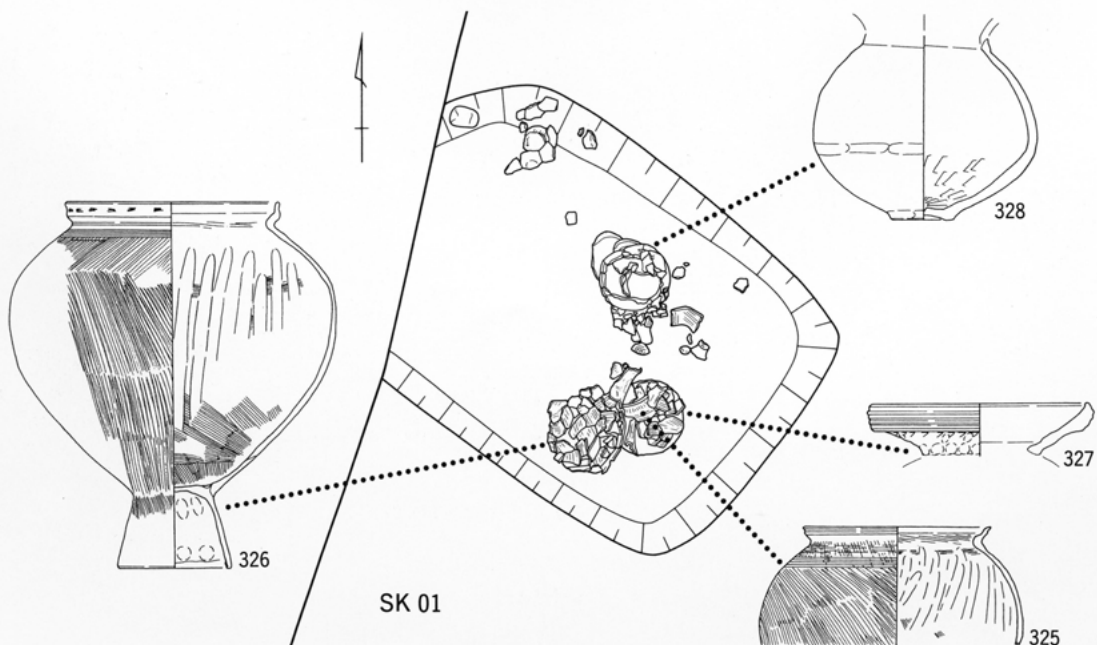


図13 遺構図D区 SK01

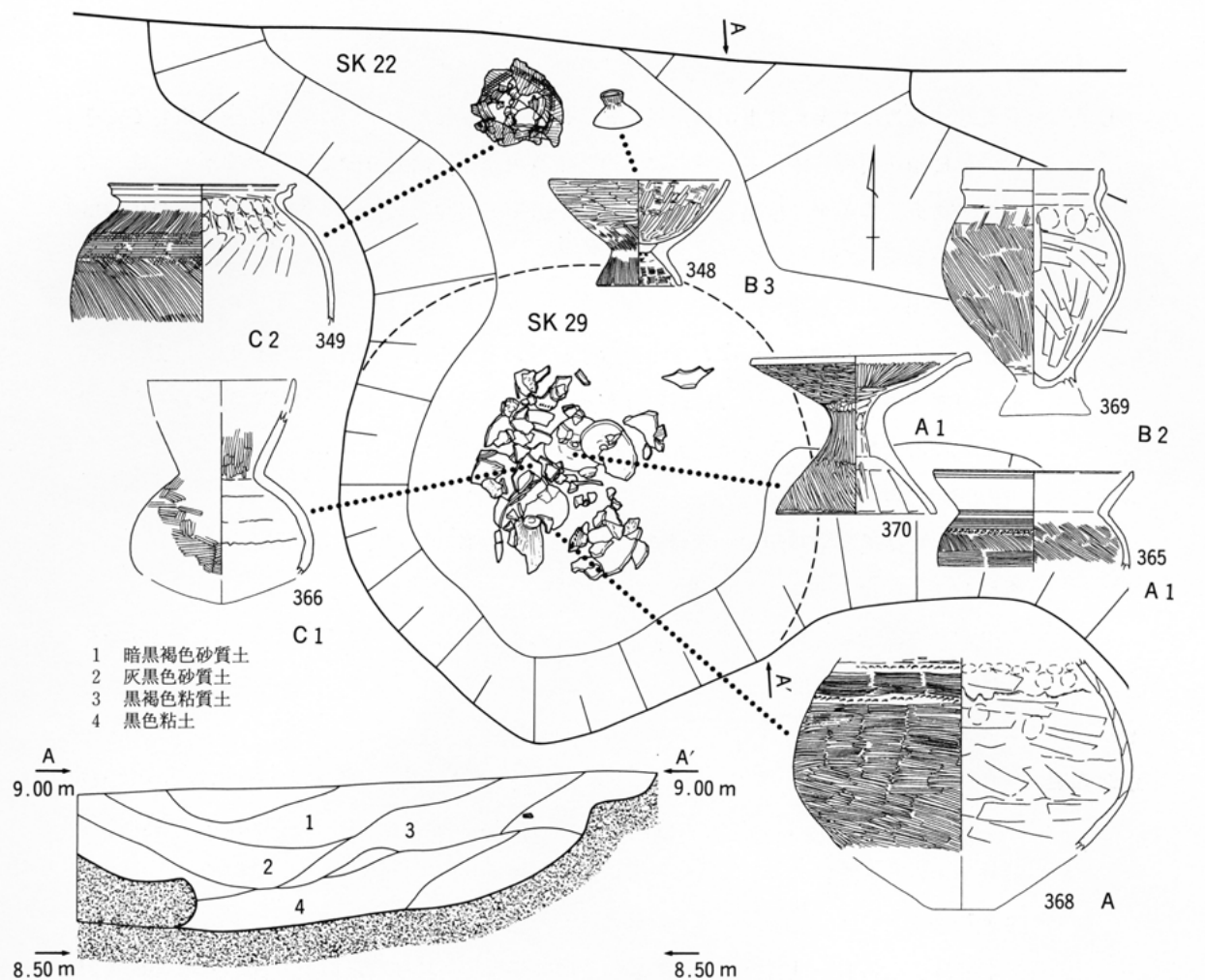


图14 遺構図D区 SK 22・26・29

S K 20・22・26・28・29 (図14・15)

SK16の北西側に展開する土坑であるが、いずれも中規模の土坑であるが、完形品を含む土器が多く出土している。前後関係は認められるものの、A区の土坑の状況とは異なる。

このことは祭祀空間内の異なる行為の存在を示唆するのであろう。

S B01 (図8)

1間×2間の唯一の掘立柱の建物である。

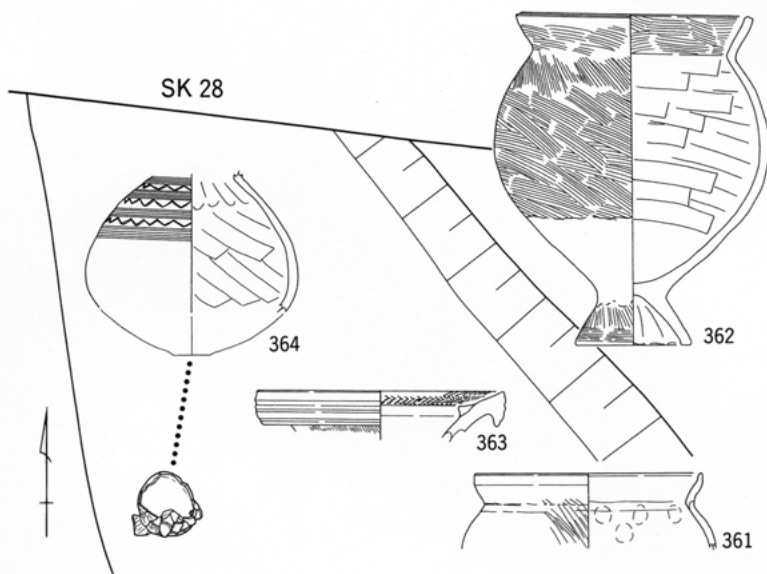


図15 遺構図D区 SK28

II-b期 II-a期の遺構が機能を失ったのち新たに掘削された遺構群である。(図16)

こうした遺構を検出したのは全ての調査区であったが全面的ではかならずしもない。

A区では、調査区の南東側と北東隅の2個所に集中していた。II-a期の遺構の主軸が北東から南西方向を指向するのに対して、北西から南東方向に軸線が指向されている。特にA区では、同期のSD10を中心にこれに直交するかたちで幅20~30cm程で100cmから120cmの間隔を保ちながら北西から南西方向に掘削されている。A区の北東隅ではこれほどの規則性は見られないが、ある一定の間隔を置いて掘削されていることは看取される。

B区での分布は調査区の南側、すなわちD区から延びてくる溝群である。A区程顕著ではないが、やはり100m程の間隔は認められる。しかし、これらの溝群はこれ以上北には延びていない。

C区はA区の南側に展開する調査区で先のA区の溝群につながる。ここでは、最も顕著に遺構の存在を確かめられた。(図版4-6・7) C区の北半で整然とした状況で16条の小溝が検出できた。それらは、いずれもSD87の埋没後掘削されいた。わずかながら、SD67(288)・SD68(289)で遺物が出土している。

D区は調査区の北東部で数条の小溝群を確認できた。なかにはB区につながる溝も認められる。ただし、C区ほど整然とはしてはおらず、検出状況から広範囲に展開していたことが読みとれる。

以上、ここではこれらの遺構群を畝状遺構群として捉えておく。



图16 畝状遺構群図

Ⅲ期 (図17) Ⅲ期の遺構はⅡ期の遺構に比して決して多くない。遺物そのものは、少ないながら全ての調査区において出土しているものの、明確な遺構は全調査区の南部（C区の南半やD区の南半に若干）にて検出した。とりわけ、北東から南西方向に延びるⅡ期のSD10以南に集中する傾向にあった。このことは、SD10を境にして基盤層の相違と関連するのであろう。又、北道手遺跡に於けるⅢ期以降の生活空間の広がりⅡ期とは異なっていたことを物語っている。

Ⅲ期の遺構は全てC・D区に限定されており、遺構の主軸方位はやや振れるが東西位と南北位をとる。このⅢ期の時期は、概ね8世紀代と考えられる。

C区の遺構 C区のⅢ期の遺構は、SD63・85・89、SK64・91となる。SD85は南北位にとり、SD89がこれに直口する。このSD89の南側の壁際にSK64がある。この土坑より(435)が単独で出土している。(図17)

D区の遺構 SD11は調査区の南壁に併行するかたちで東西位に延びる。幅139cmで24cmの深さを測る。断面はU字形となる。(図17) C区のSD85と併行関係にあり、何らかの区画溝と考えられる。

A・B・E区でも遺物を検出したが遺構としては認識できなかった。

※Ⅲ期の段階では、NR01は存在していない。

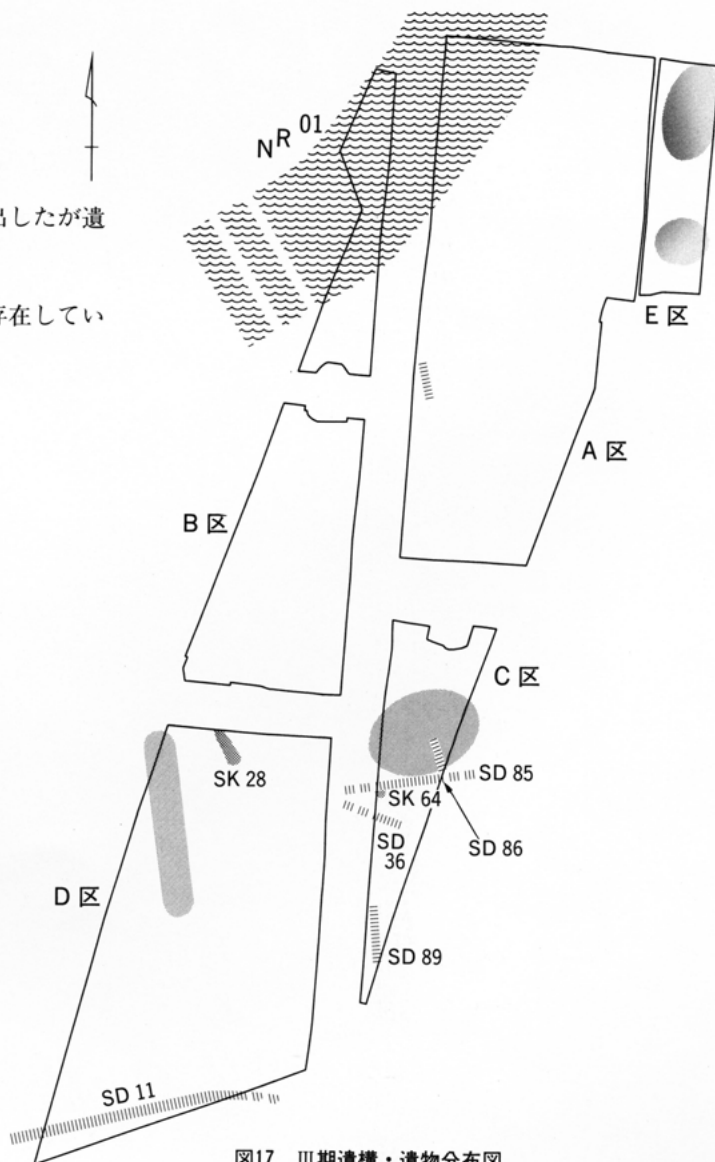


図17 Ⅲ期遺構・遺物分布図

Ⅳ期

(図18)

Ⅳ期と考えられる遺構は、93B・C・D・94E区にて散在的に認められた。93A区の北東隅からB区の北半にかけて北から南への水流は認められるNR01は堆積状況の切り合いからⅣ期のある段階に起こった自然現象と考えている。以下、検出した遺構について記述する。Ⅳ期の遺構も主軸の方向性はⅢ期と同様に東西方向と南北方向を基調としている。

SD25はD区の中央を南から北へ流れていたようで、SD25の他に数条の溝が並行する。これらに共通することは、南で掘削されたと思われるが北につれて溝を溝として明瞭に確認できず、荒い砂のなかに黒色腐植土をブロック状に含む堆積状況から、かなりの水量があたえられる。そしてD区の北西隅に向かって深くなる。

SD79はB区とC区にまたがる土坑と考えられる。井戸の可能性はなく、東にSD59が西にSD80が同時期の溝と考えられ、SD79は貯水的な機能を持つ遺構と思われる。

94E区

94E区は他の区に比べて高位にあり、中世の遺構は想定していなかったが、Ⅱ期の包含層を削り取った遺構を確認した。調査区の中央部に堤状の土手があり、これを挟んで凹地状になる。水田かとも考えたが、墨書土器の出土から重要度の高いため池的な機能を持つ遺構と考えている。しかし、堤の北の凹地は急激な水量の変化があったことが認められる。

このⅣ期は本遺跡の南に展開する田所遺跡、なかでも墳墓堂跡の時期と同時期で少なからず関連する遺構も存在すると考えられる。しかし、本調査区では墓域の様相を示す遺構は検出されていない。

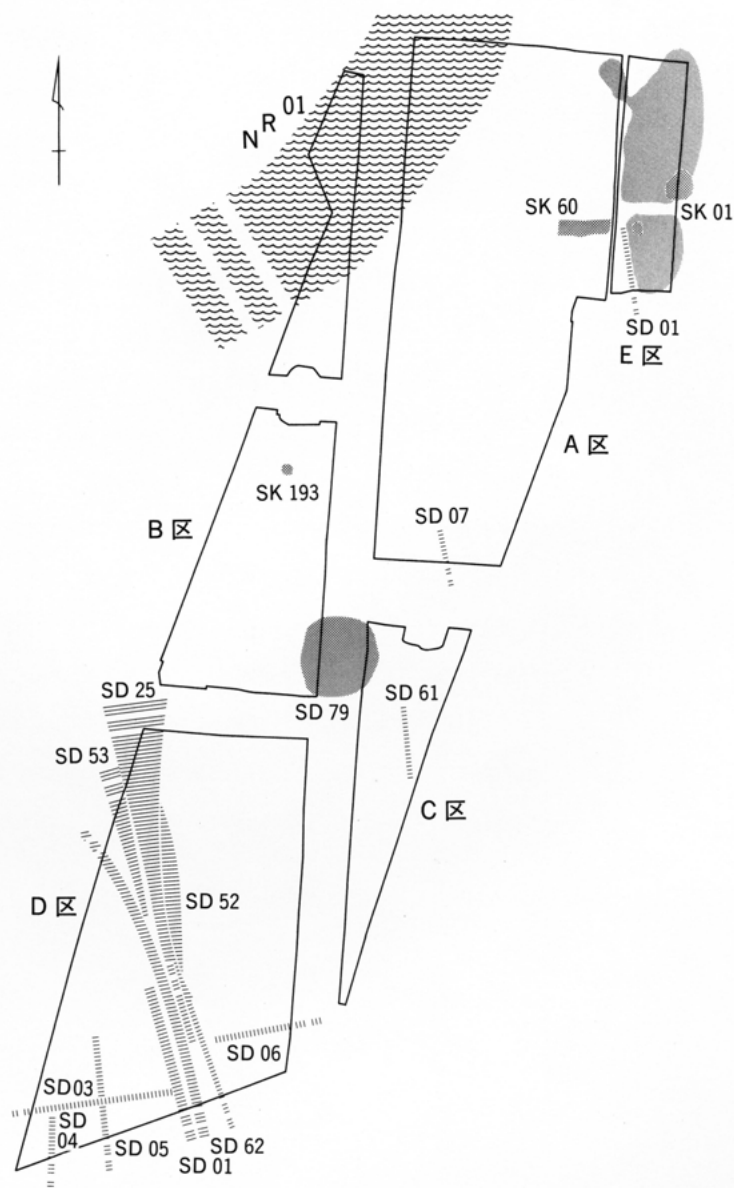


図18 Ⅳ期遺構・遺物分布図

第3章 遺物

第1節 土器

北道手遺跡から出土したⅠ期～Ⅴ期の遺物について記述する。記述する上で便宜上土器類とその他（石製品・土製品・木製品）とに区分する。出土遺物の内土器類が9割以上をしてをり、そのうちⅡ期に属する遺物が大半を占める。遺構出土遺物を中心に記述し、検出遺物はこれらを補完するに留める。

Ⅰ期 Ⅰ期の遺物は本遺跡の開始時期を示すもので弥生時代中期中葉に比定できる。土器の他に石鏃・打製石斧等もこの時期に属するのであろう。土器は93A区に限られるが石器はすべての調査区で出土している。

SK22出土（400～403）の中期土器

400は、胴部上半を欠くが受口状の口縁形態を持つ細頸形の壺と思われる。胴部の文様は、クシ描文様帯とヘラミガキされた無文帯の互層構成となる。下胴部は放射状にハケ目調整がなされている。典型的な貝田町期の土器である。SK56出土の140も同様土器である。ただ400のクシ描文様帯の上に縦位の単位クシ描文を描くが140では対を弧状文となる違いがある。

401～403は条痕深鉢である。87（93A区のSK27）や137・138（93A区のSK56）でも出土している。401は底部付近を欠くが口縁外面部は口縁部で右下がりの斜位条痕をその下位に横位条痕を施したのち横位羽状条痕となる。口縁部内面には羽状の刺突列がみられる。402は口縁部破片で401の口縁部同様である。403は横位羽状条痕を施す胴部破片である。137・138も同時期深鉢となる。口縁内面の刺突列の違いから別個体となる。139は同時期の三河に通有タイプの広口壺の胴部片である。太い沈線が文様の基本となる。

クシ描きの壺と条痕の煮沸具の器種構成は尾張北部から美濃に看取できる組み合わせである。

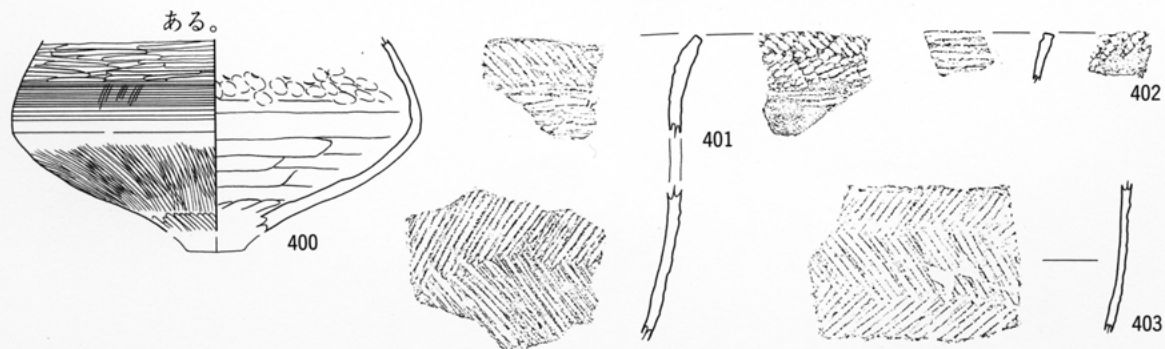


図19 Ⅰ期土器実測図

II期

本遺跡の中心時期である。従ってその遺物量は最も多く本報告での土器分類を行うことが記述する上でもまた資料に普遍性を持たせるためにも必要と思われるが、単一遺跡での分類はかえって混乱のもとであるし、本遺跡の資料では不十分と思われる。本遺跡をとりまく周辺地域をも包括するような分類でなければならない。しかし、現状では資料不足であるため、先学の分類を援用しつつ更なる段階への基礎となるべきよう必要に応じて段階的な分類を便宜的に行うことにする。

機能的分類として壺形土器・甕形土器・高環形土器・器台形土器・鉢形土器・蓋形土器・ミニチュア土器・特殊土器として手焙形土器にとどめ、細部の分類はそのつど提示する。

壺Aは広口口縁を持つ加飾壺とする。特徴は外反する口縁部もち、口縁部は拡張垂下もしくは上方に突き出して断面三角形状呈し、この面に擬凹線を施す。口縁内面に段・稜を有す。

一般的にパレス壺と称する土器をあてる。本遺跡では3タイプに細分できる。

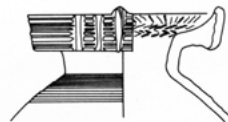
- A 1 口縁内面に段を持ち、口縁は下方に拡張垂下する。擬凹線を施した面は垂直となる。



- A 2 口縁内面に稜を有し、稜から上方に突き出る。面は斜めとなる。

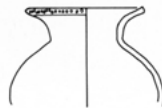


- A 3 円柱状の明瞭な頸部をもち、段をもつて口縁部に至る。

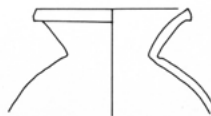


壺Bは広口口縁を持つ壺。壺A程に加飾性はない。若干口縁部や胴部上半に文様が施れている。口頸部の形態により細分できる。

- B 1 円柱状の頸部から緩やかに外反するか、水平方向に短く延びる口縁部となる。

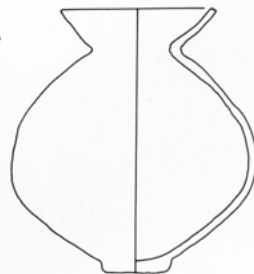
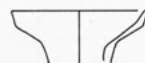


- B 2 頸部から緩く外反するか、直線的な口縁部となる。口唇部は面をもつタイプ・丸みのタイプ・拡張するタイプを含む。



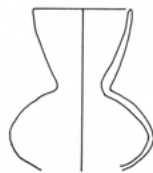
- B 3 口縁部が内彎するタイプ

- B 4 口縁部が受口状を呈するタイプ



壺Cは口頸部が内彎、もしくは直口するタイプ。本遺跡では全体を知りえる資料が乏しい。出土個体数が少ないため2タイプにのみ細分する。

C 1 口縁部が内彎しながら立ち上がるタイプ。



C 2 口縁部が直線的にひらくタイプ。



壺Dは柳ヶ坪形土器を総称する。細分できるが一括するにどどめる。



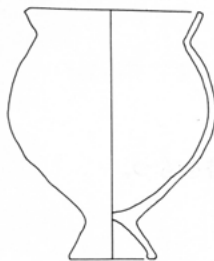
壺Eは二重口縁壺形土器を総称する。



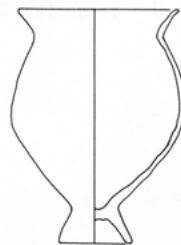
甕形土器は口縁形態を視座に「く」字形口縁・S字状口縁・受口状口縁に大きく分類する。ミクロ的にのおの細分する。いずれも台付となる。

甕Aは口縁部形態が「く」字形に外反するタイプ。

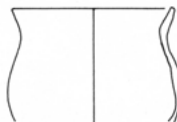
A 1 く字状に外反した口縁部は面をもって終わるタイプ。



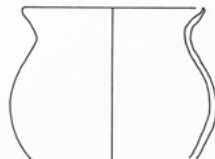
A 2 く字状に外反する口縁部は丸みをもって終わるタイプ。



A 3 く字状の外反度が弱いタイプ。

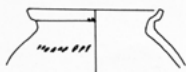


A 4 く字状に外反するが口縁部先端でわずかに立ち上がるタイプ。

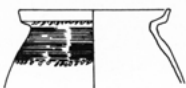


甕Bはいわゆる受口状口縁部形態を呈するタイプ。口縁部・胴部に文様を施す例が多い。

B 1 明瞭な頸部を持って立ち上がる口縁部となる。



B 2 受口部が直口するタイプ。

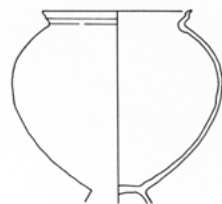
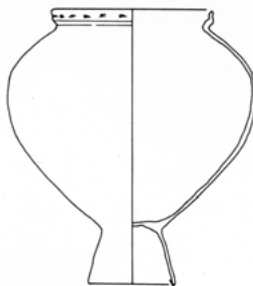


B 3 受口部はつまみ上げによりわずかに立ち上がるタイプ。

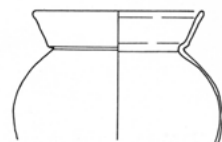
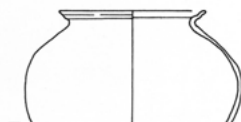


甕Cは口縁形態がS字状を呈するタイプを総括する。口縁形態の差異で更に細分できる。

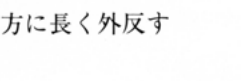
- C 1 A類と呼称されているタイプ。直口的にS字が立ち上がる。多くは口縁外面に押引文を有す。胴部の最大径は上半にある



- C 2 B類に相当する。S字らしく強く屈曲する。口唇部は上方に面を持つ。



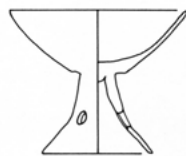
- C 3 C類に相当する。S字斜めに開く。胴部最大径は中央にありやや偏平化する。



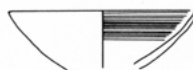
- C 4 D類に相当する。屈曲する口縁の上半は外方に長く外反するタイプ

高坏Aは杯部に段をもち大きく外反するタイプ

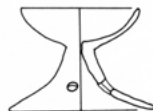
- A 1 明瞭な段を持ち、内彎する脚となる。



- A 2 段が鈍くなり、広がる脚となる。



- A 3 杯部内面に文様帯をもつ。



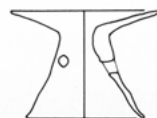
高坏Bは杯部が碗形となる。

高坏Cは小形有稜高坏とする。

器台形土器Aは中形で杯部径が脚径を上回る。

- A 1 脚は内彎する。

- A 2 脚が直線的に開く。



器台形土器Bは小型器台。脚径が杯部径を凌駕する。

- B 1 碗形の杯部に直線的な脚。 B 2 筒状の中実な脚。 B 3 杯部に段をもつ。



鉢形土器は大型品をA、小型品をBとしさらにこれを細分する

A 1 体部は偏平で外反する口縁をもつ。



A 2 体部は偏平で受口状の口縁形態となる。



B 1 椀形の口縁となる。 B 2 屈曲する口縁となる。 B 3 開く口縁である。 B 4 その他

以上、報告を進めるうえで最低限度の分類に留めた。北道手遺跡に於ける分類であって何ら広域的に通有するものでもない。あくまでも便宜的な分類にすぎないことを断っておく。

北道手遺跡に於ける土器様相

ここでは、北道手遺跡出土の古墳時代初期の土師器について、その土器様相を考えてみる。当地域の弥生時代から古墳時代にかけての土器研究の先学として、大参義一氏の研究業績がある。氏は70年代までの調査成果を基に伊勢湾沿岸を視座に捉えた土器編年体系を明らかにし、それまでの地域的混乱を整理した。その後、80年代に入りそれまでに増して大規模化した調査は膨大な資料を提供することとなった。こうした状況下で特に尾張部あるいは伊勢湾沿岸地域での調査例はこれまでの研究成果を見直すのみ充分な内容を伴っていた。赤塚次郎氏は東海系土器の実相を提示したうえで、グローバルな土器編年体系を提示した。これまでより深層化した体系であったため、今日広く支持されている。基礎的な廻間様式となったのが、廻間遺跡の出土資料であった。北道手遺跡出土土器は赤塚編年上の廻間Ⅱ式が最も多く、若干その前後を含んでいる。しかし、詳細に廻間式土器と比較してみるとかならずしもその範疇に収まり切れない様相も見いだされる。廻間遺跡が尾張南部であるのに対して北道手遺跡は尾張北部に位置していることに起因すると考えている。北道手遺跡が尾張南部との関係以上により北部すなわち美濃地方との相互影響の結果ではなかろうか。S字形口縁台付甕（以下S字甕）が煮沸具の主体的地位にあること。口縁内面に加飾する高環形土器の比率が高いこと。尾張南部以上に北陸系土器製作の影響を受けた在地土器が多いことなどが挙げられる。これらを視点に土器様相を概観してみる。

北道手遺跡出土の土器として、壺形土器・甕形土器・高環形土器・器台形土器・鉢形土器・ミニアチュア土器、特殊な土器として手焙形土器が出土している。

壺形土器 壺形土器Aはパレス形土器に当たる。口縁形態・文様構成等南部と軌道を共にするが、壺A3の264は円筒系の頸部をもち胴部文様に山形文を配さない構成となるうえ朱彩は認められない特徴を有す。口径部形態からは古相を示すが廻間Ⅲ式の土器と共伴する。壺Bを一括して広口壺とした。B3の内彎口縁土器やB4のような受口状を呈す土器は低い比率を示している。短く直口する頸部をもつB5（54）は他の壺に比して大型品で類例が少なく、大形品はあるがカゴ目跡が見られる。壺Cの出土比率は低く、これとセットを成す大形器台も少ない。壺Dは柳ヶ壺坪形土器と称す器形である。頸部に凸帯を巡らす土器（266）は（264）と共伴しさらに二重口縁壺E（265）とも共伴する。S D10の埋没後の廃棄で廻間Ⅲ式に比

定できよう。

甕形土器 く字形口縁甕A・受口口縁甕B・S字甕Cで構成されるが、甕Cが主体を示す。なかでもC2のb類が本遺跡の中心的存在となる。甕形土器で明らかに他地域の土器製作の影響を受けたと考えられる一群が看取される。19・369の口縁部形態は北陸系土器製作に由来するのであろう。口縁部の擬凹線等はなくナデ調整のみで終わるが、19の胴部内部調整はケズリとなる。甕ではないが、鉢の278は口縁に擬凹線を胴部調整にケズリを用いている。北陸系土器製作の影響を受けた土器は他に343の器台形土器も模倣された土器と考えられる。尾張北部から美濃地方にかけて明らかに北陸系土器を出土する遺跡に藤掛遺跡(笠松町)⁽⁶⁾：器台城内遺跡(岐阜市)⁽⁷⁾：特殊器台今宿遺跡(大垣市)⁽⁸⁾：月影式甕曾根八代町遺跡(大垣市)⁽⁹⁾：月影式甕があり、近年出土例が増えつつある。これらが搬入品かは今後の研究を待たなければならない。

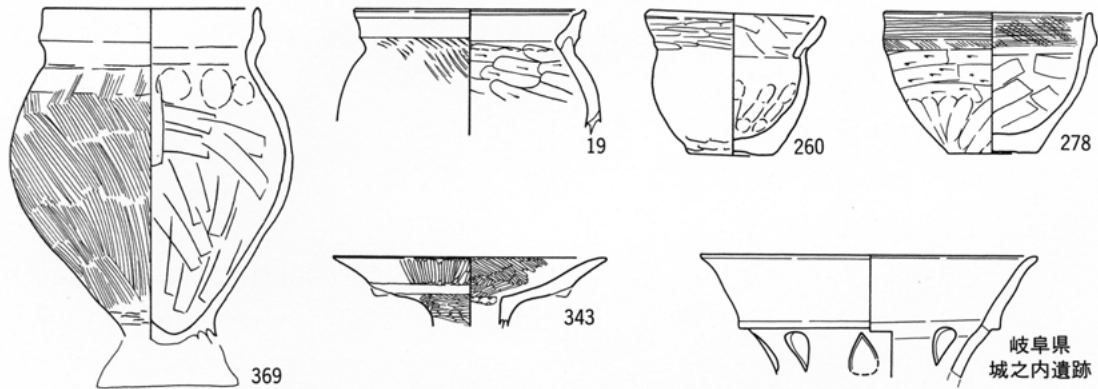


図20 北陸系土器

器台形土器 器台形土器には器台Aの大形品に比べて、小形のBの比率が高くかつ変化に富む特徴を持っている。⁽¹⁰⁾

鉢形土器 他の器種に比べて変化に富む。無台で112の如く朱をといたと思われるもの、135は精製された胎土に丁寧にヘラミガキされており、典型的な尾張の土器。286は小型丸底壺を連想させる。⁽¹¹⁾しかし、平底でかつハケ調整の土器となる。263は使用の痕跡はなく、土坑出土の45などは全面に煤が付着する違いを示している。

その他の検出遺物ではあるが、396は唯一出土したタタキ甕である。390のようなヘラ描き紋を持つ一群がある。321～324・395は人物と船を描く線刻絵画土器である。手焙形土器片が2点(44・320)ではあるが出土している。

高坏形
土器

高坏A・B・Cに分類した。特に高坏A1は本遺跡を特徴づけている。口唇部や口縁内面にクシ横線や沈線文を施すことにある。加飾を視座に更に分類できる。A1-a類：口唇部に数条の文様を施す。A1-b類：口縁内面に幅広に文様を施す。A1-c類：口縁部を肥厚させて文様を施す。系譜的にA1-a類→b類とA1-a類→c類の2系統ある。口唇部への加飾は高坏の口唇部面取りが前提であるゆえに、加飾への発展は比較的広い範囲で生じたのではないか。しかし、三河部では面取りの伝統がありながら加飾高坏は見られない地域であった。発展の中心地は尾張から美濃更に近江東部に限定される。特にb類は美濃西部に中心が、a類は近江東部が中心地となる。

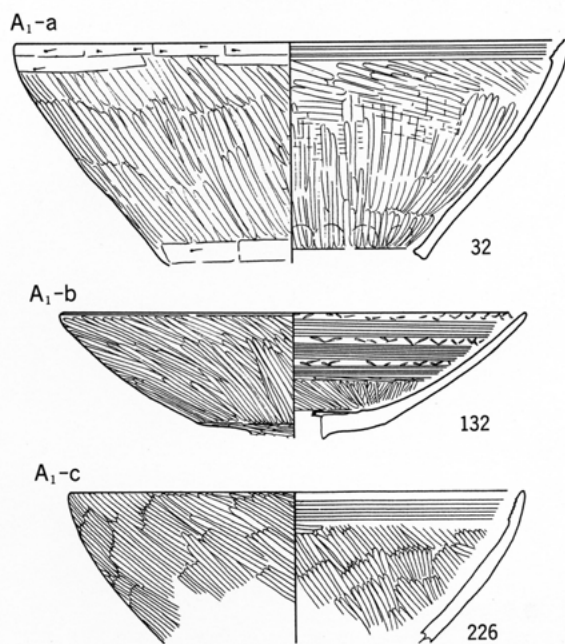


図21 高坏A1分類図

- (注) (1) 1968 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』第47輯。
1974 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号。
- (2) 1990 赤塚次郎「廻間式土器」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター。
- (3) 土器型式の設定の前提条件として、共有する時間幅と共有する地域が存在し、この二者を諸条件の元でどのような枠組みを構築するかである。巨視的に枠組みを共通的な文化圏とし、微視的な変異を地域的小文化圏として捉えられる。廻間式土器は尾張南部域の土器様式である。これを取り囲む地域では地域的小文化圏をそれぞれ形成していると考えられる。
- (4) 煮沸具はその本来の機能を究極的に追及すれば、器壁を極力薄くするであろうし、還元炎の効率を最大限に生かそうとすれば胴部の形へ影響を与えるであろうし或いは体部そのものを火元から一定の距離を保つ工夫(台を付ける・支脚)へと指向するであろう。その意味でS字口縁台付甕形土器(以下S字甕とする)は煮沸具としては完成された一つの姿と言える。であるならば、S字甕が主体を占める地域があり、その機能故に他地域に移動し得たのは理解できる。しかし、S字甕がく字甕を圧倒する地域は尾張北部から美濃西部にかけて限られてくる。
- (5) 加飾土器のうち加飾(口縁内面を加飾する)高杯はS字甕と同様な分布域を示すと考えられていたが、東海南部域即ち三河及伊勢地方には分布をみない。一方、尾張西部から美濃西部・近江東部にかけて濃厚に分布している。二者を東海的土器と考えると異なる分布域はただ単なる土器そのものの機能に起因するのではなく、もっと本質的な要因を含んでいるようである。
- (6) この遺跡は正式調査によるものではなく、従ってその名称も一定していないが、現木曾川の河道の中洲部から多量の古式土師器が出土している。その中に北陸系の装飾器台の脚部が1点ではあるが含まれている。1981 宮川将治「線刻絵画」のある土器について」『岐阜県考古』第8号。
- (7) 装飾器台の杯部が1点出土している。花卉形の透かしが北陸系の特徴的をあらわしている。岐阜県教育委員会『城之内遺跡』岐阜市文化財報告1990-1。廻間Ⅱ式～Ⅲ式に比定できる。
- (8) 大垣市教育委員会の鈴木・高田両氏の好意によりご教示をいただいた。
- (9) 未報告資料にもかかわらず大垣市教育委員会の鈴木・高田両氏より実見の機会を得た。
- (10) 器台の大形・小形は時間的な幅で捉えることが一般的である。本遺跡では、廻間Ⅰ式～Ⅲ式に比定できるがⅡ式が中心となることから大形の器台の消失期にあたっている。しかし、小形器台とセット関係になる壺は器台の点数に見合うだけの個体数は認識していないのが現状である。
- (11) 口径は体部径を凌駕する器形は、口頸部を大きく開き、やや縦長な球形気味な体部となる丸底とはならず、小さな平底となる。小形丸底壺の先行的形態を連想させる。類例は未見である。

A 区 SD 05

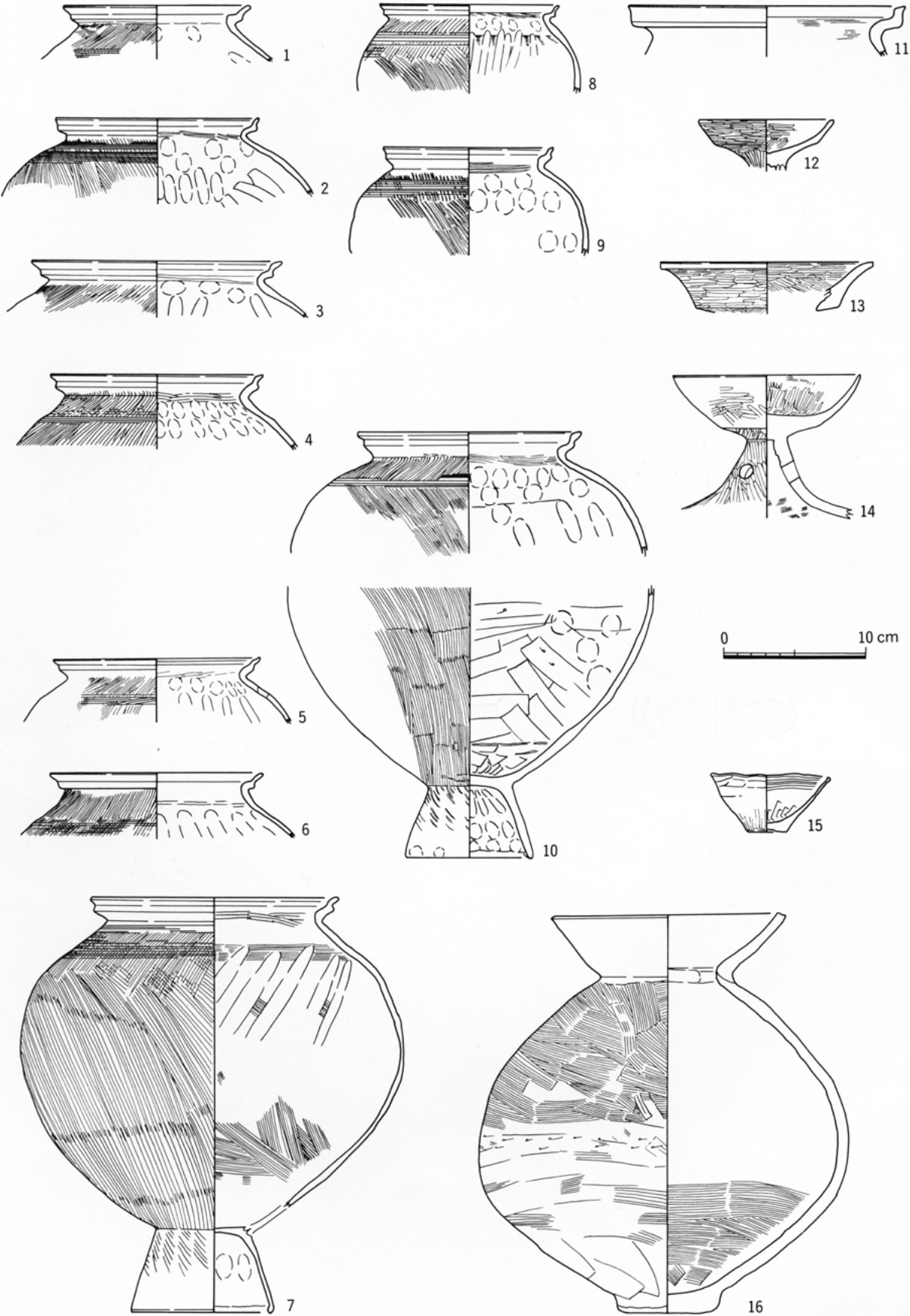
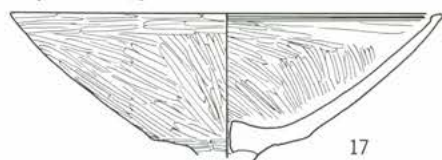
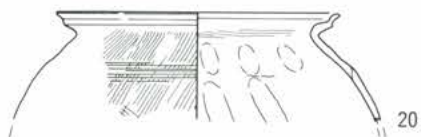
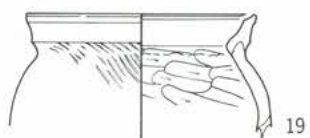


图22 II 期土器实测图 A 区 SD05

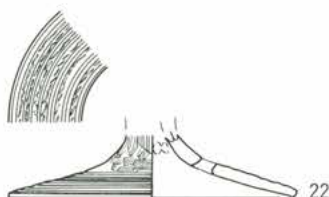
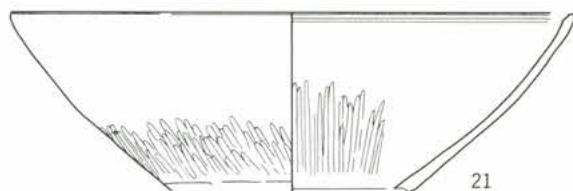
A 区 SD 19



A 区 SD 25



A 区 SD 27



A 区 SD 36



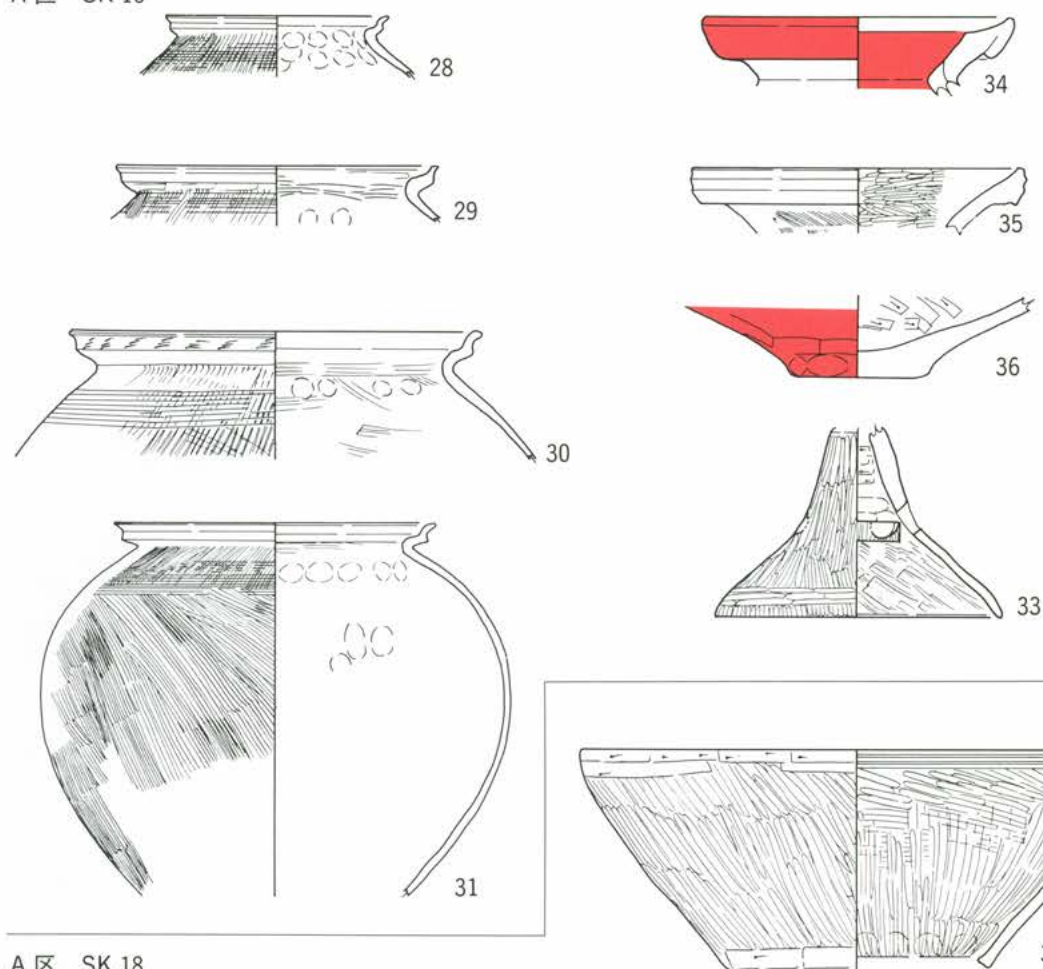
A 区 SK 15



0 10 cm

图23 II期土器实测图 A区SD19·25·27·36·SK14

A 区 SK 16



A 区 SK 18

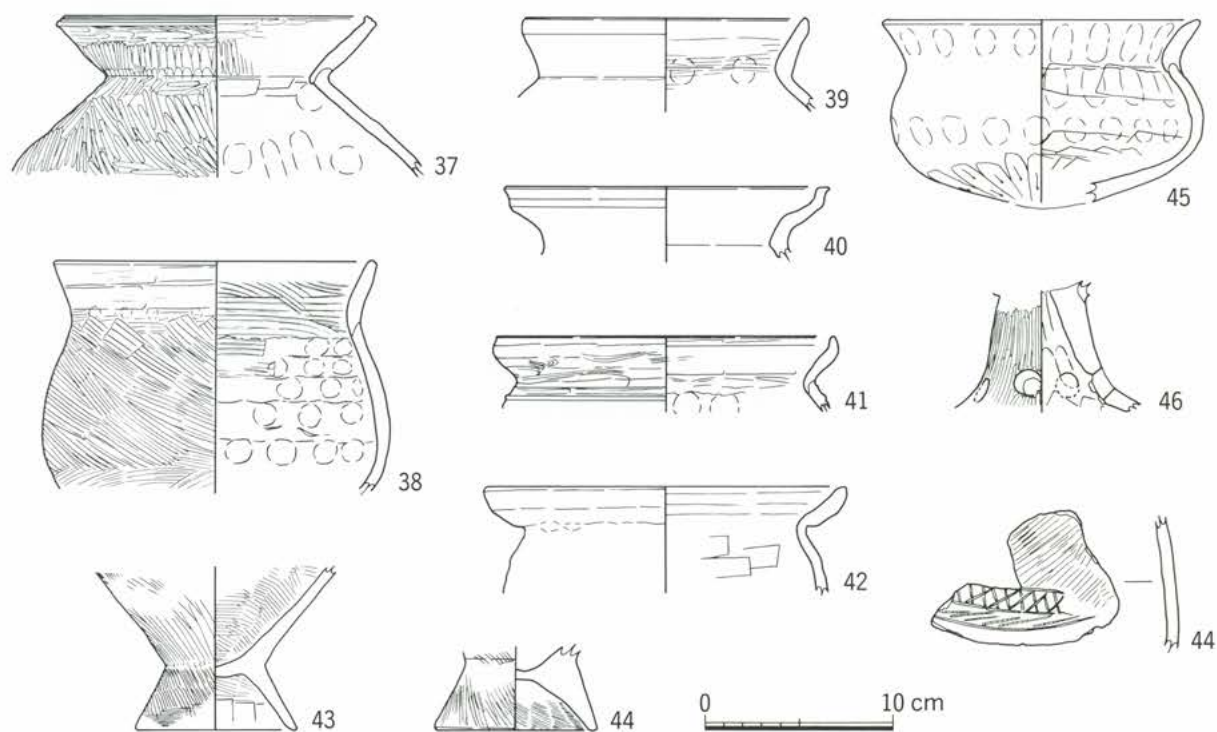


图24 II 期土器实测图 A 区 SK 16 · 18

A区 SK 19

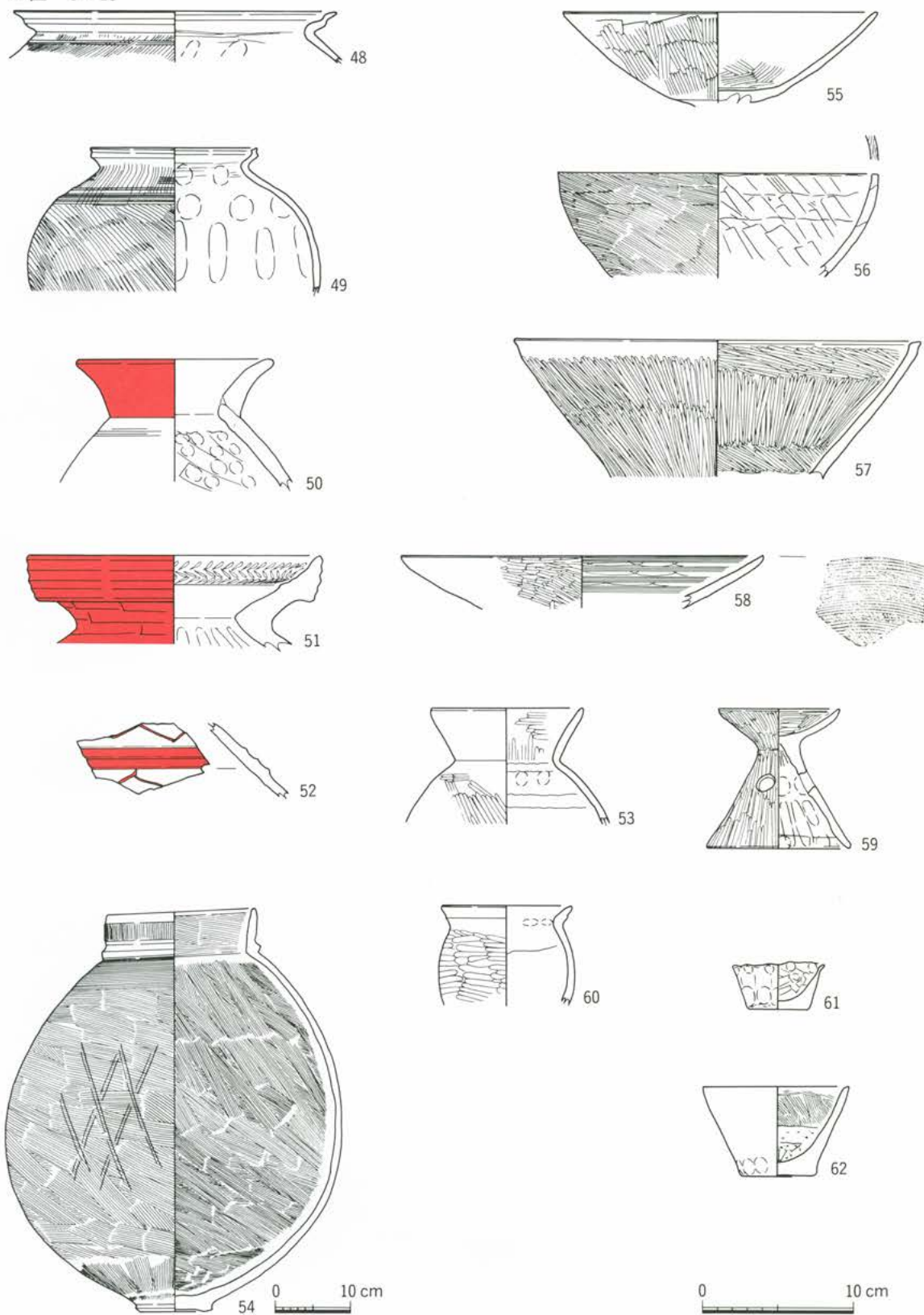


图25 II期土器实测图 A区SK19

A 区 SK 24

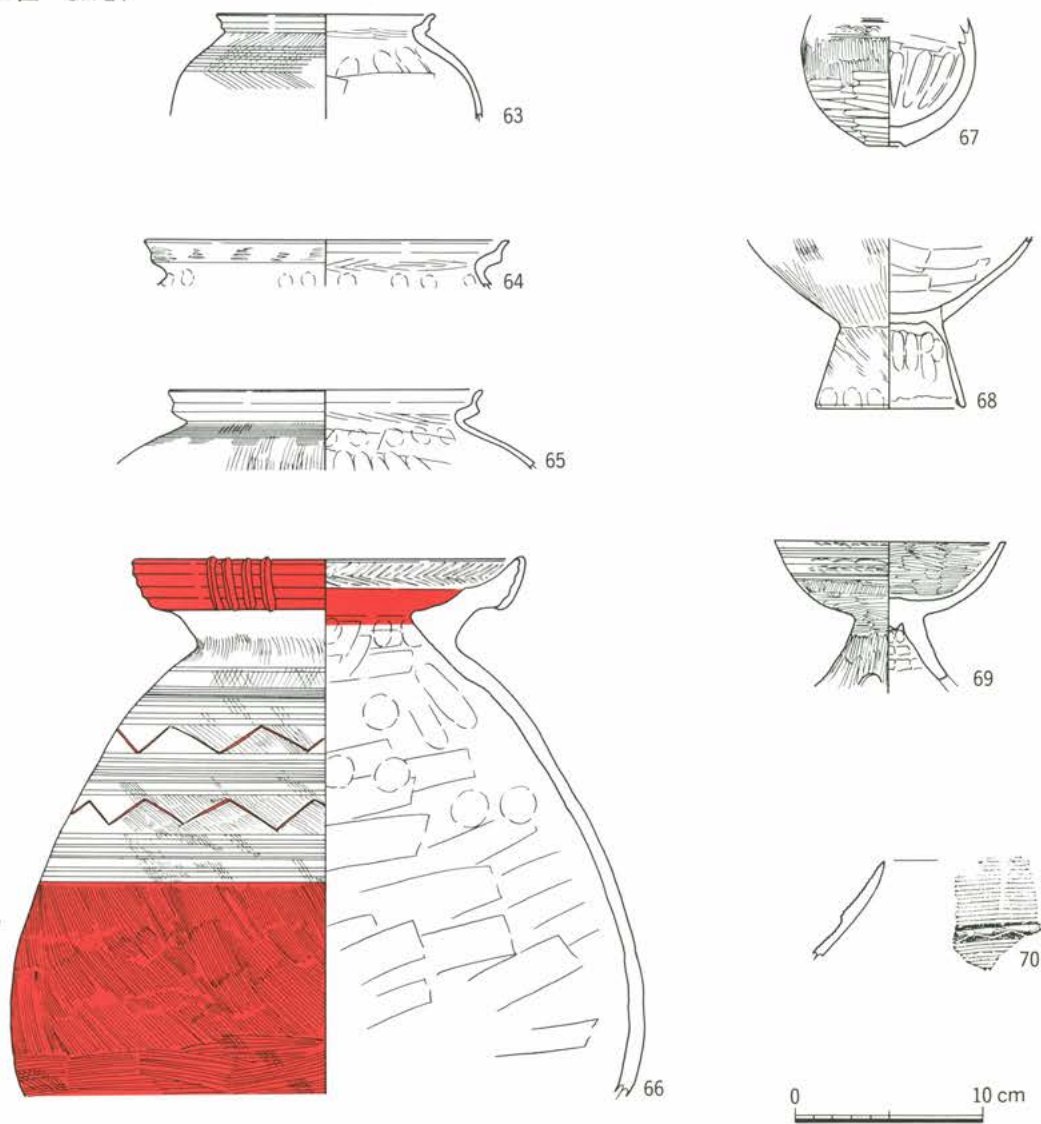


图26 II期土器实测图 A区SK24

A 区 SK 27

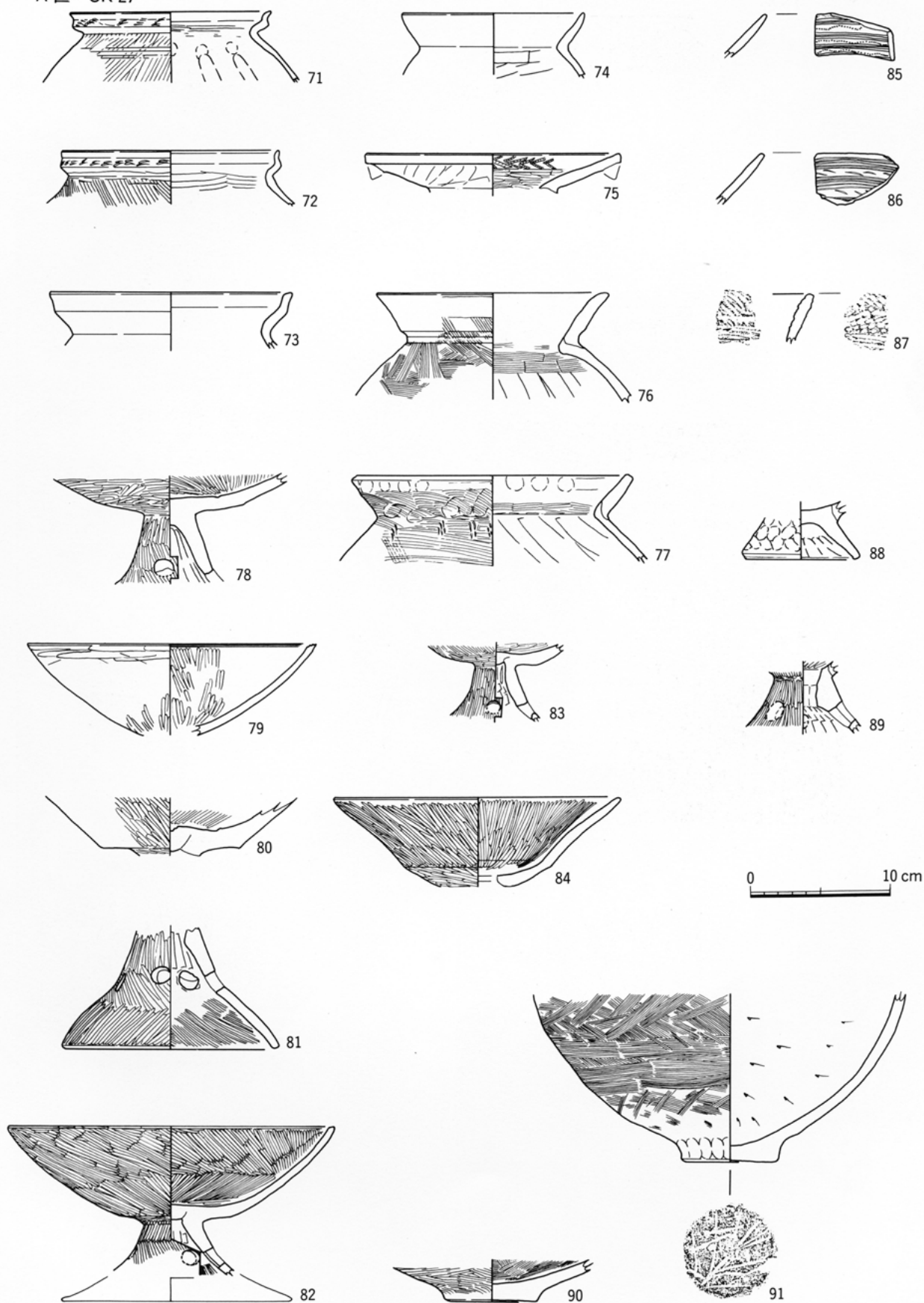
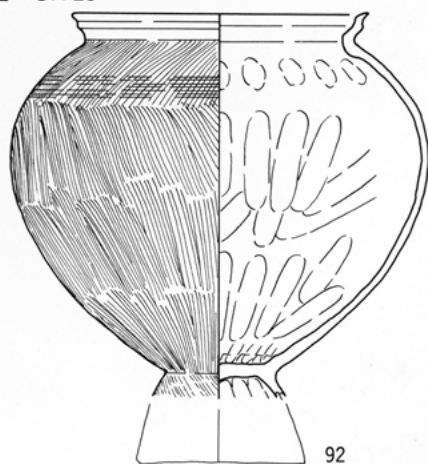


图27 II 期土器实测图 A 区 S K 27

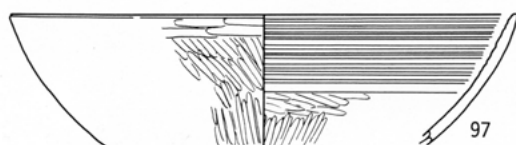
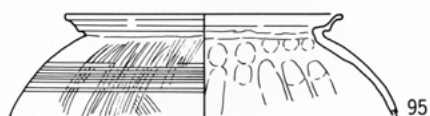
A 区 SK 28



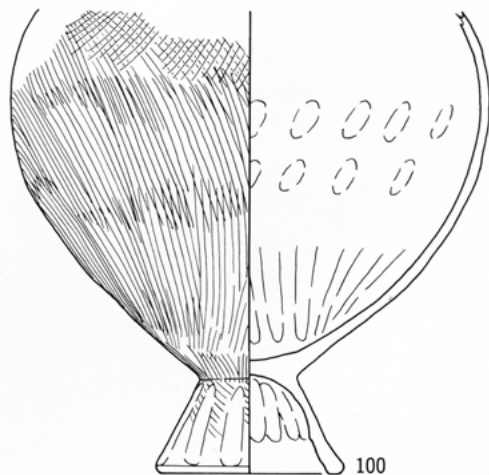
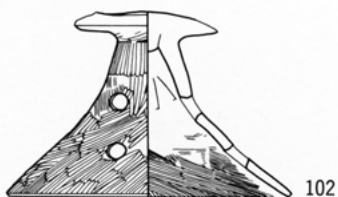
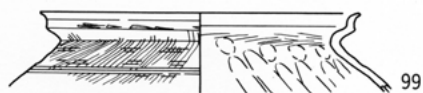
A 区 SK 33



A 区 SK 34



A 区 SK 48



A 区 SK 49

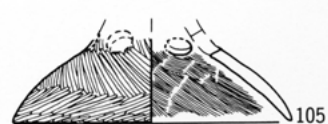


图28 II期土器实测图 A区SK28·33·34·48·49

A 区 SK 55

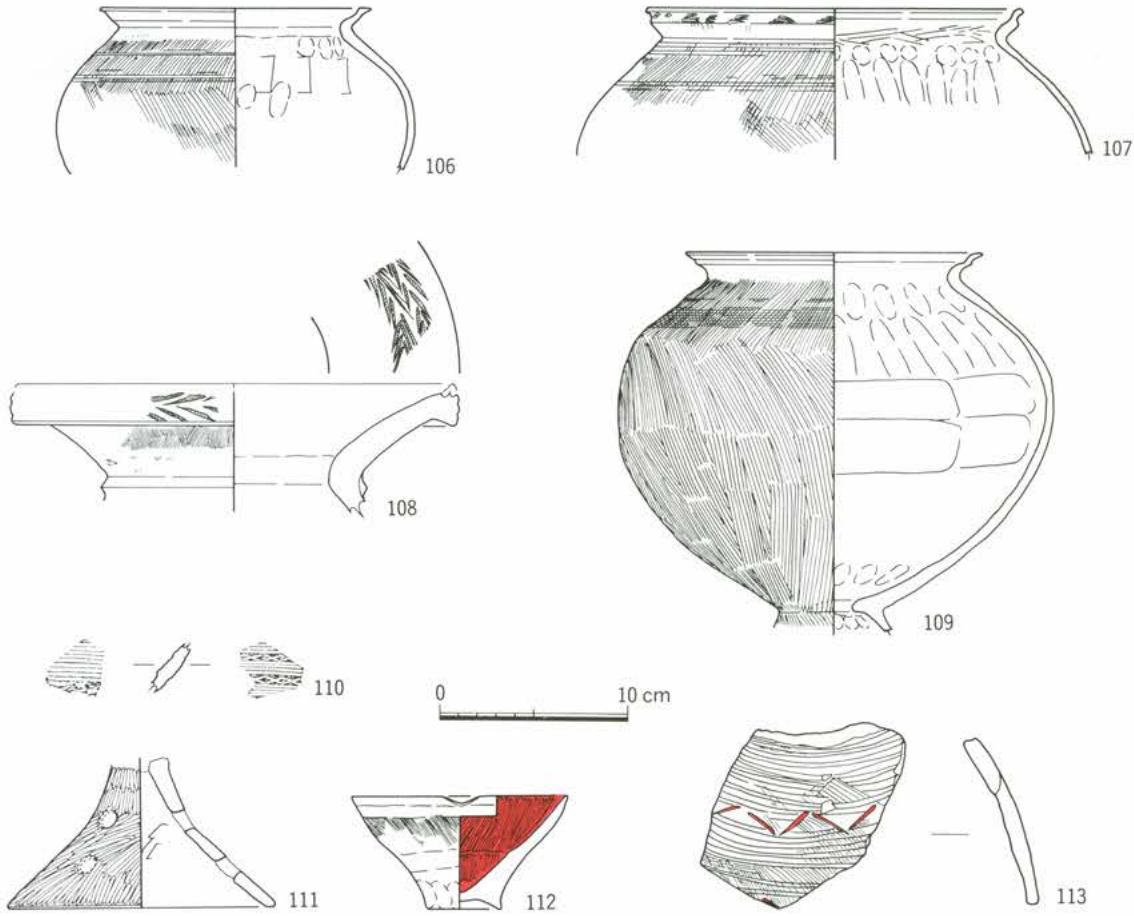


图29 II期土器实测图 A区SK55

A区 SK 56

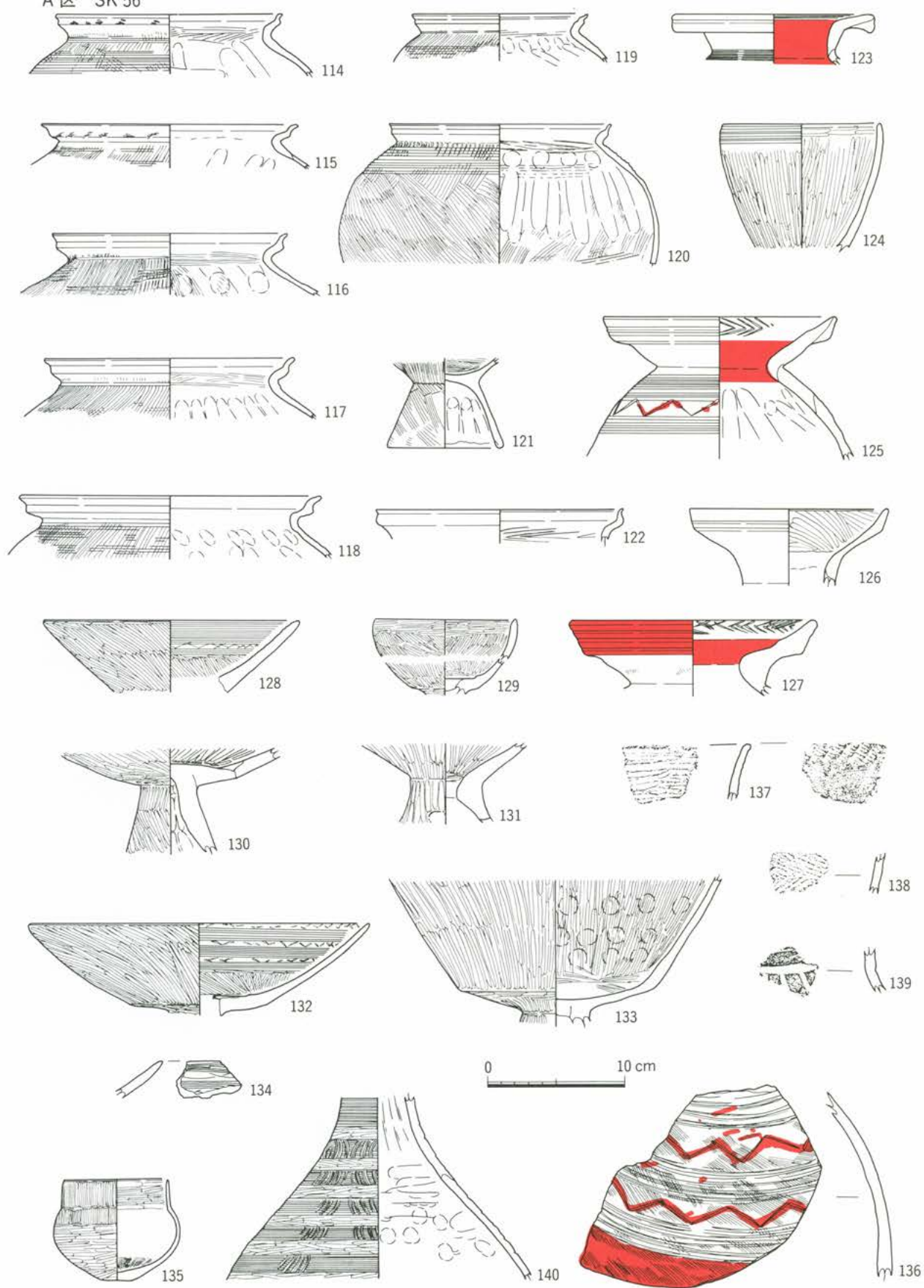


图30 II期土器实测图 A区SK56

A 区 SK 58

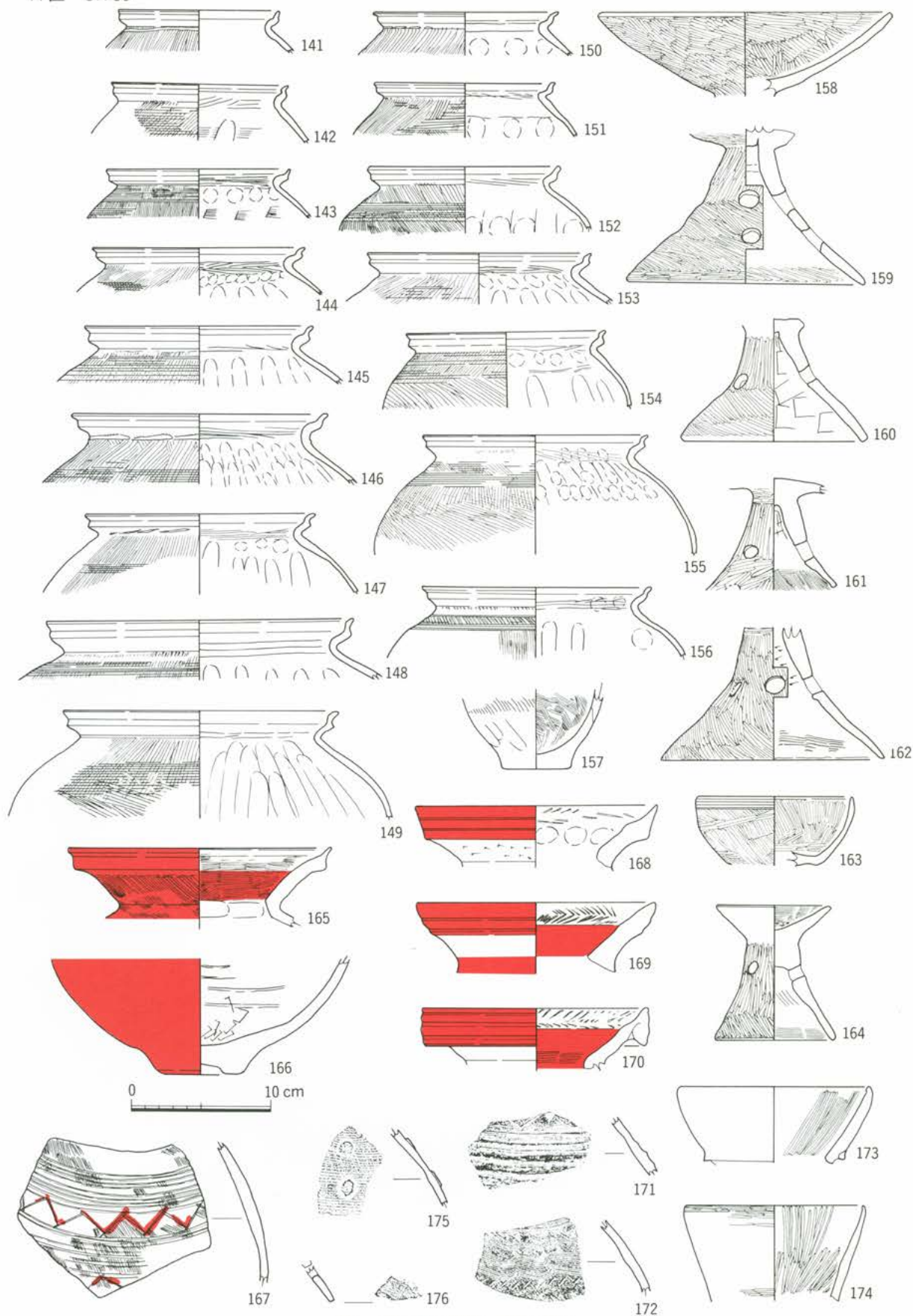
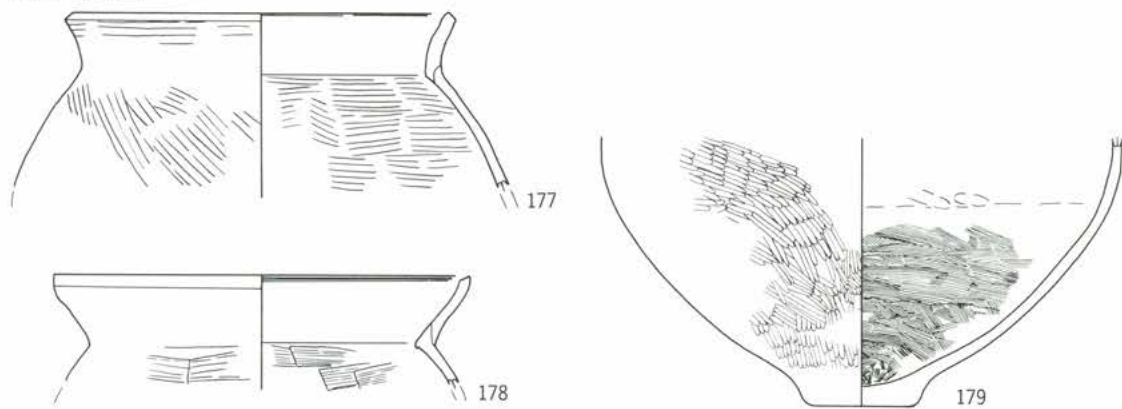
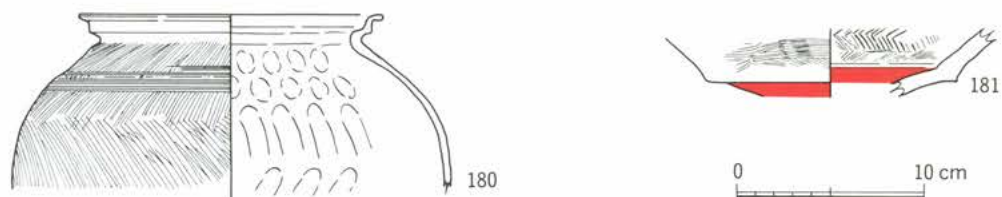


图31 II期土器实测图 A区SK58

A 区 SD 34



A 区 SD 37



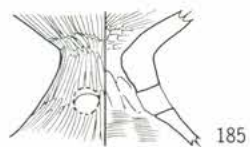
A 区 SD 38



A 区 SD 44



A 区 SD 64



A 区 SD 65

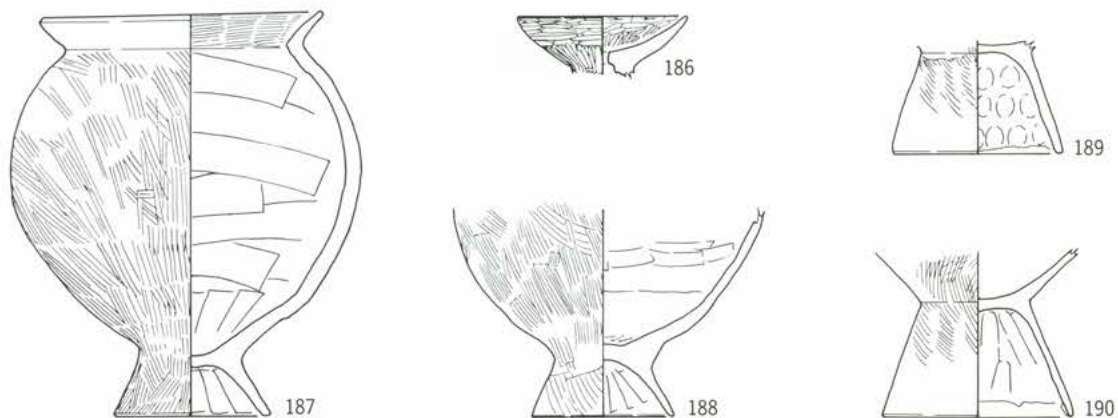
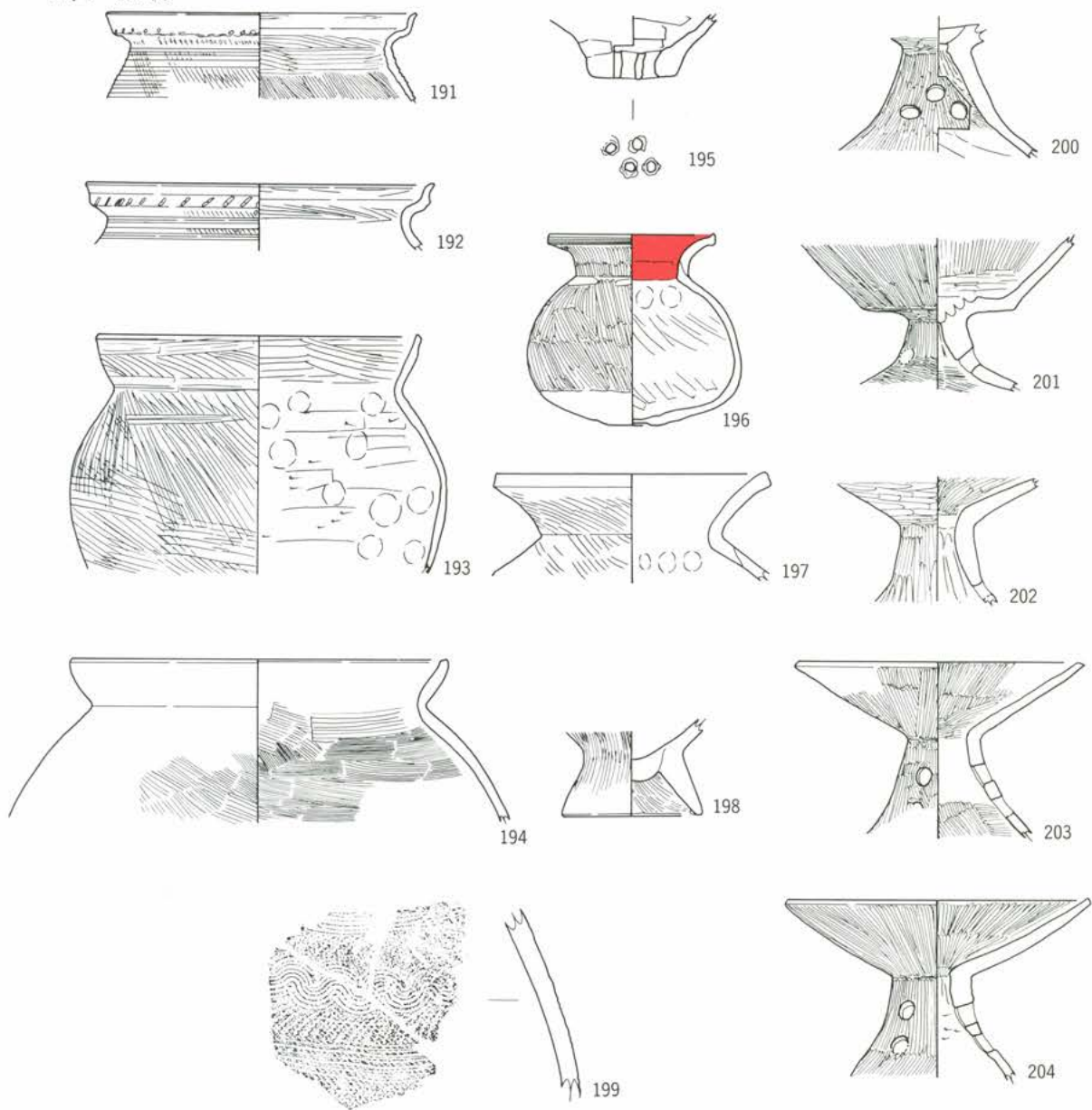
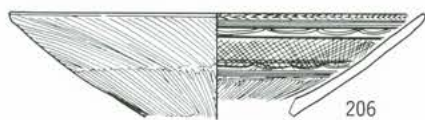


图32 II期土器实测图 A区SD34·37·38·44·64·65

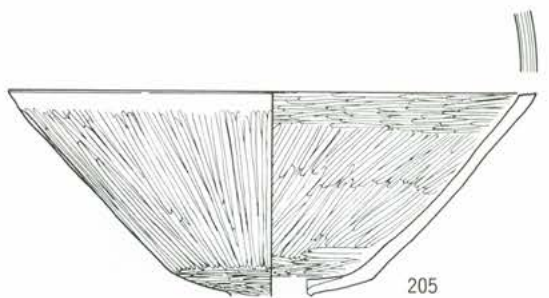
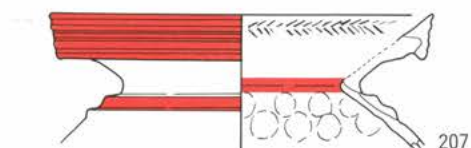
A 区 SK 59



A 区 SK 68



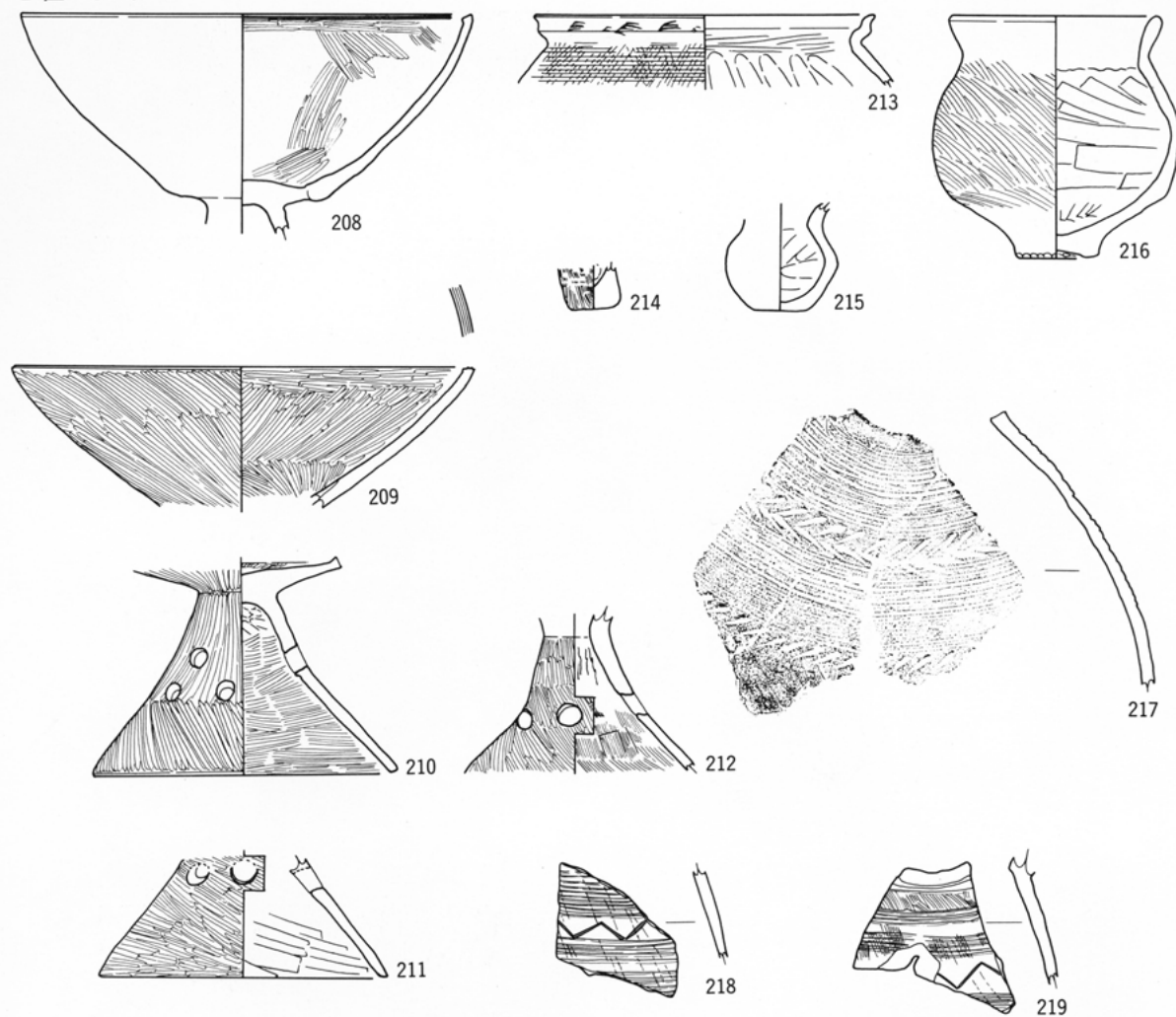
A 区 SK 99



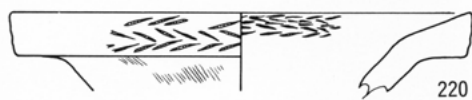
0 10 cm

图33 II期土器实测图 A区SK59·68·99

B 区 SD 91



B 区 SD 102



0 10 cm

B 区 SD 103

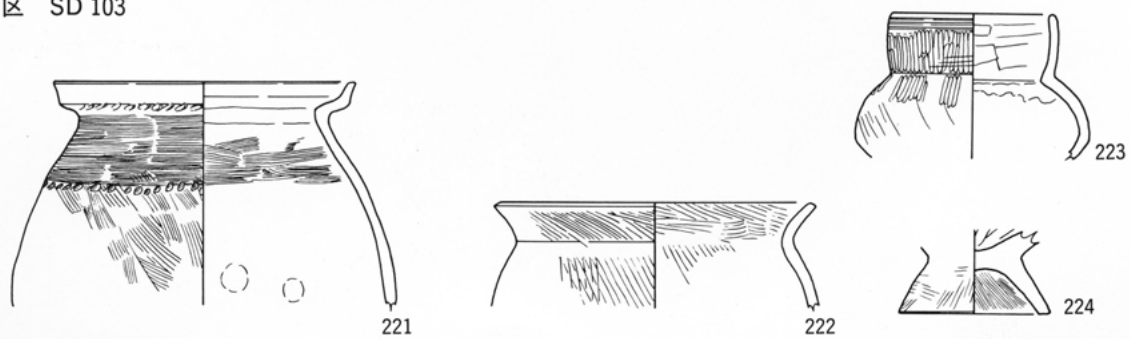
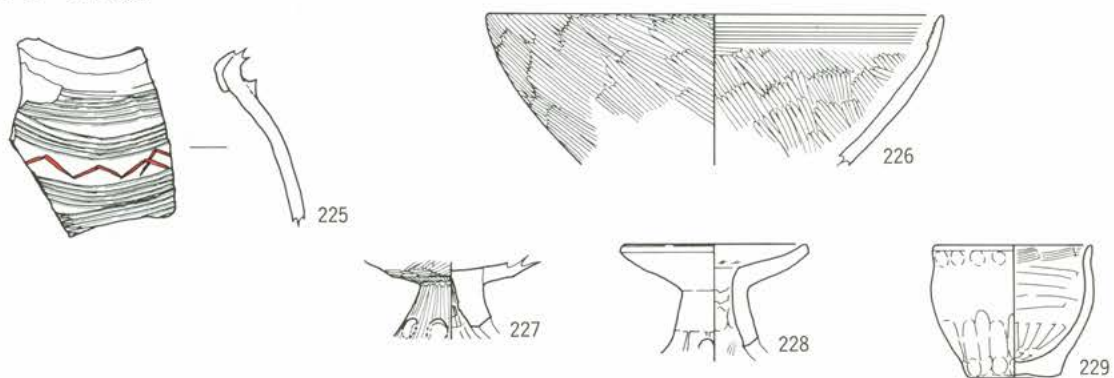
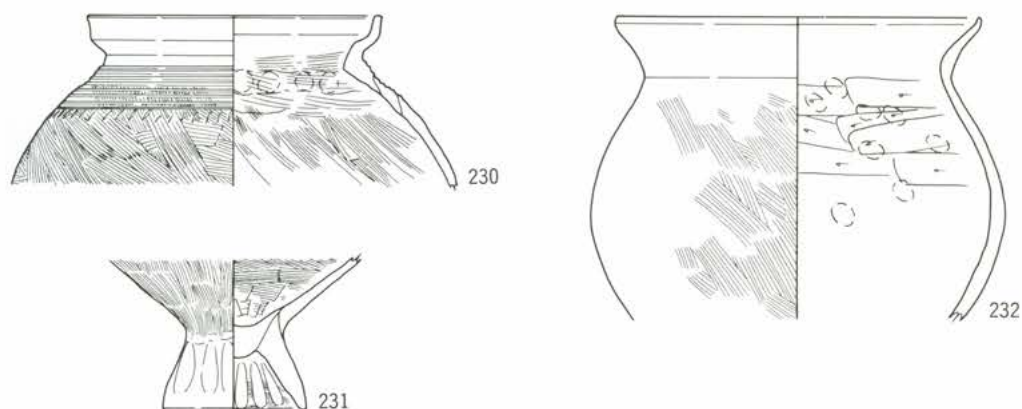


图34 II 期土器实测图 B 区 SD 91 · 103 · 104

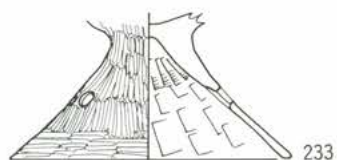
B 区 SK 103



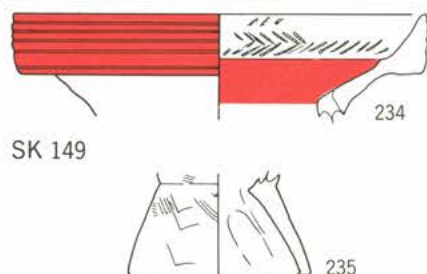
B 区 SK 104



B 区 SK 121



B 区 SK 149



0 10 cm

B 区 SK 126

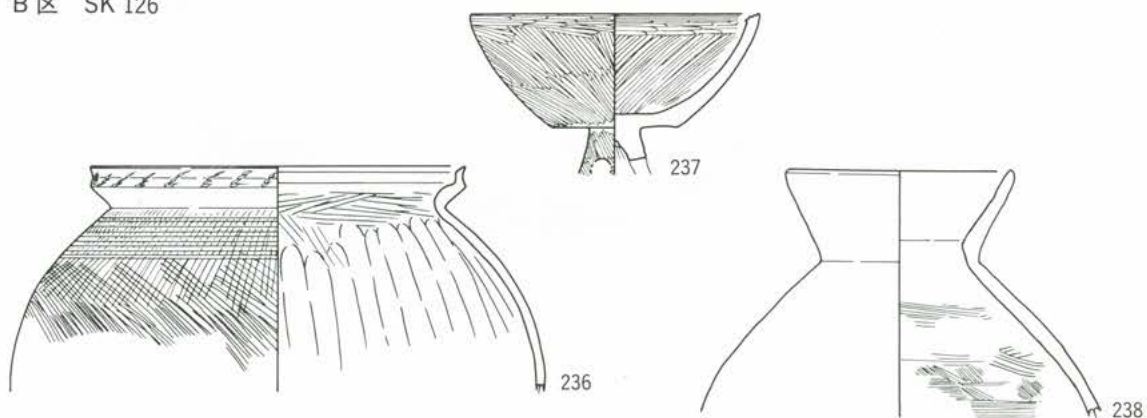
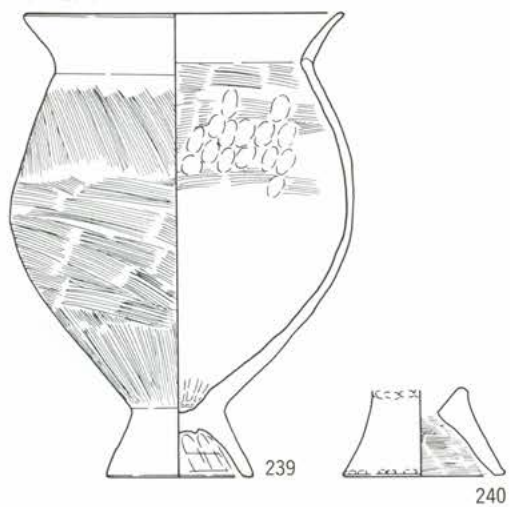
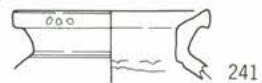


图35 II期土器实测图 B区SK103·104·121·126·149

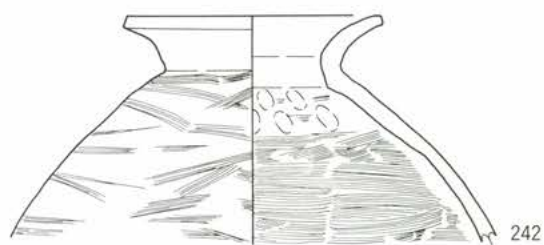
B 区 SK 174



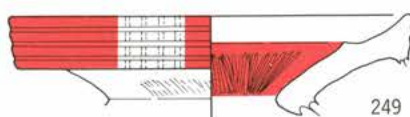
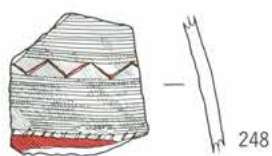
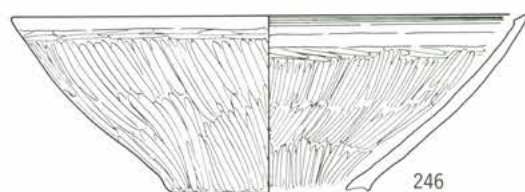
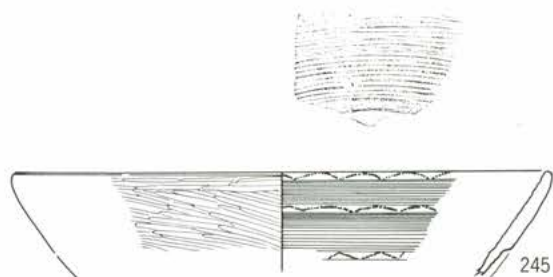
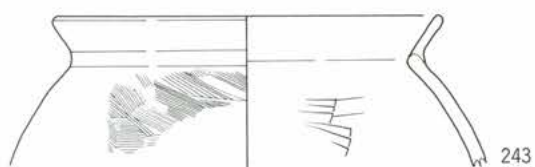
B 区 SK 186



B 区 SK 201



B 区 SK 202



0 10 cm

图36 II 期土器实测图 B 区 S K 174 · 186 · 201 · 202

C区 SD 10

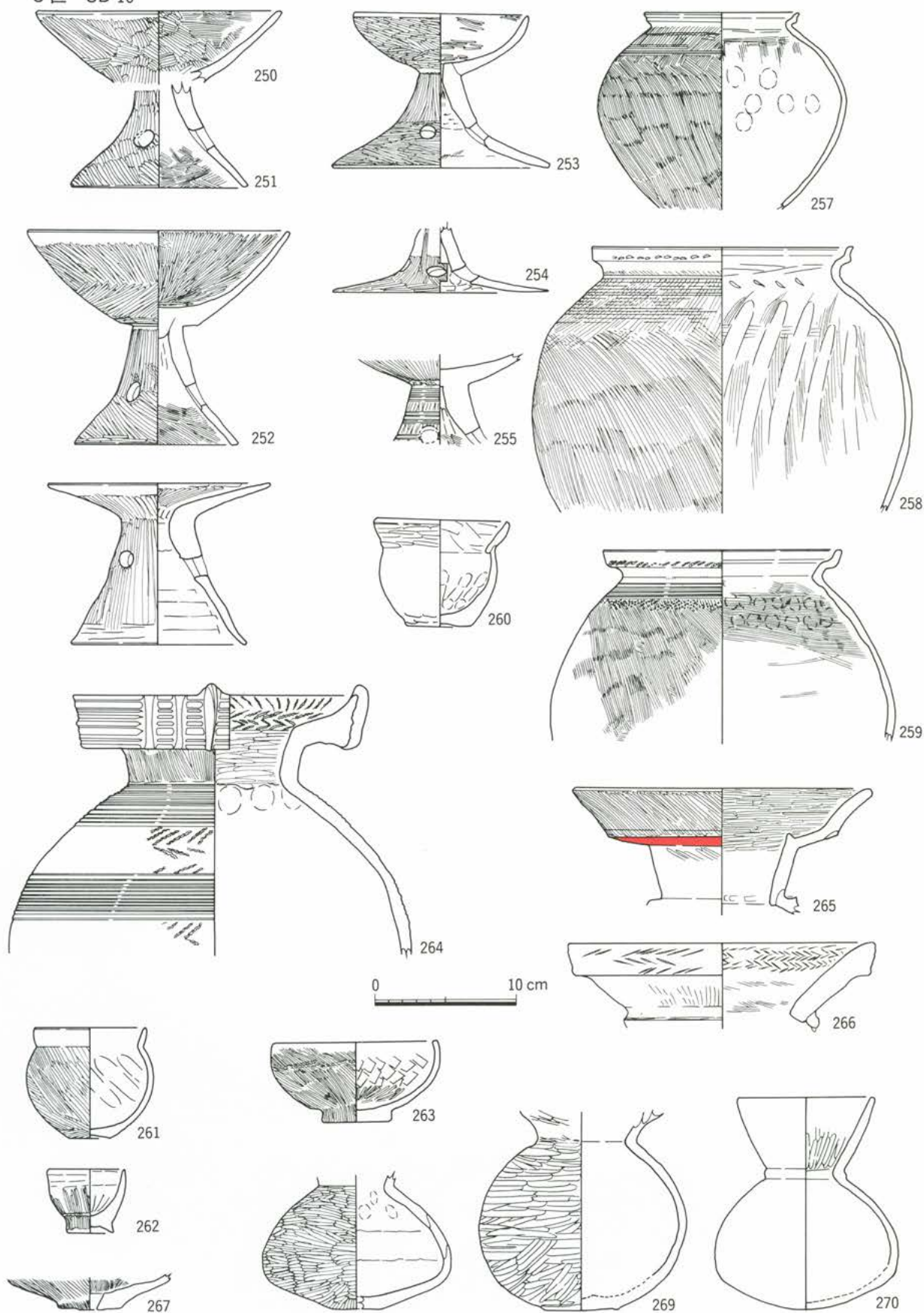
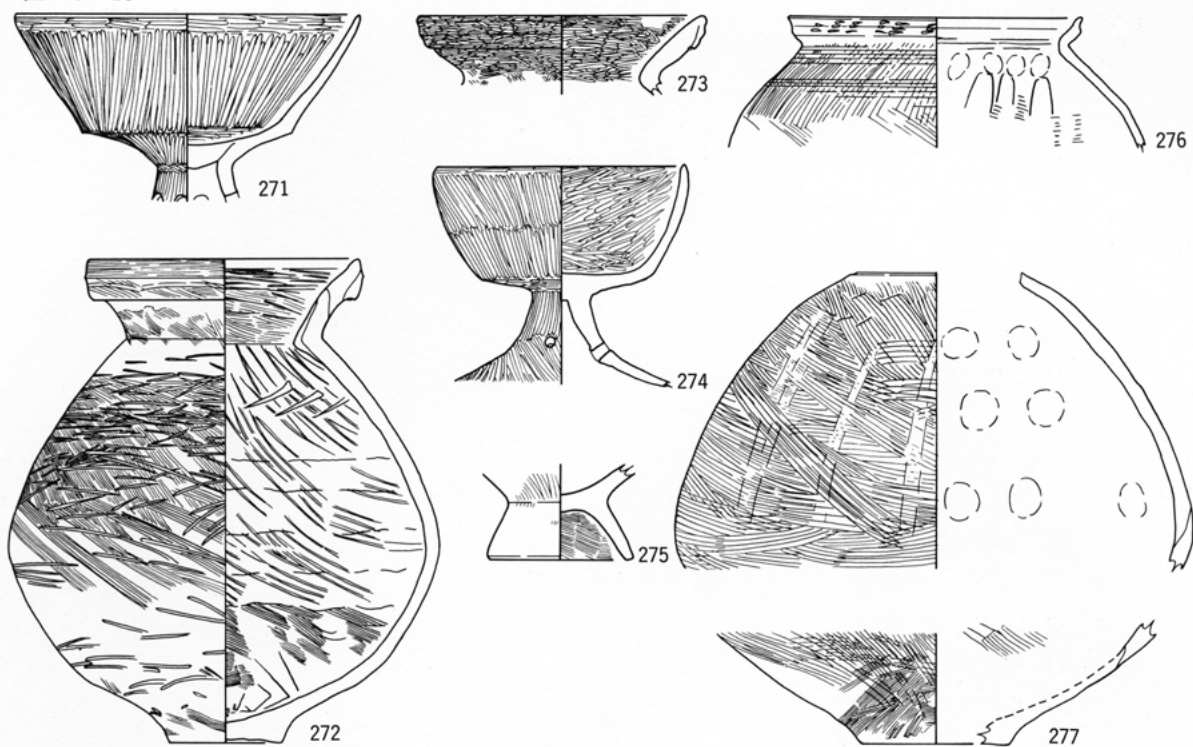
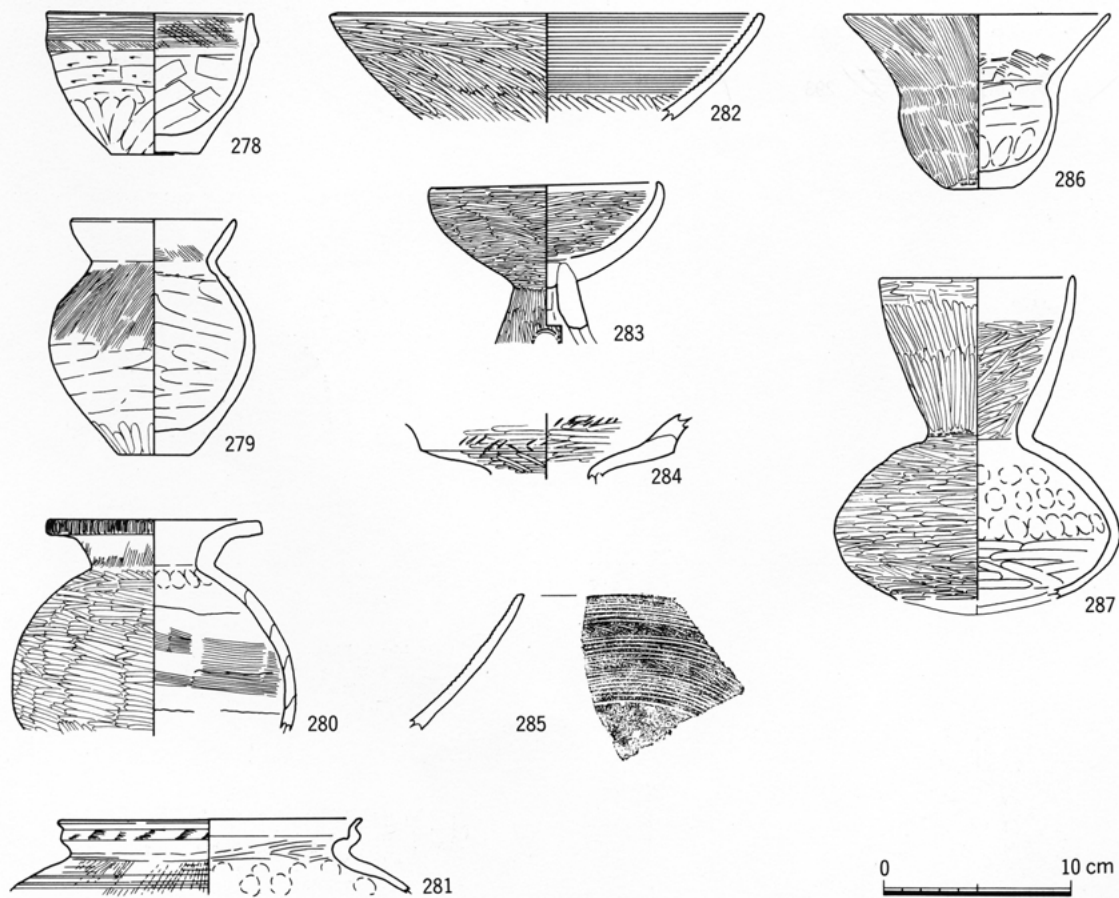


图37 II期土器实测图 C区SD10

C区 SD 10



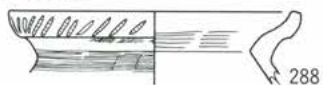
D区 SD 10



0 10 cm

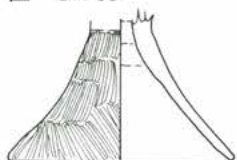
图38 II期土器实测图 C区SD10 D区SD10

C 区 SD 67



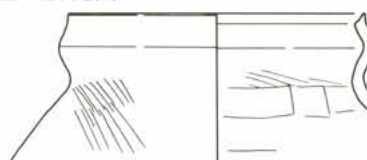
288

C 区 SK 68



289

C 区 SK 174



290

D 区 SD 03



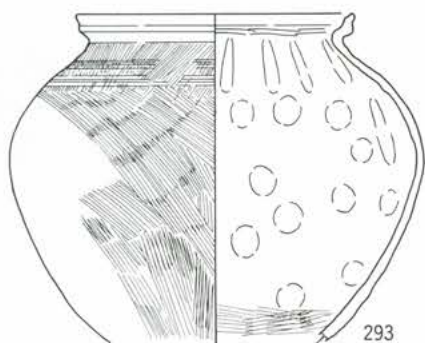
291

D 区 SD 09



292

D 区 SD 15

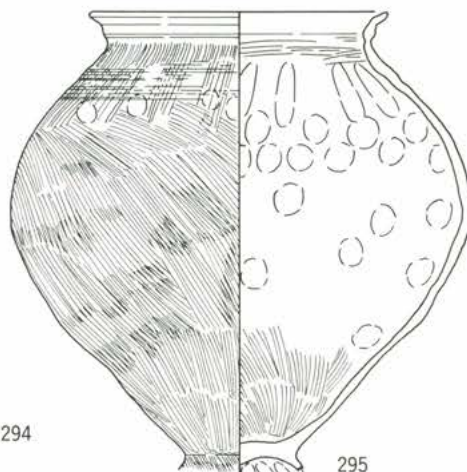


293

0 10 cm

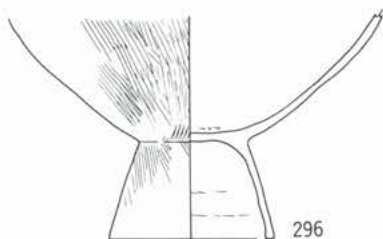


294



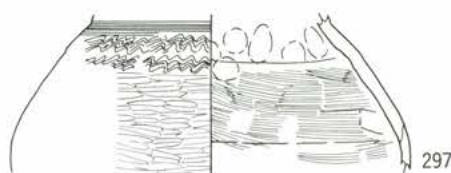
295

D 区 SD 16



296

D 区 SD 18



297

D 区 SD 20



298

D 区 SD 21



299



300

图39 II期土器实测图 C区SD67·SK68·174 D区SD03·09·15·16·18·20·21

C 区 SD 87

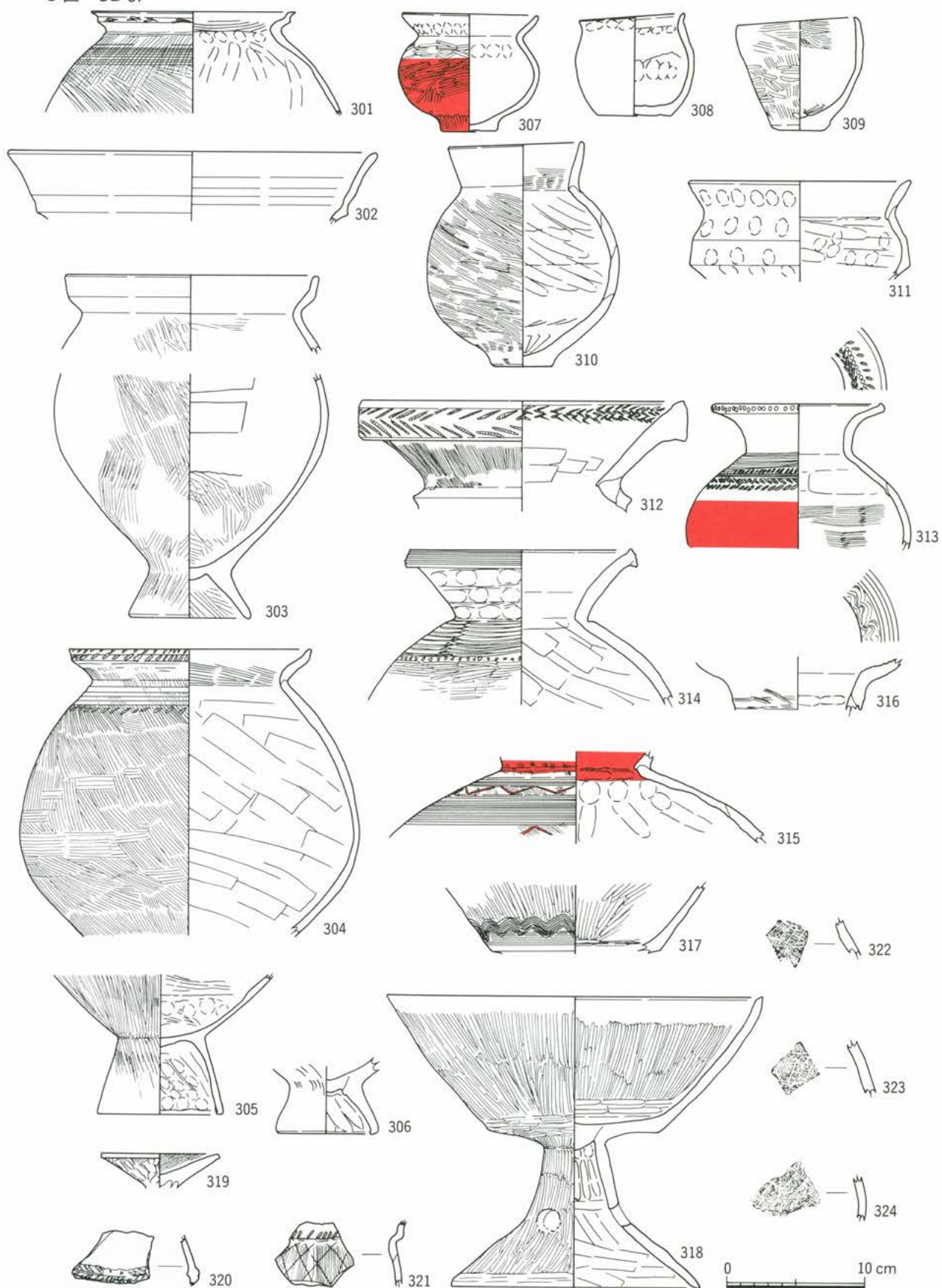
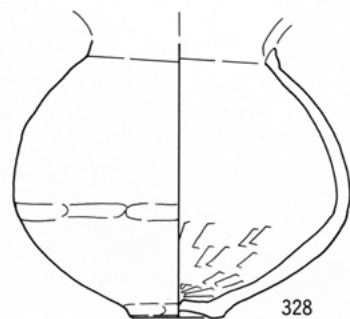
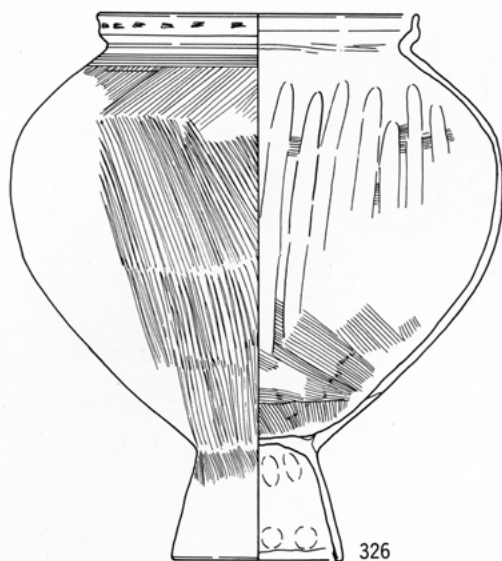
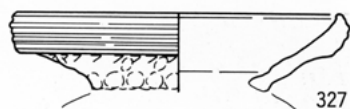
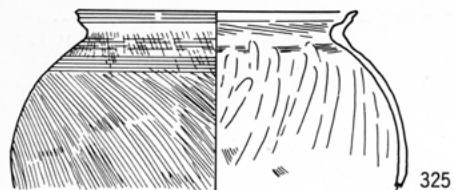


图40 II期土器实测图 C区SD87

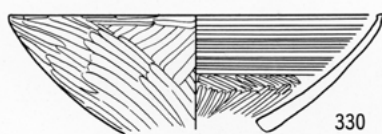
D 区 SK 01



D 区 SK 02



D 区 SD 25



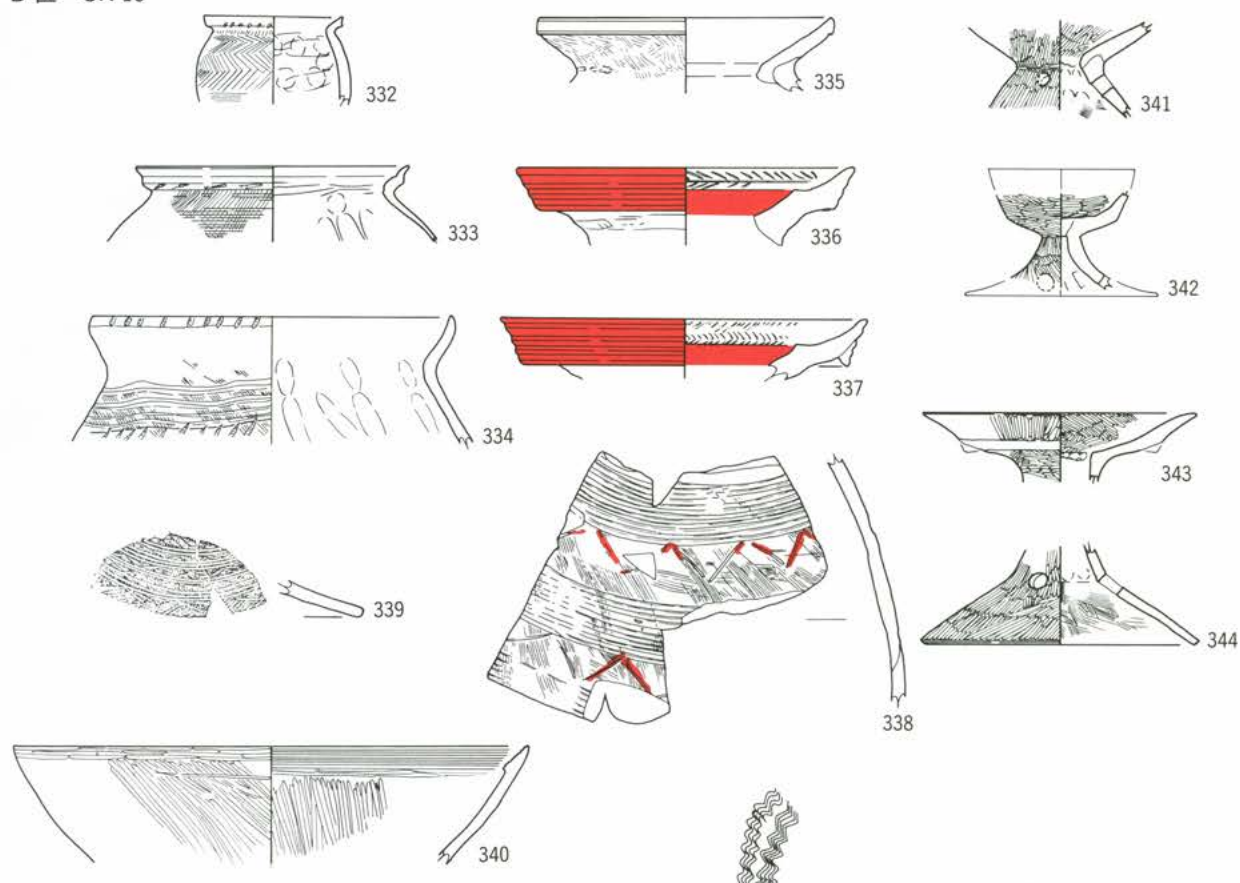
D 区 SD 43



0 10 cm

图41 II期土器实测图 D区SK01·02·SD25·43

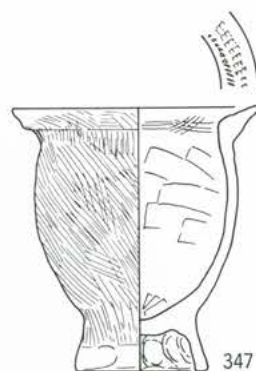
D 区 SK 16



D 区 SK 21



D 区 SK 25



D 区 SK 22

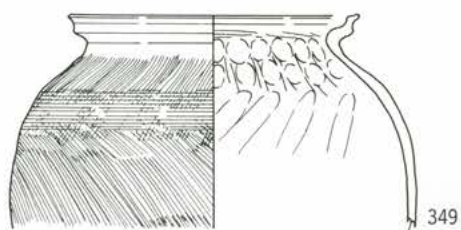
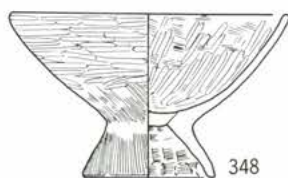
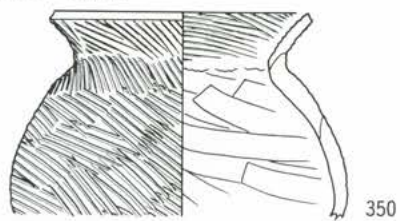
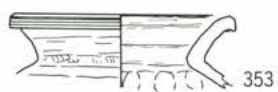


图42 II期土器实测图 D区SK16·21·22·25

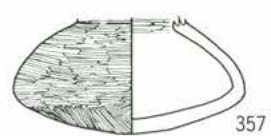
D 区 SK 26



350



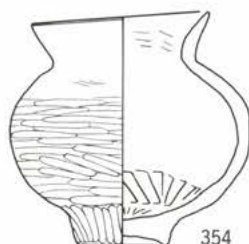
353



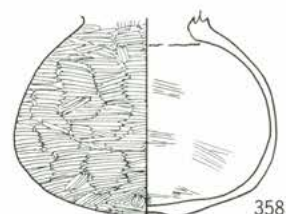
357



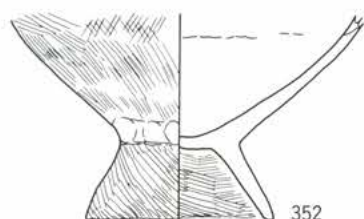
351



354



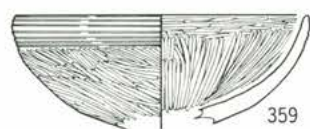
358



352



356

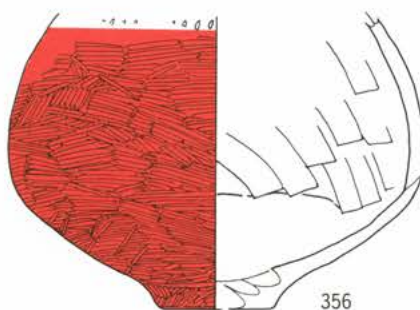


359

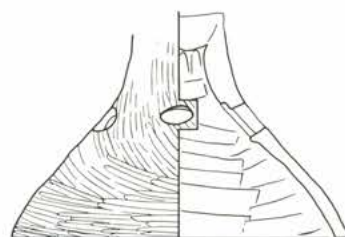
D 区 SK 28



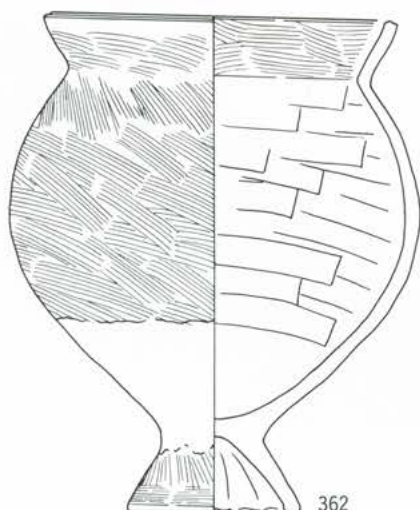
361



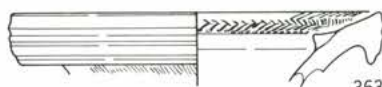
363



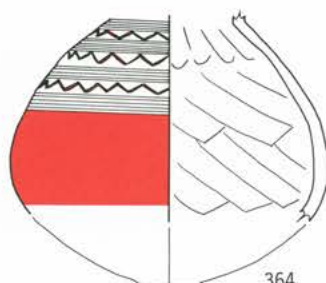
360



362



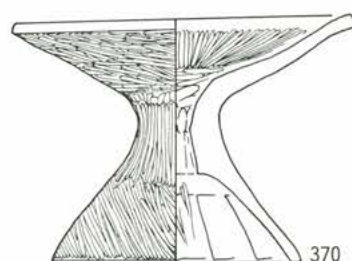
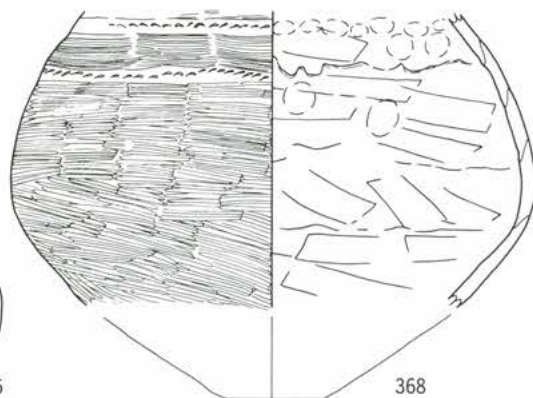
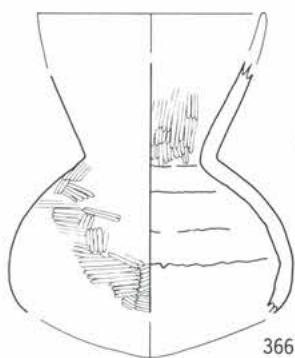
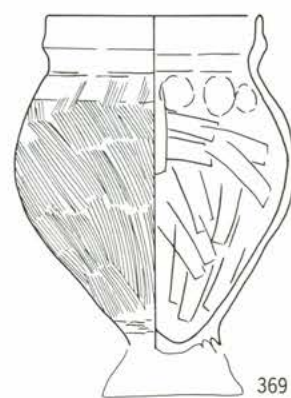
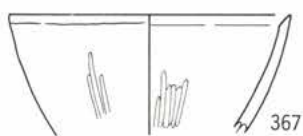
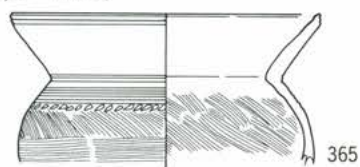
364



0 10 cm

图43 II期土器实测图 D区SK26·28

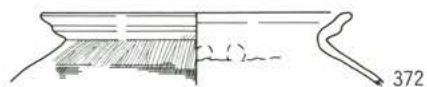
D 区 SK 29



D 区 SK 38

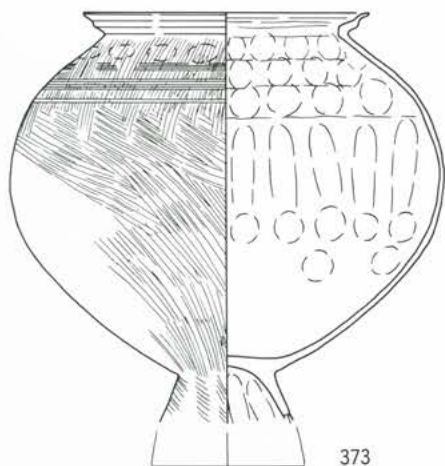


D 区 SK 39



0 10 cm

D 区 SK 40



D 区 SK 41

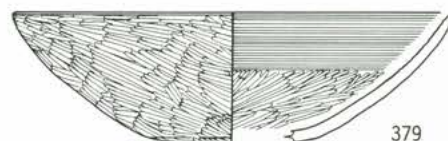
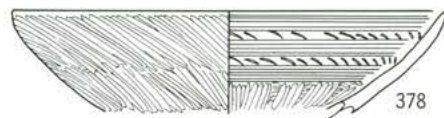
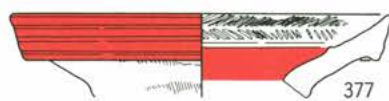
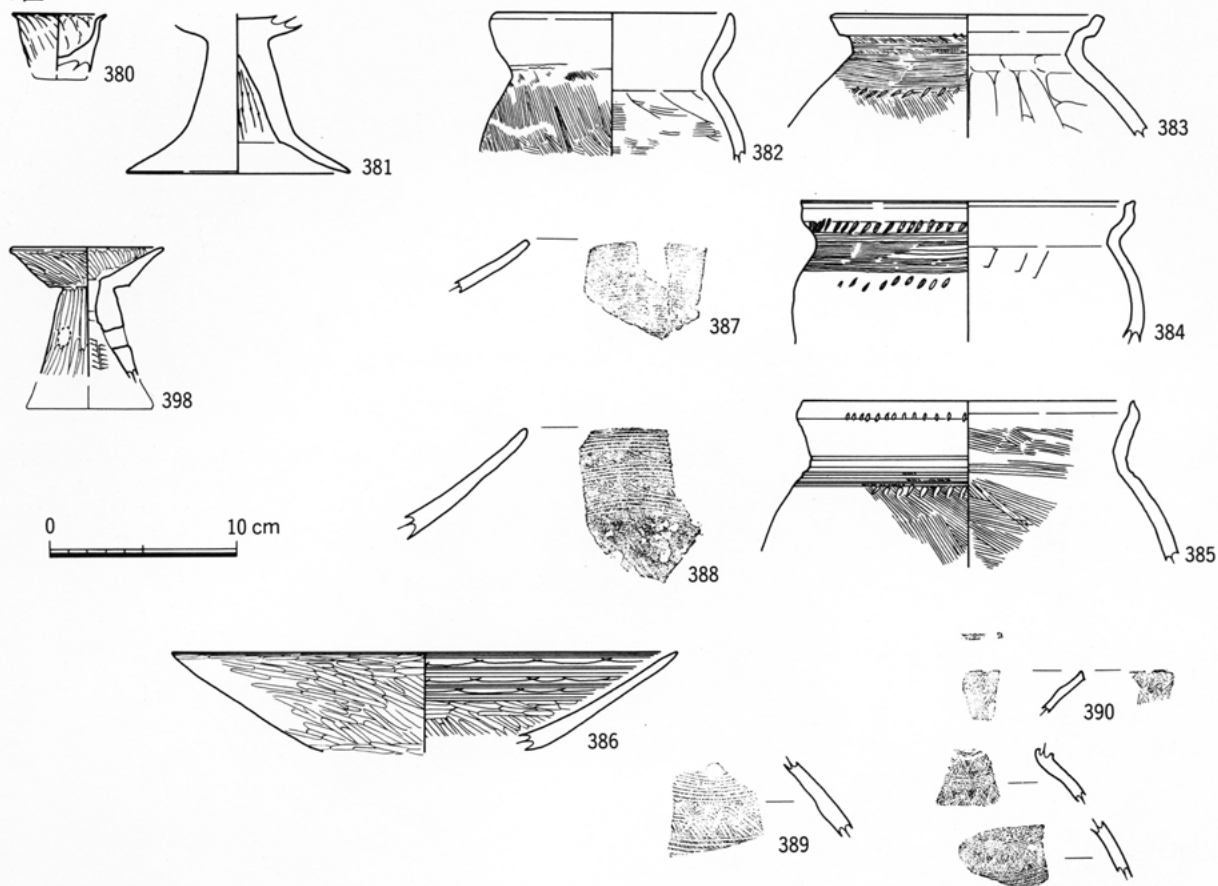
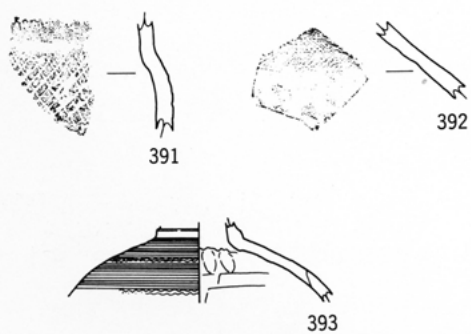


图44 II 期土器实测图 D 区 SK 29 · 38 · 39 · 40 · 41

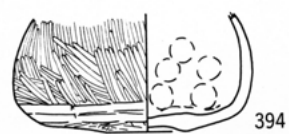
A 区



C 区



D 区



E 区

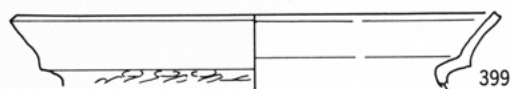
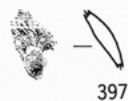
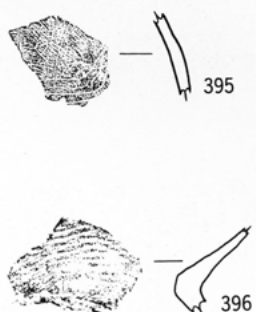


图45 II期土器实测图 包含层出土

Ⅲ期の遺物

Ⅲ期 Ⅲ期の遺物は、概ね 8 世紀代の須恵器となる。なかに 435 の白色系陶器と称される遺物と 436 の土師器甕を含んでいる。須恵器は美濃須衛産と考えられるが、一部に猿投産も含まれる。

杯身 (404～419) : 美濃須衛産

404～408 は高台付の杯身である。404 は腰に明瞭な稜を持たず直線的に開く。405・406 は腰に明瞭な稜を持ちやや反り気味に立ち上がる。407 は腰に明瞭な稜を持つが外反はなく、口縁部を摘み上げている特徴を持つ。408 は 406 等と同様に口縁は外反するが、底部外面が高台部を上回り突出する形となる。

無台杯身 (409～414) : 美濃須衛産

いずれも明瞭な底部を持たず、直線的な口縁部をつくる。底部に粘土巻き跡を残している。410 の内面には煤・タールの付着が認められ灯明皿としての使用が考えられる。412・413 の内面底部からタールの付着が口縁部にかけて認められる。

碗 (415～418)

415・416 は底部をやや突出するが、口縁部で強く外反する共通を示す。417 あるいは 418 は平底となろう。418 は大形品で前 3 者に比べて口縁の外反は弱く、腰中央部に 1 条の沈線をもつ。これは佐波理碗の写しと考えられる。いずれも、美濃須衛産と考えられる。416・417 の内面に煤が付着していた。

419 はおおきさから鉢であろうか。420 は高盤の杯部と思われる。美濃須衛産？

杯蓋 (421～427)

いずれも擬宝珠の摘み部を持つと思われる。422～427 は口縁端部でわずかに折り返す。421 は折り返しがなく新しい。427 は 1 条沈線を施しており、佐波理碗の蓋か。

428 は瓶の口縁部か？ 429 は小瓶、430 は口縁部が特徴的で鉢に近い甕であろう。431 は長頸瓶の口径部、下が研磨されており何かに転用されたか。猿投産？

432 は器面に亀甲文を配し中空の 2 本の筒が付く。硯の蓋か？

433 は形象硯の四足の前足と思われる。434 は器面に鱗状にへら文があり形象硯の一部か？

435 は C 区の S K 64 から単独で出土。小型の高盤に托を組み合わせたような形状を示す。全体に淡い白色で脆い感じがする。

436 は 8 C 代の土師器甕である。

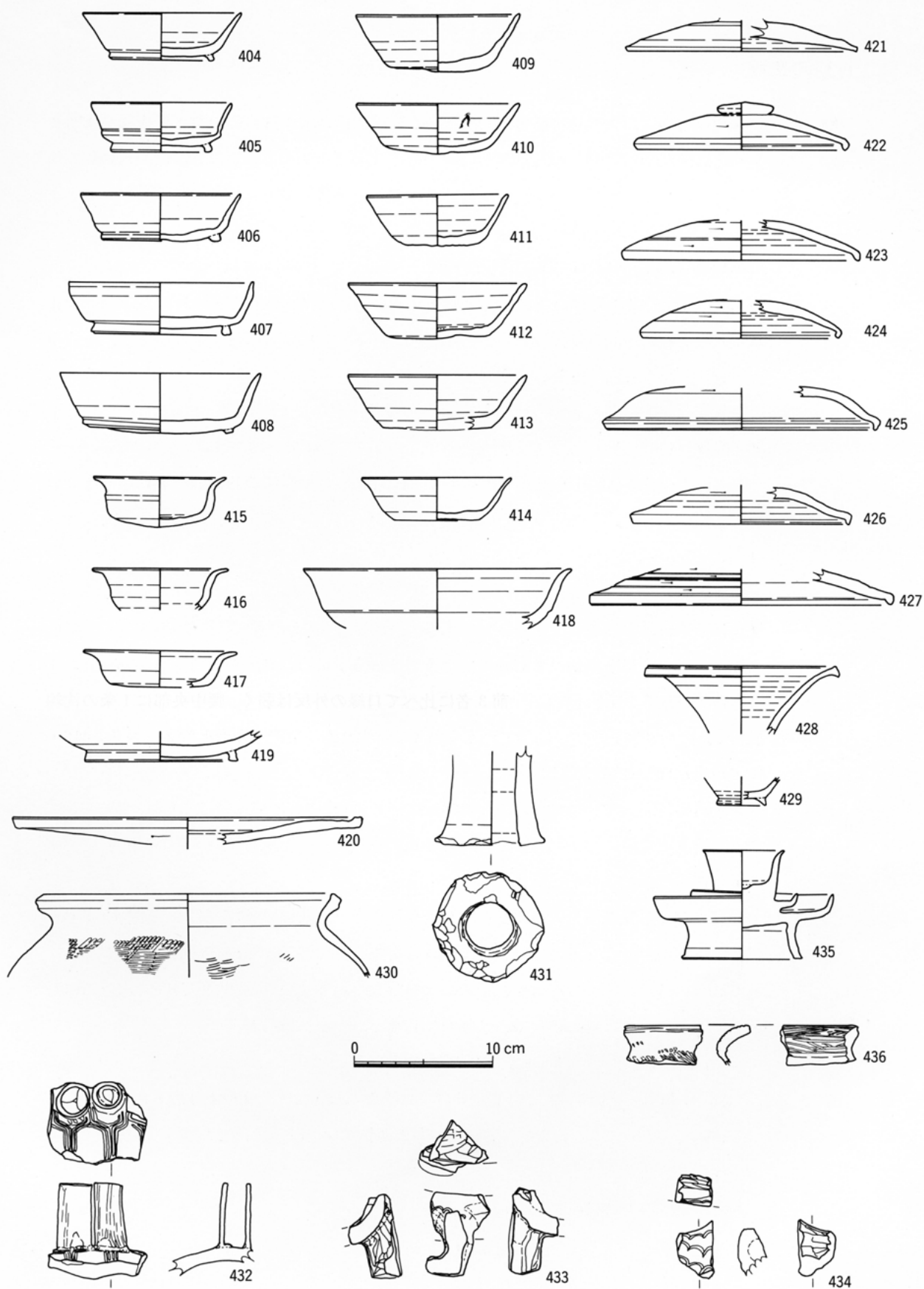


图46 III期土器实测图

Ⅳ期の遺物

Ⅳ期 Ⅳ期は一部に12世紀後半を含むが、大半が13世紀代の前半期に限られる。灰釉系陶器を北部系と南部系に大別したとき、本遺跡ではほぼ同比率となる。土師質皿は94 E区13 C前半の灰釉系陶器と共伴した。輸入陶磁・常滑甕・土師質鍋等をⅣ期の範疇で扱う。

灰釉系碗 (437～449)

北部系は437・440・442・443・445～448、南部系は438・439・441・444・449である。439・443・447・448・448の内面に煤の付着が認められる。

灰釉系皿 (450～464)

450は唯一高台を持つ小皿で12世紀後半と思われる。北部系は452・454・456・457・458・459・462で、南部系は451・453・455・461・463・464である。461は内面に煤が付着していた。

土師質皿 (465～479)

口径が13～14cmとなるタイプと10cm未満のタイプがある。前者の特徴は467を除いて厚手の作りで口縁端部を回転による強いナデ調整を行っている。470～479は非ロクロ成形となる。470は内面に煤が付着している。

輸入陶磁 (480～483)

480・481は連弁文を持つ青磁碗、482は文様のない青磁碗で龍泉産であろう。483は同安産の青磁皿となる。12世紀後半から14 C世紀の初頭に比定できる。

484・485は口縁端部を内側に折り返した鍋である。486は羽釜である。487は内耳鍋、488は灰釉系陶器の鉢となる。489・490は常滑の大甕で491は火鉢であろうか、足部のひとつである。

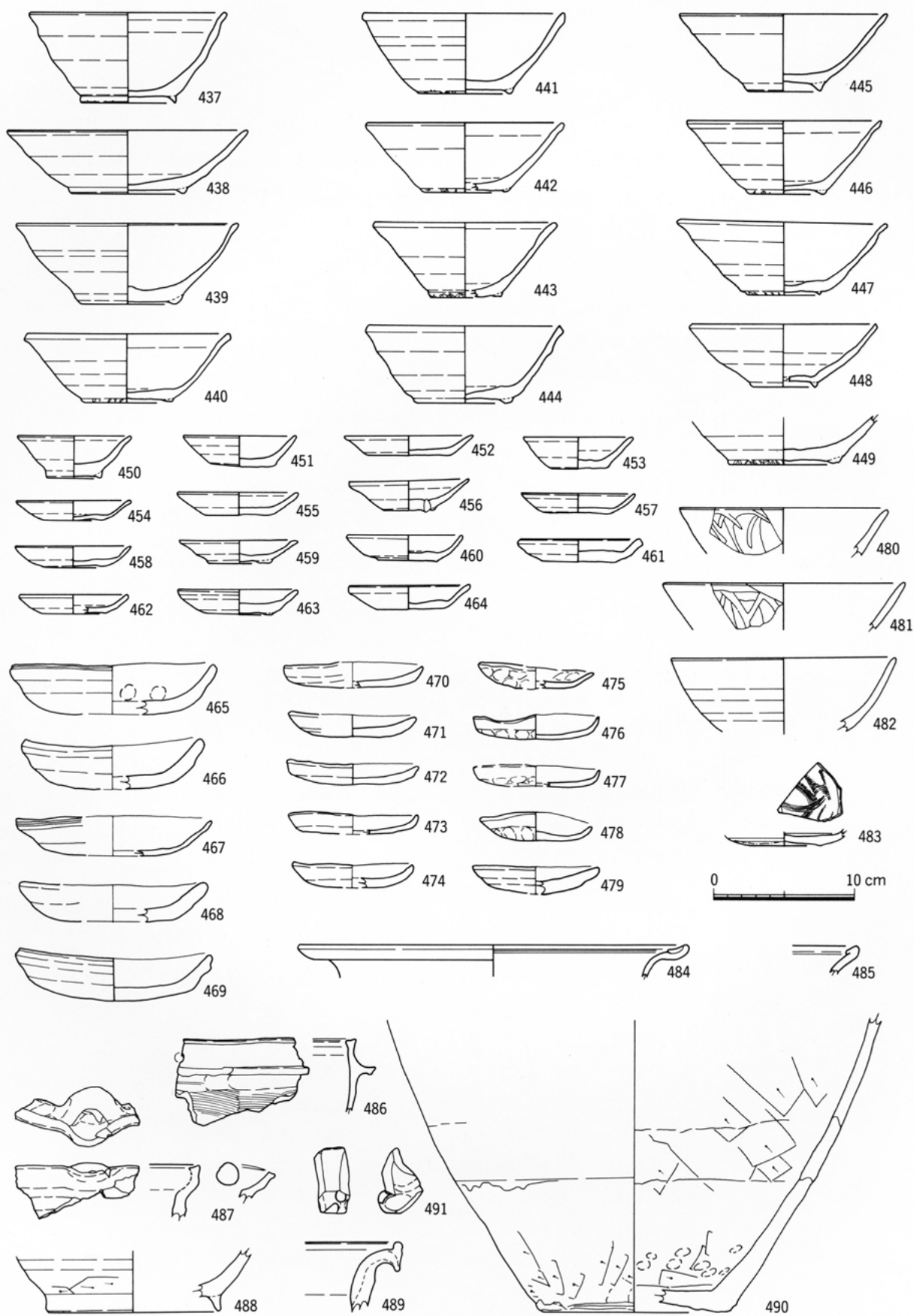


图47 III期土器实测图

墨書土器

墨書土器 (492～513)

北道手遺跡からは21点の墨書土器が出土した。21点中18点が94 E 区から出土している。492は8世紀代の須恵器で残りは全て灰釉系陶器であった。墨書が描かれたのは、492は口縁部に近い外面であるのに対して灰釉系陶器の場合は全て底部外面である。

492は鉄鉢を写した須恵器鉢である。2文字描かれているが左の墨書は何か漢字の跳ねだろうか。右は佛と読める。

灰釉系陶器に描かれた墨書は記号的なもの(499の○とか507の×)と漢字(498)や平仮名(500)に分類できる。灰釉系陶器20点中の5点が小皿の底部に描かれている。493・494の墨書は解読できないが、底部から側面にかけて底部で十字状に何かの跡がみとめられる。火轆の跡と思われる。口縁部には火轆によるくぼみがあり焼成前に掛けられていた。墨書は火轆に切られている。496は×で498は楷書で嶋六と人名であろうか。500は平仮名でいぬと読める。501・508もいぬと読めないだろうか。503は読めないが、509は台所か？

南部系や北部系を問わず墨書されており、墨書の内容も一定しない。概ね13世紀代に比定できる。

番号	調査区/遺構	器種/分類	釈文	墨書部位	備考
E-492	C S D85	須恵器 鉢	□佛	体部外面	美濃須衛？
E-493	E 検出II	灰釉系陶器 皿	□(六カ)	底部外面	“北部系,火轆”
E-494	E 検出II	灰釉系陶器 皿	□	底部外面	“北部系,火轆”
E-495	A 検出II	灰釉系陶器 皿	□	底部外面	北部系
E-496	E 検出II	灰釉系陶器 皿	十	底部外面	南部系
E-497	E 検出II	灰釉系陶器 皿	□(十カ)	底部外面	北部系
E-498	E 検出II	灰釉系陶器 碗	嶋六	底部外面	北部系
E-499	E 検出II	灰釉系陶器 碗	○	底部外面	北部系
E-500	E 検出II	灰釉系陶器 碗	いぬ	底部外面	北部系
E-501	E 検出II	灰釉系陶器 碗	い□(ぬカ)	底部外面	北部系
E-502	E 検出II	灰釉系陶器 碗	上	底部外面	北部系
E-503	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[]	底部外面	北部系
E-504	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[]	底部外面	北部系
E-505	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[]	底部外面	北部系
E-506	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[](十カ)	底部外面	北部系
E-507	E 検出II	灰釉系陶器 碗	十	底部外面	南部系
E-508	A S K92	灰釉系陶器 碗	い□(ぬカ)	底部外面	南部系
E-509	E 検出II	灰釉系陶器 碗	臺所カ	底部外面	南部系
E-510	E 検出II	灰釉系陶器 碗	○	底部外面	南部系
E-511	E 検出II	灰釉系陶器 碗	け□(さカ)	底部外面	南部系
E-512	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[]	底部外面	南部系
E-513	E 検出II	灰釉系陶器 碗	[]	底部外面	南部系

第3表 墨書土器釈文一覧

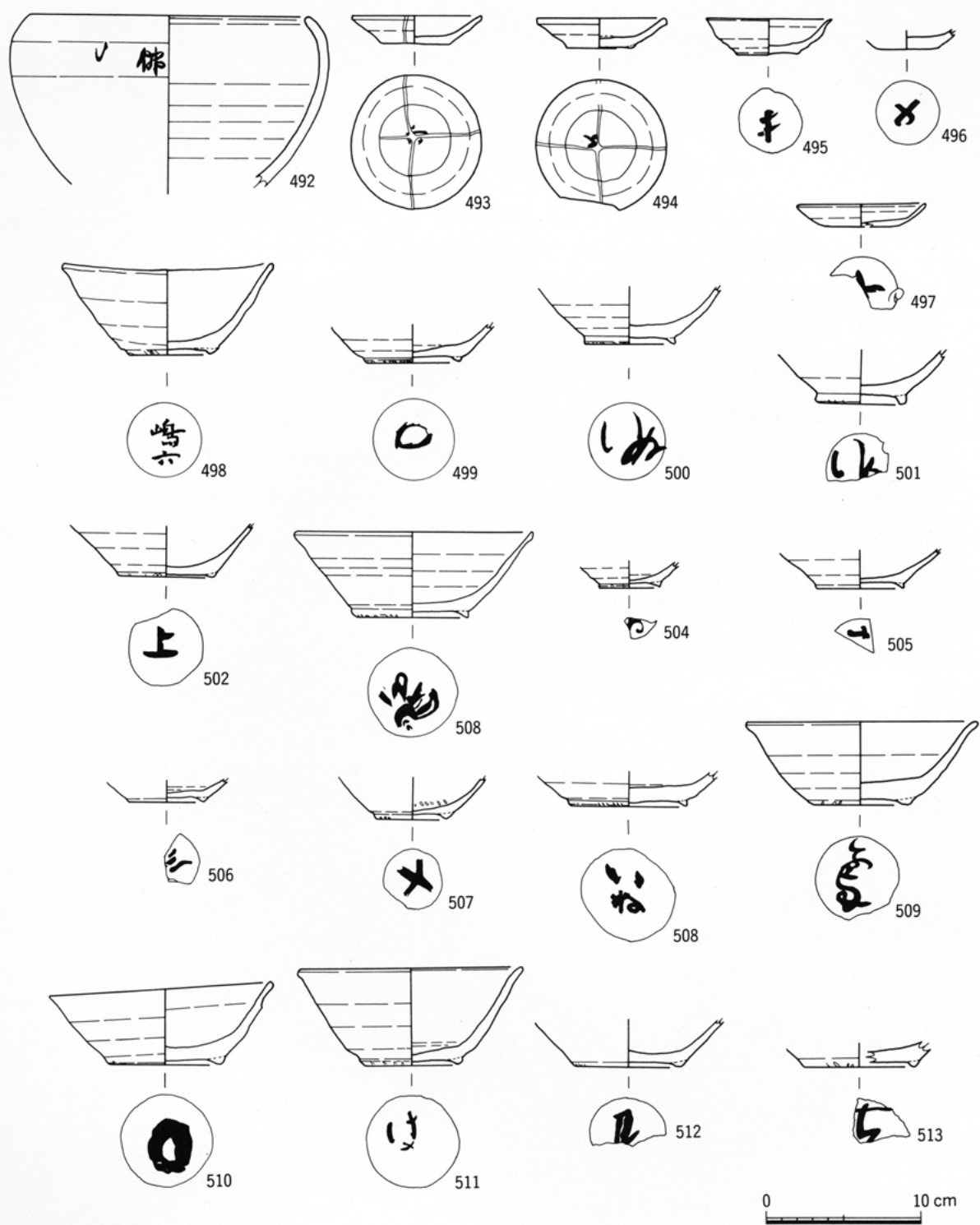


图48 墨書土器实测图

第2節 その他

石製品(1~25)(図52)

すべての調査区から出土したが帰属時期はかならずしも明確にできない。出土した石製品の内容は打製石鏃・搔器・打製石斧・敲石・砥石であった。

打製石鏃(1~6)

凹基形石鏃1点、有基形石鏃4点、柳葉形石鏃1点の計6点である。1はホルンフェルス製で両肩に稜をもつ五角形を呈す。2はチャート製で短い基部を持つ。1と同様五角形をしている。3はチャート製で稜を持たない三角形となる。4は6.4gと他に比べて格段に重い。チャート製である。5は透明度の高い黒曜石製でめずらしい。縦長であるが五角形をしている。6はいわゆる下呂石の安山岩系の基部を丸くするタイプである。これらは、弥生中期に属すると思われる。

搔器(7)

両端の一部を欠くが4×2.3cmの長方形を呈す。石質は安山岩系である。

打製石斧(8・9)

8は一部を欠損しているが全体として長方形状を呈すると考えられる。石質が安山岩系であるため(7)と同様な搔器かも知れない。9は結晶片岩で先端から側面にかけて摩滅の跡が認められる。弥生中期の掘り具か？

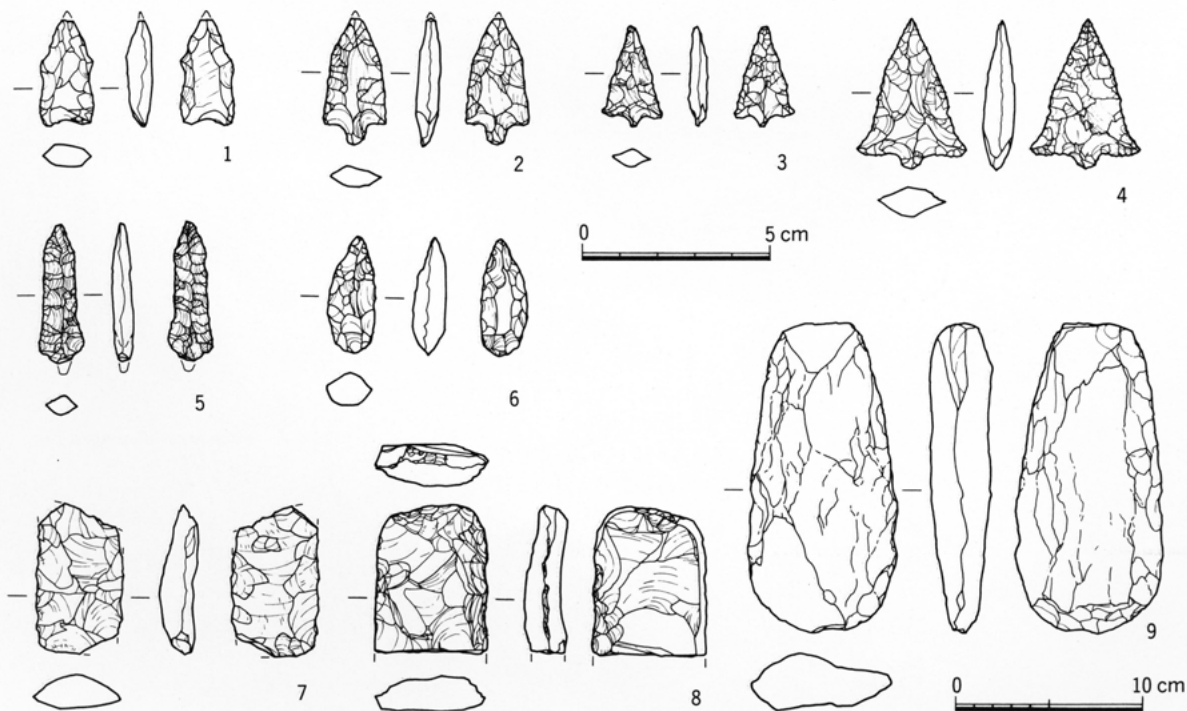


図49 石製品実測図(1) <1~7=1:2、8・9=1:4>

敲石 (10~14)

5 点の敲石が出土した。いずれも円筒形のいかにも握りやすい長さ15~18cmの河原石で
 両端がすり減っている(10~14)。一部に側面をも摩滅の痕跡がある(11)。10は濃飛流紋岩、
 11は砂岩、12は濃飛流紋岩、13は凝灰岩、14は安山石質凝灰岩となる。帰属時期は判然と
 しないがⅠ期からⅡ期に属すると考えていいだろう。これらに対応する皿状の石は出土し
 ていない。

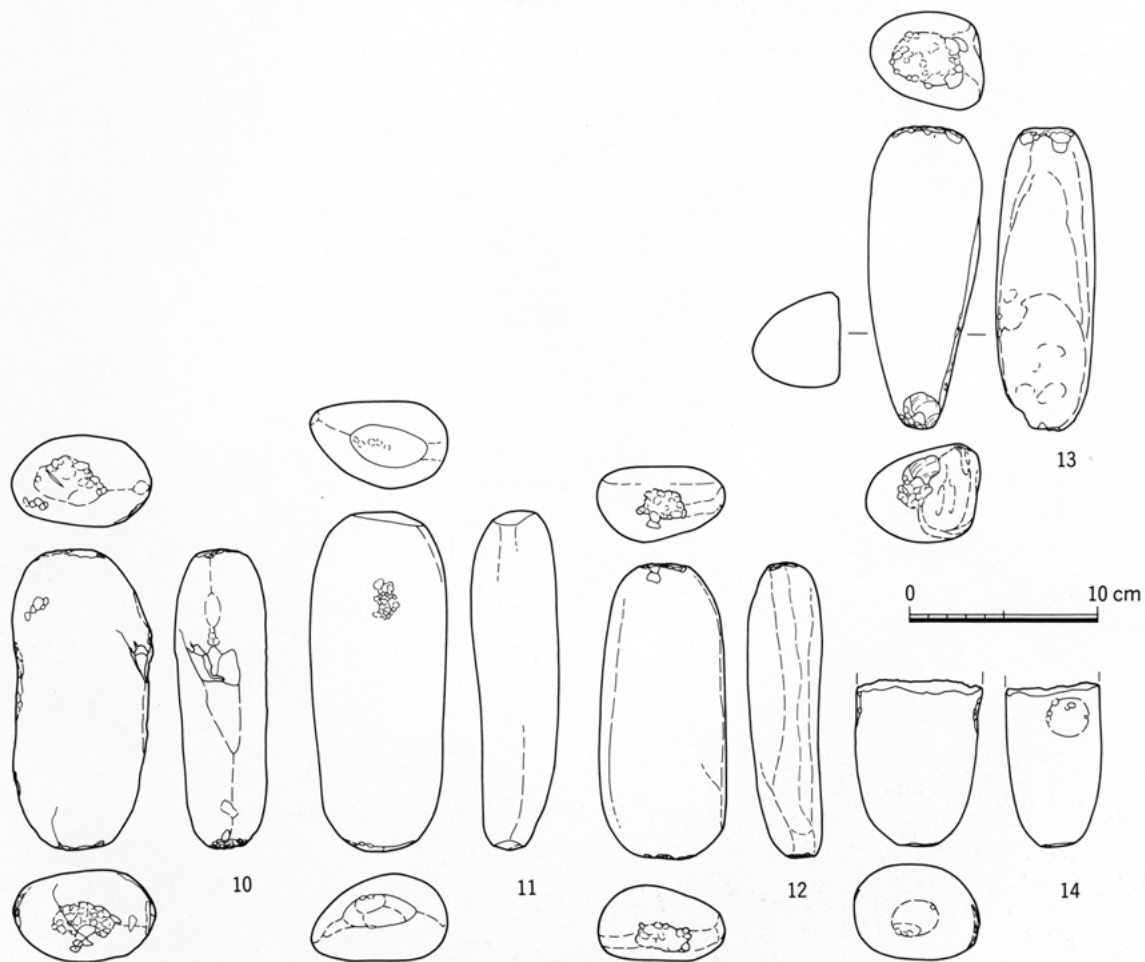


図50 石製品実測図(2) <1:4>



図51 石製品実測図(3) <1:3>

砥石 (15~25)

大小は別として形態上、方形と長方形の2タイプがある。石質はさまざまでホルンフェルスが15・19、流紋岩質凝灰岩は16、頁岩は17、泥岩は18、凝灰岩は20・22・23・24、安山岩は21、砂岩は25とばらつきある。使用工程上に起因するのであろうか。いずれも小型品であり、手持ち砥石と思われる。出土状況からⅡ期に属すると思われる。

土製品(514～544) (図52)

ここで土製品とするのは、加工円盤(Ⅱ期・Ⅳ期)・陶丸・加工土器・土鍾・土玉・土鈴である。帰属時期は判然しない。

加工円盤 (514～526)

加工円盤にはⅡ期に属するものとⅣ期に属するものがある。514～523はⅡ期に属する。523の径2.7cmを除いて5cm前後の大きさに集中する。使われた土器も壺・甕・高坏と一定しない。不定形ながら周縁を乱暴に打ち欠いただけである。

524～526はⅣ期に属する。524は播り鉢を525・526は灰釉系陶器の再利用品である。形態はⅡ期もⅣ期も同型であるが、時代と規模の違いはそれぞれの使用法に起因するのであろうか。

陶丸 (527)

灰釉系陶器製で径2cmの大きさである。

加工土器 (528～533)

加工土器とは土器片を用いて、その周縁がすり減っているものを指す。Ⅱ期の所産である。器種は壺片が528・530・531で他は高坏片を利用している。使用目的は語れない。

土鍾 (534～543)

円形状と管状との2タイプがあった。

534・540～543はⅠ期又はⅡ期に属する。

543は全面に朱彩を施している。

542・543は土鍾ではなく別の装飾性の高い土玉であるかも知れない。

土鈴 (544)

紐部と球形部の一部を欠く。Ⅳ期に比定される。

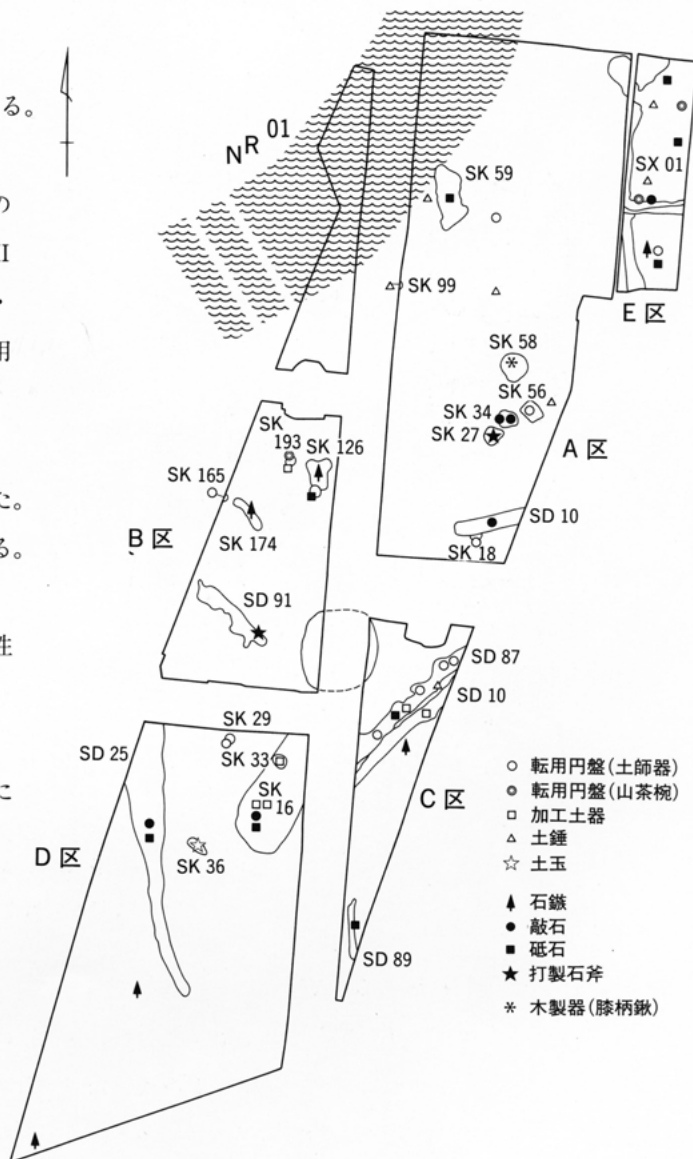


図52 石製品・土製品・木製品分布図

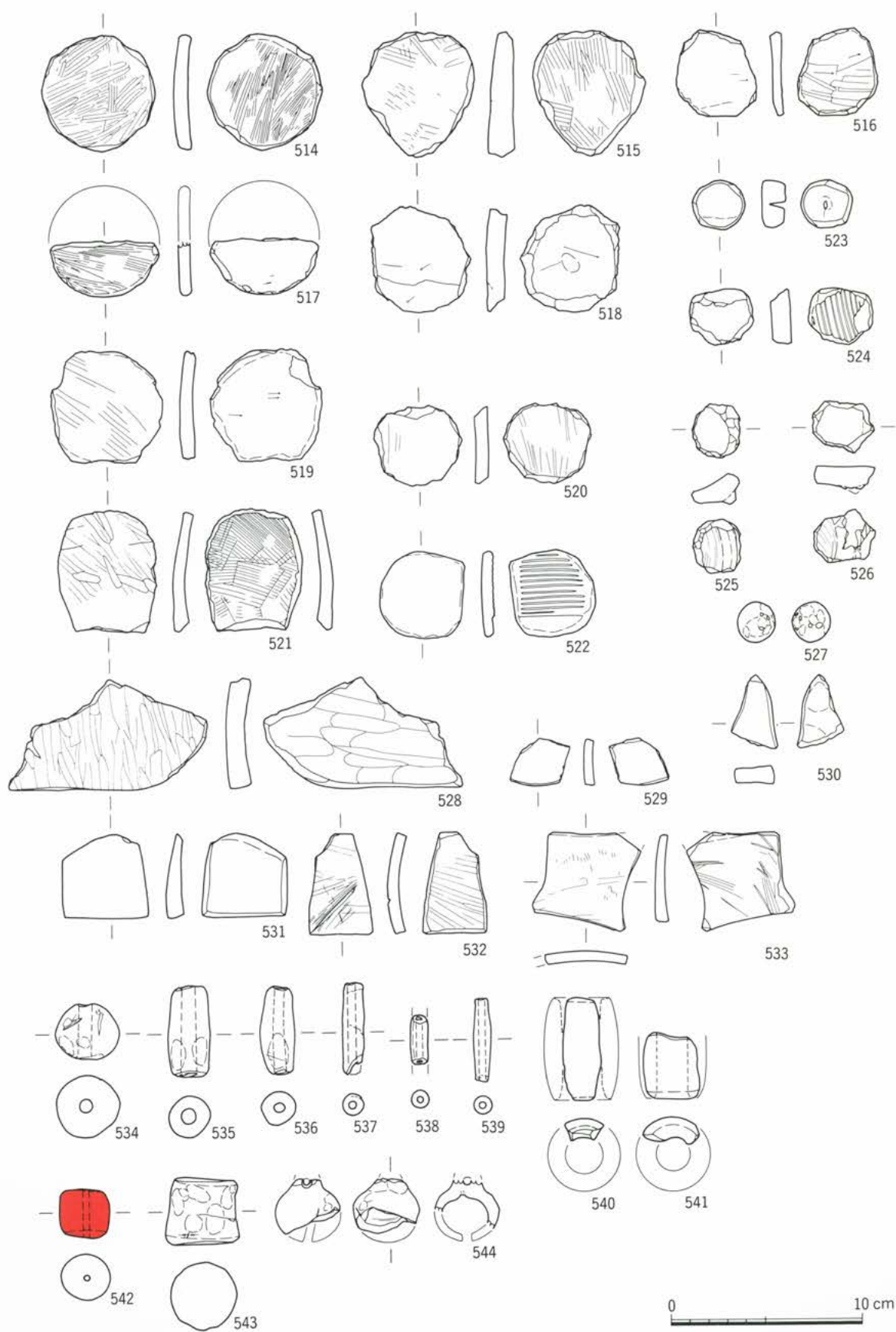


图53 土製品実測図 <1:3>

木製品(1・2)(図54)

穿孔のある木製品(1)

93C区のSD10より出土している。現長は12.2cmを測る。両端は欠損しているが、その一端に1孔が穿たれている。

膝柄鍬(2)

ほぼ全形を知りえる。全長48.6cm、幅9.0cmを測る。基部には取り付けようの刻みが彫り込められている。SK59の最底部から出土した。最底部からは他の遺物は出土しておらず、膝柄鍬が廃棄の初期行為の中でなされたことを物語っている。出土木器そのものは東海地方にみられる一般的な形態を示している。北道手遺跡唯一の農耕具である。

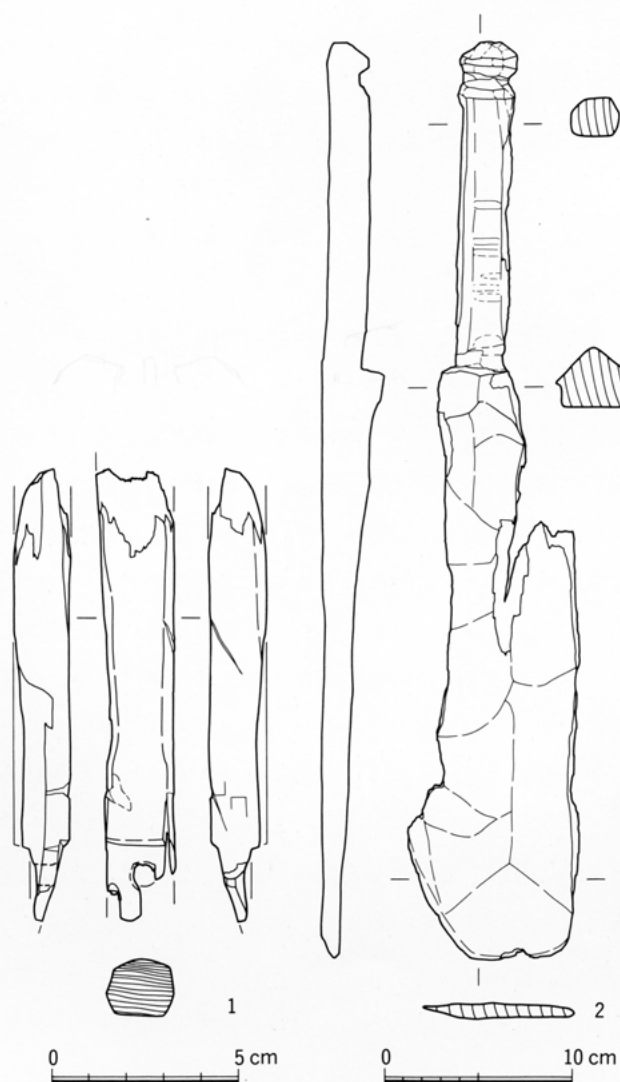


図54 木製品実測図 <1=1:2、2=1:4>

第4章 科学分析

第1節 北道手遺跡の地形・地質

北道手遺跡は濃尾平野北西部、一宮市大字光明寺字北道手に位置する。調査地の北側およそ1.0kmには木曽川が西流する。北道手地区の東には犬山付近から南西方向に向かって半径およそ12kmで広がる犬山扇状地がある。標高およそ10m等高線にこの扇状地の扇端部は設定できる。そこから標高およそ2.5mまでが、上流側の扇状地帯に対して河川地形がみられることから自然堤防帯という。調査地である北道手地区は扇状地帯と自然堤防帯の境界部付近にあたる（図55）。

礫などの粒径の大きいものを扇状地帯で堆積させてきた河川は、本地域付近で地形勾配が急に緩やかになるため、礫よりもさらに細かい砂などを堆積させるようになる。そのため、ときに砂が小高い丘状に堆積し、いわゆる自然堤防を形成しているところが見られる。例えば、調査地東方の一宮市光明寺地区には、東西およそ1.0km、南北およそ0.5kmの東西に長い自然堤防が認められる。また、調査地の南側およそ0.4kmの一宮市田所地区にも、集落を囲んで東西・南北およそ0.3kmの自然堤防が存在している。北道手遺跡はこれらの自然堤防がつくる微高地と微高地とに挟まれた低地にあたり、調査当時は水田が広がっていた。

江戸時代に薩摩藩がおこなった築堤により木曽川の流路が固定されるまでは、本地域周辺には河川が北西－南東方向に幾本も流下していたことが文献資料からわかっている。これら河川の運搬・堆積作用は、当地域に砂を主体とした碎屑物を厚く堆積させた。調査地も河川営力が大きいところに位置するため砂質堆積物が厚く埋積している。また、調査区が比較的新しい河川により削剝を受けている場所（93A b区）もみられた。遺跡の堆積層序は、下位よりシルトや粘土などを含まない非常に淘汰のよい白色細粒砂からなる。本層はときに細礫を含んでくる。その上位には明瞭な境界面をもたずに漸移する砂質シルトが堆積する。堆積構造は見られない。この砂質シルト層の上部は基本的に構成堆積物は同じであるものの、腐植質を多く含み黒色を呈する部分で更に2層に分けられる。上部と下部の境界面は漸移的に変化し、明瞭な境界面をもたない。主に遺跡から出土する土器および遺構は、本層の上部である黒色を呈する腐植質な砂質シルト層から検出され、本層が当時の生活面であったと考えられる。

北道手地区は、木曽川本流にも近く地下水面が高いことが予想される。そのため砂層自体は過去においても過飽和状態にあったと期待される。第4章、第2節で後述するように、過去の地震により形成された地震痕が数多く確認される。

北道手遺跡A区およびB区を北東から南西方向に削剝する河川流路跡で、砂層の液状化およびそれに伴う流動化跡が確認された。A区の西半分には古墳時代の遺物包含層である黒色腐植質砂質シルト層を切る河川堆積物がみられる。この堆積物中に砂層の液状化跡がみられ、極細粒砂とシルトからなる平行葉理が乱されたコンボルト葉理 (convolute lamination) と、遺物包含層である黒色の中粒砂

質腐食質土が砂層中に取り込まれた粘土の集合片 (mud clast aggregates) が確認された。コンボルト葉理は、黒色の中粒砂質腐植質土の境界面に沿って東西の幅約3～4 m、南北約15 mにわたって発達するが、境界面から離れる（西側へ向かう）と変形構造はみられない。粘土の集合片は、砂層内部の堆積構造とはほとんど無関係に不規則な形で含まれる。集合片は平均数cm程度の角礫状を呈し、淘汰は悪く配列に規則性は認められない。B区では、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土を切る砂脈が多数確認された。これは地震により間隙水圧の高くなった砂が、構造的に弱い部分をめがけて貫入したものである。また、SD79では遺構を埋積する層厚およそ25 cmのシルト中にコンボルト葉理がみられた。このコンボルト葉理や泥質堆積物の集合片という現象は、ともに地震などの繰り返し応力を受けた堆積物が粒子間応力（有効応力）を失って、浮遊・流動状態になり形成されるものである。北道手遺跡でみられるコンボルト葉理の特徴には次のようなものがある。

1. 砂層全体または単層上部に発達する。
2. 褶曲はなめらかで小断層はみられないことが多い。
3. 褶曲は砂層の下部より上部で著しい。
4. 平行葉理や斜交葉理の変形でその存在がわかる。

北道手遺跡では砂層の変形構造が顕著である。これは、北道手遺跡が木曽川に近く地下水面も高いと予想され、砂層内部は少なからず飽和状態にあったと考えられるからである。飽和した砂の液状化現象が地震などにより普遍的に生じることが知られており、本地域の現象も地震により生じたことは確実である。



図55 北道手遺跡の位置と周辺の地形
 (国土地理院発行1/25,000土地条件図を使用)
 黒いトーン部分が自然堤防（微高地）、白抜き部分は後背湿地にあたる。

第2節 北道手遺跡の地震の痕跡

地震の痕跡 沖積平野である濃尾平野は厚く堆積した未固結の礫・砂・シルトなどの堆積物から構成されており、軟弱地盤ゆえの災害を被りやすい。地震による液状化をはじめとした災害もその代表的な例といえよう。近年、遺跡における地震の痕跡の発見は、歴史時代における単なる災害の研究に留まらず、防災的な意味あいからも注目されている。

ここでは、北道手遺跡で確認された地震痕の記載を行い、その意義について検討する。

地震痕の (1) 93A区

記載 93A区においては、次の2つの形態の地震痕が確認された。

異常堆積 1. 河川堆積物に認められる異常堆積構造〈図58A〉

構造 93A区内で検出された河川（NR01）を埋積する堆積物は、当時の岸に相当する部分で、細粒砂及びシルトの互層で構成される（第1節参照）。この互層のラミナは、一部で液状化した砂に引き裂かれており、また不自然な歪みも観察される。また、岸に接する部分では、地震痕の1つの形態である砂脈に引き裂かれた黒色シルト塊の取り込みが認められることから、地震の影響を受けているものと考えられる。

砂脈 2. 砂脈〈B〉

93A区南端では、黒色シルト層を垂直方向に20cm以上引き裂き、上昇する幅1cm、延長1m、70～80°W方向にのび、「杉」型の雁行配列をする砂脈が3本観察された。砂脈の給源となった砂層は黒色シルト層直下の灰白色粗粒砂層である。



図56 旧河川堆積物にみられる異常堆積構造

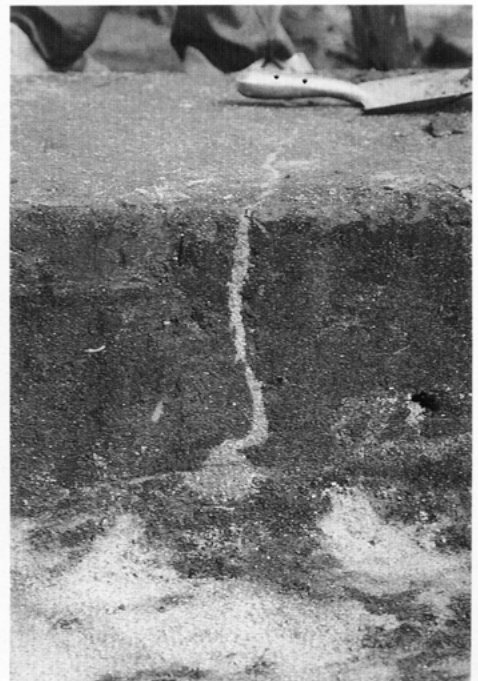


図57 砂脈の産状

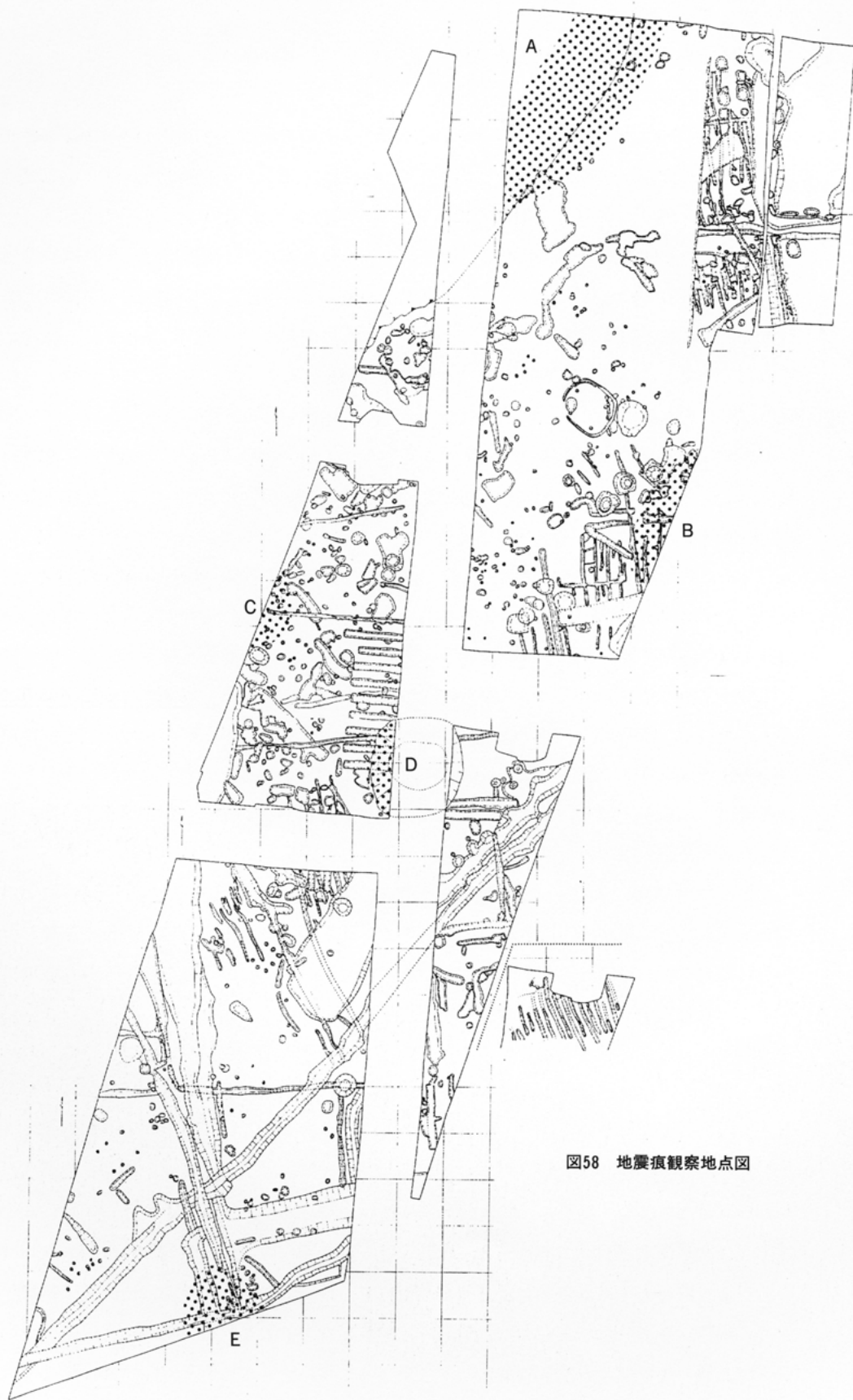


图58 地震痕觀察地点图

(2) 93B区

93B区においては、断層と地層の液状化（流動化）の痕跡が認められた。

断層

1. 断層〈図58C〉

断層は、図58のC地点で観察された（図59・60）。この断層は、古墳時代初頭の遺物を包含する黒色砂質シルト層を見かけ上、西側に30cm程度沈降させる正断層の形態を示している。走向はN10°W、傾斜は上端部で80°、下方部で45°Wを示している。

断層運動により沈降した西側の黒色砂質シルト層の上位には、断層に対して東側の黒色砂質シルト層上位には認められない灰白色粗粒砂層が、断層の落差により生じた窪みを埋積するように20cm程度堆積している。この砂層は断層が生じた直後の出水により、窪みを埋め立てるように速やかに堆積したものと考えられる。この上位には、中世の遺物を含む灰色砂質シルト層が断層面を挟んだ両側に連続して堆積しているが、これは、窪みが中世の頃までには完全に埋積されたことを示している。また、この灰色砂質シルト層は断層の変位を全く受けていないことから、断層そのものの活動は、黒色砂質シルト層を変位させた1回だけであると考えられる。

砂脈

さらに、断層面に沿って発達する砂脈も観察された。この砂脈は幅3mm程度の灰白色粗粒砂により構成されている。この砂脈の上端部は、中世の灰色砂質シルト層を引き裂いていることから、断層の活動とは時期を異にするものであろうと考えられる。また、砂脈は途中で、見かけ上断層を挟んだ東西両方向へ、水平方向に2本ずつ枝分かれしている部分も認められた。図61は、この分岐した砂脈部分の拡大模式図であるが、枝分かれした砂脈は、断層の両側で食い違いが認められる。図61のb-b'で示した下方の砂脈は、断層を境に西側が2.4cm上昇、また、a-a'で示した上方の砂脈は西側が7mm程度上昇している。この変異量の差は、以下のような砂脈と断層の動きを想定させるものである。

まず、すでに形成されていた断層面が、物理的な弱線となっており、大規模な地震によって液状化した砂の通路に利用されたことが考えられよう。液状化した砂が上位の地層を引き裂いて上昇する際には、物理的な弱線に集中することは、寒川（1992など）や服部（1994など）の遺跡における地震痕の研究成果からも明らかである。

また、a-a'、b-b'それぞれの砂脈の断層を挟んだ両側の変位は、断層そのものの活動を示すものではないと考えられよう。それは、砂脈が上位の中世の灰色砂質シルト層を引き裂いているにもかかわらず、断層による変位を受けていないことから証明できる。

ではなぜ砂脈に変位が生じたのであろうか。これは弱線である断層面に沿って噴き出した砂が潤滑剤の役割を果たし、断層面を揺り動かしたためと考えられよう。a-a'、b-b'の上下の砂脈で変位量に差があることは、ごく短い揺れの間に発生した砂脈の形成時期に差があったためであることが原因であろう。すなわち下方の水平砂脈は地震発生初期、上方の砂脈は地震終末期という砂脈形成の時間差を表すものと考えられる。上位の灰色砂質シルト層に見かけ上の変位が全く見られないことは、砂脈を発生させた地震が灰色砂質シルト層の未固結時に発生したためにわずかな断層の変位を吸収したためと考えられる。



図59 93B区 断層の産状

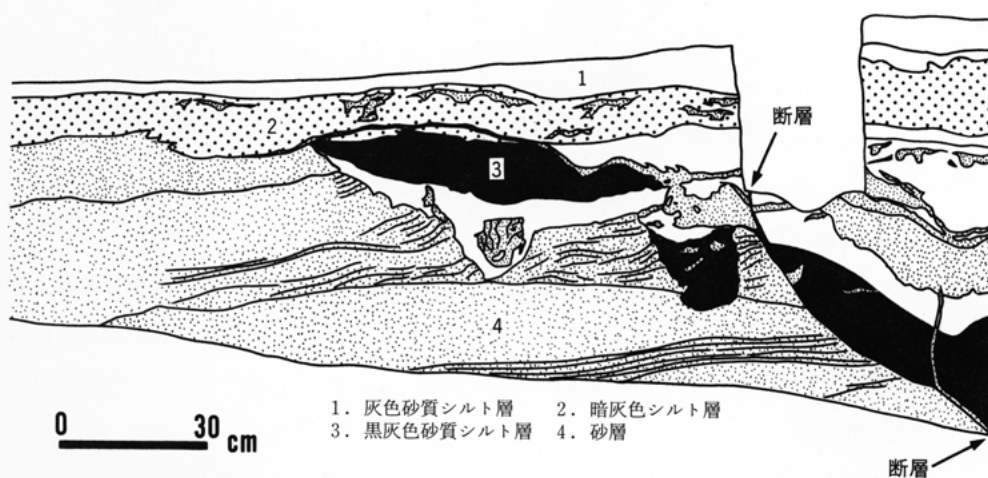


図60 北道手遺跡93B区 断層スケッチ

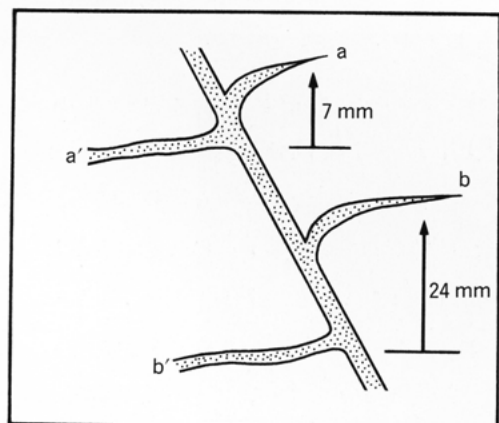


図61 断層運動と砂脈の変位

2. 地層の液状化（流動化）〈図58D〉

液動化

地層の液状化は、噴砂（砂脈）などの現象として北海道遺跡でも一般的に認められる地震痕の形態であるが、SK79においては噴砂を伴わない、地層中のラミナが流動化した痕跡として観察された（図62）。この流動化層は、土坑埋土である斑状のシルト塊を多量に含む層の下位に位置する灰色～暗灰色シルト互層中に発達する。このような流動化は、地層が未固結な状態で地震による振動を受けたことを示していると考えられる。



図62 中世土坑中の地層の液動化

(3) 93D区 〈図58E〉

小断層

93D区では調査区南端の壁面において小断層が確認された。この壁面は、図63に示すように下位から灰白色粗粒砂層、暗灰色シルト層の順に堆積し、この暗灰色シルト層を弥生時代末～古墳時代初頭の遺構（SD14）が掘り込んでいる。その上位には埋積された遺構上面を覆うように灰色砂質シルト層が堆積している。

小断層は、図64に示すように灰白色粗粒砂層、暗灰色シルト層およびSD14の埋土の一部を見かけ上3cm変位させている正断層である。走向はN10°Wを示し、93B区で見られた断層とはほぼ同じ方向を示し、傾斜は88°Wを示す。



図63 93D区断層の産状

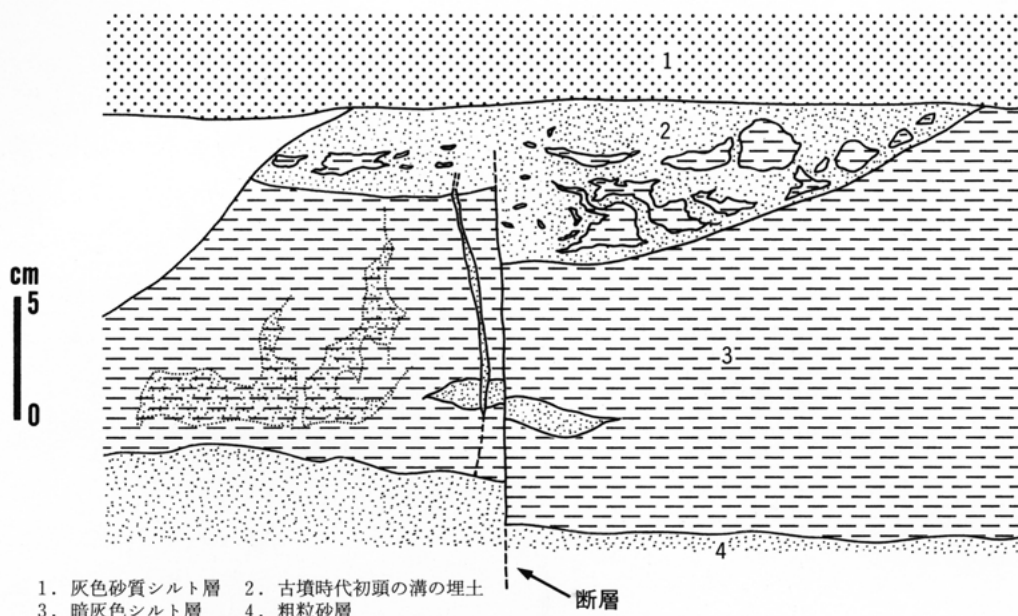


図64 北道手遺跡93D区南壁断層スケッチ

S D14の埋土は、中～粗粒砂を基質とし、これに最大3～5 cmのシルト塊を混じえる。溝内の堆積物の特徴として断層により落ち込んだ側のシルト塊がより大きいこと、またシルトの一部が断層活動により引き伸ばされた構造が認められる。このような堆積物の変形は、S D14の埋土が未固結な状態の時のものと考えられる。

この断面では同時に、基盤の粗粒砂層から上昇する3～4 mm程度の砂脈も認められ、S D14の埋土に噴き上げている。

なお、S D14を覆い堆積している灰色砂質シルト層は、断層による変位や噴砂の影響を受けていない。

(4) 地震痕に関するまとめ

北道手遺跡で確認された地震痕から考えられる地震の発生時期を推定してみよう。

93A区の河川堆積物中の地震痕は、河川堆積物そのものの年代が不明なため地震発生年代は確定できない。砂脈については、地表付近まで噴き出しが確認できること、砂脈の雁行配列が付近を通る濃尾地震の際に形成された根尾谷断層の延長「岐阜—宮線」の横ずれ運動に整合的であることなどから、1891年発生の濃尾地震による地震痕と考えられる。

93B区の断層については、古墳時代前期以後、中世以前という年代幅が考えられるが、断層によって形成された窪みは、速やかに埋積されたであろうと考えられるので古墳時代前期に近い時代が考えられる。なお、砂脈および流動化層については、中世の地震によるものと推定される。

93D区の断層は、古墳時代前期の溝が埋積された直後、埋土が未固結状態のものであり、時間的には93B区の断層とほぼ同じ時期であろうと考えられる。

なお、ここで断層として表現した地震痕は、地震断層（活断層）本体ではなく、おそらく液状化による砂の噴き出しで、下位の地層の体積が減少したために生じた陥没性の断層（断裂）と考えられる。

第3節 岩倉城・北道手遺跡出土土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

愛知県西部濃尾平野における古墳時代前期のS字口縁を持つ土器(以下S字口縁とする)は同時期の他の土器や時代の異なる弥生土器や中世の土師器などとは明らかに異質な胎土を持つことが、当社による分析で明らかにされている。S字口縁の胎土は角閃石とザクロ石を主体とする組成を示し、「受口」や「く字」と呼ばれる口縁の土器胎土は、尾張地域在地を示す両輝石型の組成を示す。このように同時期の土器の胎土との組成の違いは明瞭であり、中間的な組成も認められない。また、S字口縁の中には両輝石型の胎土のものが少数含まれる場合があるが、「受口」や「く字」の中には角閃石やザクロ石の多い胎土はない。さらに、角閃石とザクロ石を主体とする胎土は、尾張地域の弥生土器や中世土師器にもほとんど認められない。

この胎土の状況から、濃尾平野におけるS字口縁の製作と流通には、特別な事情が背景にあることは間違いない。本分析では、S字口縁の出土例が多い濃尾平野北部に位置する北道手遺跡とそこから地理的には若干離れた濃尾平野北東部に位置する岩倉城遺跡から出土したS字口縁を試料として、これまでの胎土の傾向を確認し、さらにS字口縁の胎土の細分を試みる。これによって、S字口縁をめぐる状況を詳細に捉え、濃尾平野内での地域的な差異の有無を確かめる。さらに、角閃石とザクロ石という鉱物組み合わせから考えられる地質学的背景について、既存の文献資料から検討し、考察する。

1. 試料

試料は、愛知県岩倉市にある岩倉城遺跡より出土したS字カメ15点(試料番号1~15)と一宮市北道手遺跡より出土したS字カメ20点(試料番号16~35)と丹彩土器15点(試料番号36~50)である。各試料には、出土位置などを記した注記と時期などの備考がある。これらは、重鉱物組成を示した図1に併記する。

2. 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片約10~15gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をテトラブromoエタン(比重約2.96)により重液分離、重鉱物および軽鉱物を

偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。

3. 分析結果

(1) 胎土の分類

50点の試料のうち、同定粒数100個未満のものは14点あった。(表1、図1)。これらのうち試料番号23、26、32、36、37、38、41の7点は、同定粒数100個以上を得られた他の試料の分量に比べて特に少ないといえないため、重鉱物の含量が少ないことも胎土の特徴になるかも知れない。他の7点は、試料の分量が少ないことによると考えられる。同定粒数100個以上を得られた試料では、角閃石が多く、少量のザクロ石を伴うものが多いが、中には斜方輝石と単斜輝石を主体とする組成のものも認められる(表1、図1)。

冒頭で述べたように尾張地域のS字口縁の胎土については、これまでの分析により1) 角閃石が多く少量のザクロ石を伴う、2) ザクロ石が多く少量の角閃石を伴う、3) 両者の中間組成の3種類といわゆる両輝石型から構成されるとしてよい。ここでは、この分類に基づき、さらに両輝石型については、今回報告(別報告)する一色青海遺跡の当社胎土分析報告書に示された、分類に基づき記載する。

a) I型

角閃石が非常に多く、少量のザクロ石を伴う組成。試料によっては、微量～少量の黒雲母、ジルコン、緑レン石などを伴う。

b) III型

ザクロ石が多く、少量の角閃石を伴う組成。試料によっては、微量～少量の黒雲母、ジルコン、ザクロ石、電気石などを伴う。I型とIII型の中間組成をII型とするが、本分析では認められない。

c) IV型

角閃石と黒雲母およびザクロ石の3鉱物を主体とする組成。角閃石とザクロ石の関係はII型に準ずるが、黒雲母の量比の多いことでIV型とした。

d) V型

角閃石が非常に多く、少量のジルコンと緑レン石を伴う。角閃石の多いことはI型に似るが、ザクロ石をほとんど含まないことでV型とした。

e) A型

いわゆる両輝石型の中でも出現数のもっとも多い組成。斜方輝石が主体を占める組成であるが、他の種類に比べて単斜輝石の量比が多い。

f) C型

斜方輝石が主体を占め、単斜輝石は微量、角閃石を伴い、少量または微量のジルコンを

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母	紅柱石	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	同定鉱物粒数
1	0	0	0	173	1	10	0	0	10	2	1	1	52	250
2	0	2	0	161	1	8	0	1	34	1	4	4	34	250
3	0	8	6	5	1	4	0	4	2	2	0	2	78	112
4	0	8	0	7	1	0	0	4	2	9	0	56	163	250
5	0	1	1	9	0	0	0	0	5	0	1	1	3	21
6	0	11	2	200	0	2	0	1	14	1	1	1	17	250
7	0	5	0	196	0	5	0	1	4	1	0	3	35	250
8	0	1	0	1	0	0	0	0	47	0	2	0	7	58
9	0	112	36	9	0	6	0	2	0	0	0	1	84	250
10	0	151	31	4	0	0	0	0	0	0	0	4	60	250
11	0	5	0	176	0	1	0	0	30	0	3	14	21	250
12	0	2	2	177	5	1	0	0	13	0	0	5	45	250
13	0	11	1	0	1	39	0	0	2	0	0	0	43	97
14	0	1	0	8	0	0	0	3	49	0	18	15	10	104
15	0	55	16	36	0	2	0	3	1	3	0	61	73	250
16	0	3	0	146	4	36	0	0	12	1	1	2	45	250
17	0	5	0	155	1	33	0	1	5	1	0	4	45	250
18	0	0	0	38	4	32	0	0	145	2	4	1	24	250
19	0	7	2	37	97	13	0	0	14	6	4	0	70	250
20	0	3	1	15	1	31	1	0	20	7	1	9	38	127
21	0	7	1	179	1	16	0	0	2	2	1	0	41	250
22	0	3	2	199	1	8	0	0	9	1	3	4	20	250
23	0	1	0	6	1	41	2	0	3	1	0	2	16	73
24	0	13	2	115	5	16	0	0	16	0	4	3	34	208
25	0	4	0	165	13	22	0	0	9	0	3	0	34	250
26	0	4	1	10	0	9	0	1	2	0	0	5	13	45
27	1	16	1	172	1	4	0	2	16	1	4	11	21	250
28	0	2	0	151	7	9	0	0	36	1	2	2	40	250
29	0	1	0	1	1	7	0	0	5	0	0	2	11	28
30	0	10	1	144	2	12	1	1	34	2	3	7	33	250
31	0	15	2	83	0	7	0	2	7	0	0	2	9	127
32	0	1	0	7	0	0	0	0	3	0	0	1	3	15
33	0	9	1	186	1	0	0	3	19	2	2	7	20	250
34	0	3	1	153	0	5	0	1	43	2	11	5	26	250
35	0	4	0	119	1	0	0	9	2	18	0	14	69	236
36	0	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	19	31
37	0	9	1	6	1	0	0	1	0	0	0	4	2	24
38	0	29	1	14	0	0	0	0	0	2	1	8	4	59
39	0	99	10	11	8	1	0	0	0	2	0	3	32	166
40	0	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	20	205	233
41	0	6	0	2	0	0	0	0	0	0	1	3	10	22
42	0	115	21	16	2	1	0	1	2	0	0	38	36	232
43	0	134	21	4	2	2	0	3	0	0	3	31	35	235
44	0	93	2	32	3	0	0	2	0	1	0	15	34	182
45	0	25	0	6	7	0	0	6	2	0	0	18	186	250
46	0	18	0	0	0	0	0	3	0	1	0	26	130	178
47	0	23	1	11	0	0	0	3	1	1	0	36	174	250
48	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
49	0	30	3	2	3	0	0	0	0	0	1	6	18	63
50	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	6	11

第4表 胎土重鉱物分析結果

含む組成である。

g) F型

上記の一色青海遺跡では認められなかった両輝石型の組成なのでF型とした。「その他」が非常に多く、同定される主な鉱物は、両輝石と角閃石、ジルコン、緑レン石、不透明鉱物などである。

h) G型

これも上記の一色青海遺跡では認められなかった両輝石型の組成なのでG型とした。「その他」が非常に多く、斜方輝石と不透明鉱物が少量含まれる。

(2) 遺跡および種類別の胎土の状況 (図64)

a) 岩倉城遺跡 (S字カメのみ)

同定粒数100個以上の12点の試料のうち、I型の胎土が最も多く、試料番号1、2、6、7、11、12の6点を占める。他は、A型3点(試料番号9、10、15)、F型2点(試料番号3、4)、III型1点(試料番号14)である。同定粒数100個未満の試料では、試料番号8は明らかにIII型の組成を示す。試料番号5はI型またはIII型の可能性があり、試料番号13は両輝石型であると考えられるが、細分はできない。

b) 北道手遺跡

1) S字カメ

同定粒数100個以上の16点の試料のうち、I型の胎土が圧倒的に多く13点を占める。I型に分類されない3点は、試料番号18はIII型、試料番号20はIV型、試料番号35はV型にそれぞれ分類される。同定粒数100個未満の4点の試料の中は、いずれもI型またはIII型に分類されると考えられる。

b) 丹彩土器

同定粒数100個以上の8点の試料は、全て両輝石型である。そのうち試料番号44～47の4点はC型に分類され、試料番号39、42、43の3点はA型に分類される。また、試料番号40は、G型である。同定粒数100個未満の試料も全て両輝石型に分類される可能性があるが、細分はできない。

4. 考察

(1) S字口縁の胎土について

これまでに分析された尾張地域の古墳時代前期の土師器は、今回の調査も含めると13遺跡約290点に及ぶ。ここでは、これらの成果から認められるS字口縁の胎土の傾向について述べてみたい。本分析結果において、岩倉城遺跡と北道手遺跡のS字口縁の胎土の状況には差異が認められる。すなわち、どちらの遺跡ともI型が多いことは共通するが、岩倉城遺跡では少数の両輝石型が混在するのに対し、北道手遺跡のS字口縁では両輝石型は存在せず、しかもI型の占める割合が非常に高い。このような状況は、これまでの分析でも認

められる。岩倉城遺跡の状況に類似するのは、廻間、松ノ木、土田、朝日、町田の各遺跡であり、北道手遺跡の状況に近いのは、下渡、山中、南木戸、元屋敷の各遺跡である。前者の遺跡の分布域は濃尾平野中部および東部であり、後者は濃尾平野北西部である。ただし、岩倉城遺跡と元屋敷遺跡は濃尾平野中部と北西部の中間的な位置にある。この遺跡の分布と胎土との状況から、S字口縁の胎土の主流ともいえるⅠ型やⅢ型の生産地に近いのは、濃尾平野北西部であり、生産地からより遠い濃尾平野中部や東部では、地元で作られる両輝石型のS字口縁が混在していたということが推定される。岩倉城遺跡や元屋敷遺跡の辺りは、その中間的な地域であったといえないだろうか。この傾向は、さらに多くの分析例を増やすことで、より確かなものとなるかあるいは異なる傾向となるかもしれない。問題は、Ⅰ型やⅢ型の生産地である。

Ⅰ型およびⅢ型の特徴は、多量の角閃石とザクロ石の組み合わせにある。仮にこの組み合わせの中にジルコンが入っていれば、それは西三河型の組成になり、生産地も西三河地域ということになる。しかし、ほとんどジルコンが含まれることはないから、西三河地域という可能性はない。この点において、西三河地域から多くの搬入があった可能性の高い尾張地域の弥生土器とは状況が異なっている。さて、濃尾平野をとりまく地質を概観すると、重鉱物の供給源となる火成岩および変成岩の分布はかなり広い。そのなかで、角閃石とザクロ石の給源になりそうな地質は、濃飛流紋岩（濃飛流紋岩団体研究グループ，1973；1976；1979；1982；小井土，1974）、奥美濃酸性岩類（棚瀬，1982）、貝月山カコウ岩（鈴木，1975）、三重県北部の鈴鹿カコウ岩や青山高原の領家変成岩類およびそれに接する領家カコウ岩類（以上端山ほか，1982）が上げられる。これらの地質のうち、濃飛流紋岩、奥美濃酸性岩類、貝月山カコウ岩は、いずれも黒雲母が優先する岩質であり、角閃石は少量または微量しか含まれない。また、ザクロ石の記載はない。鈴鹿カコウ岩および領家カコウ岩は、黒雲母と角閃石が多く含まれるが、ジルコンも比較的多く含まれる。したがって、これらの地質は、Ⅰ型やⅢ型の給源になる可能性は低い。残る青山高原の領家変成岩類では、泥岩相の変成岩にはザクロ石の記載があり、また、石灰質砂岩相の変成岩には角閃石が多く含まれるという記載がある。以上の資料から考えれば、Ⅰ型やⅢ型の給源は、三重県北部地域である可能性がある。今後、これを検証するための資料（自然堆積物の重鉱物組成や三重県北部地域のS字口縁の胎土重鉱物組成など）が是非必要であると考え。また、S字口縁を持つ土器の分布なども検討し、その地域的傾向を理解しておくことも重要である。ところで、当社の分析例では、三重県松阪市出土のS字口縁は本分析のⅤ型の組成を示すものが多い。したがって、三重県内でもS字口縁の胎土には地域的な差があることが推定される。

(2) 丹彩土器の胎土について

丹彩土器の胎土から考えられることは、1) 同時期に使われていたS字口縁とは全く別の生産・流通事情にある、2) 生産地は尾張地域内である、3) 複数種の胎土の存在から、尾張地域内でも複数の生産地あるいは生産者がいた、の3点である。本分析で認められた

複数種の胎土のうち、弥生土器の例でみればA型は朝日遺跡周辺の濃尾平野中部に多く認められ、C型は勝川遺跡や月縄手遺跡周辺の濃尾平野東部地域に多く認められる胎土である。現段階では、A型は濃尾平野中部域、C型は濃尾平野東部域を生産地とすると判断するまでには至っていないが、丹彩土器の生産・流通にも一様でない事情があるように思える。

文献

- 端山好和・山田哲雄・伊藤 誠・沓掛俊夫・政岡邦夫・宮川邦彦・望月康年・仲井 豊・田結庄良昭・吉田 勝・河原林育朗・津村善博 (1982) 近畿地方東部の領家帯の地質－特に花崗岩の岩体区分と相互関係。地質学雑誌, 88, p.451－466.
- 小井土由光 (1974) 岐阜県下呂町東部地域の濃飛流紋岩－とくに、赤石溶結凝灰岩層の細分について－。地質学雑誌, 80, p.307－322.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ (1973) 濃飛岩体東縁部における流紋岩類の層序と形成史。地球科学, 27, p.161－179.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ (1976) 濃飛岩体西部の流紋岩類－特に陥没運動と火山活動のステージについて－。地球科学, 30, p.193－205.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ (1979) 飛騨古川～御母衣湖地域の濃飛流紋岩－濃飛岩体北部地域における東西地質断面－。地質学論集, 17, p.165－176.
- 濃飛流紋岩団体研究グループ (1982) 濃飛岩体北部地域における玄武岩質安山岩類の活動。地質学雑誌, 88, p.231－248.
- 鈴木和博 (1975) 岐阜県春日村の接触変成帯に発達する特異な交代変成岩の脈について。地質学雑誌, 81, p.487－504.
- 棚瀬充史 (1982) 奥美濃酸性岩類－両白山地における白亜紀火成作用－。地質学雑誌, 88, p.271－288.

第5章 考察

第1節 北道手遺跡の位置づけ

北道手遺跡の調査は、その遺跡の範囲と思われる西部地域の一部であるため、遺跡の中心地と異なり様相を示していると思われる。しかし、集落内の一部構成していた以上この遺跡の最盛期である古墳時代初頭の時代相或いは地域相を反映していると考えられる。ここでは、尾張北部に留まらず尾張南部はもちろん美濃地方特に西濃地方を視野に捉えて北道手遺跡を考えてみたい。

北道手遺跡は木曽川中流域に位置し、同時期の遺跡として下渡遺跡（一宮市）、藤掛遺跡（笠松町）、伊八弥兵衛島遺跡（川島町）、江東遺跡（岐阜市）、八竜遺跡（各務原市）等が知られている。これらの地域でかならずしも資料は充実してきている訳ではないが各遺跡を包括する地域の土器様相から概観する。

各地の土器様相はかならずしも一様ではなく、器種構成上、同一地域は存在しない。単純化すると、S字状口縁台付甕が多く採用されたのは尾張低地部や伊勢・大垣を中心とする西濃地域であり、パレス形壺は尾張低地部に近接する地域を中心に比較的広範囲な地域で受け入れられている。受口状口縁台付甕も尾張東部をも含み更に広い範囲で採用されている。有段高坏のうち、口縁内面に多状沈線を施したものは、尾張低地部や美濃地方でも

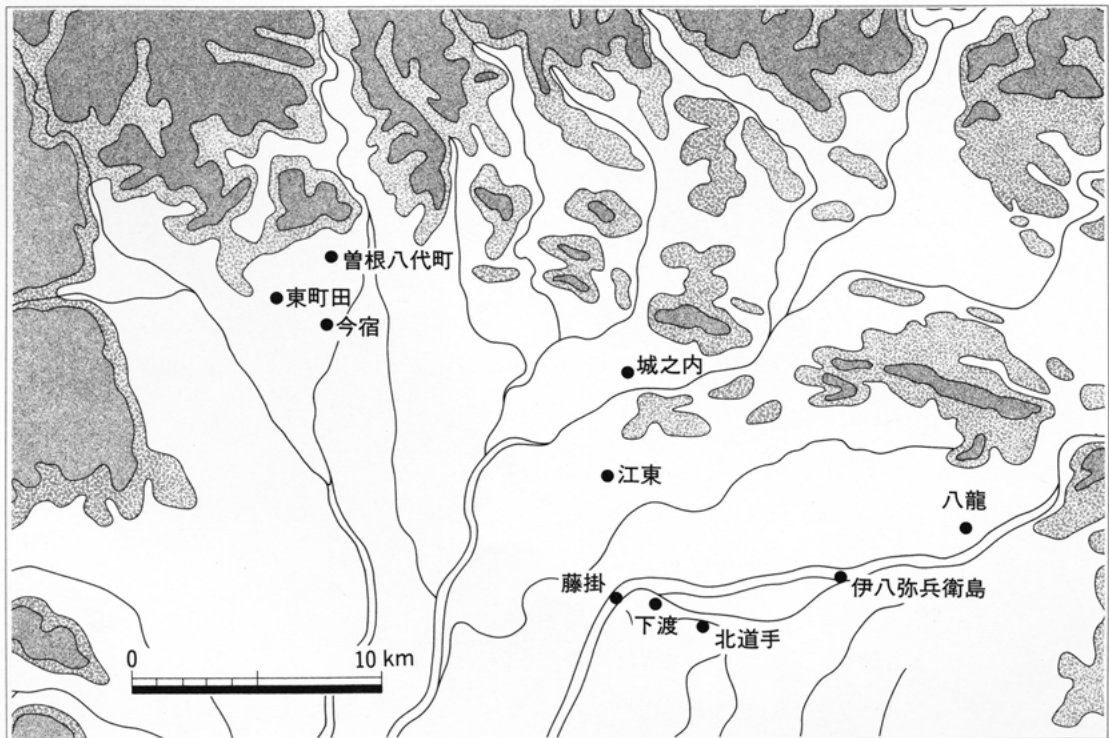


図66 古墳時代前期の遺跡分布 <1 : 300000>

西濃地域に分布し、更に近江の東部に濃密に分布する。今一つ考慮しなければならない遺物に北陸系土器の存在がある。つまり尾張北部から美濃西部からより北ないしは北西方向の地域との地域交流を示していることは、充分想定される。尾張北部に位置する北道手遺跡は尾張南部の土器様相とは異なりむしろより北部や西部地域に惹かれる土器様相であることが指摘できる。

ここでは、北道手遺跡をミクロ的に見ようとする。その材料を土坑群の分布のあり方とそこからの出土遺物の関係に求めたい。これを土台にさらにマクロへと展開する。

土坑群

北道手遺跡を特徴付けている遺構は土坑群の存在にある。あらためて追求する。検出した土坑群のなかからある程度土器を出土している土坑を対象に器種別に数量化した。先に触れたが土坑群はその規模によって大きく2つのグループに分けられる。土坑の長辺と短辺の関係から両辺とも2m未満に収まるAグループと長辺は2m以上のBグループに分けられる。これに深さ50cm以上の要素を加えると、Bグループの方が規模も大型でしかもより深いものが多い共通性を見いだせる。これを各調査区ごとにみるとA区ではSK14・19・22・27・34・55・56・58のBグループとSK15・16・17・18・24・25・26・30・33・52のAグループの両グループから構成されている。B区ではBグループよりむしろAグループが多い。つまり、小規模の土坑が主体となる。D区はBグループが5基、Aグループが4基となりA区と同様な構成を示すがA区の土坑群に比べて深さが1m前後しかなく、A区に比べて浅い土坑であることが解る。これらから、便宜的に調査区毎に土坑を比較してきたが、土坑は決して一様に分布するのではなく何らかの機能的かつ役割的に意図された配置がされているようである。今一つに土坑より炭化物の検出率がB区の土坑が最も高かった。特に、土坑ではないがSD87では1m四方に厚さ3cm程敷き詰めたような状況で検出した。炭化物の混入は他の土坑でも観察できたが、いずれも少量に留まるのが多いようである。つまり、A区ではSK19を除き各土坑は廃棄用の役割を有していたのであろう。B区のSD87を中心とする土坑群は何らかの炭化物を生じるような行為そのものがそこで行われていた

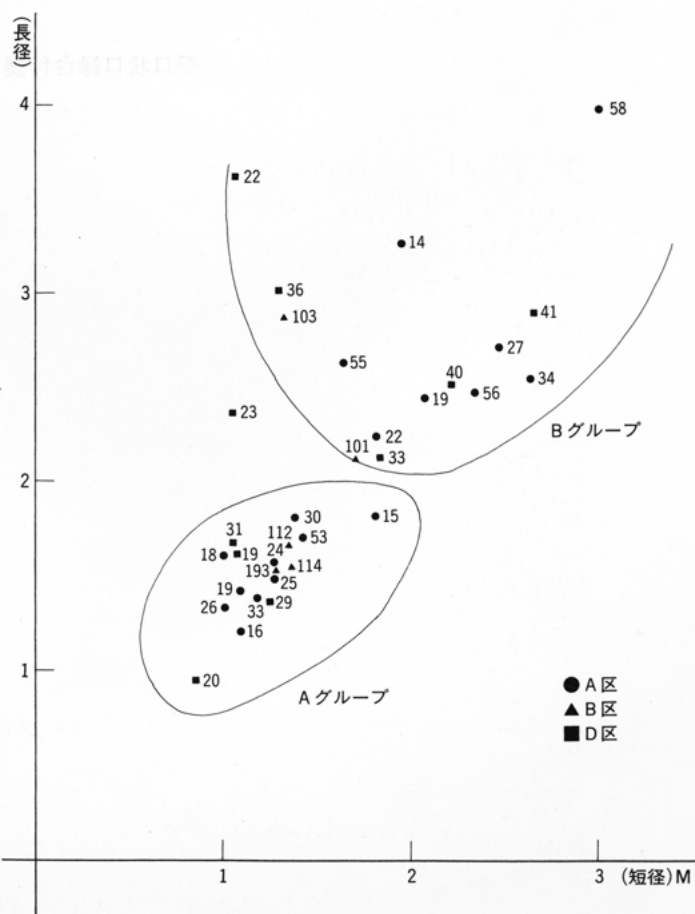
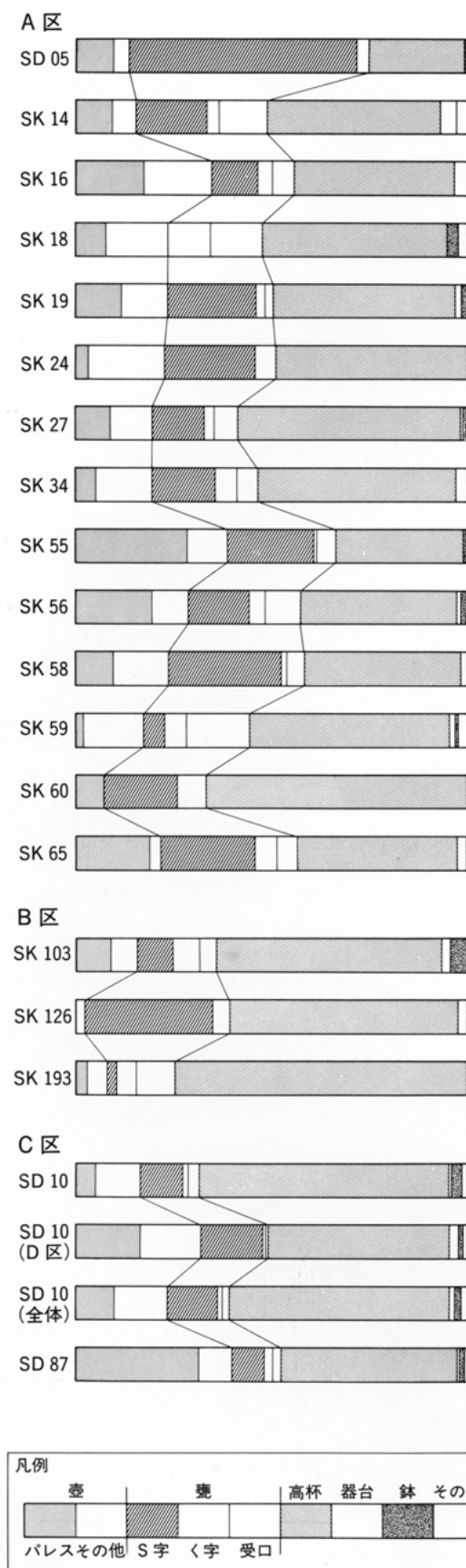
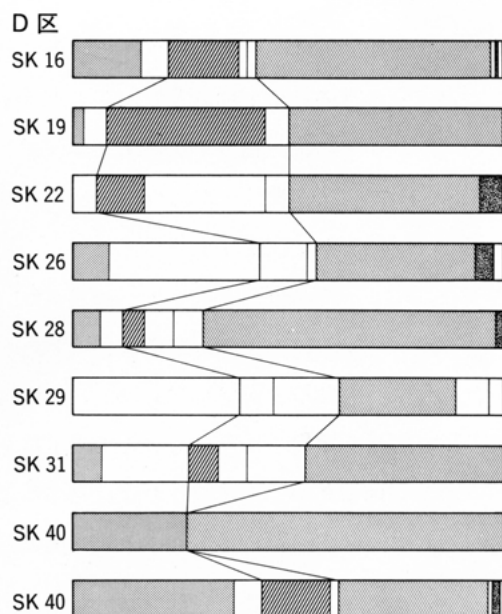


図67 土坑相関図



第5表 土坑土器カウントグラフ



第6表 遺物カウント土坑 一覧

区	遺構	長cm	短cm	深cm
A	SK14	326	194	37
	SK15	181	180	57
	SK16	121	109	43
	SK17	142	109	47
	SK18	160	(100)	70
	SK19	244	207	68
	SK22	224	181	70
	SK24	157	127	44
	SK25	(149)	108	5
	SK26	133	101	8
	SK27	271	247	79
	SK30	180	138	14
	SK33	138	117	64
	SK34	253	263	88
	SK52	170	142	44
	SK55	263	(164)	76
	SK56	247	233	87
	SK58	398	333	87
	SK59	886	300	20
	SK60	(710)	(362)	(39)
	SK65	(686)	237	39
B	SK101	213	170	33
	SK103	288	132	23
	SK112	165	137	26
	SK126	425	330	20
	SK114	155	138	22
	SK193	155	128	50
D	SK16	(1715)	785	33
	SK19	162	107	50
	SK20	(96)	85	16
	SK22	(362)	125	43
	SK23	236	106	25
	SK26	0	120	42
	SK28	0	(143)	33
	SK29	138	122	48
	SK31	165	105	41
	SK33	212	184	41
	SK36	302	130	45
	SK40	252	221	59
	SK41	290	(265)	44

結果ではないだろうか。そして、B区の南に展開するD区では土坑自体の減少化と集中化する一方で他の調査区の土坑にはない完形品の土器を出土する特徴を具備している。完形品遺物の出土率の高さはこれらの土坑群の前方（南側）は同時期の遺構が分布せず、空白地区を確保していることと有機的関連があると思われる。

各土坑群の配置からB区の南部からD区の西南部にかけての空白域こそが、土坑を伴う一連の祭祀行為にとって重要な役割を果たしていたのであろう。

次に各土坑群から検出した土器類について検討を加える。土器カ

ウント作業は遺構内すべての土器を対象とし、残存率2分の1以上をカウントして明らかに同一個体と思われる個体は除外した。選別器種は壺形の場合、壺Aとその他に区分し、甕形の場合は甕A・甕B・甕C（く字甕・受口甕・S字甕）とした。高坏・器台・鉢は一括してカウントした。（第5表）

まず注目に値するのは高坏の出土比率が極めて高いこと。第2点として、煮沸用としてS字甕の占める割合が高いことにある。第3点として、土坑によっては壺Aのパレス壺が他の壺形を凌駕する状況を示すことにある。

土坑をその規模（A：大形、B：中形）による分布のあり方から、各土坑群にはそこで行われた全体的な行為に対して特定の役割を担っていたようである。本遺跡においてはB区及D区に展開する土坑Aグループは前者に炭化物を伴う例が多く、後者に多くの完形品を伴っていることから、全体的行為の中核ゾーン（遺構空白ゾーンをも含む）と捉えることができる。一方、土坑Bグループでは規模が大形であるにもかかわらず完形品の出土例は稀でむしろ細片化された土器で充満していることから、全体的な行為に対しては従的な存在で中核ゾーンに対して外縁ゾーンを形成していたようである。中核ゾーンと外縁ゾーンにより構成されていた行為は水際で展開された祭祀にほかならない。NR01は古墳時代初頭段階では流れていないが、A区～B区で確認したNR01は中世期の氾濫の最大規模を示すものであって、本流とも言うべきNRはより西方に流れていたと考えている。常に氾濫の危機にさらされている地域が本遺跡の調査区にあたるのである。

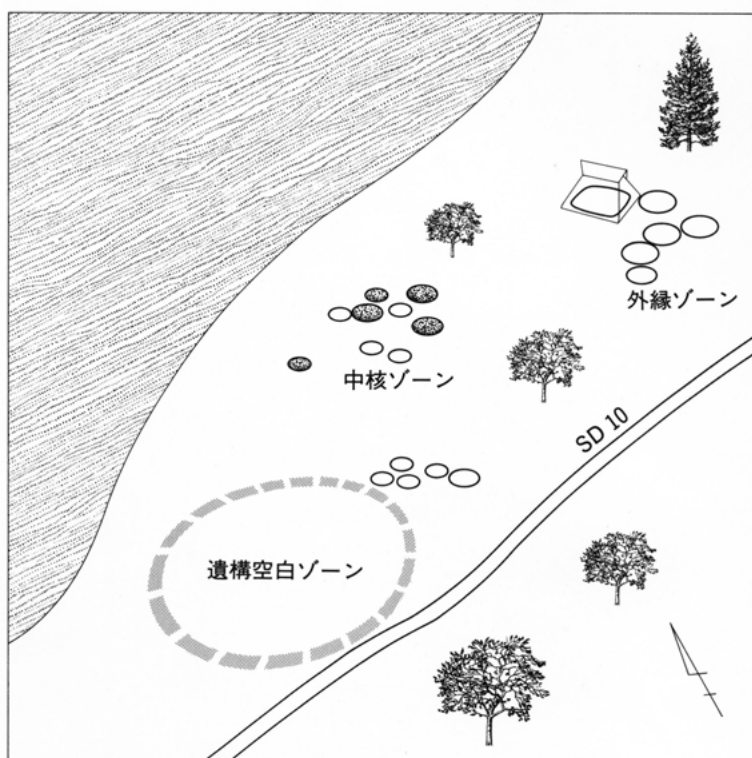


図68 北道手遺跡概念図

第7表 土坑出土土器カウントー覧

調査区	遺 構	壺		甕			高 坏	器 台	鉢	その他	総 計
		パレス	その他	S 字	く 字	受 口					
A	SD05	18 9.7%	7 3.8%	108 58.1%	6 0.0%	6 3.2%	46 24.7%		1 0.5%		186
	SK14	3 9.1%	2 6.1%	6 18.2%	1 3.0%	4 12.1%	15 45.5%	1 3.0%		1 3.0%	33
	SK16	9 17.3%	9 17.3%	6 11.5%	2 3.8%	3 5.8%	21 40.4%	2 3.8%			52
	SK18	3 7.9%	6 15.8%		4 10.5%	5 13.2%	18 47.4%		1 2.6%	1 2.6%	38
	SK19	22 11.8%	22 11.8%	42 22.5%	4 2.1%	4 2.1%	87 46.5%	3 1.6%	3 1.6%		187
	SK24	2 3.5%	11 19.3%	13 22.8%		3 5.3%	28 49.1%				57
	SK27	21 9.1%	25 10.8%	30 12.9%	6 2.6%	14 6.0%	132 56.9%	1 0.4%	3 1.3%		232
	SK34	4 5.5%	10 13.7%	12 16.4%	4 5.5%	4 5.5%	37 50.7%	2 2.7%			73
	SK55	36 28.6%	13 10.3%	28 22.2%	1 0.8%	6 4.8%	41 32.5%		1 0.8%		126
	SK56	24 19.8%	11 9.1%	19 15.7%	5 4.1%	11 9.1%	48 39.7%	1 0.8%	2 1.7%		121
	SK58	36 9.7%	53 14.2%	107 28.8%	5 1.3%	17 4.6%	148 39.8%	6 1.6%			372
	SK59	3 2.1%	22 15.2%	8 5.5%	8 5.5%	24 16.6%	74 51.0%	2 1.4%	1 0.7%	3 2.1%	145
	SK60	2 7.4%		5 18.5%		2 7.4%	18 66.7%				27
	SK65	7 20.0%	1 2.9%	7 20.0%	2 5.7%	2 5.7%	15 42.9%	1 2.9%			35
B	SK103	4 8.9%	3 6.7%	4 8.9%	3 6.7%	2 4.4%	26 57.8%	1 2.2%	2 4.4%		45
	SK126		1 2.2%	15 32.6%	2 4.3%		27 58.7%	1 2.2%			46
	SK193	1 2.5%	2 5.0%	1 2.5%	2 5.0%	4 10.0%	30 75.0%				40
C	SD10	11 5.0%	25 11.3%	24 10.9%	3 1.4%	6 2.7%	142 64.3%	1 0.5%	4 1.8%	5 2.3%	221
	SD10 (D区)	28 16.2%	27 15.6%	27 15.6%	1 0.6%	1 0.6%	81 46.8%	4 2.3%	2 1.2%	2 1.2%	173
	SD10 (計)	39 9.9%	52 13.2%	51 12.9%	4 1.0%	7 1.8%	223 56.6%	5 1.3%	6 1.5%	7 1.8%	394
	SD87	342 31.1%	96 8.7%	89 8.1%	23 2.1%	24 2.2%	498 45.2%	5 0.5%	14 1.3%	10 0.9%	1101
D	SK16	126 16.0%	48 6.1%	130 16.5%	15 1.9%	16 2.0%	432 55.0%	6 0.8%	4 0.5%	9 1.1%	786
	SK19	1 2.6%	2 5.3%	14 36.8%		2 5.3%	19 50.0%				38
	SK22		1 5.6%	2 11.1%	5 27.8%	1 5.6%	8 44.4%		1 5.6%		18
	SK26	4 8.7%	16 34.8%		5 10.9%	1 2.2%	17 37.0%		2 4.3%	1 2.2%	46
	SK28	4 6.8%	3 5.1%	3 5.1%	4 6.8%	4 6.8%	40 67.8%		1 1.7%		59
	SK29		10 38.5%		2 7.7%	4 15.4%	7 26.9%	2 7.7%		1 3.8%	26
	SK31	1 6.7%	3 20.0%	1 6.7%	1 6.7%	2 13.3%	7 46.7%				15
	SK40	4 26.7%					11 73.3%				15
	SK41	40 37.4%	7 6.5%	17 15.9%	2 1.9%		37 34.6%	1 0.9%	2 1.9%	1 0.9%	107

(2) 着飾った土器

土器は本来その機能だけを究極的に追求すれば、どの世界でも同じ様な形になるであろう。何かを貯蔵しようとするれば、口があり胴部はいくらかの膨らみを持たせるであろう。何かを煮ようとするれば、口は大きく底に向かって細くするであろう。しかし、現実には土器を生み出した世界のそれぞれは決して同じではないのである。機能面での最大公約数ではまとめることは可能でも形式なる最小公倍数で括ることは不可能なのである。なぜなら、土器は決してその機能だけが一人歩きするわけではない。それを生み出した社会を反映している。そこで生まれ、社会の規制を享受した人々が作るのである。社会の構成員である以上没个性的にはなりえない。製作された土器は個性的な属性を備えつつも社会規制・規範の産物と理解できる。

着飾った土器とは、土器の胴部あるいは口縁内外面に文様を施した土器をさす。ただし、日本史上最も華麗で派手やかな土器は縄文土器であろうが、しかし、ここでは弥生土器の系譜上にありながら、古墳時代になると汎日本的に無文化あるいは簡素化が進行するなかで局部的・限定的ではあるものも伊勢湾沿岸地域では文様を施す土器が古墳時代前期段階まで依存するのである。そして、それが伊勢湾沿岸地域の地方色に成りえているのである。ここで取り上げようとするのも、地方色を生み出しただけではなくすでに説かれていることではあるが、その出土分布が伊勢湾沿岸に留まらず比較的広範囲に及んでいることにある。伊勢湾沿岸の土器が他地域に影響を与えつつ拡散していった代表的遺物にS字形口縁台付甕（以下S字甕とする）が存在する。S字甕の発生・変遷過程の論は他に譲るとして、S字甕なる煮沸土器のみが人とともに移動するのであろうか。S字甕の拡散は一定方向を取らず四方に及んでいる。西あるいは東へとしかも、その受容姿勢は各地域のその地域が持つ感電性により大きく異なっている。西方に比べて東方地域では感電性はより高く一部では、独自の変遷過程を示しているようである。ものが時空間的距離を隔てて共有する場合、単にものあるいは人と言った移動・交流では説明できないことがある。そしてこうした事象の起こり得た時代背景が問題になるであろうし、ましてや弥生時代から古墳時代への画期に展開していることは、他の諸問題に大きな反響となろう。

着飾った土器として、S字甕の拡散範囲を基軸に同時期の高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・壺形土器を対象とする。ここでの定義は着飾る文様には、クシやヘラによる横線・刺突・弧文・波状文・浮文があり、施文部位を口縁部・脚端部・胴部の上半部と言った限定された場所とする共通する要素を持った一群の土器とする。

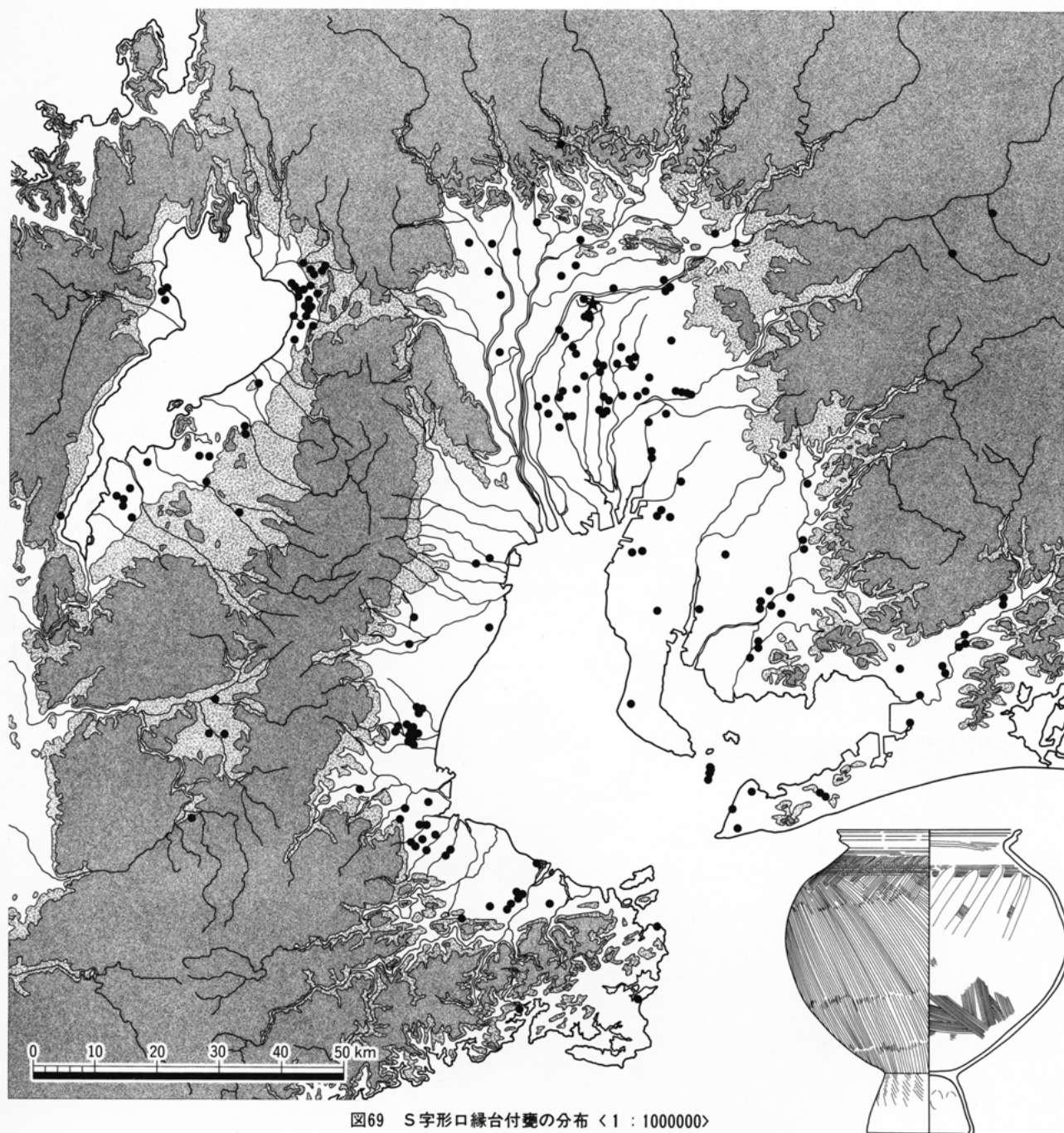


図69 S字形口縁台付甕の分布 <1 : 1000000>

S字形口縁台付甕形土器（以下S字甕）が東海系土器の代表的存在と認識されて久しい。しかし、その故地を伊勢湾沿岸地域のどこに求めるのか。尾張北部から美濃西部に求めるのか。確たる定見は示されていない。胎土分析・重鉍物分析等の物理的手法から究明しようと試みも有効と考えられる。ここでは、着飾った土器を考察する上でS字甕はキーに成りうると考え、S字甕の持つ必要最低限度の情報である分布を第一に概観する。分布は大きく3つ存在する。尾張北部から美濃西部域・近江東部域・伊勢域となる。三河部は希薄で渥美や豊川流域はおそらく伊勢からの影響であろう。伊勢湾沿岸域と言いつつも3つの中心域の存在を指摘できる。では、着飾った土器たちの分布と一体どんな関係になるのだろうか。

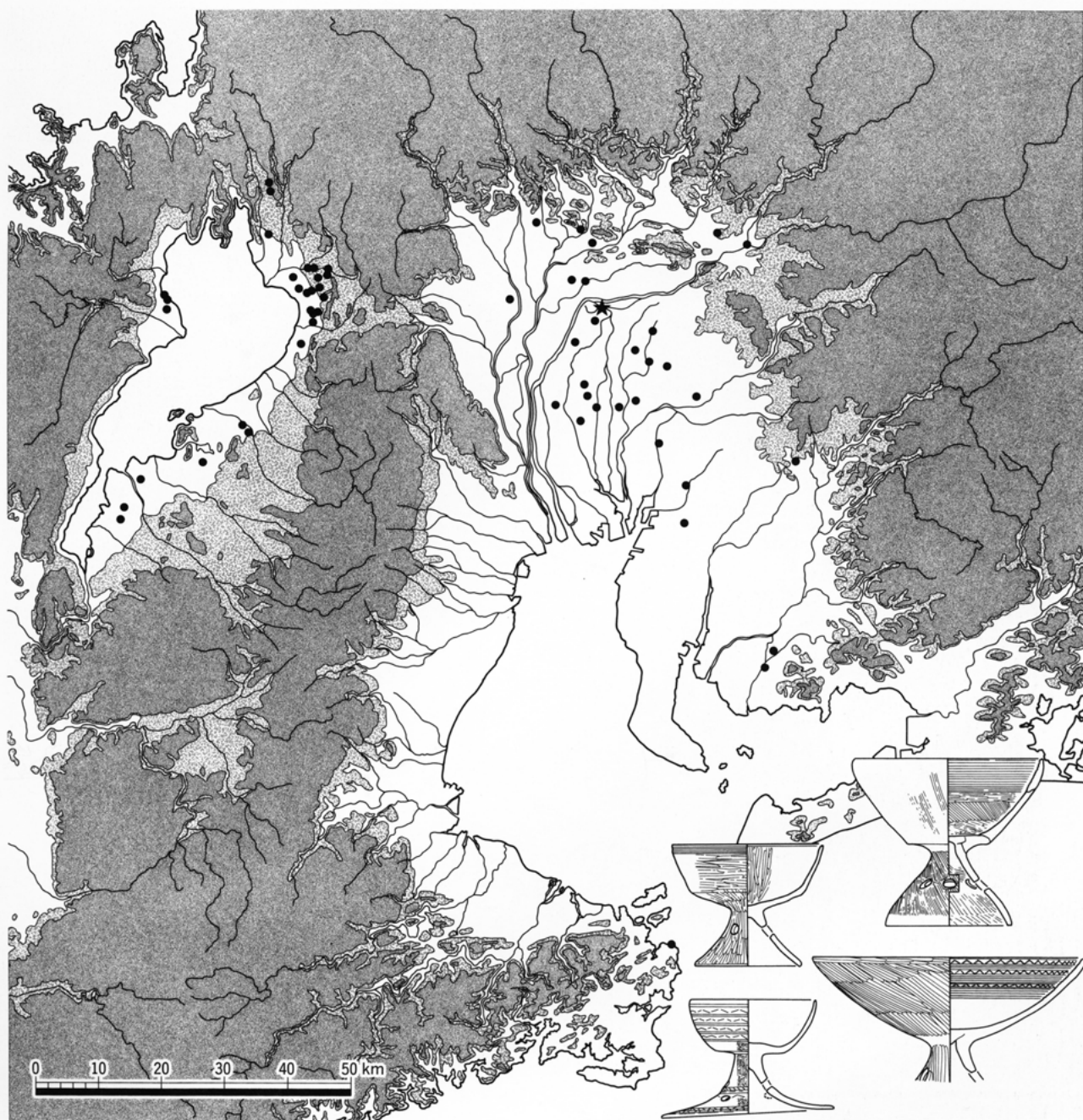


図70 高坏形土器の分布 <1 : 1000000>

当地域での高杯への装飾は杯部・脚部に多用された山中期を最後に急速に消失傾向にある。そして、無文化した時を経て再び装飾を指向するのである。しかしこの加飾指向は前時期とは異なり杯部内面への加飾である。これらの分布は、S字甕の分布範囲内に包括されている。ただし、伊勢地域では鳥羽地方で若干の出土例に留まっている。特に器種分類した高杯Aの分布は極めて特徴的である。



図71 器台形土器の分布 <1 : 1000000>

着飾った器台と捉えたのは、杯部端部を拡張或いは肥厚させ壺Aと同様な加飾を施したものを指す。高杯の分布と同様なあり方を示している。出土例では、近江地方が湖東に集中するのが湖南或いは湖西へと拡散する傾向を示している。一方、尾張北部や美濃西部では散在するに過ぎない。しかし、近江地方の加飾指向は、端部の拡張でありその部位に沈線・クシ描き横線で満たすのにすぎないが、尾張部加飾指向は器台そのものに壺の加飾を加えており加飾に2系統が存在している。尾張的特徴と言える。

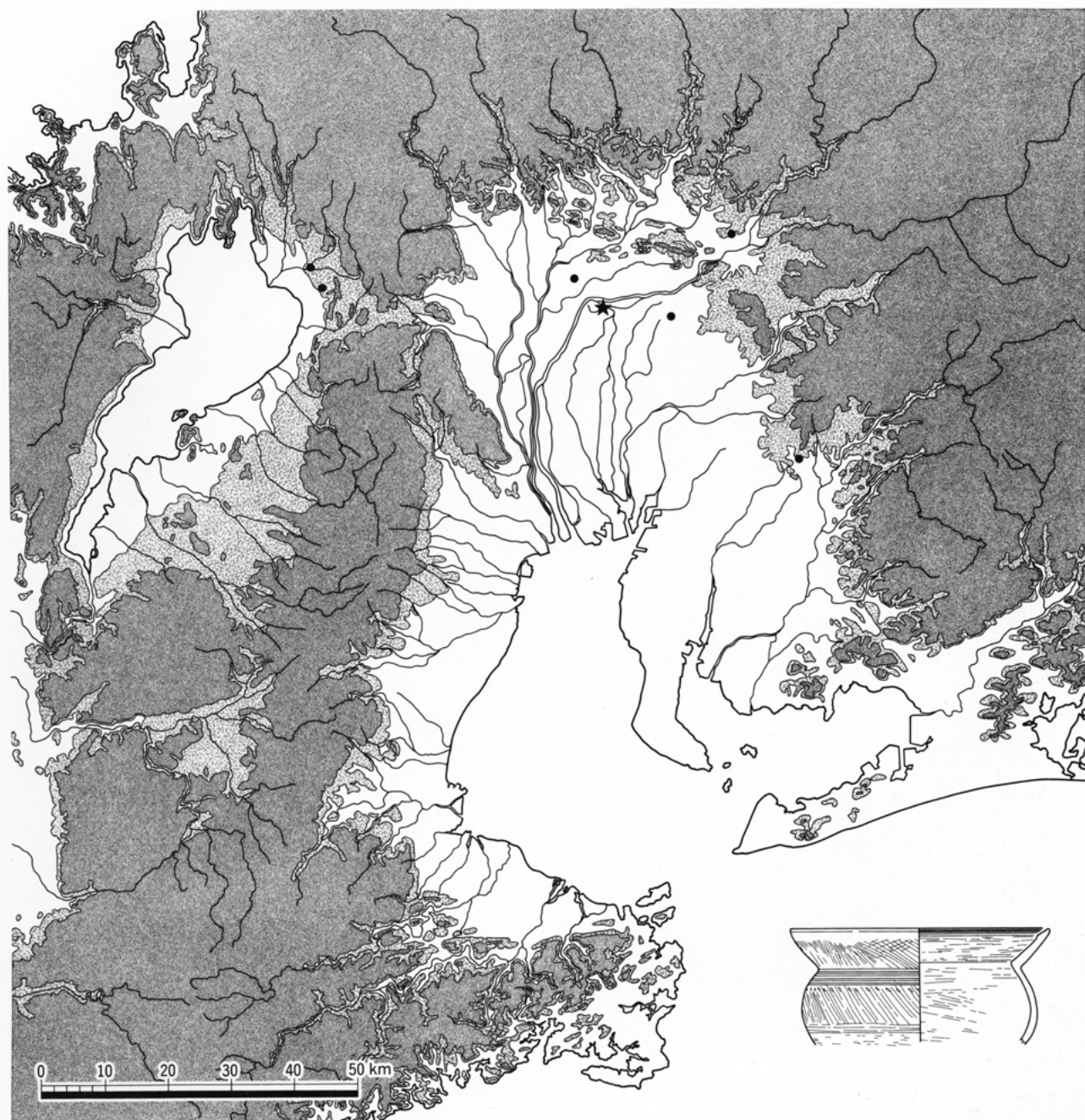


図72 鉢形土器の分布 <1 : 1000000>

鉢形土器への加飾は口縁端部内外面への数条の沈線・クシ描き横線に限られる。出土例は極めて少なく特徴を見い出せない。尾張北部から美濃地方と近江東域に分布することは高杯Aの加飾指向と軌を同一とする結果であろう。

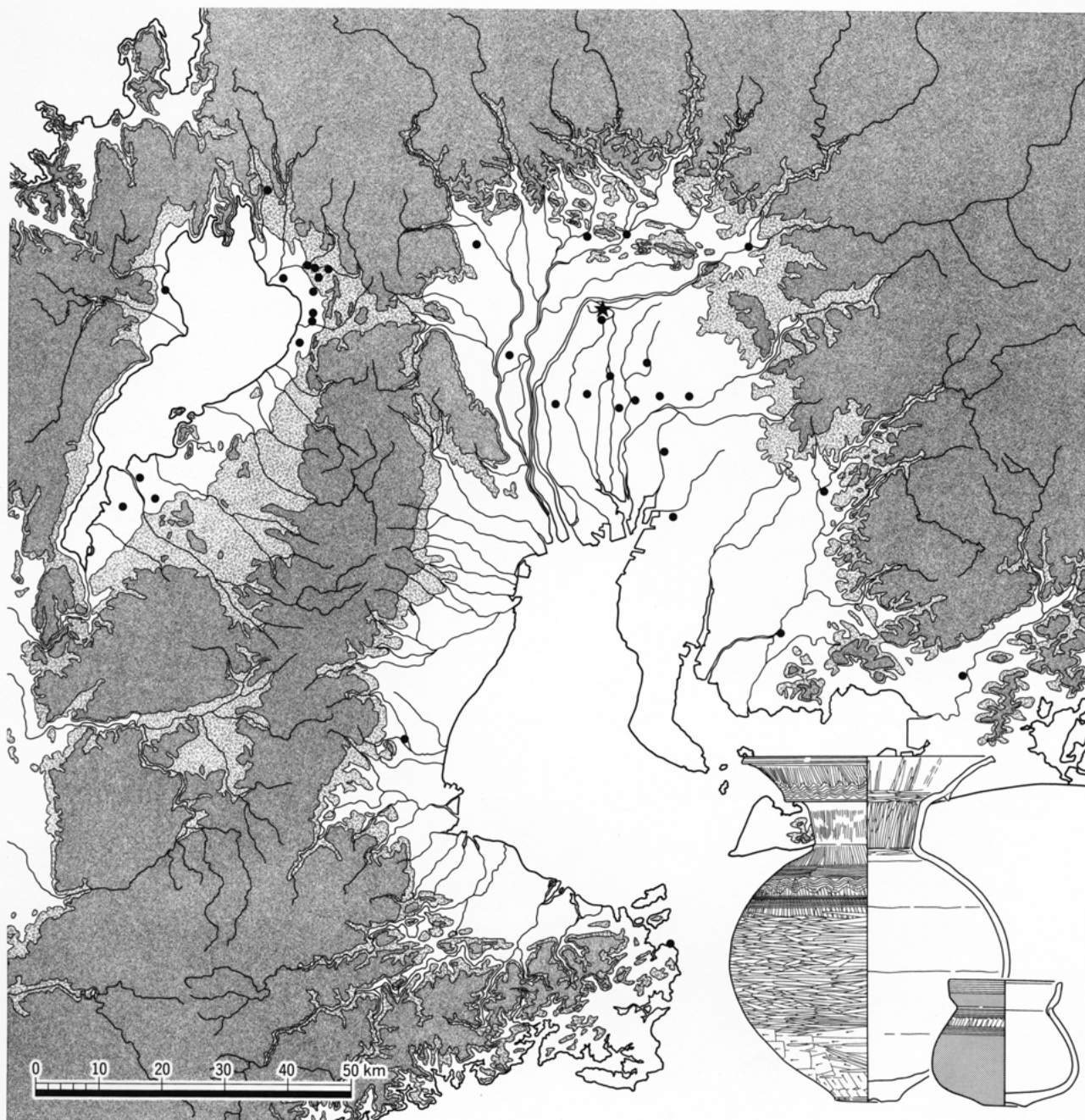


図73 壺形土器の分布 <1 : 1000000>

壺形土器への加飾はなにも伊勢湾沿岸域の特徴とはならないが、東海的なパレス壺に見られる加飾指向とことなる二重口縁壺的な加飾指向の2系統が存在している。ここでは前者の分布を重ねていないが、近江東部の分布と尾張北部からの美濃西部の分布の2大域に集中する傾向は他の器種と同様である。

伊勢湾沿岸地域は周辺に大小河川による低湿地部を形成し、それを取り囲む様に高地部を配している。それは、一見すると全体が他地域と閉塞された感がある。(逆の視点にたてば海に対して限りなく開かれている)しかし、実際には尾張と美濃の間には木曾川が流れており、木曾三川が尾張あるいは美濃と伊勢とを分断しており、更に三河部にも大きな河川が大地を分断しているのである。伊勢は南北に長く、鈴鹿山系に発する幾多の河川は東流して伊勢湾に注ぎ、南北に長い伊勢を更に分断している。一方、同じ鈴鹿山系を源を持つ河川のうち西流・北西流すれば、それらは皆近江の琵琶湖に注いでいる。

鈴鹿山系の北端は北に広がる伊吹山系に連なるのではなく、今の関ヶ原付近で途切れ狭いながらも谷部を形成しているのである。それは伊勢湾沿岸地域においては閉塞部の抜け道であるかの如く地形環境を示している。いや閉塞部への唯一の交流路(海以外)になり得ているのではなからうか。近江から関ヶ原を抜けるとまるで大地と空とが限りなく広がっているようで、原野を遮るものは何も無い地形となっている。この、鈴鹿山系と伊吹山系の谷部は、今日では日本の主要な幹線交通網の集中地域になっている。こうした地理的環境故には古くから重要な交通路であったことは容易に想像できる。しかし、長い時間の中ではこの抜け道が内から外への抜け道ではなく、むしろ外から内への入り口にも成りうる道となる。こうしたことは、土器(弥生後期段階)交流からすでに指摘されている。時代によりその強弱の相違はあろうが、閉塞部(抜け道・入り口)を挟んだ両地域に於ける各時代の土器に見られる親縁性は十分想定できる。

東海系土器に於ける広がり、S字甕(廻間Ⅱ式段階の第一次拡散)に牽引されるように他の器種(壺・高杯・器台:鉢は資料店数が少ない)も拡散している様相が指摘されている。そして、近年美濃西部での調査事例の増加によって近江東部・北東部(琵琶湖東岸)の事例比較検討が容易になりつつある。それは、土器への加飾現象が当地では一過性の現象に留まるものではなく普遍的な地域相の表出にほかならない。近年こうした事象を東海系土器の名のもとに当地の自己表現力の求心性及びその特殊性として位置付け、新たな歴史の構築を摸索している。

第8表 S字甕・加飾土器出土土器一覧

遺跡名	所在地	S字高坏器台鉢壺
名古屋城三の丸遺跡	愛知県名古屋市	●
高蔵遺跡	愛知県名古屋市	●
月繩手遺跡	愛知県名古屋市	● ●
貴生町遺跡	愛知県名古屋市	●
古沢町遺跡	愛知県名古屋市	●
下前津遺跡	愛知県名古屋市	●
若葉通遺跡	愛知県名古屋市	●
三王山遺跡	愛知県名古屋市	●
見晴台遺跡	愛知県名古屋市	● ●
竪三蔵通遺跡	愛知県名古屋市	● ●
本屋敷遺跡	愛知県一宮市	●
下渡遺跡	愛知県一宮市	●
平松遺跡	愛知県一宮市	● ● ●
南木戸遺跡	愛知県一宮市	●
山中遺跡	愛知県一宮市	●
でんやま古墳	愛知県一宮市	●
北道手遺跡	愛知県一宮市	● ● ● ●
勝川遺跡	愛知県春日井市	● ● ●
町田遺跡	愛知県春日井市	●
松河戸遺跡	愛知県春日井市	●
南東山遺跡	愛知県春日井市	● ●
西岩神B地区	愛知県大山市	●
流古墓跡付近	愛知県大山市	●
木曾川水没遺跡	愛知県尾西市	●
大平遺跡	愛知県尾西市	● ●
西之海道遺跡	愛知県小牧市	●
三ツ山古墳群	愛知県小牧市	●
塔之越遺跡	愛知県稲沢市	● ●
陸田白山遺跡	愛知県稲沢市	● ●
堀之内花ノ木遺跡	愛知県稲沢市	● ● ●
下津城跡	愛知県稲沢市	●
土田関連遺跡	愛知県稲沢市	●
重本・横地遺跡	愛知県稲沢市	●
込野遺跡	愛知県稲沢市	●
琵琶戸遺跡	愛知県稲沢市	●
小森遺跡	愛知県岩倉市	●
岩倉城遺跡	愛知県岩倉市	● ● ●
西北出遺跡B地点	愛知県岩倉市	●
能田旭遺跡	愛知県西春日井郡勝町	●
弥勒寺御申塚遺跡	愛知県西春日井郡西春町	● ●
朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	● ● ● ●
廻間遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	● ● ● ●
土田遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	● ●
仁所野遺跡	愛知県丹羽郡大口町	● ●
大御堂遺跡	愛知県丹羽郡大口町	●
門間遺跡	愛知県葉栗郡木曾川町	●
金塚出土	愛知県葉栗郡木曾川町	● ● ●
福塚出土	愛知県葉栗郡木曾川町	● ● ●
法立字正作出土	愛知県中島郡平和町	●
法立字賀屋敷出土	愛知県中島郡平和町	●
埋田遺跡	愛知県津島市	●
寺野遺跡	愛知県津島市	● ●
阿弥陀寺遺跡	愛知県海部郡甚目寺町	●
大淵遺跡	愛知県海部郡甚目寺町	●
清明遺跡	愛知県海部郡甚目寺町	●
定納遺跡	愛知県海部郡八開村	●
東西野遺跡	愛知県海部郡佐織町	● ● ●
鶴廻遺跡	愛知県海部郡佐織町	●
奥津社古墳	愛知県海部郡佐織町	●
五反田遺跡	愛知県半田市	●
塚森遺跡	愛知県東海市	●
トトメキ遺跡	愛知県東海市	● ● ●
子安神社遺跡	愛知県大府市	● ●

遺跡名	所在地	S字高坏器台鉢壺
細見遺跡	愛知県知多市	●
法海寺遺跡	愛知県知多市	●
神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町	●
神明社東坂道遺跡	愛知県知多郡南知多町	●
鯨浜遺跡	愛知県知多郡南知多町	●
相模谷遺跡	愛知県知多郡美浜町	●
坂戸遺跡	愛知県岡崎市	●
御旅所遺跡	愛知県岡崎市	●
高木遺跡	愛知県岡崎市	●
生平遺跡	愛知県岡崎市	●
米野遺跡	愛知県岡崎市	●
矢作川河床遺跡	愛知県岡崎市	●
亀塚遺跡	愛知県安城市	●
中狭間遺跡	愛知県安城市	●
本神遺跡	愛知県安城市	● ●
岡島遺跡	愛知県西尾市	● ● ●
毘沙門遺跡	愛知県西尾市	●
不毛第一遺跡	愛知県西尾市	● ●
荒新切遺跡	愛知県知立市	●
王江遺跡	愛知県高浜市	●
中根山遺跡	愛知県幡豆郡吉良町	● ● ●
高橋遺跡	愛知県豊田市	● ● ● ●
伊保遺跡	愛知県豊田市	● ● ● ●
八剣遺跡	愛知県新城市	●
南貝津遺跡	愛知県新城市	●
市杵嶋神社古墳	愛知県豊橋市	●
瓜郷遺跡	愛知県豊橋市	●
雨谷遺跡	愛知県豊川市	●
船原遺跡	愛知県豊川市	●
郷中遺跡	愛知県豊川市	● ● ●
大塚古墳	愛知県宝飯郡一宮町	●
御園遺跡	愛知県宝飯郡一宮町	●
宮沢遺跡	愛知県宝飯郡一宮町	●
柳原遺跡	愛知県渥美郡田原町	●
山崎遺跡	愛知県渥美郡田原町	●
瓦場遺跡群 (大草地区)	愛知県渥美郡渥美町	●
八幡上遺跡	愛知県渥美郡渥美町	●
ドウツン松遺跡	愛知県渥美郡渥美町	● ● ● ●
江東遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ● ●
城之内遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ●
御望遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ●
一本松遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ● ●
竜田町遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ●
下川手遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ●
下城田寺山上遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ●
太田遺跡	岐阜県岐阜市	● ● ● ●
花無山遺跡	岐阜県恵那市	● ● ●
(大野吾遺跡)		
今宿遺跡	岐阜県大垣市	● ● ● ●
曾根八千町遺跡	岐阜県大垣市	● ● ● ●
八龍遺跡	岐阜県各務原市	● ● ● ●
弥兵衛島遺跡	岐阜県各務原市	● ● ● ●
宮之脇遺跡	岐阜県可児市	● ● ● ●
中村遺跡	岐阜県中津川市	● ● ● ●
尾崎遺跡	岐阜県美濃加茂市	● ● ● ●
伊瀬瀬地遺跡	岐阜県美濃加茂市	● ● ● ●
輪之内四郷遺跡	岐阜県安八郡輪之内町	● ● ● ●
大池東遺跡	岐阜県揖斐郡池田町	● ● ● ●
南山遺跡	岐阜県揖斐郡大野町	● ● ● ●
(南山古墳下層)		
水没遺跡	岐阜県羽島郡笠松町	● ● ● ●
宗慶大塚古墳	岐阜県本巣郡真正町	● ● ● ●

遺 跡 名	所 在 地	S字	高	環	器	台	鉢	壺
船来山古墳群	岐阜県本巣郡糸貫町	●						●
九合洞窟遺跡	岐阜県山県郡美山町	●						
納所遺跡	三重県津市	●						
桐山遺跡	三重県津市	●						
養老遺跡	三重県津市	●						
六六A遺跡	三重県津市	●						
六六B遺跡	三重県津市	●						
里前遺跡	三重県津市	●						
太田遺跡	三重県津市	●						
蔵田遺跡	三重県津市	●						
西垣内遺跡	三重県津市	●						
中蔵遺跡	三重県津市	●						
竹川遺跡	三重県津市	●						
野垣内遺跡	三重県伊勢市	●						
中楽山遺跡	三重県伊勢市	●						
隠岡遺跡	三重県伊勢市	●						
高ノ御前遺跡	三重県伊勢市	●						
澤田遺跡	三重県上野市	●						
小芝遺跡	三重県上野市	●						
神部遺跡	三重県上野市	●						
地蔵僧遺跡	三重県亀山市	●						
山城遺跡	三重県亀山市	●						
天ノ宮遺跡	三重県鈴鹿市	●						
白浜遺跡	三重県鳥羽市	●	●	●	●			●
人參峠遺跡	三重県名張市	●						
草山遺跡	三重県松阪市	●						
粥鍋遺跡	三重県松阪市	●						
曲遺跡	三重県松阪市	●						
大足遺跡	三重県松阪市	●						
堂ノ後遺跡	三重県松阪市	●						
深長古墳	三重県松阪市	●						
杉垣内遺跡	三重県松阪市	●						
上野遺跡	三重県四日市市	●						
永井遺跡	三重県四日市市	●						
浄土寺南遺跡	三重県安芸郡安濃町							●
清水西遺跡	三重県安芸郡安濃町	●						
高畑遺跡	三重県一志郡一志町	●						
貝塚遺跡	三重県一志郡三雲町	●						
宮の越遺跡	三重県一志郡三雲町	●						
女牛谷古墳群	三重県一志郡三雲町、 松阪市	●						
小村遺跡	三重県一志郡嬉野町	●						
下之庄東方遺跡	三重県一志郡嬉野町	●						
西殿遺跡	三重県志摩郡阿児町	●						
牛バサマA遺跡	三重県多気郡多気町	●						
掛橋遺跡	三重県度会郡小俣町	●						
湯野田遺跡A	三重県度会郡小俣町	●						
小杜遺跡	三重県度会郡玉城町	●						
勝田遺跡	三重県度会郡玉城町	●						
迫間浦道瀬遺跡	三重県度会郡南勢町	●						
滋賀里遺跡	滋賀県大津市	●						
豆木原遺跡	滋賀県大津市					●		
錦織遺跡	滋賀県大津市					●		
南滋賀遺跡	滋賀県大津市					●		
穴太遺跡	滋賀県大津市					●		
金剛寺・後川遺跡	滋賀県近江八幡市	●						
浅小井(高木)遺跡	滋賀県近江八幡市					●		
蛇塚遺跡	滋賀県近江八幡市	●						
東出遺跡	滋賀県近江八幡市					●		
黒橋遺跡	滋賀県近江八幡市	●	●					
千僧供庵寺遺跡	滋賀県近江八幡市					●		
馬淵遺跡	滋賀県近江八幡市	●				●		
九里館遺跡	滋賀県近江八幡市					●		
五条・南山田遺跡	滋賀県草津市					●		
御倉遺跡	滋賀県草津市					●		
大皮亥遺跡	滋賀県長浜市	●						

遺 跡 名	所 在 地	S字	高	環	器	台	鉢	壺
金剛寺遺跡	滋賀県長浜市	●				●		
高田遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●				
柿田遺跡	滋賀県長浜市	●	●					●
越前塚遺跡	滋賀県長浜市	●	●					●
大東遺跡	滋賀県長浜市	●						
熊岡山西遺跡	滋賀県長浜市	●	●					
松塚遺跡	滋賀県長浜市	●						
鴨田遺跡	滋賀県長浜市	●	●	●				
国友遺跡	滋賀県長浜市	●	●				●	●
永久寺遺跡	滋賀県長浜市					●		●
森前遺跡	滋賀県長浜市					●		●
高橋南遺跡	滋賀県長浜市	●						
大辰巳遺跡	滋賀県長浜市			●				
今川東遺跡・	滋賀県長浜市		●	●	●			
十禅寺遺跡								
相模北遺跡	滋賀県長浜市					●		●
十里町遺跡	滋賀県長浜市			●	●			
塚町遺跡	滋賀県長浜市	●						
墓立遺跡	滋賀県長浜市	●	●					
妙楽寺遺跡	滋賀県彦根市	●				●		
堀南遺跡	滋賀県彦根市						●	
笠原南遺跡	滋賀県守山市	●					●	
金ヶ森西遺跡	滋賀県守山市	●						
赤野井遺跡	滋賀県守山市	●						
山賀西遺跡	滋賀県守山市						●	
横江遺跡	滋賀県守山市			●	●			
石田三宅遺跡	滋賀県守山市	●	●					●
小島遺跡	滋賀県守山市						●	
播磨田東遺跡	滋賀県守山市						●	
古高遺跡	滋賀県守山市						●	
伊勢遺跡	滋賀県守山市	●						
唐川遺跡	滋賀県伊香郡高月町						●	
円通寺遺跡	滋賀県伊香郡高月町					●		
坂口遺跡	滋賀県伊香郡余呉町					●	●	
桜内遺跡	滋賀県伊香郡余呉町					●	●	●
堂田遺跡	滋賀県蒲生郡蒲生町	●						
蔵之町遺跡	滋賀県神崎郡五箇荘町	●						
斗西遺跡	滋賀県神崎郡能登川町	●	●					
垣見北遺跡	滋賀県神崎郡能登川町					●		
小川遺跡	滋賀県神崎郡能登川町					●		
法勝寺遺跡	滋賀県坂田郡近江町		●	●	●			
世継遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●						
高溝遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●	●					●
顔戸遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●						
黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●	●	●	●			●
西火打遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●						
西円寺遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●						
狐塚遺跡	滋賀県坂田郡近江町	●						
奥松戸遺跡	滋賀県坂田郡近江町			●				
入江内湖西野遺跡	滋賀県坂田郡米原町	●	●	●				●
中多良遺跡	滋賀県坂田郡米原町	●						
弘川遺跡	滋賀県高島郡今津町						●	
森浜遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●					●	●
針江遺跡	滋賀県高島郡新旭町					●	●	
針江中遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●						
針江北遺跡・	滋賀県高島郡新旭町						●	
針江川北遺跡								
針江遺跡群旭遺跡	滋賀県高島郡新旭町						●	
正伝寺南遺跡	滋賀県高島郡新旭町			●	●			
吉武城遺跡	滋賀県高島郡新旭町	●	●	●				
五条遺跡	滋賀県野洲郡中主町						●	
六条遺跡	滋賀県野洲郡中主町	●	●	●	●	●	●	●
木部遺跡	滋賀県野洲郡中主町						●	
野洲川左岸遺跡	滋賀県野洲郡野洲町						●	
常楽寺遺跡	滋賀県野洲郡野洲町							●
中北遺跡	滋賀県野洲郡野洲町						●	

第5章 まとめ

東海北陸自動車道の建設事業は、尾張北部地域を生活基盤とする人々にとって大きな変化をもたらすであろうことは、想像に難くない。さらに開通した折りには一体どのような生活が展開されるのであろうか。こうしたその社会の根底部分までも変化させてしまうような事象を画期と呼び、長い歴史のなかでは幾度となく繰り返されきたのであろう。こうした延長上に今日の世界が形成されている。それぞれの画期をそれぞれ時代の人々がどのような姿勢で受け止めたのかが、歴史のなかで評価される点でもある。画期に押しつぶされ、歴史の闇のなかに葬り去られたこともあったであろう。また、画期を乗り越えて更なる段階へと発展したこともあったのであろう。北道手遺跡で集落が本格的に形成され始めた3世紀という時代は、汎日本的規模で当時の社会において多くの地域・人々を巻き込んだ画期であった。西方に端を発した潮流は列島の中央部により更に増長された巨大な政治的エネルギーを帯びて放射状に拡散していった。はたしてそうであろうか。いとも簡単に人々は、巨大エネルギーにひれ伏したのだろうか。北道手遺跡はもちろんこの問いに明快に答えてくれるわけではない。以下、調査の成果をまとめてみる。

北道手遺跡の集落としての開始時期は、弥生時代中期中葉に遡る。尾張的視野での中期全般を概観した場合、中期前葉段階の集落の発展は前期集落の延長上に位置する。しかし、すべての前期遺跡がその道を辿った訳ではない。つまり、水田農耕の受容と拡散とはかならずしも軌を一致するものではない。土器様式共に広範囲に拡散するのは、中期中葉である。尾張の周辺地域はもちろん特に美濃地方へ広がりが認められる。この段階に新たに集落を形成した遺跡がその後も継続性を維持しえた遺跡は例外なく、尾張南部の遺跡に限られてくる。北道手遺跡や下渡遺跡・西上免遺跡等は継続しない遺跡であり、阿弥陀寺遺跡は継続し巨大な集落形成していく。前者の遺跡は中期中葉後空白期間を経て再び集落形成を開始するのが古墳時代初頭の段階まで待たねばならない。こうした出現様相を内的要因で理解するのか、あるいは同段階での西方からの巨大なエネルギーによる外的要因で理解するのかは、当地方に特徴的なS字形口縁台付甕（以下S字甕）の出現とその段階的拡散現象のあり方が問題となってくる。最近では、S字甕のほかに注目されてきているのが、加飾性に富み水銀朱による赤色顔料を用いて赤彩する土器のパレス形壺形土器や同様に加飾化が一般化したように他の器種（高坏・器台・壺・鉢）に多様されており、それらに尾張型の名称を与え尾張の独自性を探ろうとする研究指向が見られる。

着飾った土器すなわち加飾性に富む土器の分布はS字甕の分布と重なる地域が多い。特に杯部内面に沈線紋を加飾する高坏型土器は尾張低地部・北部を含めて美濃西部や近江東部に集中するようである。ただし、尾張や美濃では沈線多条が少条を凌駕しており、一方近江東岸では少条が多条を凌駕する違いが看取される。また、加飾高坏のなかで口縁内面を肥厚させたとえて沈線を多条化する一群は近江東岸で発達し、肥厚させないでの多条化

は美濃西部から尾張北西部において発展している。こうした、近江－美濃西部－尾張のルートは、近江のさらに北の北陸ともつながっており、北陸系土器のうち口縁部に凹線の見られる甕型土器や立ち上げた口縁部形態のみを受け入れた器形（文様はないままの器形）や特殊な器形をした器台等の土器が各地域のなかに入り込み土器形式を構成している。北陸系土器を出土する遺跡は、美濃地方では今宿遺跡・曾根八代町遺跡・城内遺跡・水没藤掛遺跡が知られており、尾張では北道手遺跡・朝日遺跡が挙げられる。

北道手遺跡を特徴づけているのは、水辺の祭祀形態である。水際に対して一定の空白ゾーンの背後に2 mを越す大型の土坑が2～3基のもとに規模が2 m以下の浅め土坑が付随して単位群（中核ゾーン）を形成する。空白ゾーンと土坑による単位群を形成する間には炭化物を伴う土坑群が存在している。単位群を形成する土坑群の一角に周溝を伴う仮設の建物が付随する。単位土坑群内の土器類が多量ではあるが細片化された土器が主体であったのに対して炭化物を含む土坑群周辺の土坑には完形品を含んでおり、祭祀の中心地が大型土坑群にあるのではなく水際こそ（空白ゾーンと中核ゾーンの両者）が重要な地域であったのであろう。

北道手遺跡は古墳時代の極短期間の集落遺跡でしかもその中心域（集落の本体）は調査区の北東部にあたり、西に広がる川あるいは氾濫に悩まされる湿地地帯に対峙した人々の祈りが繰り広げられた場所であったのであろう。北道手遺跡の理解には北東部の状況が必要であろう。しかし、今日の生活があり、そこは古墳時代以降安定したことをものがたっている。長期的安定生活には、自然に無力な人々にとって自然の怒りを鎮める祈りが欠かせなかった。いまやかつての祈りの場が生活の根幹をなす水田に置き換えられており、北道手遺跡はこうした歴史の流れを我々に教えてくれる。

線刻画
土器

94 E区の検出遺物として取り上げたこの土器片には焼成前になるへら描きによる絵画が描かれており、II期の壺形土器の破片と思われる。一見して船と船上の人物を表現しているようで人物の頭部には大きな飾りものを載せているかのようである。

描き手順は、船を描いた後船上の人物らしきものを描いている。船部は一見すると併走する2艘のようであるが、船首もしくは船尾を高く反り上げた描き方は耐波性を重視した準構造船を思わせる。船を描く視点は船に対して同位置で、船側面を外郭線のみならず複数の線刻で表現している。合わせ板を表現しているのであろうか。舷側には櫂の支点らしきものは描かれていない。人物は胴部と両肩（腕は略されている）更に頭部とおぼしき位置から上に向かって6条の線が延びている。うち右から2本目の線は体の中央部を貫き舷側をも貫いている。6条の線は鳥人を意識した羽根飾りではないだろうか。体の正中線を舷側を貫いていることは、不十分ながら人物が船内に立っていることを意識するものであろう。

この線刻画土器は全体構図の3分の1程であろう。全体を知り得ないが、右端の2つの三角形の描き方を船首もしくは船尾を高く反り上げた耐波性を強調したものであるとすると、渡航船を表現していることになる。そして、船上の人物は南方系の鳥人と考えても差し支えないのではなかろうか。しかし、この土器片を出土したのは内陸部の北道手遺跡である。海とはほど遠い。

参考文献

1983 石井謙治『図説 和船史話』

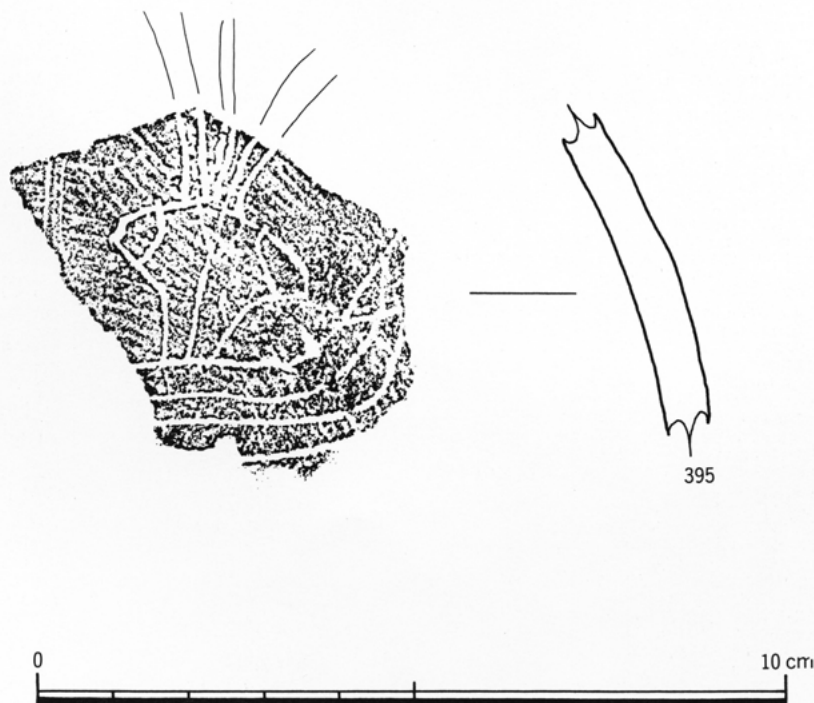


図74 線刻画土器

参考文献一覧

刊年	文 献	遺 跡 名	所 在 地
1 1963	瓜郷(市教委)	瓜郷遺跡	愛知県豊橋市
2 1964	豊川用水路関係遺跡調査報告(県教委)	八剣遺跡	愛知県新城市
3 1965	北條遺跡・大御堂遺跡発掘調査報告(町文化財保護委員会)	大御堂遺跡	愛知県丹羽郡大口町
4 1967	昭和41年度渥美半島埋蔵文化財調査報告(県教委)	瓦場遺跡群(大草地区)	愛知県渥美郡渥美町
5 1968	見晴台遺跡第Ⅳ次・第Ⅴ次発掘調査概報(市教委)	見晴台遺跡	愛知県名古屋市中区
6 1968	埋田遺跡発掘調査報告(市史編纂委員会)	埋田遺跡	愛知県津島市
7 1969	高橋遺跡(市教委)	高橋遺跡	愛知県豊田市
8 1970	春日井市遺跡発掘調査報告第4集(市教委)	南東山遺跡	愛知県春日井市
9 1970	津島市史:資料篇(一)	寺野遺跡	愛知県津島市
10 1971	朝日遺跡群の土器(保存会)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
11 1971	高橋遺跡(市教委)	高橋遺跡	愛知県豊田市
12 1972	朝日遺跡群予備調査報告2(県教委)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
13 1972	門間遺跡発掘調査報告書(町教委)	門間遺跡	愛知県豊田郡木曾川町
14 1972	御旅所遺跡(市教委)	御旅所遺跡	愛知県岡崎市
15 1972	養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告(県教委)	桐山遺跡	三重県津市
16 1972	養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告(県教委)	桐山遺跡	三重県津市
17 1972	養老・森山B・桐山遺跡発掘調査報告(県教委)	桐山遺跡	三重県津市
18 1972	鴨田遺跡発掘調査概要(県教委)	鴨田遺跡	滋賀県長浜市
19 1973	尾西市木曾川水没遺跡調査報告(市教委)	木曾川水没遺跡	愛知県尾西市
20 1973	安城市史:資料編	本神遺跡	愛知県安城市
21 1973	西尾市史:自然環境・原始古代一	不毛第一遺跡	愛知県尾西市
22 1973	昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告(県教委)	中栗山遺跡	三重県伊勢市
23 1973	永井遺跡発掘報告(市教委)	永井遺跡	三重県四日市市
24 1973	昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	清水西遺跡	三重県安芸郡安濃町
25 1973	昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	宮の越遺跡	三重県一志郡三雲町
26 1973	昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	小村遺跡	三重県一志郡嬉野町
27 1973	湖西線関係遺跡調査報告書(調査団)	滋賀里遺跡	滋賀県大津市
28 1974	古沢町遺跡発掘調査報告(市教委)	古沢町遺跡	愛知県名古屋市中区
29 1974	古沢町遺跡発掘調査報告(市教委)	下前津遺跡	愛知県名古屋市中区
30 1974	伊保遺跡(猿投遺跡調査会)	玉江遺跡	愛知県高浜市
31 1974	伊保遺跡(猿投遺跡調査会)	伊保遺跡	愛知県豊田市
32 1975	朝日遺跡群第一次調査報告(県教委)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
33 1975	甚目寺町史	清明遺跡	愛知県海部郡甚目寺町
34 1975	坂戸遺跡(市教委)	坂戸遺跡	愛知県岡崎市
35 1976	高橋遺跡第六次調査報告(市教委)	高橋遺跡	愛知県豊田市
36 1976	宮之脇遺跡発掘調査報告書(可児町教委)	宮之脇遺跡	岐阜県可児市
37 1976	追間浦遺跡調査報告(町教委)	追間浦遺跡	三重県度会郡南勢町
38 1976	榎木原遺跡発掘調査報告Ⅱ(県教委)	榎木原遺跡	滋賀県大津市
39 1977	中島遺跡発掘調査報告(市教委)	中島遺跡	三重県津市
40 1977	入江内湖西野遺跡発掘調査報告書(県教委)	入江内湖西野遺跡	滋賀県坂田郡米原町
41 1978	地蔵僧遺跡発掘調査報告(市教委)	地蔵僧遺跡	三重県亀山市
42 1978	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ(県教委)	赤井野遺跡	滋賀県守山市
43 1978	森浜遺跡発掘調査報告書(県教委)	森浜遺跡	滋賀県高島郡新旭町
44 1979	小原池古竈址群(小原池団地遺跡調査団)	相模谷遺跡	愛知県知多郡美浜町
45 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	江東遺跡	岐阜県岐阜市
46 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	御望遺跡	岐阜県岐阜市
47 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	一本松遺跡	岐阜県岐阜市
48 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	竜田町遺跡	岐阜県岐阜市
49 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	下川手遺跡	岐阜県岐阜市
50 1979	岐阜市史:史料編:考古・文化財	下城田山道上遺跡	岐阜県岐阜市
51 1979	中村遺跡第1~2次発掘調査報告書(市教委)	中村遺跡	岐阜県津川市
52 1979	昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	野垣内遺跡	三重県伊勢市
53 1979	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ-3(県教委)	熊岡山西遺跡	滋賀県長浜市
54 1979	森浜遺跡発掘調査報告書(県教委)	森浜遺跡	滋賀県高島郡新旭町
55 1980	三ツ山古墳群発掘調査報告書(市教委)	三ツ山古墳群	愛知県小牧市
56 1980	塔の越遺跡発掘調査報告書(市教委)	塔の越遺跡	愛知県稲沢市
57 1980	西の浜久森遺跡(調査団)	八幡上遺跡	愛知県渥美郡渥美町
58 1980	納所遺跡(県教委)	納所遺跡	三重県津市
59 1980	高田遺跡調査報告書(市教委)	高田遺跡	滋賀県長浜市
60 1980	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-5(県教委)	小川遺跡	滋賀県神崎郡能登川町
61 1980	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-1(県教委)	針江遺跡	滋賀県高島郡新旭町
62 1981	一宮南高校平松遺跡発掘調査報告書(県教委)	平松遺跡	愛知県一宮市
63 1981	朝日遺跡群発掘調査中間概報8(県教委)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
64 1981	木曾川町史	金塚出土	愛知県豊田郡木曾川町
65 1981	木曾川町史	稲塚出土	愛知県豊田郡木曾川町
66 1981	岐阜県史・温史編:原始	輪之内四郷遺跡	岐阜県安八郡輪之内町
67 1981	岐阜県史・温史編:原始	九合洞窟遺跡	岐阜県山県郡美山町
68 1981	昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	神部遺跡	三重県上野市
69 1981	昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	天ノ宮遺跡	三重県鈴鹿市
70 1981	昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	浄土寺南遺跡	三重県安芸郡安濃町
71 1981	歩路第2号(皇学館大学考古研究会)	小社遺跡	三重県度会郡玉城町
72 1981	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ-1(県教委)	唐川遺跡	滋賀県伊香郡高月町
73 1981	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ-3(県教委)	弘川遺跡	滋賀県高島郡今津町
74 1982	朝日遺跡(県教委)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
75 1982	平和町誌	法立字巽屋敷出土	愛知県中島郡平和町
76 1982	細見遺跡(市教委)	細見遺跡	愛知県知多市
77 1982	阿木川ダム関係遺跡発掘調査報告書	花無山遺跡(大野吾遺跡)	岐阜県恵那市
78 1982	針江遺跡群地遺跡発掘調査概要(県教委)	針江遺跡群地遺跡	滋賀県高島郡新旭町
79 1983	大山市史:史料編三:考古・古代・中世	西岩神B地区	愛知県大山市
80 1983	大山市史:史料編三:考古・古代・中世	濱古路付近	愛知県大山市
81 1983	弥勒寺御中塚遺跡発掘調査報告書(町総務部企画課)	弥勒寺御中塚遺跡	愛知県西春日井郡西春町
82 1983	廻間遺跡(県教委)	廻間遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
83 1983	仁所野遺跡(町教委)	仁所野遺跡	愛知県丹羽郡大口町
84 1983	各務原市史:考古・民俗編:考古	弥兵衛島遺跡	岐阜県各務原市
85 1983	隠岡遺跡発掘調査報告(市教委)	隠岡遺跡	三重県伊勢市
86 1983	名張の遺跡(皇学館大学考古研究会)	人參山遺跡	三重県名張市
87 1983	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-2(県教委)	唐川遺跡	滋賀県伊香郡高月町
88 1984	勝川遺跡(県サービスセンター)	勝川遺跡	愛知県春日井市
89 1984	新修稲沢市史:資料編六考古	塔の越遺跡	愛知県稲沢市
90 1984	新修稲沢市史:資料編六考古	重木・横地遺跡	愛知県稲沢市
91 1984	新修稲沢市史:資料編六考古	込野遺跡	愛知県稲沢市
92 1984	新修稲沢市史:資料編六考古	琵琶戸遺跡	愛知県稲沢市
93 1984	年報Ⅱ(県サービスセンター)	阿弥陀寺遺跡	愛知県海部郡甚目寺町
94 1984	松崎貝塚第2次発掘調査報告書(市教委)	塚森遺跡	愛知県東海市
95 1984	子安神社遺跡(市教委)	子安神社遺跡	愛知県大府市
96 1984	細見遺跡第2次発掘調査(市教委)	細見遺跡	愛知県知多市
97 1984	守山市文化財調査報告書第13冊(市教委)	播磨田東遺跡	滋賀県守山市

	刊年	文 献	道 路 名	所 在 地
98	1984	北陸自動車道関連道路発掘調査報告書Ⅸ(県教委)	坂口遺跡	滋賀県伊香郡余呉町
99	1984	国道161号線バイパス関連道路調査概要昭和58年度4(県教委)	正伝寺南遺跡	滋賀県高島郡新旭町
100	1985	岩倉市史：上巻	西北出遺跡B地点	愛知県岩倉市
101	1985	昭和59年度農業整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告(県教委)	曲遺跡	三重県松阪市
102	1985	小俣町の遺跡(京学館大学考古研究会)	掛橋遺跡	三重県会郡小俣町
103	1985	錦織・南滋賀道路発掘調査概要Ⅰ(県教委)	錦織遺跡	滋賀県大津市
104	1985	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅡ-2(県教委)	蛇塚遺跡	滋賀県近江八幡市
105	1985	ほ場整備関係道路発掘調査報告書Ⅶ-2(県教委)	永久寺遺跡	滋賀県長浜市
106	1985	県宮かんがい排水事業関連道路発掘調査報告書Ⅱ-3(県教委)	大辰巳遺跡	滋賀県長浜市
107	1986	塔の越遺跡発掘調査概要報告書(市教委)	塔の越遺跡	愛知県稲沢市
108	1986	下津城路発掘調査報告書Ⅱ(市教委)	下津城路	愛知県稲沢市
109	1986	能田旭古墳2次発掘調査報告(町教委)	能田旭遺跡	愛知県西春日井郡師勝町
110	1986	細見遺跡第3次発掘調査(市教委)	細見遺跡	愛知県知多市
111	1986	御園遺跡発掘調査報告書(町教委)	御園遺跡	愛知県宝飯郡一宮町
112	1986	西垣内遺跡発掘調査報告(市教委)	西垣内遺跡	三重県津市
113	1986	県宮干拓地等農地整備事業開発発掘調査報告書Ⅲ(県教委)	浅小井(高木)遺跡	滋賀県近江八幡市
114	1986	近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ(市教委)	九里館遺跡	滋賀県近江八幡市
115	1986	県宮かんがい排水事業関連道路発掘調査報告書Ⅲ-2(県教委)	相模北遺跡	滋賀県長浜市
116	1986	県宮かんがい排水事業関連道路発掘調査報告書Ⅲ-1(県教委)	山賀西遺跡	滋賀県守山市
117	1986	横江遺跡発掘調査報告書Ⅰ(県教委)	横江遺跡	滋賀県守山市
118	1986	守山市文化財調査報告書第8冊(市教委)	小島遺跡	滋賀県守山市
119	1986	五個荘町文化財調査報告10(町教委)	蔵之町遺跡	滋賀県神崎郡五個荘町
120	1986	国道161号線バイパス関連道路調査概要昭和60年度(県教委)	針江川北道	滋賀県高島郡新旭町
121	1987	第5次堅三蔵通遺跡発掘調査概要報告書(市教委)	堅三蔵通遺跡	愛知県名古屋
122	1987	土田遺跡(県埋文)	土田遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
123	1987	佐織町史：資料編二	東西野遺跡	愛知県海部郡佐織町
124	1987	佐織町史：資料編二	鶴岡遺跡	愛知県海部郡佐織町
125	1987	佐織町史：資料編二	奥津社古墳	愛知県海部郡佐織町
126	1987	為当条遺跡発掘調査報告書(市教委)	船原遺跡	愛知県豊川市
127	1987	一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(町教委)	大塚古墳	愛知県宝飯郡一宮町
128	1987	粥鍋遺跡発掘調査報告(松阪市)	粥鍋遺跡	三重県松阪市
129	1987	高畑遺跡発掘調査報告(町教委)	高畑遺跡	三重県一志郡一志町
130	1987	下之庄東方遺跡(高畑地区)(県教委)	下之庄東方遺跡	三重県一志郡娘野町
131	1987	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅣ-3(県教委)	金剛寺遺跡	滋賀県長浜市
132	1987	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅥ-1(県教委)	松塚遺跡	滋賀県長浜市
133	1987	笠原南遺跡発掘調査報告書(県教委)	笠原南遺跡	滋賀県守山市
134	1987	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅣ-3(県教委)	世継遺跡	滋賀県坂田郡近江町
135	1987	一般国道8号(長浜バイパス)関連道路発掘調査報告書Ⅳ(県教委)	西火灯遺跡	滋賀県坂田郡近江町
136	1987	一般国道8号(長浜バイパス)関連道路発掘調査報告書Ⅳ(県教委)	狐塚遺跡	滋賀県坂田郡近江町
137	1988	見晴台遺跡第25次発掘調査の記録(見晴考古資料館)	見晴台遺跡	愛知県名古屋
138	1988	塔の越遺跡発掘調査報告書Ⅱ(発掘調査団)	塔の越遺跡	愛知県稲沢市
139	1988	大洞遺跡・阿弥陀寺遺跡(県埋文)	大洞遺跡	愛知県海部郡甚目寺町
140	1988	トメキ遺跡(市教委)	トメキ遺跡	愛知県東海市
141	1988	一宮東部地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ(町教委)	宮沢遺跡	愛知県宝飯郡一宮町
142	1988	ドウツン松遺跡(調査会)	ドウツン松遺跡	愛知県渥美郡渥美町
143	1988	近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ(県教委)	女牛谷・ビハノ古墳群	三重県一志郡娘野町、松阪市
144	1988	下之庄東方遺跡(小野・四反田・夜ノ堀地区)(県教委)	下之庄東方遺跡	三重県一志郡娘野町
145	1988	勝田遺跡発掘調査報告(県教委)	勝田遺跡	三重県会郡玉城町
146	1988	草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報3(県教委)	御倉遺跡	滋賀県草津市
147	1988	長浜市埋蔵文化財調査資料第5集(市教委)	越前塚遺跡	滋賀県長浜市
148	1988	北陸自動車道関連道路発掘調査報告書Ⅹ(県教委)	国友遺跡	滋賀県長浜市
149	1988	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅤ-1(県教委)	国友遺跡	滋賀県長浜市
150	1988	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅤ-1(県教委)	森前遺跡	滋賀県長浜市
151	1988	長浜市埋蔵文化財調査資料第4集(市教委)	十里町遺跡	滋賀県長浜市
152	1988	石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅰ(県教委)	石田三宅遺跡	滋賀県守山市
153	1988	守山市文化財調査報告書第31冊(市教委)	高古遺跡	滋賀県守山市
154	1988	一般国道8号(長浜バイパス)関連道路発掘調査報告書Ⅴ(県教委)	法勝寺遺跡	志賀県坂田郡近江町
155	1988	狐塚遺跡・法勝寺遺跡(県教委)	法勝寺遺跡	滋賀県坂田郡近江町
156	1988	五条遺跡発掘調査報告書(県教委)	五条遺跡	滋賀県野洲郡中主町
157	1988	能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集(町教委)	斗西遺跡	滋賀県神崎郡能登川町
158	1989	若葉通遺跡発掘調査の概要(市教委)	若葉通遺跡	愛知県名古屋
159	1989	町田遺跡(県埋文)	町田遺跡	愛知県春日井市
160	1989	土田関連遺跡発掘調査報告書(発掘調査団)	土田関連遺跡	愛知県稲沢市
161	1989	平和町誌	法立字正作出土	愛知県中島郡平和町
162	1989	新修半田市誌：上巻	五反田遺跡	愛知県半田市
163	1989	神明社貝塚(町教委)	神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町
164	1989	神明社貝塚(町教委)	神明社東坂道遺跡	愛知県知多郡南知多町
165	1989	神明社貝塚(町教委)	鯉波遺跡	愛知県知多郡南知多町
166	1989	新編岡崎町史：資料考古	高木遺跡	愛知県岡崎市
167	1989	新編岡崎町史：資料考古	生平遺跡	愛知県岡崎市
168	1989	新編岡崎町史：資料考古	米野遺跡	愛知県岡崎市
169	1989	新編岡崎町史：資料考古	矢作川河床遺跡	愛知県岡崎市
170	1989	中根山遺跡(町教委)	中根山遺跡	愛知県稲垣郡吉良町
171	1989	南貝津遺跡(町教委)	南貝津遺跡	愛知県新城市
172	1989	郷中・雨谷(市教委)	雨谷遺跡	愛知県豊川市
173	1989	郷中・雨谷(市教委)	郷中遺跡	愛知県豊川市
174	1989	宮沢遺跡(町)	宮沢遺跡	愛知県宝飯郡一宮町
175	1989	八幡上遺跡調査報告(第2次)(町教委)	八幡上遺跡	愛知県渥美郡渥美町
176	1989	森山東・太田遺跡(県教委)	太田遺跡	三重県津市
177	1989	歩跡第4号(京学館大学考古研究会)	高ノ御前遺跡	三重県伊勢市
178	1989	昭和61年度農業整備事業埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ(県教委)	堂ノ後遺跡	三重県松阪市
179	1989	昭和61年度農業整備事業埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ(県教委)	深長古墳	三重県松阪市
180	1989	昭和61年度農業整備事業埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ(県教委)	杉田内古墳	三重県松阪市
181	1988	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅥ-3(県教委)	東出遺跡	滋賀県近江八幡市
182	1989	柿田遺跡発掘調査報告書(県教委)	柿田遺跡	滋賀県長浜市
183	1988	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅥ-1(県教委)	国友遺跡	滋賀県長浜市
184	1989	妙楽寺遺跡Ⅲ(県教委)	妙楽寺遺跡	志賀県彦根市
185	1989	北陸自動車道関連道路発掘調査報告書ⅩⅠ(県教委)	桜内遺跡	滋賀県伊香郡余呉町
186	1989	ほ場整備関係道路発掘調査報告書ⅩⅥ-5(県教委)	堂田遺跡	滋賀県蒲生郡蒲生町
187	1989	一般国道8号(長浜バイパス)関連道路発掘調査報告書Ⅵ(県教委)	奥松戸遺跡	滋賀県坂田郡近江町
188	1990	名古屋城三の丸遺跡Ⅰ(県埋文)	名古屋城三の丸遺跡	愛知県名古屋
189	1990	月鏡手遺跡・貴生町遺跡(県埋文)	月鏡手遺跡	愛知県名古屋
190	1990	月鏡手遺跡・貴生町遺跡(県埋文)	貴生町遺跡	愛知県名古屋
191	1990	貴生町遺跡第3～5次調査の概要(市教委)	貴生町遺跡	愛知県名古屋
192	1990	大平遺跡発掘調査報告書(市教委)	大平遺跡	愛知県尾西市
193	1990	廻間遺跡(県埋文)	廻間遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
194	1990	西中遺跡群Ⅴ(市教委)	荒新切遺跡	愛知県知立市

	刊年	文 献	道 路 名	所 在 地
195	1990	城之内遺跡(市教委)	城之内遺跡	岐阜県岐阜市
196	1990	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報(県教委)	里前遺跡	三重県津市
197	1990	白浜遺跡発掘調査報告(本浦遺跡群調査委員会)	白浜遺跡	三重県鳥羽市
198	1990	錦織・南滋賀遺跡近江国片路発掘調査概要Ⅳ(県教委)	錦織遺跡	滋賀県大津市
199	1990	埋蔵文化財調査研究発表要旨(県教委)	円通寺遺跡	志賀県伊香郡高月町
200	1990	近江町文化財調査報告書第4集(町教委)	高溝遺跡	志賀県坂田郡近江町
201	1990	近江町文化財調査報告書第5集(町教委)	顔戸遺跡	志賀県坂田郡近江町
202	1990	正伝寺南遺跡(県教委)	正伝寺南遺跡	志賀県高島郡新旭町
203	1990	六条遺跡発掘調査報告書(県教委)	六条遺跡	志賀県野洲郡中主町
204	1990	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-1(県教委)	法勝寺遺跡	滋賀県坂田郡近江町
205	1991	三王山遺跡発掘調査の概要(市教委)	三王山遺跡	愛知県名古屋市中
206	1991	旧国鉄操車場跡地内試掘調査報告書Ⅰ(市教委)	陸田白山遺跡	愛知県稲沢市
207	1991	大淵遺跡(県埋文)	大淵遺跡	愛知県海部郡甚目寺町
208	1991	市杵嶋神社遺跡(Ⅰ)(市教委)	市杵嶋神社古墳	愛知県豊橋市
209	1991	山崎遺跡(町教委)	柳原遺跡	愛知県渥美郡田原町
210	1991	山崎遺跡(町教委)	山崎遺跡	愛知県渥美郡田原町
211	1991	城之内遺跡Ⅱ(県文化財保護センター内)	城之内遺跡	岐阜県岐阜市
212	1991	八龍遺跡A地区発掘調査報告書(市教委)	八龍遺跡	岐阜県各務原市
213	1991	平成2年度農業基盤整備事業地埋蔵文化財発掘調査報告書第3分冊(県教委)	澤田遺跡	三重県上野市
214	1991	上野遺跡(市道調査会)	上野遺跡	三重県四日市市
215	1991	近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査報告書第3分冊Ⅰ(県教委)	東峽遺跡・女牛谷古墳群	三重県一志郡嶺野町、松阪市
216	1991	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-7(県教委)	金剛寺・後川遺跡	滋賀県近江八幡市
217	1991	千僧供庵遺跡発掘調査報告書(県教委)	千僧供庵遺跡	志賀県近江八幡市
218	1991	馬淵遺跡発掘調査報告書(県教委)	馬淵遺跡	志賀県近江八幡市
219	1991	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-8(県教委)	五条・南山田遺跡	滋賀県津市
220	1991	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-2(県教委)	大東遺跡	滋賀県長浜市
221	1991	県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ-1(県教委)	国友遺跡	滋賀県長浜市
222	1991	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅶ-3(県教委)	高橋南遺跡	滋賀県長浜市
223	1991	石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ(県教委)	石田三宅遺跡	滋賀県守山市
224	1991	守山市文化財調査報告書第42冊(市教委)	伊勢遺跡	滋賀県守山市
225	1991	能登川町埋蔵文化財調査報告書第20集(町教委)	垣見北遺跡	滋賀県神崎郡能登川町
226	1991	近江町文化財調査報告書第12集(町教委)	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町
227	1991	近江町文化財調査報告書第13集(町教委)	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町
228	1991	入江内湖西野遺跡(町教委)	入江内湖西野遺跡	滋賀県坂田郡米原町
229	1991	針江中遺跡・針江南遺跡(県教委)	針江中遺跡	滋賀県高島郡新旭町
230	1991	野洲川左岸遺跡発掘調査報告3(町教委)	野洲川左岸遺跡	滋賀県野洲郡野洲町
231	1992	貴生町遺跡第6～8次発掘調査概要報告書(市教委)	貴生町遺跡	愛知県名古屋市
232	1992	山中遺跡(県埋文)	山中遺跡	愛知県一宮市
233	1992	市内遺跡発掘調査概要報告書(市教委)	でんやま古墳	愛知県一宮市
234	1992	勝川遺跡Ⅲ(県埋文)	勝川遺跡	愛知県春日井市
235	1992	勝川遺跡Ⅳ(県埋文)	勝川遺跡	愛知県春日井市
236	1992	岩倉城遺跡(県埋文)	岩倉城遺跡	愛知県岩倉市
237	1992	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ(県教委)	六六B遺跡	三重県津市
238	1992	伊勢市とその周辺の古墳文化(皇学館大学考古研究会)	隠岡遺跡	三重県伊勢市
239	1992	伊勢市とその周辺の古墳文化(皇学館大学考古研究会)	高ノ温南遺跡	三重県伊勢市
240	1992	ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか(県埋文)	大足遺跡	三重県松阪市
241	1992	西段遺跡発掘調査報告(県埋文)	西段遺跡	三重県志摩郡阿児町
242	1992	近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告書第1分冊(県教委)	牛バサマA遺跡	三重県多気郡多気町
243	1992	伊勢市とその周辺の古墳文化(皇学館大学考古研究会)	掛橋遺跡	三重県度会郡小俣町
244	1992	伊勢市とその周辺の古墳文化(皇学館大学考古研究会)	湯野田遺跡A	三重県度会郡小俣町
245	1992	宮川下流域之遺跡(皇学館大学考古研究会)	小社遺跡	三重県度会郡玉城町
246	1992	伊勢市とその周辺の古墳文化(皇学館大学考古研究会)	小社遺跡	三重県度会郡玉城町
247	1992	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ-3(県教委)	黒橋遺跡	滋賀県近江八幡市
248	1992	鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅱ(県教委)	鴨田遺跡	滋賀県長浜市
249	1992	彦根市埋蔵文化財調査報告書第22集(市教委)	堀南遺跡	滋賀県彦根市
250	1992	黒田遺跡試掘調査概報(町教委)	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町
251	1992	針江北遺跡・針江川北遺跡(Ⅰ)(県教委)	(針江北遺跡・)針江川北遺跡	滋賀県高島郡新旭町
252	1993	尾崎遺跡(岐阜県文化財保護センター)	堅三蔵通遺跡	愛知県名古屋市
253	1993	西之海道遺跡(市教委)	西之海道遺跡	愛知県小牧市
254	1993	法海寺遺跡Ⅱ(市教委)	法海寺遺跡	愛知県知多市
255	1993	山崎遺跡(町教委)	山崎遺跡	愛知県渥美郡田原町
256	1993	尾崎遺跡(県文化財保護センター)	尾崎遺跡	岐阜県美濃加茂市
257	1993	松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告(市教委)	太田遺跡	三重県津市
258	1993	蔵田遺跡・平田遺跡・位田東遺跡(市教委)	蔵田遺跡	三重県津市
259	1993	小芝遺跡発掘調査報告(市教委)	小芝遺跡	三重県上野市
260	1993	南滋賀遺跡(県教委)	南滋賀遺跡	滋賀県長浜市
261	1993	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-1a(県教委)	大東遺跡	滋賀県長浜市
262	1993	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-1a(県教委)	大辰巳遺跡	滋賀県長浜市
263	1993	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ-1b(県教委)	今川東遺跡・十禅寺遺跡	滋賀県長浜市
264	1993	近江町文化財調査報告書第16集(町教委)	西門寺遺跡	志賀県坂田郡近江町
265	1993	針江川北(Ⅱ)古武城遺跡(県教委)	(針江北遺跡・)針江川北遺跡	滋賀県高島郡新旭町
266	1993	針江川北(Ⅱ)古武城遺跡(県教委)	古武城遺跡	滋賀県高島郡新旭町
267	1993	中主町文化財調査報告書第37集(町教委)	木部遺跡	志賀県野洲郡中主町
268	1993	能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集(町教委)	斗西遺跡	滋賀県神崎郡能登川町
269	1993	能登川町埋蔵文化財調査報告書第31集(町教委)	斗西遺跡	滋賀県神崎郡能登川町
270	1994	月繩手遺跡Ⅱ・Ⅲ・貴生町遺跡Ⅱ(県埋文)	月繩手遺跡	愛知県名古屋市
271	1994	松河戸遺跡(県埋文)	松河戸遺跡	愛知県春日井市
272	1994	堀之内花ノ木遺跡(県埋文)	堀之内花ノ木遺跡	愛知県稲沢市
273	1994	朝日遺跡Ⅴ(県埋文)	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町
274	1994	岡島遺跡(市教委)	岡島遺跡	愛知県西尾市
275	1994	毘沙門遺跡発掘調査の概要(市教委)	毘沙門遺跡	愛知県西尾市
276	1994	大垣市埋蔵文化財調査概要平成4年度(市教委)	今宿遺跡	岐阜県大垣市
277	1994	川合遺跡群(市教委)	宮之脇遺跡	岐阜県可児市
278	1994	伊瀬東地遺跡発掘調査報告書(市教委)	伊瀬東地遺跡	岐阜県美濃加茂市
279	1994	船来山古墳有杉の里地点発掘調査報告書(町教委)	船来山古墳群	岐阜県本巣郡糸貫町
280	1994	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ(県埋文)	六六A遺跡	三重県津市
281	1994	山城遺跡・北瀬古遺跡(県埋文)	山城遺跡	三重県亀山市
282	1994	穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ(県教委)	穴太遺跡	滋賀県大津市
283	1994	大皮亥・鴨田遺跡現地説明会資料(市教委)	大皮亥遺跡	滋賀県長浜市
284	1994	鴨田遺跡発掘調査報告書Ⅲ(県教委)	鴨田遺跡	滋賀県長浜市
285	1994	県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅹ-1(県教委)	今川東遺跡・十禅寺遺跡	滋賀県長浜市
286	1994	長浜市埋蔵文化財調査資料第8集(市教委)	塚町遺跡	滋賀県長浜市
287	1994	近江町文化財調査報告書第17集(町教委)	黒田遺跡	滋賀県坂田郡近江町
288	1995	御望遺跡(市教委)	御望遺跡	岐阜県岐阜市
289	1995	大垣市埋蔵文化財調査概要平成5年度(市教委)	曾根八千町遺跡	岐阜県大垣市
290	1995	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ(県埋文)	六六A遺跡	三重県津市
291	1995	長浜市埋蔵文化財調査資料第10集(市教委)	藤立遺跡	滋賀県長浜市

別 表

遺物一覽
遺構一覽

出土遺物一覧表

※「器高」の()内は残存部分の値

※「口径」、「底径」の()内は残存部分から推定した値

I 期 弥生時代中期の土器

番号	調査区/遺構	器種	器高 cm	口径 cm	底径 cm	備考
E-400	A SK22	細頸壺	(10.2)	—	—	貝田町 条痕
E-401	A SK22	深鉢	—	—	—	貝田町 条痕

番号	調査区/遺構	器種	器高 cm	口径 cm	底径 cm	備考
E-402	A SK22	深鉢	—	—	—	貝田町 条痕
E-403	A SK22	深鉢	—	—	—	貝田町 条痕

II 期 古墳時代初頭の土器

番号	調査区/遺構	器種	器高 cm	口径 cm	底径 cm	備考
E- 1	A SD05	甕C2	(3.9)	(13.0)	—	
E- 2	A SD05	甕C2	(6.4)	(14.2)	—	
E- 3	A SD05	甕C2	(3.6)	(17.4)	—	
E- 4	A SD05	甕C2	(4.3)	14.8	—	
E- 5	A SD05	甕C2	(4.4)	(12.6)	—	
E- 6	A SD05	甕C2	(4.6)	15.0	—	
E- 7	A SD05	甕C2	—	(17.4)	9.8	
E- 8	A SD05	甕C2	(6.1)	12.5	—	
E- 9	A SD05	甕C2	(7.5)	12.0	—	
E-10	A SD05	甕C2	—	15.6	9.0	
E-11	A SD05	甕B2	(3.6)	(19.5)	—	
E-12	A SD05	器台B2	(3.6)	9.4	—	
E-13	A SD05	高坏?	(3.4)	(15.0)	—	外来系
E-14	A SD05	高坏B	(10.1)	(13.2)	—	
E-15	A SD05	鉢B3	4.1	(8.3)	—	
E-16	A SD05	壺B3	28.0	15.5	5.0	
E-17	A SD19	高坏A1	(7.5)	(23.0)	—	
E-18	A SD19	高坏A3	(3.4)	—	(15.1)	
E-19	A SD25	甕	(6.7)	(12.0)	—	外来系
E-20	A SD25	甕C2	(5.8)	(15.0)	—	
E-21	A SD27	高坏A1	(9.6)	29.8	—	
E-22	A SD27	高坏B	(3.4)	—	15.1	
E-23	A SD27	高坏A1	(9.6)	—	—	
E-24	A SD27	甕A	(3.5)	—	8.0	
E-25	A SD27	壺A	—	—	—	
E-26	A SD36	壺C	(7.9)	—	—	
E-27	A SK14	甕C	(5.7)	—	8.2	台部のみ
E-28	A SK16	甕C2	(3.1)	11.6	—	
E-29	A SK16	甕C2	(3.0)	(17.0)	—	
E-30	A SK16	甕C2	(6.8)	(21.5)	—	
E-31	A SK16	甕C2	(19.8)	(17.0)	—	
E-32	A SK18	高坏A1	11.7	(29.2)	—	
E-33	A SK16	高坏A1	10.1	—	15.2	E-32と同一?
E-34	A SK16	壺A2	(4.1)	16.2	—	
E-35	A SK16	壺A	(3.5)	(17.6)	—	
E-36	A SK16	壺	(4.3)	—	6.4	
E-37	A SK18	壺B2	(8.6)	(16.2)	—	
E-38	A SK18最下	甕A3	(12.3)	(17.0)	—	
E-39	A SK18最下	甕A3	(5.0)	(15.0)	—	
E-40	A SK18最下	甕B1	(3.8)	(17.0)	—	
E-41	A SK18	甕B3	(4.0)	(18.0)	—	
E-42	A SK18	甕A4	(5.6)	(19.0)	—	
E-43	A SK18	甕	(8.6)	—	(8.4)	台部のみ
E-44	A SK18	甕	(4.5)	—	8.6	台部のみ
E-45	A SK18	鉢A1	(9.8)	16.4	—	
E-46	A SK18	高坏	(7.0)	—	—	
E-47	A SK18	手焙	—	—	—	
E-48	A SK19	甕C3	(3.4)	(21.2)	—	
E-49	A SK19	甕C2	(9.5)	(11.0)	—	
E-50	A SK19下層	壺B2	(8.4)	12.8	—	
E-51	A SK19	壺A2	(6.0)	(19.2)	—	
E-52	A SK19	壺A	—	—	—	
E-53	A SK19	壺C2	(7.7)	(8.0)	—	
E-54	A SK19	壺B4	52.8	(19.4)	10.0	

番号	調査区/遺構	器種	器高 cm	口径 cm	底径 cm	備考
E- 55	A SK19	高坏A2	(6.2)	(20.6)	—	
E- 56	A SK19	鉢B1	(6.8)	(21.2)	—	
E- 57	A SK19	高坏A1	(9.1)	(16.6)	—	
E- 58	A SK19	高坏A3	(3.5)	(24.0)	—	
E- 59	A SK19	器台B1	9.3	(8.0)	9.4	外来系
E- 60	A SK19	甕	6.6	(8.4)	—	
E- 61	A SK19	手づくね	3.3	6.0	4.0	
E- 62	A SK19	鉢B3	5.9	(9.5)	—	
E- 63	A SK24	甕C2	(5.5)	(11.6)	—	
E- 64	A SK24	甕C1	(2.6)	(19.0)	—	
E- 65	A SK24	甕C2	(4.2)	(16.6)	—	
E- 66	A SK24	壺A2	(28.5)	(20.7)	—	
E- 67	A SK24	壺	(6.9)	—	1.9	
E- 68	A SK24	甕C	(9.0)	—	7.8	
E- 69	A SK24	高坏B	(7.8)	(12.2)	—	
E- 70	A SK24	高坏A3	(5.0)	—	—	
E- 71	A SK27	甕C1	5.1	(14.2)	—	
E- 72	A SK27	甕C1	(3.8)	(15.4)	—	
E- 73	A SK27	甕B2	(4.1)	(17.2)	—	
E- 74	A SK27	甕A4	(4.5)	(12.8)	—	
E- 75	A SK27	壺A	(2.8)	(18.0)	—	
E- 76	A SK27	壺B2	(7.7)	(16.2)	—	
E- 77	A SK27	壺A1	(6.2)	(19.0)	—	
E- 78	A SK27	高坏A3	(7.6)	—	—	
E- 79	A SK27	高坏A2	(6.5)	(20.6)	—	
E- 80	A SK27	高坏A1	(4.2)	—	—	
E- 81	A SK27	高坏A1	(8.6)	14.6	—	
E- 82	A SK27	高坏A2	(10.6)	23.2	—	
E- 83	A SK27	高坏A1	(5.1)	—	—	
E- 84	A SK27	高坏	(6.4)	(20.2)	—	外来系
E- 85	A SK27	高坏A3	—	—	—	
E- 86	A SK27	高坏A3	—	—	—	
E- 87	A SK27	深鉢	—	—	—	貝田町 条痕
E- 88	A SK27	甕	(4.2)	—	7.5	台部のみ
E- 89	A SK27	器台A	(5.1)	—	—	
E- 90	A SK27	壺	3.0	—	6.0	
E- 91	A SK27	壺B	(12.0)	—	6.2	
E- 92	A SK28	甕C2	(20.4)	(15.5)	—	
E- 93	A SK33	壺B	(4.8)	(18.0)	—	
E- 94	A SK34	壺C3	(2.2)	(20.6)	—	
E- 95	A SK34	壺C3	(5.4)	(14.6)	—	
E- 96	A SK34	壺D	(3.1)	(19.0)	—	
E- 97	A SK34	高坏A3	(7.0)	(27.0)	—	
E- 98	A SK48	鉢?	(7.1)	—	(10.2)	
E- 99	A SK48	甕C1	(4.1)	(16.9)	—	
E-100	A SK48	甕A	(24.6)	—	9.5	
E-101	A SK48	壺	(3.6)	—	6.2	
E-102	A SK48	高坏A1	(9.8)	—	14.8	
E-103	A SK49	甕C2	(2.6)	(14.6)	—	
E-104	A SK49	高坏	(5.9)	—	7.6	
E-105	A SK49	高坏A1	(4.8)	—	14.8	
E-106	A SK55	甕C2	(8.8)	(14.0)	—	
E-107	A SK55	甕C1	(7.8)	(20.0)	—	
E-108	A SK55	壺B2	(6.4)	(24.0)	—	

			cm	cm	cm	
番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-109	A SK55	甕C3	(20.2)	(15.5)	-	
E-110	A SK55	高坏A3	-	-	-	
E-111	A SK55	高坏A1	(8.0)	-	(14.0)	
E-112	A SK55	鉢B3	6.0	11.4	4.0	
E-113	A SK55	壺A	-	-	-	
E-114	A SK56	甕C1	(4.6)	(16.2)	-	
E-115	A SK56	甕C2	(3.1)	(18.6)	-	
E-116	A SK56	甕C2	(4.4)	(17.0)	-	
E-117	A SK56	甕C2	(4.4)	(18.0)	-	
E-118	A SK56	甕C2	(4.4)	(21.6)	-	
E-119	A SK56	甕C2	(3.4)	(12.6)	-	
E-120	A SK56	甕C2	(10.0)	(16.0)	-	
E-121	A SK56	甕C	(6.5)	-	10.4	台部のみ
E-122	A SK56	甕B2	(2.3)	(18.0)	-	
E-123	A SK56	壺B1	(5.6)	(14.2)	-	
E-124	A SK56	壺C1	(9.0)	(11.4)	-	
E-125	A SK56	壺A2	17.0	(17.0)	-	
E-126	A SK56	壺B4	(6.5)	(14.4)	-	
E-127	A SK56	壺A2	(5.5)	(17.4)	-	
E-128	A SK56	高坏A3	(5.2)	(18.4)	-	
E-129	A SK56	高坏C	(5.5)	(10.0)	-	
E-130	A SK56	高坏A1	(7.5)	-	-	
E-131	A SK56	器台A1	(5.7)	-	-	
E-132	A SK56	高坏A3	(6.8)	24.5	-	
E-133	A SK56	高坏A1	(10.5)	-	-	
E-134	A SK56	高坏A3	-	-	-	
E-135	A SK56	壺C2	7.3	7.4	2.1	
E-136	A SK56	壺A	-	-	-	
E-137	A SK56	深鉢	-	-	-	貝田町 条痕
E-138	A SK56	深鉢	-	-	-	貝田町 条痕
E-139	A SK56	壺	-	-	-	瓜郷
E-140	A SK56, 58	細頸壺	(13.0)	-	-	貝田町 条痕
E-141	A SK58	甕C2	(2.9)	(11.4)	-	
E-142	A SK58	甕C2	(4.0)	(12.6)	-	
E-143	A SK58	甕C2	(3.5)	(13.0)	-	
E-144	A SK58	甕C2	(3.2)	(15.0)	-	
E-145	A SK58	甕C2	(4.0)	(16.2)	-	
E-146	A SK58	甕C2	(4.9)	(18.0)	-	
E-147	A SK58	甕C2	(5.6)	(16.4)	-	
E-148	A SK58	甕C2	(4.2)	(22.0)	-	
E-149	A SK58	甕C2	(7.6)	(19.6)	-	
E-150	A SK58	甕C2	(3.0)	(13.0)	-	
E-151	A SK58	甕C2	(3.8)	(12.8)	-	
E-152	A SK58	甕C2	(4.5)	(13.6)	-	
E-153	A SK58	甕C2	(3.7)	(15.9)	-	
E-154	A SK58	甕C2	(5.4)	(14.0)	-	
E-155	A SK58	甕C2	(8.5)	(15.8)	-	
E-156	A SK58	甕C2	(5.0)	(16.2)	-	
E-157	A SK58	壺	(5.7)	-	(4.8)	
E-158	A SK58	高坏A2	(6.0)	(20.6)	-	
E-159	A SK58	高坏A1	(11.0)	-	(6.6)	
E-160	A SK58	高坏A1	8.8	-	12.7	
E-161	A SK58	高坏A1	(8.0)	-	-	
E-162	A SK58	高坏A1	(9.3)	-	(16.0)	
E-163	A SK58	高坏C	(4.9)	(11.0)	(6.0)	
E-164	A SK58	器台B2	9.7	7.9	(8.4)	
E-165	A SK58	壺B2	(5.6)	(18.8)	-	
E-166	A SK58	壺	(8.2)	-	5.6	
E-167	A SK58	壺A	-	-	-	
E-168	A SK58	壺A2	(4.3)	(17.2)	-	
E-169	A SK58	壺A2	(5.0)	(16.7)	-	
E-170	A SK58	壺A1	(3.8)	(14.8)	-	
E-171	A SK58	壺A	-	-	-	
E-172	A SK58	壺	-	-	-	

			cm	cm	cm	
番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-173	A SK58	壺B3	(5.5)	(13.6)	-	
E-174	A SK58	壺C	(6.8)	(13.0)	-	
E-175	A SK58	細頸壺	-	-	-	貝田町 条痕
E-176	A SK58	高坏	-	-	-	
E-177	A SD34	甕A3	(9.3)	(19.8)	-	
E-178	A SD34	甕A3	(5.8)	22.1	-	
E-179	A SD34	壺	(14.3)	-	5.3	
E-180	A SD37	甕C3	(9.2)	(16.0)	-	
E-181	A SD37	壺	(3.6)	-	-	
E-182	A SD38下層	壺C2	(8.0)	10.3	-	
E-183	A SD38	高坏A3	(7.7)	24.6	-	
E-184	A SD44	高坏	(7.7)	-	-	
E-185	A SD64	器台A1	(7.2)	-	-	
E-186	A SK65	器台B1	(3.1)	(9.0)	-	
E-187	A SK65	甕A1	21.5	14.6	8.0	
E-188	A SK65	甕A	(11.0)	-	(7.4)	
E-189	A SK65	甕C	(5.9)	-	9.0	台部のみ
E-190	A SK65	甕C	(8.8)	-	(10.1)	台部のみ
E-191	A SK59	甕C1	(5.0)	(18.2)	-	
E-192	A SK59	甕C1	(3.8)	(20.2)	-	
E-193	A SK59	甕A3	(13.9)	(18.8)	-	
E-194	A SK59	甕A3	(9.6)	(22.0)	-	
E-195	A SK59	甕	(3.8)	-	(5.0)	底部穿孔4ヶ 焼成前
E-196	A SK59	壺B1	11.2	(9.8)	3.0	
E-197	A SK59	壺B2	(6.4)	(15.8)	-	
E-198	A SK59	甕	(5.0)	-	8.2	台部のみ
E-199	A SK59	壺	-	-	-	
E-200	A SK59	高坏A1	(7.8)	-	-	
E-201	A SK59	高坏	(9.0)	-	-	
E-202	A SK58	器台A1	(7.3)	-	-	
E-203	A SK59	器台A1	(10.3)	(46.4)	-	
E-204	A SK59	器台A1	(10.6)	(17.5)	-	
E-205	A SK59	高坏A1	(10.8)	(29.8)	-	
E-206	A SK68	高坏A3	(5.4)	22.2	-	
E-207	A SK99	壺A3	(7.2)	(20.4)	-	
E-208	B SD91灰層	高坏A1	(11.9)	(24.2)	-	
E-209	B SD80, 91	高坏A1	(7.6)	(24.8)	-	
E-210	B SD80, 91	高坏A1	(11.6)	-	16.0	
E-211	B SD91	高坏A1	(6.4)	-	(15.6)	
E-212	B SD91	器台A1	(8.4)	-	-	
E-213	B SD91	甕C1	(3.8)	(18.2)	-	
E-214	B SD91	手づくね	(2.3)	-	(2.4)	
E-215	B SD80, 91	壺	(5.8)	2.9	2.5	
E-216	B SD91	壺B2	8.0	(11.0)	4.0	
E-217	B SD91	壺A	-	-	-	
E-218	B SD91	壺A	-	-	-	
E-219	B SD91	壺A	-	-	-	
E-220	B SD102	壺D	(4.2)	24.6	-	
E-221	B SD103	甕B2	(11.9)	(16.0)	-	
E-222	B SD103	甕A1	(5.6)	(16.4)	-	
E-223	B SD103	壺C2	(7.7)	(8.6)	-	
E-224	B SD103	甕	(4.4)	-	(3.8)	台部のみ
E-225	B SK103	壺A	-	-	-	
E-226	B SK103	高坏A3	(7.9)	(24.2)	-	
E-227	B SK103	高坏A1	(4.2)	-	-	
E-228	B SK103	器台B4	(6.2)	(9.6)	-	
E-229	B SK103	鉢B2	7.0	(6.4)	(4.5)	
E-230	B SK104	甕B1	(9.1)	15.7	-	
E-231	B SK104	甕	(8.0)	-	7.6	
E-232	B SK104	甕A4	(16.1)	(19.2)	-	
E-233	B SK121	高坏	7.7	-	15.0	
E-234	B SK149	壺A3	(5.5)	(21.8)	-	
E-235	B SK149	甕	(5.4)	-	9.6	台部のみ

番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-236	B SK126	甕C1	(12.0)	(19.9)	-	
E-237	B SK126	高坏C	(8.5)	(15.2)	-	
E-238	B SK126	壺B3	(13.0)	(11.6)	-	
E-239	B SK174	甕A2	24.6	17.7	7.8	
E-240	B SK174	甕	(4.7)	-	8.5	台部のみ
E-241	B SK186	壺B1	(3.6)	(10.4)	-	
E-242	B SK201	壺B1	(12.1)	13.6	-	
E-243	B SK202	甕A1	(8.0)	(10.2)	-	
E-244	B SK202	高坏?	(7.0)	-	-	外来系?
E-245	B SK202	高坏A3	(5.6)	(28.2)	-	
E-246	B SK202	高坏A1	(9.5)	(27.2)	-	
E-247	B SK202	高坏	(3.9)	-	-	
E-248	B SK202	壺A	-	-	-	
E-249	B SK202	壺A1	5.4	21.2	-	
E-250	C SD10上面	高坏A1	-	17.0	12.6	
E-251	C SD10上面	高坏A1	(7.2)	-	(12.6)	
E-252	C SD10上面	高坏A1	15.1	18.4	11.4	
E-253	C SD10上面	高坏B	11.0	12.2	15.2	
E-254	C SD10上面	高坏B	(4.5)	-	(15.2)	
E-255	C SD10上面	高坏	(6.4)	-	-	
E-256	C SD10上面	器台A2	11.4	(15.6)	(12.2)	
E-257	C SD10上面	甕C2	(14.9)	11.0	-	
E-258	C SD10上面	甕C1	(18.6)	(18.5)	-	
E-259	C SD10上面	甕C2	(13.5)	(16.8)	-	
E-260	C SD10上面	鉢B2	7.7	(9.2)	4.5	
E-261	C SD10	甕B2	7.8	(7.8)	(3.0)	
E-262	C SD10上層	甕B1	4.5	5.6	3.2	
E-263	C SD10下部	鉢B1	5.8	11.8	4.8	
E-264	C SD10上面	壺A3	(19.0)	(20.0)	-	
E-265	C SD10上面	壺E	(9.0)	20.8	-	
E-266	C SD10上面	壺B	(5.4)	(21.6)	-	
E-267	C SD10	壺	(2.7)	-	(4.4)	底部穿孔1ヶ 焼成前
E-268	C SD10	壺C	(9.5)	-	(3.4)	
E-269	C SD10	壺C	(14.0)	-	5.0	
E-270	C SD10上層	壺C2	15.0	(9.4)	1.6	
E-271	C SD10	高坏A1	(9.7)	(18.3)	-	
E-272	C SD10	壺B2	(25.6)	(14.8)	(6.0)	
E-273	C SD10上層	壺B2	(4.2)	(15.0)	-	
E-274	C SD10上部	高坏C	(11.7)	13.1	-	
E-275	C SD10上層	甕	(5.1)	-	(7.4)	台部のみ
E-276	C SD10	甕C1	(7.1)	(15.4)	-	
E-277	C SD10上層	壺	-	-	(7.8)	
E-278	D SD10	鉢B2	7.6	11.0	4.7	
E-279	D SD10	壺B2	12.5	(8.7)	3.8	
E-280	D SD10	壺B1	(11.2)	(11.4)	-	
E-281	D SD10	甕C1	(3.9)	(16.0)	-	
E-282	D SD10	高坏A3	(5.6)	(12.4)	-	
E-283	D SD10	高坏B	(9.7)	12.1	-	
E-284	D SD10	器台?	(3.5)	-	-	外来系?
E-285	D SD10	高坏A3	(7.2)	-	-	
E-286	D SD10上面	鉢A4	9.3	(14.0)	-	
E-287	D SD10	壺C1	(17.1)	(10.2)	-	
E-288	C SD67	甕B1	(3.9)	(15.5)	-	
E-289	C SK68	高坏A1	7.5	-	12.0	
E-290	C SK174	甕B3	(8.2)	(15.7)	-	
E-291	D SD03	甕C1	(4.9)	(16.8)	-	
E-292	D SD09	器台	(6.3)	-	-	
E-293	D SD15	甕C2	(17.4)	(14.8)	-	
E-294	D SD15	壺C2	(8.4)	(9.2)	-	
E-295	D SD15	甕C2	(24.5)	(15.6)	-	
E-296	D SD16	甕C	-	-	8.7	
E-297	D SD18	壺A	(8.2)	-	-	
E-298	D SD20	高坏A1	(9.7)	-	(12.0)	

番号	調査区/遺構	器種	器高	口径	底径	備考
E-299	D SD21	甕C2	(4.0)	(14.0)	-	
E-300	D SD21	壺A2	(4.4)	(18.0)	-	
E-301	C SD87	甕C2	(7.3)	(14.6)	-	
E-302	C SD87上面	甕C4	(5.0)	(26.4)	-	
E-303	C SD87	甕B2	-	(18.0)	4.5	
E-304	C SD87上面	甕B3	(20.7)	(16.5)	-	
E-305	C SD87	甕C	(10.1)	-	(9.2)	台部のみ
E-306	C SD87下層	甕	(5.4)	-	6.8	台部のみ
E-307	C SD87下層	壺B3	8.6	9.4	3.8	
E-308	C SD87上層	鉢B2	7.4	7.5	5.2	
E-309	C SD87上面	鉢B1	8.2	8.6	3.0	
E-310	C SD87	壺C2	16.2	9.6	4.0	
E-311	C SD87下層	鉢A1	(7.1)	16.0	-	
E-312	C SD87上面	壺D	(7.9)	(23.2)	-	
E-313	C SD87	壺B1	(10.4)	(12.0)	-	
E-314	C SD87	壺B2	(11.2)	(16.0)	-	
E-315	C SD87上層	壺A	(6.5)	-	-	
E-316	C SD87	壺?	3.8	-	-	外来系?
E-317	C SD87下層	高坏	(4.9)	-	-	
E-318	C SD87	高坏A1	16.9	(27.2)	-	
E-319	C SD87上面	器台B2	(2.5)	-	(8.5)	
E-320	C SD87	手焙	-	-	-	
E-321	C SD87	甕	-	-	-	
E-322	C SD87上層	壺	-	-	-	胴部片
E-323	C SD87上層	壺	-	-	-	胴部片
E-324	C SD87	壺	-	-	-	胴部片
E-325	D SK01	甕C2	(9.6)	14.8	-	
E-326	D SK01	甕C1	(29.0)	(17.0)	(8.9)	
E-327	D SK01	壺B2	(4.2)	17.2	-	
E-328	D SK01	壺B	14.7	9.8	4.9	
E-329	D SK02	甕C	(6.2)	-	7.0	台部のみ
E-330	D SD25	高坏A3	(6.2)	(20.0)	-	
E-331	D SD43	甕B3	(7.8)	(23.4)	-	
E-332	D SK16	甕B	(4.6)	(7.5)	-	
E-333	D SK16	甕C2	(4.4)	(14.4)	-	
E-334	D SK16	甕C3	(6.8)	(19.2)	-	
E-335	D SK16	壺B2	(3.9)	(15.6)	-	
E-336	D SK16	壺A2	(4.1)	(18.0)	-	
E-337	D SK16	壺A2	(3.2)	(19.6)	-	
E-338	D SK16	壺A	-	-	-	
E-339	D SK16, 22, 24	高坏	-	-	-	
E-340	D SK16	高坏A1	(6.2)	(27.4)	-	
E-341	D SK16	器台	(5.1)	-	-	
E-342	D SK16	器台C	(4.6)	-	-	
E-343	D SK16	器台	(3.7)	(14.4)	-	外来系
E-344	D SK16	器台	(5.3)	-	(14.4)	E-343と同一
E-345	D SK16	壺E?	(20.6)	-	-	
E-346	D SK21	甕	(7.7)	-	7.3	台部のみ
E-347	D SK25	甕A1	14.2	12.8	7.0	
E-348	D SK22	鉢B3	8.7	14.4	5.0	
E-349	D SK22	甕C2	(11.3)	15.2	-	
E-350	D SK26	甕A1	(10.8)	15.6	-	
E-351	D SK26	甕	(7.1)	-	(7.0)	台部のみ
E-352	D SK26	甕	(11.0)	-	(10.0)	台部のみ
E-353	D SK26	壺B2	(3.8)	(11.6)	-	
E-354	D SK26	壺B2	12.4	(9.3)	4.8	
E-355	D SK26	壺	(10.8)	-	4.4	
E-356	D SK26	壺A	(15.5)	-	(5.8)	
E-357	D SK26	壺C	6.0	-	-	
E-358	D SK26	壺C	(10.5)	-	2.5	
E-359	D SK26	高坏B	(6.1)	15.4	-	
E-360	D SK26	高坏A1	12.0	-	(18.0)	
E-361	D SK28	甕B3	(6.0)	(18.0)	-	

番号	調査区/遺構	器種	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-362	D SK28	甕A1	26.4	18.0	—	
E-363	D SK28	壺A1	(3.6)	(19.6)	—	
E-364	D SK28	壺A	(10.9)	—	—	
E-365	D SK29	鉢A1	(7.9)	(16.5)	—	
E-366	D SK29	壺C2	(13.2)	—	—	
E-367	D SK29	壺C1	(6.3)	15.0	—	
E-368	D SK29	壺A	(15.7)	—	—	
E-369	D SK29	甕B2	18.0	11.4	—	
E-370	D SK29	器台A1	13.1	17.8	12.1	
E-371	D SK38	壺	(12.0)	—	8.8	底部穿孔1壺 焼成前
E-372	D SK39	壺C3	(3.9)	(16.2)	—	
E-373	D SK40	甕C2	(21.7)	15.2	—	
E-374	D SK41	蓋	4.5	9.0	11.0	
E-375	D SK41	甕C1	(2.2)	(15.6)	—	
E-376	D SK41	甕C2	12.5	(10.0)	6.0	
E-377	D SK41	壺A2	(4.4)	(20.0)	—	
E-378	D SK41	高坏A3	(5.4)	(23.0)	—	
E-379	D SK41	高坏A3	(6.8)	(23.2)	—	
E-380	A 検出II	手づくね	(3.1)	5.0	—	

番号	調査区/遺構	器種	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-381	A 検出II	高坏	(8.5)	—	(11.8)	
E-382	A 検出II	甕B3	(7.7)	(12.6)	—	
E-383	A 検出II	甕B1	(6.4)	(14.0)	—	
E-384	A 検出II	鉢A2	(7.5)	(17.6)	—	
E-385	A 検出II	甕B3	(8.4)	(17.6)	—	
E-386	A 検出II	高坏A3	(5.3)	(26.8)	—	
E-387	A 検出I	高坏A3	—	—	—	
E-388	A 検出I	高坏A3	—	—	—	
E-389	A 東トレンチ	壺	—	—	—	
E-390	A 検出II	壺	—	—	—	
E-391	C 検出II	壺	—	—	—	瓜壺
E-392	C 検出I	壺	—	—	—	
E-393	C 検出II	壺E?	(4.3)	—	—	
E-394	D 検出II	壺C	(6.3)	—	(4.0)	
E-395	E 検出II	壺	—	—	—	線刻画あり
E-396	E 検出I	甕	—	—	—	タタキ目あり
E-397	D 検出I	壺	—	—	—	線刻画あり
E-398	D 検出I	器台B3	(6.9)	—	—	
E-399	D 検出I	甕C4	(3.9)	(26.2)	—	

III期 古代の遺物

番号	調査区/遺構	器種/分類	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-404	D SD25	須恵器 坏身	3.5	(11.4)	7.2	美濃須衛
E-405	D SD25	須恵器 坏身	3.6	10.1	7.2	美濃須衛
E-406	C 東トレンチ	須恵器 坏身	3.4	11.6	8.4	美濃須衛
E-407	D 検出I	須恵器 坏身	3.8	13.3	9.3	美濃須衛
E-408	D SD11	須恵器 坏身	4.4	14.4	9.9	美濃須衛?
E-409	C SD85	須恵器 坏身	4.2	11.8	—	スス付着
E-410	C 検出II	須恵器 坏身	3.8	11.6	—	美濃須衛 スス付着
E-411	C 検出II	須恵器 坏身	3.7	10.2	—	美濃須衛
E-412	C 検出II	須恵器 坏身	4.0	12.8	—	美濃須衛 スス付着
E-413	C 検出II	須恵器 坏身	(3.9)	(12.8)	—	美濃須衛 スス付着
E-414	C SD85	須恵器 坏身	3.1	10.8	6.0	美濃須衛 スス付着
E-415	C 検出I	須恵器 坏身	3.7	9.6	—	—
E-416	C 検出II	須恵器 坏身	(3.0)	(9.5)	—	美濃須衛 スス付着
E-417	C 検出I	須恵器 坏身	2.6	10.4	(4.8)	美濃須衛 スス付着
E-418	D SD25	須恵器 坏身	(4.3)	(19.4)	—	美濃須衛
E-419	E SK01	須恵器 鉢?	(2.2)	—	(11.0)	美濃須衛
E-420	D SD25	須恵器 高盤?	(1.9)	(25.2)	—	?

番号	調査区/遺構	器種/分類	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-421	D SD25	須恵器 坏蓋	(2.2)	(16.6)	—	美濃須衛?
E-422	C SD91	須恵器 坏蓋	3.5	(15.0)	—	美濃須衛
E-423	C 検出II	須恵器 坏蓋	(2.9)	(17.0)	—	美濃須衛?
E-424	C 検出II	須恵器 坏蓋	(2.7)	(14.2)	—	美濃須衛?
E-425	C SD89	須恵器 坏蓋	(3.1)	(19.2)	—	?
E-426	C 検出I	須恵器 坏蓋	(3.1)	(15.5)	—	美濃須衛
E-427	C SD63	須恵器 坏蓋	(2.6)	(21.6)	—	美濃須衛
E-428	C SD85	須恵器 板?	(4.9)	(13.6)	—	?
E-429	E 検出I	須恵器 小瓶	(2.1)	—	(1.7)	
E-430	D SD25	須恵器 甕	(6.0)	(21.0)	—	美濃須衛?
E-431	D SK28	須恵器 長頸瓶	(6.7)	—	—	痕投
E-432	D 検出I	須恵器 ?	(6.9)	—	—	
E-433	E 検出II	須恵器 形象甕	(6.1)	—	—	美濃須衛?
E-434	A 検出II	須恵器 形象甕	(4.1)	—	—	美濃須衛?
E-435	C SK64	白色系陶器 ?	7.9	5.8	8.6	美濃須衛?
E-436	D SD52	土師質 甕	(2.9)	(22.0)	—	

IV期 中世の遺物

番号	調査区/遺構	器種/分類	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-437	A 検出III	灰釉系陶器 碗	6.5	(14.8)	8.2	北部系
E-438	C 東トレンチ	灰釉系陶器 碗	4.5	(16.8)	8.0	南部系
E-439	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.7	15.6	6.5	南部系、スス付着
E-440	E 検出II	灰釉系陶器 碗	4.8	14.4	6.4	北部系
E-441	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.8	13.6	6.0	南部系
E-442	E 検出II	灰釉系陶器 碗	4.9	13.8	(5.9)	北部系
E-443	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.3	12.8	5.0	北部系、スス付着
E-444	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.4	13.6	6.0	南部系
E-445	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.5	14.6	5.0	北部系
E-446	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.2	13.7	5.8	北部系
E-447	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.3	14.6	5.2	北部系、スス付着
E-448	E 検出II	灰釉系陶器 碗	4.4	13.0	4.4	北部系、スス付着
E-449	E 検出II	灰釉系陶器 碗	3.3	—	9.8	南部系、スス付着
E-450	A 検出II	灰釉系陶器 皿	3.0	7.8	3.8	美濃須衛?
E-451	E SK04	灰釉系陶器 皿	2.2	7.8	4.5	南部系
E-452	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.4	9.0	5.5	
E-453	E 検出II	灰釉系陶器 皿	2.2	7.8	3.8	南部系
E-454	A 検出II	灰釉系陶器 皿	1.4	8.0	4.2	北部系
E-455	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.7	8.6	4.2	南部系

番号	調査区/遺構	器種/分類	cm			備考
			器高	口径	底径	
E-456	E 検出II	灰釉系陶器 皿	2.2	8.4	3.7	北部系
E-457	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.4	8.0	4.0	北部系
E-458	A 検出II	灰釉系陶器 皿	1.5	8.4	3.9	北部系
E-459	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.7	(8.0)	4.2	
E-460	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.8	8.1	4.1	北部系
E-461	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.8	8.4	5.2	南部系、スス付着
E-462	D SD01	灰釉系陶器 皿	1.4	7.6	4.5	北部系
E-463	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.8	8.3	4.6	南部系
E-464	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.6	8.5	4.8	南部系
E-465	E 検出II	土師質 皿	3.5	14.2	—	
E-466	E 検出II	土師質 皿	3.7	12.3	—	ロクロ成形
E-467	E 検出II	土師質 皿	2.7	14.0	—	
E-468	E 検出II	土師質 皿	2.9	(13.0)	—	
E-469	E 検出II	土師質 皿	3.7	(13.6)	—	
E-470	E 検出II	土師質 皿	1.8	(9.8)	—	口縁にスス付着
E-471	E 検出II	土師質 皿	1.7	(28.7)	4.0	
E-472	E 検出II	土師質 皿	1.7	(9.3)	—	
E-473	E 検出II	土師質 皿	1.6	8.9	4.9	
E-474	E 検出II	土師質 皿	1.7	(8.4)	—	

番号	調査区/遺構	器種/分類	器高	口径	底径	備考
E-475	D SD25	土師質 皿	1.9	7.9	—	
E-476	E 検出II	土師質 皿	1.7	9.0	—	
E-477	E 検出II	土師質 皿	(1.6)	(8.9)	—	
E-478	E 検出II	土師質 皿	2.0	8.0	—	
E-479	E 検出II	土師質 皿	1.9	9.7	—	
E-480	D 検出II	中国青磁 碗	(3.3)	(14.6)	—	龍泉窯系
E-481	E 検出II	中国青磁 碗	(3.3)	(17.0)	—	龍泉窯系
E-482	E 検出II	中国青磁 碗	(5.2)	(15.8)	—	龍泉窯系
E-483	E 検出II	中国青磁 皿	(1.0)	—	(5.0)	同安窯系

番号	調査区/遺構	器種/分類	器高	口径	底径	備考
E-484	A 検出I	土師質 鍋	(2.3)	(27.4)	—	伊勢型
E-485	E SK04	土師質 鍋	(2.0)	(25.2)	—	伊勢型
E-486	A 東トレンチ	土師質 羽釜	(6.1)	(28.0)	—	
E-487	E 検出I	古瀬戸 内耳鍋	(3.9)	(24.0)	—	
E-488	E SK04	灰釉系陶器 鉢	(3.4)	—	(12.0)	
E-489	A/E 検出II	常滑 甕	(5.0)	(35.0)	—	
E-490	E 検出II	常滑 甕	(20.7)	—	13.4	
E-491	D SD53	瓦器? 火鉢?	(4.7)	—	—	

墨書のある遺物

番号	調査区/遺構	器種/分類	器高	口径	底径	備考
E-492	C SD85	須恵器 鉢	(11.0)	(18.0)	—	美濃須恵?
E-493	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.9	8.4	4.5	北部系
E-494	E 検出II	灰釉系陶器 皿	2.0	8.3	4.2	北部系
E-495	A 検出II	灰釉系陶器 皿	2.3	8.2	3.9	北部系
E-496	E 検出II	灰釉系陶器 皿	(1.3)	—	3.4	南部系
E-497	E 検出II	灰釉系陶器 皿	1.4	(4.2)	4.6	北部系
E-498	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.6	14.0	5.5	北部系
E-499	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(2.5)	—	6.0	北部系
E-500	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(3.9)	—	5.8	北部系
E-501	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(3.5)	—	(5.5)	北部系
E-502	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(3.3)	—	6.0	北部系

番号	調査区/遺構	器種/分類	器高	口径	底径	備考
E-503	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.6	15.4	7.2	北部系
E-504	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(1.7)	—	(3.8)	北部系
E-505	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(3.5)	—	(5.6)	北部系
E-506	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(1.5)	—	5.0	北部系、スス付着
E-507	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(2.7)	—	4.6	北部系
E-508	A SK92	灰釉系陶器 碗	(2.2)	—	7.5	南部系、スス付着
E-509	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.4	(15.2)	6.0	南部系、スス付着
E-510	E 検出II	灰釉系陶器 碗	5.3	14.4	7.1	南部系
E-511	E 検出II	灰釉系陶器 碗	6.3	(14.5)	6.0	南部系
E-512	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(3.0)	—	6.9	南部系
E-513	E 検出II	灰釉系陶器 碗	(1.6)	—	(7.1)	南部系

加工円盤・土鍾ほか

番号	調査区/遺構	器種/分類	器高	口径	底径	備考
E-514	A SK18	加工円盤	径 5.9	厚 0.7		甕?
E-515	C SD87上面	加工円盤	径5.5	厚 1.4		壺
E-516	C SD87下層	加工円盤	径4.8	厚 0.6		高坏脚部
E-517	A SK56	加工円盤	径 (5.7)	厚 0.6		甕?
E-518	C SD87	加工円盤	径5.6	厚 1.0		甕
E-519	D SK29	加工円盤	径6.3	厚 0.7		甕?
E-520	A 検出II	加工円盤	径4.5	厚 0.6		高坏坏部
E-521	B SK165	加工円盤	径6.3	厚 0.7		甕
E-522	C SD87上層	加工円盤	径5.0	厚 0.6		高坏口縁部
E-523	E 検出II	加工円盤	径2.7	厚 1.2		高坏頸部
E-524	B SK193	加工円盤	径3.2	厚 1.0		錆軸播鉢
E-525	E 検出II	加工円盤	径2.8	厚 1.1		山茶碗
E-526	E 検出II	加工円盤	径3.1	厚 1.2		山茶碗
E-527	D SD01	陶丸	径 2.0			
E-528	D SK16	加工土器片	長 10.3	幅 5.7	厚 1.0	壺
E-529	D SK33	加工土器片	長 3.0	幅 2.4	厚 0.5	高坏坏部?
E-530	D SK16	加工土器片	長 3.8	幅 2.4	厚 0.9	壺
E-531	C SD10上面	加工土器片	長 4.4	幅 4.3	厚 0.8	壺
E-532	C SD87下層	加工土器片	長 5.3	幅 3.3	厚 0.6	高坏坏部
E-533	B SK193	加工土器片	長 5.5	幅 5.0	厚 0.5	高坏坏部?
E-534	A 検出II	鍾	長 2.9	径 3.3	重 26.0	
E-535	A 検出I	鍾	長 4.7	径 2.2	重 18.3	
E-536	A 検出I	鍾	長 4.5	径 1.8	重 (9.6)	
E-537	A 検出II	鍾	長 4.8	径 1.1	重 (4.5)	
E-538	A SK99	鍾	長 (2.5)	径 0.9	重 (1.8)	
E-539	C 検出I	鍾	長 4.3	径 0.9	重 2.9	陶器?
E-540	E 検出I	鍾	長 (3.2)	径 (3.6)	重 (11.3)	
E-541	E 検出II	鍾	長 5.3	径 (3.8)	重 (9.7)	
E-542	D SK36	玉	長 2.5	径 2.6	重 (17.5)	赤彩
E-543	C 検出II	鍾	高 3.5	径 3.8	重 51.1	
E-544	A 検出I	鈴	高 (1.9)	幅 2.3		

石製品

番号	調査区/遺構	器種	法量A	法量B	法量C	重さ	材質
S- 1	B SK126中位	鐵	長 2.8	幅 1.4	厚 0.7	3.1	ホルンフェルス
S- 2	C 検出II	鐵	長 (3.3)	幅 1.6	厚 0.6	(2.9)	チャート
S- 3	D 検出II	鐵	長 2.6	幅 1.6	厚 0.5	(2.9)	チャート
S- 4	D 検出II	鐵	長 4.0	幅 2.9	厚 0.8	6.4	チャート
S- 5	B SK174	鐵	長 (3.7)	幅 1.2	厚 0.5	(1.7)	黒曜石
S- 6	E 検出II	鐵	長 3.1	幅 1.3	厚 0.9	3.0	下呂石
S- 7	B 検出I	播磨	長 (4.0)	幅 2.3	厚 1.0	(8.2)	安山岩
S- 8	B SD91	打製石斧	長 (7.9)	幅 6.0	厚 2.2	(135.7)	安山岩
S- 9	A SK27	打製石斧	長 16.5	幅 7.9	厚 3.3	480.2	結晶片岩
S-10	D SD25	敲石	長 15.9	幅 7.5	厚 4.9	871.3	濃飛流紋岩
S-11	D SK16	敲石	長 18.0	幅 7.3	厚 4.6	912.3	砂岩
S-12	A SK34	敲石	長 15.7	幅 6.8	厚 4.0	660.9	濃飛流紋岩
S-13	A SK34	敲石	長 16.0	幅 6.1	厚 5.2	680.5	凝灰岩
S-14	E 検出II	敲石	長 (8.9)	幅 (6.7)	厚 5.1	(452.6)	安山岩質凝灰岩
S-15	E 検出II	砥石	長 (3.4)	幅 2.7	厚 (0.7)	(9.3)	ホーンフェルス(黒部)
S-16	C SD89	砥石	長 6.4	幅 2.2	厚 1.9	(31.4)	流紋岩質凝灰岩
S-17	A SK59	砥石	長 12.3	幅 3.5	厚 2.5	117.1	頁岩
S-18	D SD25	砥石	長 5.7	幅 1.8	厚 2.1	22.3	泥岩
S-19	E 検出II	砥石	長 6.8	幅 5.7	厚 3.4	129.2	ホルンフェルス
S-20	E 検出II	砥石	長 7.8	幅 2.4	厚 3.5	54.0	凝灰岩
S-21	B SK114	砥石	長 5.9	幅 5.7	厚 3.3	151.8	安山岩
S-22	C SD87	砥石	長 (3.9)	幅 (1.8)	厚 (1.6)	(2.6)	凝灰岩
S-23	C 検出I	砥石	長 6.3	幅 (5.0)	厚 2.7	(76.5)	凝灰岩
S-24	A SD10	砥石	長 9.0	幅 5.5	厚 3.5	89.6	流紋岩
S-25	D SK16	砥石	長 9.0	幅 4.2	厚 3.4	161.5	砂岩

木製品

番号	調査区/遺構	器種	法量A	法量B	法量C
W-1	C SD10中下	?	長(12.2)	幅 1.8	厚 1.5
W-2	A SK58	膝柄杓?	長 48.6	幅 (9.0)	厚 3.3

遺構一覧表

A 区

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
P01	57	51	25	U字	円形	
P02	33	33	10	U字	円形	
P03	62	57	24	U字	円形	
P04	45	45	13	U字	円形	
P05	33	31	11	U字	方形	
P06	60	57	11	U字	円形	
P07	56	40	13	U字	楕円形	
P08	(38)	41	4	U字	楕円形	
P09	(45)	50	6	皿	楕円形	
P10	(55)	39	9	U字	楕円形	
P11	85	50	25	U字	不定形	
P12	48	46	9	皿	円形	
P13	41	38	28	U字	円形	
P14	34	29	25	U字	円形	
P15	52	45	18	U字	円形	
P16	29	26	7	U字	円形	
P17	44	32	13	U字	楕円形	
P18	37	(33)	14	U字	円形	
P19	65	50	7	U字	楕円形	
P20	42	39	28	U字	円形	
P21	39	32	28	U字	楕円形	
P22	25	25	18	U字	円形	
P23	40	30	14	箱	楕円形	
P24	40	33	13	U字	楕円形	
P25	42	(37)	23	U字	円形	
P26	35	32	16	U字	円形	
P27	(90)	(22)	(13)	U字	?	
P28	28	26	10	U字	円形	
P29	40	36	-	U字	円形	
P30	52	45	4	皿	楕円形	
P31	73	38	8	U字	不定形	
P32	56	44	9		不定形	
P33	40	35	22	U字	円形	
P34	(37)	(31)	(12)	U字	?	
P35	40	25	10	U字	不定形	
P36	43	(24)	16	U字	円形	
P37	36	30	8	U字	円形	
P38	45	39	23	U字	楕円形	
P39	70	(36)	1	皿	楕円形	
P40	44	38	24	U	円形	
P41	35	34	8	U	円形	
SD01	(233)	35	9	U字		
SD02	(302)	30	11	U字		
SD03	386	64	17	U字		
SD04	469	53	11	U字		
SD05	(506)	(158)	(82)	U字		
SD06	(312)	50	20	U字		
SD07	461	53	8	皿		
SD08	(1191)	72	15	U字		
SD09	(328)	30	7	U字		
SD10	(961)	194	16	皿		
SD11	(369)	36	6	U字		
SD12	527	40	11	U字		
SD13	(1102)	50	12	U字		
SD14	(120)	27	?	皿		
SD15	(614)	39	5	U字		
SD16	(316)	30	6	U字		
SD17	(800)	37	7	U字		
SD18	774	40	9	U字		
SD19	620	70	33	U字		SD20に続く
SD20	(490)	60	11	U字		SD19に続く
SD21	-	50	9	U字		
SD22	244	50	9	皿	コ字に屈曲	
SD23	(333)	80	18	U字		
SD24	(94)	49	9	U字		
SD25	-	95	23	U字	屈曲	
SD26	(259)	48	9	U字		

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SD27	(413)	112	28	皿		
SD28	-	39	16	U字	C字に湾曲	
SD29	327	34	10	U字		
SD30	(274)	29	19	U字		
SD31	96	33	9	U字		
SD32-1	120	39	13	U字		
SD32-2	134	49	11	U字		
SD33	205	35	8	U字		
SD34	(582)	274	15	U字		
SD36	191	58	20	U字		
SD37	1323	155	18	U字	湾曲	
SD38	(800)	94	43	箱		
SD39	-	60	8	U字		
SD40	499	89	12	U字		
SD41	(215)	117	16	U字		
SD42	(220)	30	2	U字		
SD43	(324)	33	10	U字		
SD44	(421)	60	23	U字		
SD45	(364)	33	10	U字		
SD46	(570)	36	12	U字		
SD47	356	45	19	U字		
SD48	(118)	24	1	U字		
SD49	(380)	31	12	U字		
SD50	(82)	21	8	U字		
SD51	(200)	32	?	U字		
SD52	(343)	37	10	U字		
SD53	(186)	35	-	U字		
SD54	(702)	54	53	箱		
SD55	(87)	56	33	箱		
SD57	(138)	38	10	U字		SD70に続く
SD58	(490)	30	10	U字		SD75に続く
SD59	(186)	33	7	U字		SD74に続く
SD60	(67)	30	-	U字		
SD61	(263)	39	14	U字		
SD62	(704)	34	12	U字		
SD63	(110)	64	13	U字		
SD65	(711)	59	8	U字		
SD66	127	64	17	U字		
SD67	158	92	71	U字		
SD68	(435)	36	16	U字		
SD69	(228)	36	16	U字		
SD70	149	42	15	U字		SD57に続く
SD71	(200)	(54)	-	U字		
SD72	(130)	30	10	U字		
SD73	(511)	48	26	U字		
SD74	(100)	56	18	U字		SD59に続く
SD75	(689)	43	13	U字		SD58に続く
SD76	(256)	55	14	U字		
SK01	98	62	15	U字	不定形	
SK02	(116)	62	39	U字	楕円形	
SK03	97	85	19	U字	不定形	
SK04	91	41	9	皿	不定形	
SK05	64	43	5	皿	楕円形	
SK06	75	61	21	U字	楕円形	
SK07	66	50	15	U字	方形	
SK08	100	90	21	U字	楕円形	
SK09	70	60	14	皿	方形	
SK10	64	63	28	U字	円形	
SK11	63	58	23	箱	方形	
SK12	62	60	19	U字	円形	
SK13	55	(39)	7	皿	?	
SK14	326	194	37	箱	不定形	
SK15	181	180	57	U字	円形	
SK16	121	109	43	U字	不定形	
SK17	142	109	47	箱	不定形	
SK18	160	(100)	70	U字	?	
SK19	244	207	68	U字	楕円形	

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考	番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SK20	(87)	38	12	U字	不定形		SK60	(710)	(362)	(39)	U字	不定形	
SK21	63	61	13	U字	不定形		SK61	75	62	32	U字	不定形	
SK22	224	181	70	U字	不定形		SK62	138	83	11	箱	不定形	
SK23	229	214	50	箱	方形		SK63	-	93	11	U字	不定形	
SK24	157	127	44	U字	不定形		SK64	105	70	45	U字	不定形	
SK25	(149)	108	5	箱	不定形		SK65	(686)	237	39	U字	不定形	
SK26	133	101	8	箱	不定形		SK66	97	79	29	U字	不定形	
SK27	271	247	79	U字	不定形		SK67	102	64	28	U字	不定形	
SK28	71	53	30	U字	楕円形		SK68	(217)	(166)	(20)	U字	不定形	
SK29	160	38	7	U字	不定形		SK69	83	59	31	U字	不定形	
SK30	180	138	14	皿	方形		SK70	(65)	(85)	35	U字	不定形	
SK31	(94)	87	12	箱	?		SK71	(40)	45	13	U字	?	
SK32	(165)	(65)	12	箱	方形		SK72	59	57	24	U字	円形	
SK33	138	117	64	U字	不定形		SK73	46	(39)	-	U字	円形	
SK34	253	263	88	U字	不定形		SK74	62	53	9	U字	楕円形	
SK35	85	65	14	U字	不定形		SK75	129	109	26	U字	不定形	
SK36	69	45	17	U字	楕円形		SK77	88	66	31	U字	方形	
SK37	81	(65)	9	U字	不定形		SK78	66	(35)	9	U字	不定形	
SK38	78	53	13	U字	楕円形		SK79	94	48	26	U字	不定形	
SK39	88	(67)	24	U字	不定形		SK80	(40)	(19)	(20)	U字	?	
SK40	55	46	16	U字	楕円形		SK81	-	232	50	U字	不定形	
SK41	108	66	23	U字	不定形		SK82	116	(53)	30	U字	不定形	
SK42	47	(36)	12	U字	?		SK83	110	105	28	U字	方形	
SK43	65	27	14	皿	?		SK84	79	78	31	U字	円形	
SK44	120	106	24	U字	不定形		SK85	209	132	55	U字	不定形	
SK45	161	119	35	U字	楕円形		SK86	190	144	53	U字	不定形	
SK46	(136)	(63)	24	U字	不定形		SK87	(97)	(47)	18	U字	?	
SK47	119	50	(19)	U字	楕円形		SK88	130	118	55	U字	不定形	
SK48	354	99	25	U字	不定形		SK89	102	(65)	17	U字	不定形	
SK49	107	54	27	U字	不定形		SK90	106	76	40	U字	不定形	
SK50	101	38	14	U字	不定形		SK91	147	127	43	U字	不定形	
SK51	(153)	78	9	皿	不定形		SK92	(140)	74	11	U字	楕円形	
SK52	170	142	44	U字	楕円形		SK93	48	46	15	U字	円形	
SK53	(89)	(77)	(4)	皿	?		SK94	51	36	10	U字	楕円形	
SK54	208	90	7	箱	不定形		SK95	54	34	27	U字	楕円形	
SK55	263	(164)	76	箱	不定形		SK96	29	23	20	U字	楕円形	
SK56	247	233	87	箱	方形		SK97	50	50	27	U字	円形	
SK57	45	42	25	箱	円形		SK98	(55)	(29)	(21)	U字	?	
SK58	398	333	87	U字	不定形		SK99	(130)	(45)	(28)	U字	?	
SK59	886	300	20	箱	不定形		SK100	(80)	(33)	(23)	U字	?	

B区

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考	番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SD 78	(1374)	(323)	(31)	皿			SK104	(312)	140	33	U字	不定形	
SD 79	(1032)	(245)	(150)	U字		= 93c/SK60	SK105	93	70	12	U字	楕円形	
SD 80	(1526)	54	12	皿			SK106	69	49	9	U字	楕円形	
SD 81	(533)	86	18	箱			SK107	88	87	21	U字	方形	
SD 82	(550)	86	14	皿			SK108	113	88	23	U字	不定形	
SD 83	(535)	81	17	皿			SK109	121	60	10	皿	楕円形	
SD 84	(521)	91	14	皿			SK110	85	43	7	皿	不定形	
SD 85	(522)	80	18	皿			SK111	102	70	32	U字	方形	
SD 86	(539)	85	11	皿			SK112	165	137	26	U字	楕円形	
SD 87	(529)	81	13	皿			SK113	(272)	215	17	箱	不定形	
SD 88	(478)	80	14	皿			SK114	155	138	22	U字	楕円形	
SD 89	(647)	87	18	皿			SK115	(270)	80	12	U字	不定形	
SD 90	(1490)	41	16	皿			SK116	63	56	18	U字	円形	
SD 91	1214	260	33	箱			SK117	103	90	40	U字	楕円形	
SD 92	(379)	42	12	U字			SK119	153	83	18	皿	不定形	
SD 93	(483)	35	24	U字			SK120	55	51	12	U字	円形	
SD 94	(75)	30	6	U字			SK121	177	85	20	皿	楕円形	
SD 95	(120)	30	12	U字			SK122	77	63	12	U字	楕円形	
SD 97	(94)	37	10	U字			SK123	127	30	8	皿	不定形	
SD 98	(444)	56	12	皿			SK124	64	42	13	U字	楕円形	
SD 99	920	60	11	箱			SK125	225	(106)	24	U字	不定形	
SD100	250	36	13	箱			SK126	425	330	20	箱	不定形	
SD101	(250)	28	8	U字			SK127	56	41	18	U字	方形	
SD102	(1172)	45	10	箱			SK128	(238)	117	20	皿	不定形	
SK101	213	170	33	U字	楕円形		SK129	199	149	12	箱	不定形	
SK102	114	73	10	U字	不定形		SK130	69	56	15	U字	楕円形	
SK103	288	132	23	U字	楕円形		SK131	150	72	21	箱	不定形	

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SK132	214	60	15	U字	楕円形	
SK133	103	92	30	U字	楕円形	
SK134	82	60	15	U字	楕円形	
SK135	107	91	11	U字	方形	
SK136	87	55	7	箱	楕円形	
SK137	(90)	(51)	(9)	箱	?	
SK138	(232)	166	8	箱	不定形	
SK139	108	91	25	U字	不定形	
SK140	202	64	28	V字	楕円形	
SK141	(105)	(68)	(5)	?	?	
SK142	37	30	19	U字	楕円形	
SK143	42	36	3	U字	円形	
SK144	261	122	21	U字	方形	
SK145	300	(95)	24	箱	楕円形	
SK146	206	162	15	箱	不定形	
SK147	29	27	16	U字	円形	
SK149	141	(84)	24	U字	不定形	
SK150	65	10	12	U字	不定形	
SK151	52	44	21	U字	円形	
SK152	57	45	27	U字	楕円形	
SK153	137	71	14	箱	不定形	
SK154	110	35	?	?	不定形	
SK155	74	59	37	U字	楕円形	
SK156	60	57	12	箱	円形	
SK157	58	54	15	U字	円形	
SK158	(31)	(30)	(12)	?	楕円形	
SK159	(38)	34	16	U字	?	
SK160	63	46	4	箱	方形	
SK161	66	46	27	U字	楕円形	
SK162	41	40	18	U字	円形	
SK164	58	52	18	U字	円形	
SK165	83	57	29	U字	楕円形	
SK167	45	34	20	U字	楕円形	
SK168	(220)	80	13	箱	不定形	
SK169	456	120	27	箱	不定形	
SK170	80	66	36	U字	楕円形	
SK171	48	47	18	U字	円形	
SK172	150	112	40	U字	不定形	
SK173	424	182	36	箱	不定形	
SK174	541	111	28	箱	不定形	
SK175	36	32	10	U字	円形	

C区

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SD10	(2038)	143	70	箱		
SD58	(146)	(282)	(27)	箱		
SD59	(437)	57	17	U字		
SD60	(895)	(138)	(85)	U字	?	
SD61	(960)	73	14	U字		
SD62	(1009)	148	20	箱		
SD63	(380)	101	17	箱		
SD64	-	93	21	箱	屈曲	
SD65	(400)	83	8	U字		
SD66	373	31	9	U字		
SD67	(504)	40	12	U字		
SD68	343	27	8	U字		
SD69	(382)	37	9	U字		
SD70	315	36	12	U字		
SD71	(492)	34	17	U字		
SD72	(472)	35	11	U字		
SD73	(666)	37	17	U字		
SD74	(536)	32	12	U字		
SD75	(702)	47	13	U字		
SD76	(562)	35	18	U字		
SD77	(507)	41	15	U字		
SD78	214	33	6	U字		
SD79	333	30	11	U字		
SD80	(145)	42	7	U字		
SD81	(124)	32	7	U字		
SD82	(787)	80	30	U字		

番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SK176	118	52	18	V字	楕円形	
SK177	98	75	34	箱	不定形	
SK178	179	103	13	箱	不定形	
SK179	97	33	14	U字	楕円形	
SK180	566	138	16	箱	不定形	
SK181	144	84	28	U字	楕円形	
SK182	(56)	42	15	U字	楕円形	
SK183	63	44	22	U字	楕円形	
SK184	143	103	(8)	箱	不定形	
SK185	166	114	24	U字	不定形	
SK186	175	134	30	U字	楕円形	
SK187	15	36	23	U字	楕円形	
SK188	65	49	22	U字	楕円形	
SK189	50	25	20	U字	楕円形	
SK190	63	45	30	U字	楕円形	
SK191	52	42	21		楕円形	
SK192	108	80	9		不定形	
SK193	155	128	50	U字	楕円形	
SK194	62	55	13	U字	楕円形	
SK195	(221)	(111)	(11)	箱	不定形	
SK196	(74)	(39)	(16)	U字	?	
SK197	113	92	10	箱	不定形	
SK198	(230)	(99)	(44)	U字	?	
SK199	248	208	21	箱	不定形	
SK201	(193)	(120)	(21)	箱	不定形	
SK202	(537)	262	(48)	U字	不定形	
SK203	(304)	70	27	箱	方形	
SK204	(218)	(80)	11	箱	不定形	
SK205	(375)	123	11	箱	不定形	
SK206	32	111	88	U字	楕円形	
SK207	(62)	(25)	(15)	V字	?	
SK208	(177)	129	34	U字	不定形	
SK209	120	82	20	U字	楕円形	
SK210	80	32	27	U字	不定形	
SK211	(200)	128	15	U字	不定形	
SK212	99	82	48	U字	楕円形	
SK213	97	78	34	U字	楕円形	
SK214	85	56	-	U字	楕円形	
SK215	58	48	20	U字	楕円形	
SK216	(260)	194	47	U字	不定形	
SK217	68	42	8	U字	楕円形	

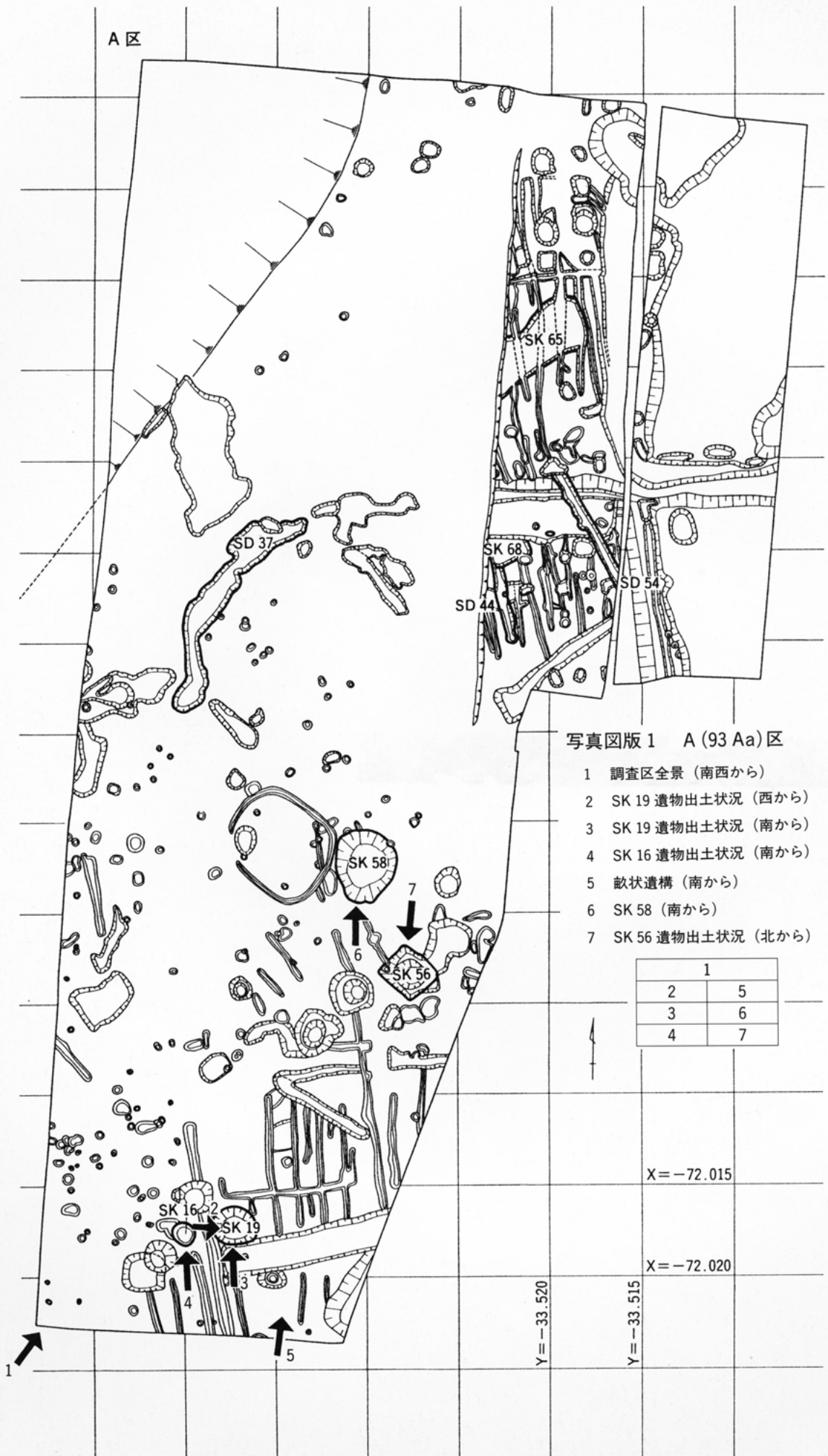
D 区

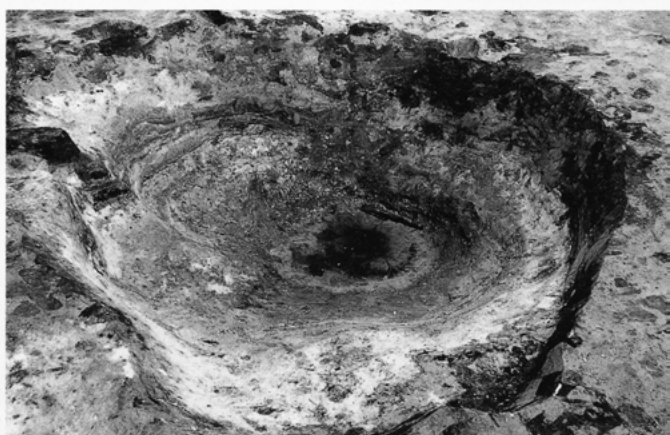
番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考	番号	長cm	短cm	深cm	断面形	平面形	備考
SK64	(136)	(118)	35	皿	方形		SD41	662	50	17	皿		
SK65	84	52	29	皿	楕円形		SD42	205	55	14	U字		
SK66	101	95	58	U字	円形		SD44	(1674)	50	10	皿		
SK67	72	49	30	U字	楕円形		SD45	266	43	13	皿		
SK68	108	98	45	U字	円形		SD46	75	40	9	皿		
SK69	96	75	11	U字	楕円形		SD47	306	48	10	皿		
P01	40	35	13	U字	円形		SD48	485	45	10	皿	楕円形	
P02	35	32	16	U字	円形		SD49	(319)	32	4	皿		
P03	36	30	18	U字	円形		SD50	(170)	42	12	U字		
P04	35	30	11	U字	円形		SD51	(235)	33	6	皿		
P05	52	40	9	U字	不定形		SD52	(2537)	130	25	皿		
P06	48	37	18	U字	円形		SD53	(1707)	135	13	皿		
P07	37	34	16	U字	円形		SD54	430	25	11	皿		
P08	42	33	7	U字	楕円形		SD55	(520)	20	6	皿		
P09	38	32	14	箱	円形		SD56	(2006)	84	17	皿		
P10	(31)	30	8	U字	円形		SD57	(625)	90	16	皿		
P11	(70)	30	22	U字	楕円形		SK01	151	114	19	U字	方形	
P12	66	30	10	U字	楕円形		SK02	114	(60)	26	U字	?	
P13	28	19	11	U字	楕円形		SK04	64	34	13	U字	楕円形	
P14	41	38	13	U字	楕円形		SK05	143	96	19	U字	不定形	
P15	70	39	12	U字	楕円形		SK06	89	64	28	U字	楕円形	
SB01	334	280	-				SK07	106	83	21	U字	楕円形	
SD01	(743)	103	35	皿			SK08	70	51	22	U字	楕円形	
SD02	(3057)	160	54	皿			SK09	54	28	3	U字	楕円形	
SD03	(1837)	70	23	皿			SK10	46	40	16	箱	方形	
SD04	(635)	55	13	皿			SK11	65	45	24	箱	楕円形	
SD05	(1340)	58	12	皿			SK12	42	42	6	U字	円形	
SD06	(1020)	48	11	皿			SK13	122	74	12	円	方形	
SD07	(1225)	44	10	皿			SK14	66	52	8	U字	楕円形	
SD08	(675)	65	8	皿			SK15	62	50	9	U字	楕円形	
SD09	(1550)	460	35	U字			SK16	(1715)	785	33	皿	方形	
SD10	(5840)	203	62	U字		=93C/SD10	SK17	106	105	28	皿	方形	
SD11	(2770)	139	24	U字			SK18	65	52	10	皿	方形	
SD12	(978)	53	14	U字			SK19	162	107	50	U字	楕円形	
SD13	-	-	(21)	U字	屈曲		SK20	(96)	85	16	皿	方形	
SD14	-	197	44	U字	屈曲		SK21	115	95	37	U字	円形	
SD15	(1053)	120	45	U字	屈曲		SK22	(362)	125	43	皿	長楕円形	
SD16	350	60	18	U字			SK23	236	106	25	皿	不定形	
SD17	190	63	12	U字			SK24	(150)	(27)	(19)	U字	?	
SD18	-	175	20	U字			SK25	197	83	43	箱型	不定形	
SD19	616	50	22	U字			SK26	-	120	42	U字	?	
SD20	(542)	75	25	U字			SK27	(41)	50	13	皿	?	
SD21	(1413)	145	43	U字			SK28	-	(143)	33	皿	?	
SD22	-	137	7	U字	屈曲		SK29	138	122	48	U字	円形	
SD23	(316)	32	12	U字			SK30	106	76	8	皿	楕円形	
SD24	(476)	60	7	U字			SK31	165	105	41	皿	楕円形	
SD25	-	-	67	皿			SK32	55	48	15	U字	楕円形	
SD26	(100)	30	7	皿			SK33	212	184	41	皿	楕円形	
SD27	50	15		皿			SK34	66	44	28	U字	楕円形	
SD28	(55)	40	-	皿			SK35	35	28	22	U字	円形	
SD29	(230)	70	19	皿			SK36	302	130	45	U字	西洋梨形	
SD30	(365)	40	13	皿			SK37	55	30	12	皿	楕円形	
SD31	(200)	219	6	皿			SK38	69	67	11	皿	円形	
SD32	(80)	38	7	皿			SK39	137	122	33	U字	楕円形	
SD33	218	66	15	皿			SK40	252	221	59	皿	楕円形	
SD34	(146)	(30)	(19)	皿			SK41	290	(265)	44	皿	円形	
SD35	(417)	51	10	皿			SK43	51	43	23	U字	円形	
SD36	(511)	30	14	U字			SK44	264	146	16	皿	不定形	
SD37	(460)	38	11	U字			SK45	43	39	7	U字	円形	
SD38	268	39	9	U字			SK46	90	63	10	皿	楕円形	
SD39	212	58	10	皿			SK47	43	37	16	U字	円形	
SD40	709	40	12	皿									

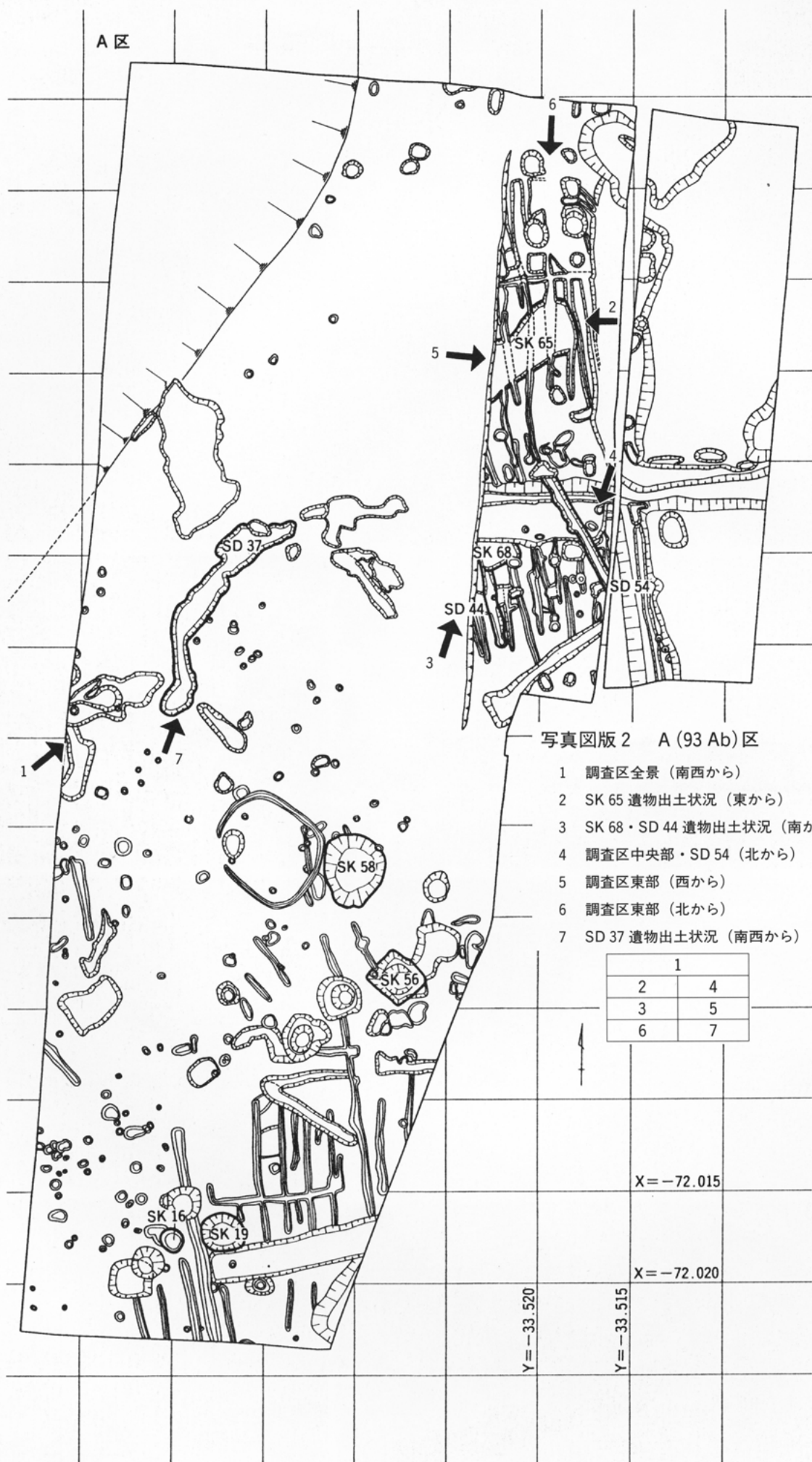
版 圖



A 区









B 区

X = -71.995

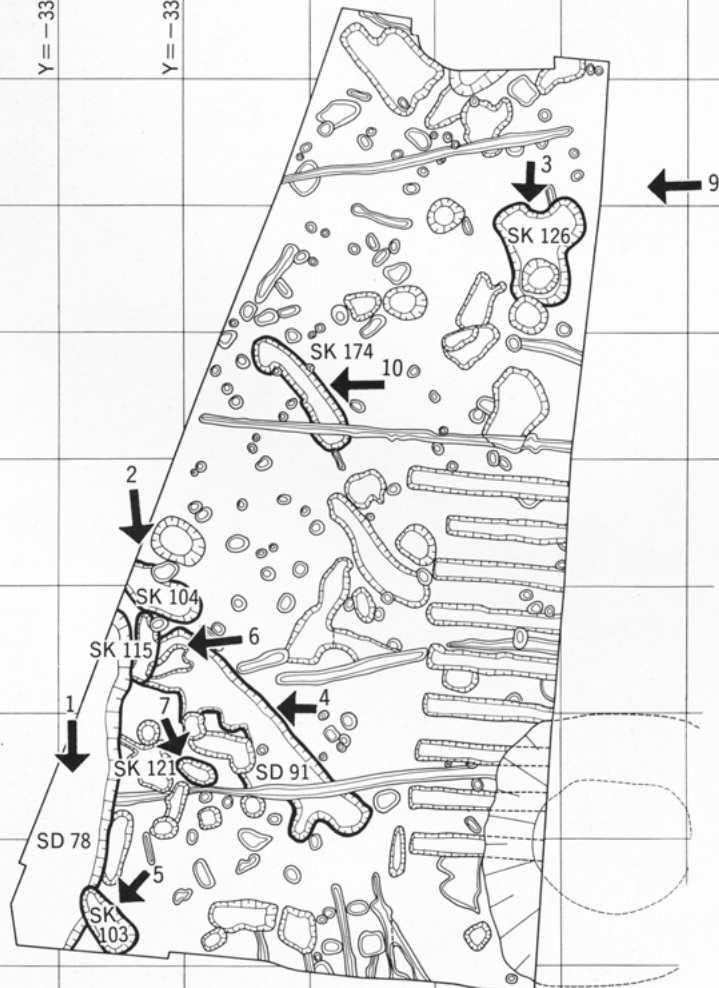
8

SK 202

X = -72.000

Y = -33.575

Y = -33.570

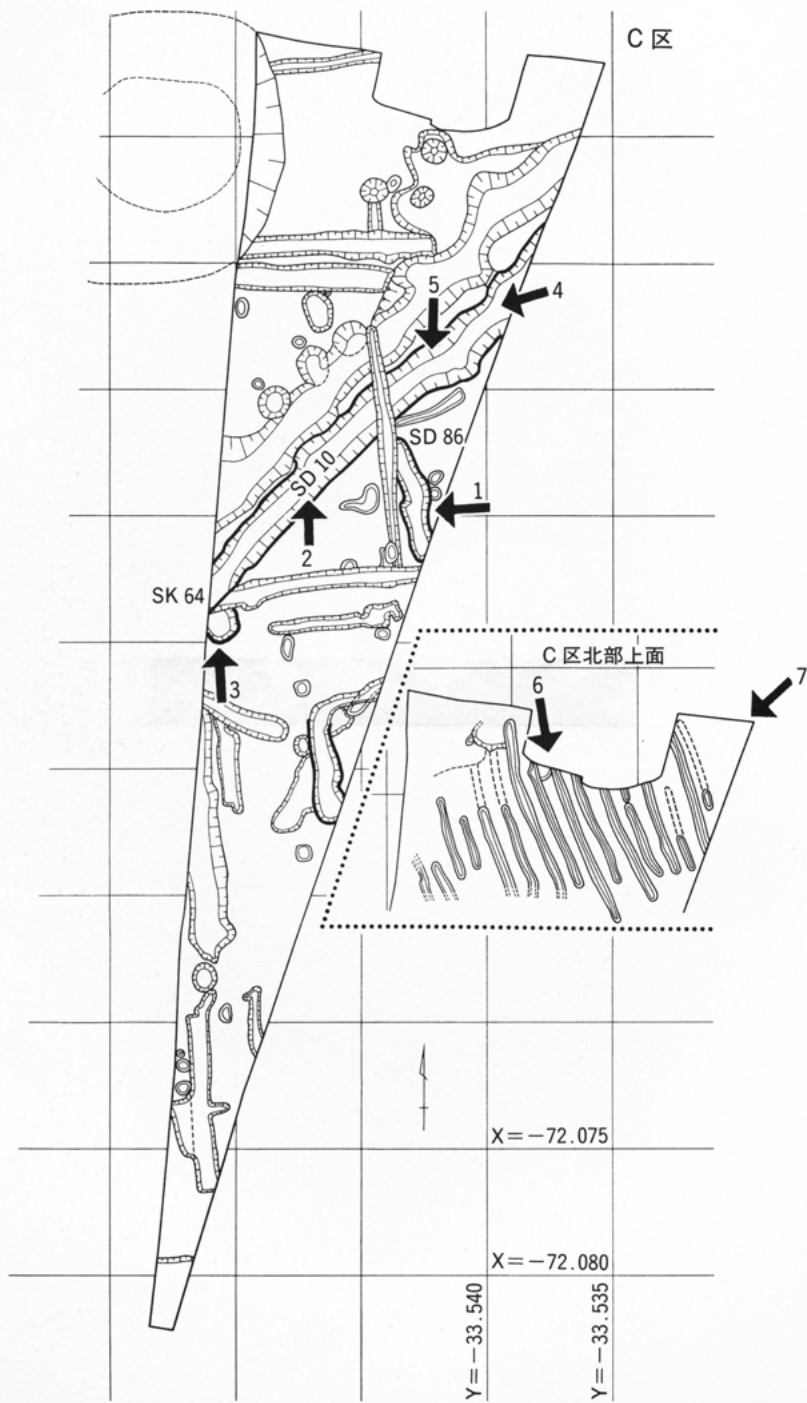


写真図版 3 B (93 B) 区

- 1 SD 78 地震痕 (北から)
- 2 SK 104 遺物出土状況 (北東から)
- 3 SK 126 遺物出土状況 (北から)
- 4 SD 91 遺物出土状況 (西から)
- 5 SK 103 遺物出土状況 (北から)
- 6 SK 115 地震痕 (東から)
- 7 SK 121 遺物出土状況 (東から)
- 8 SK 202 遺物出土状況 (西から)
- 9 調査区中央部 (東から)
- 10 SK 174 遺物出土状況 (東から)

1	6
2	7
3	8
4	9
5	10

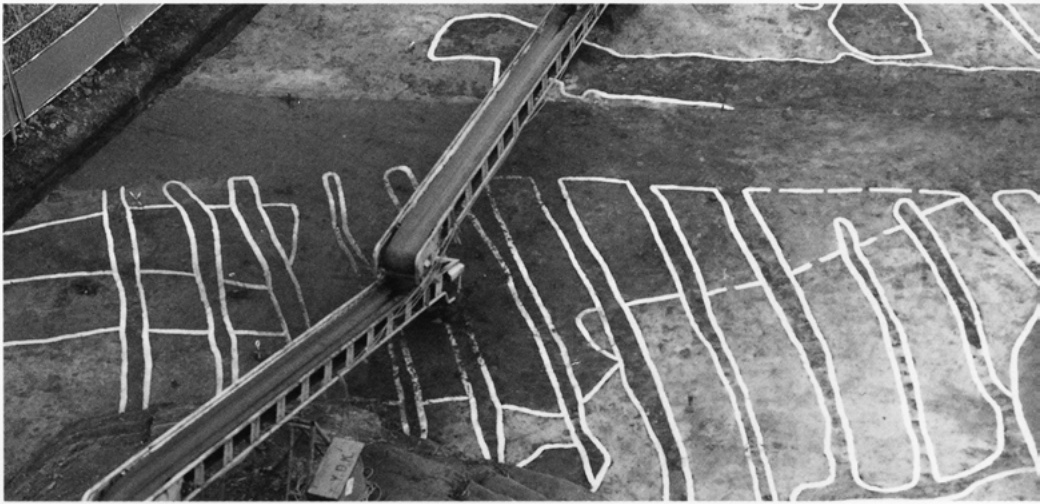


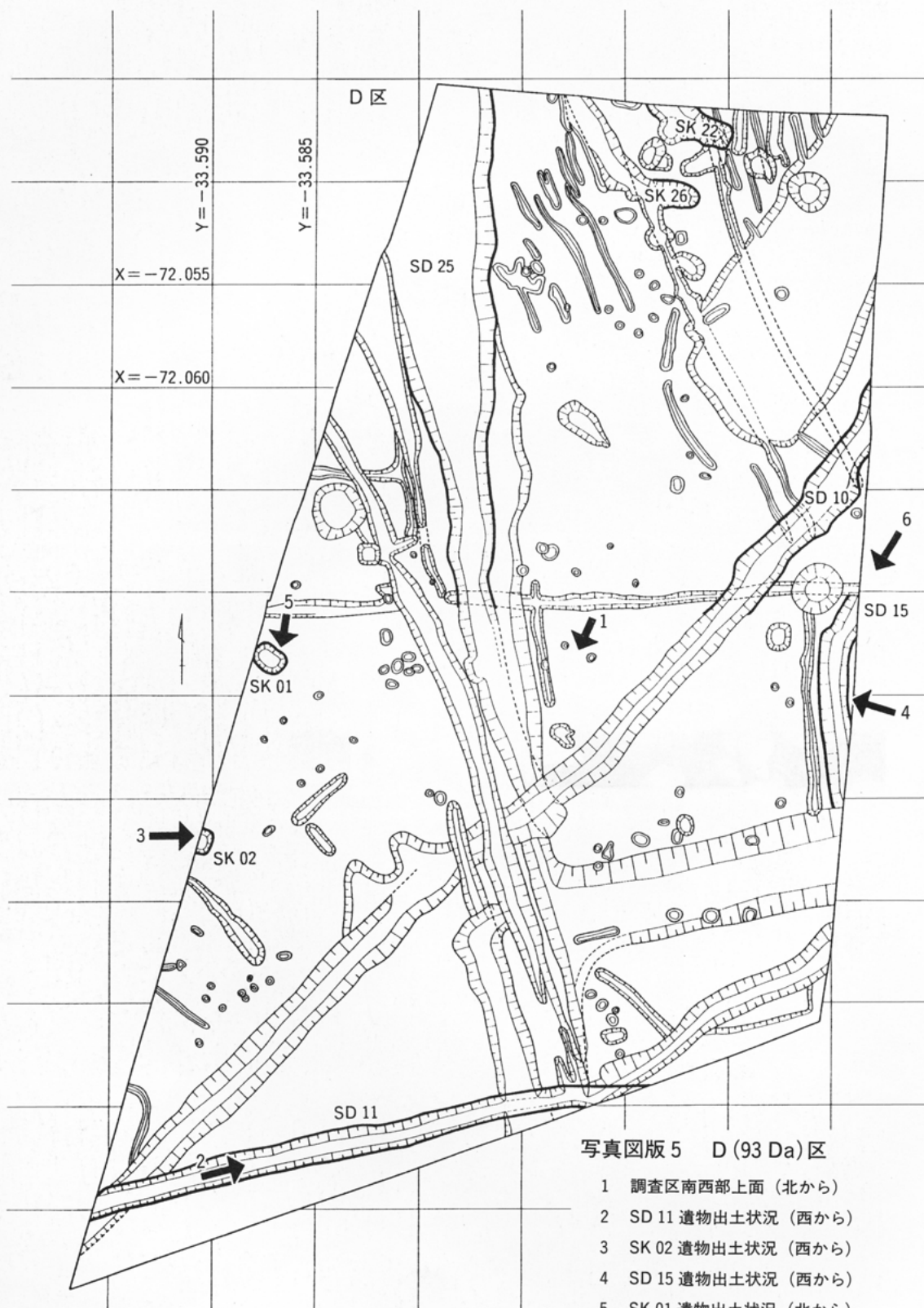


写真図版 4 C (93 C) 区

- 1 SD 86 遺物出土状況（東から）
- 2 SD 10 遺物出土状況（南西から）
- 3 SD 64 遺物出土状況（南から）
- 4 SD 10 遺物出土状況（北東から）
- 5 SD 10 遺物出土状況（北から）
- 6 畝状遺構（北から）
- 7 調査区全景（北東から）

1	3
2	4
5	
6	
7	

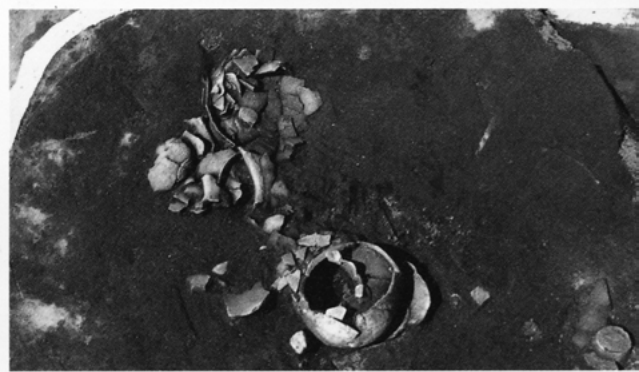
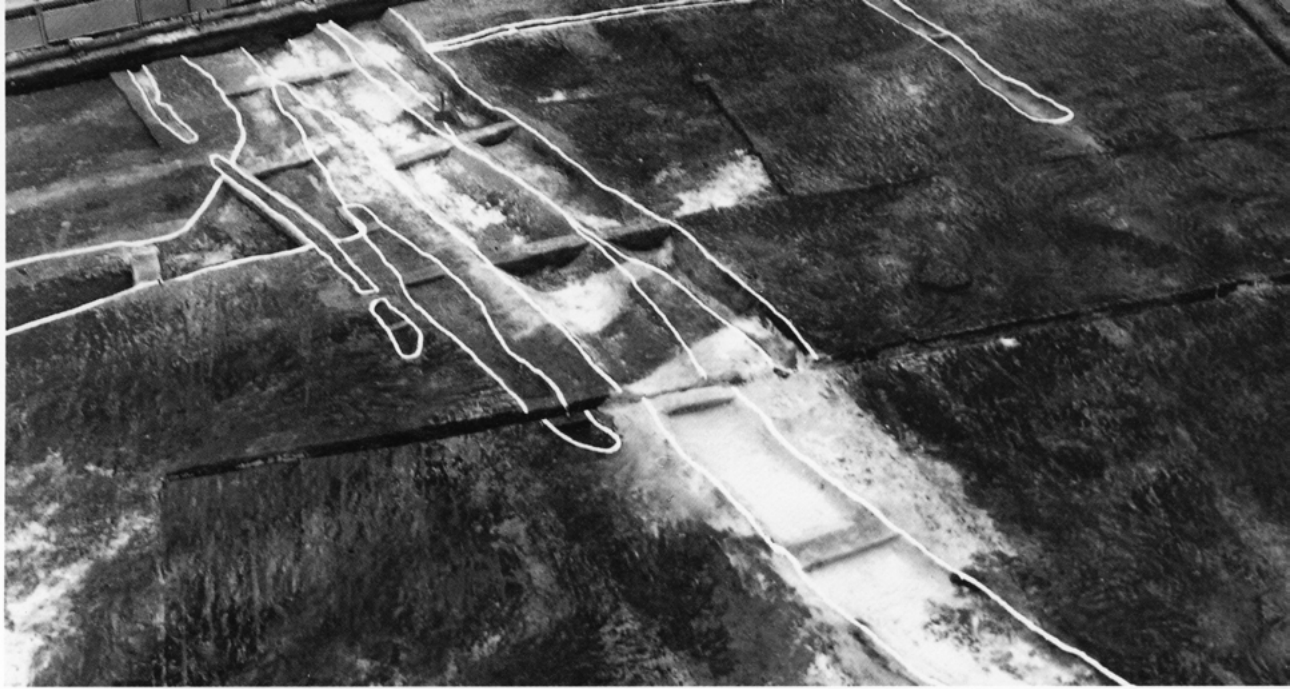


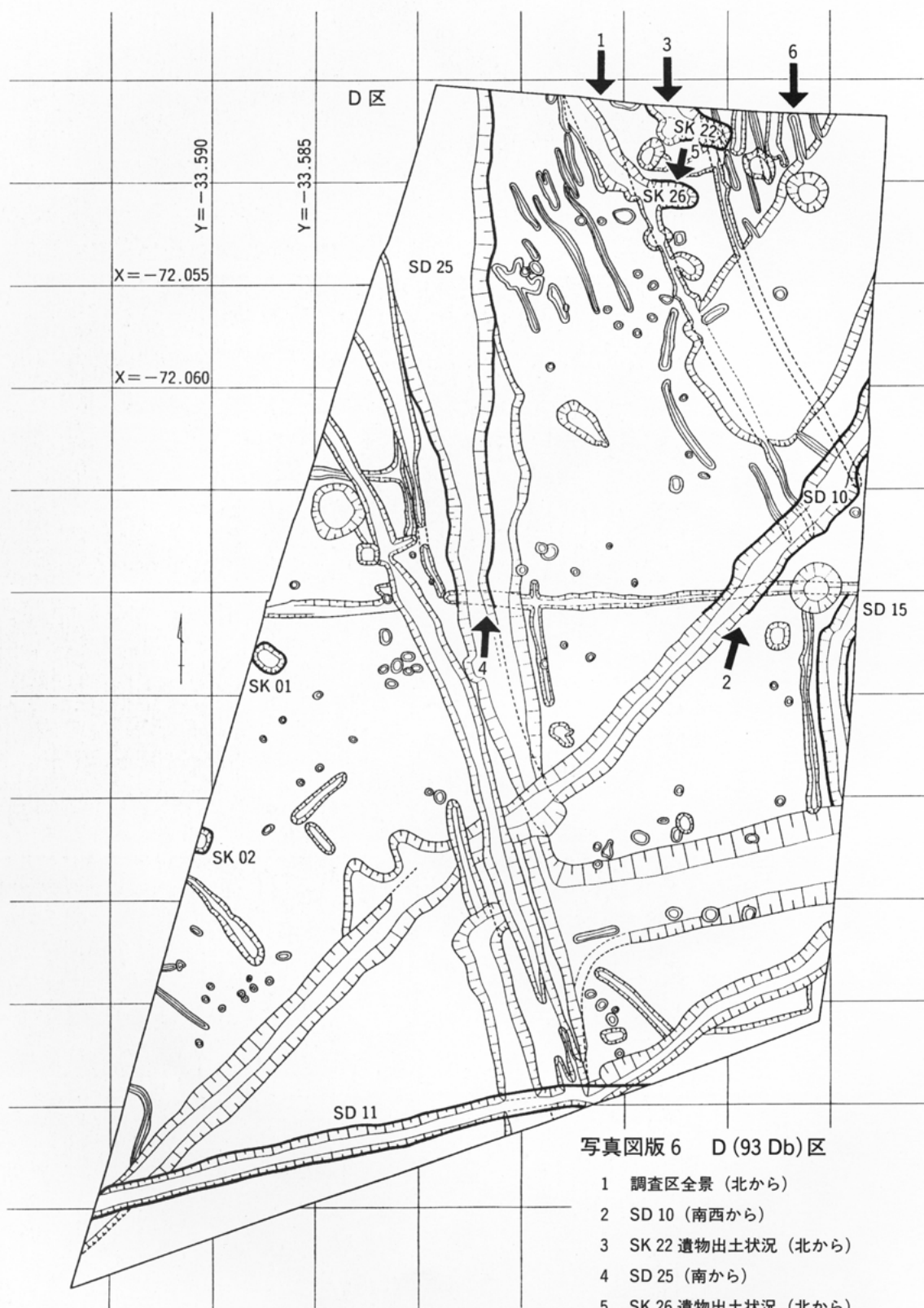


写真図版 5 D (93 Da) 区

- 1 調査区南西部上面 (北から)
- 2 SD 11 遺物出土状況 (西から)
- 3 SK 02 遺物出土状況 (西から)
- 4 SD 15 遺物出土状況 (西から)
- 5 SK 01 遺物出土状況 (北から)
- 6 調査区全景 (北から)

1	
2	4
3	5
6	



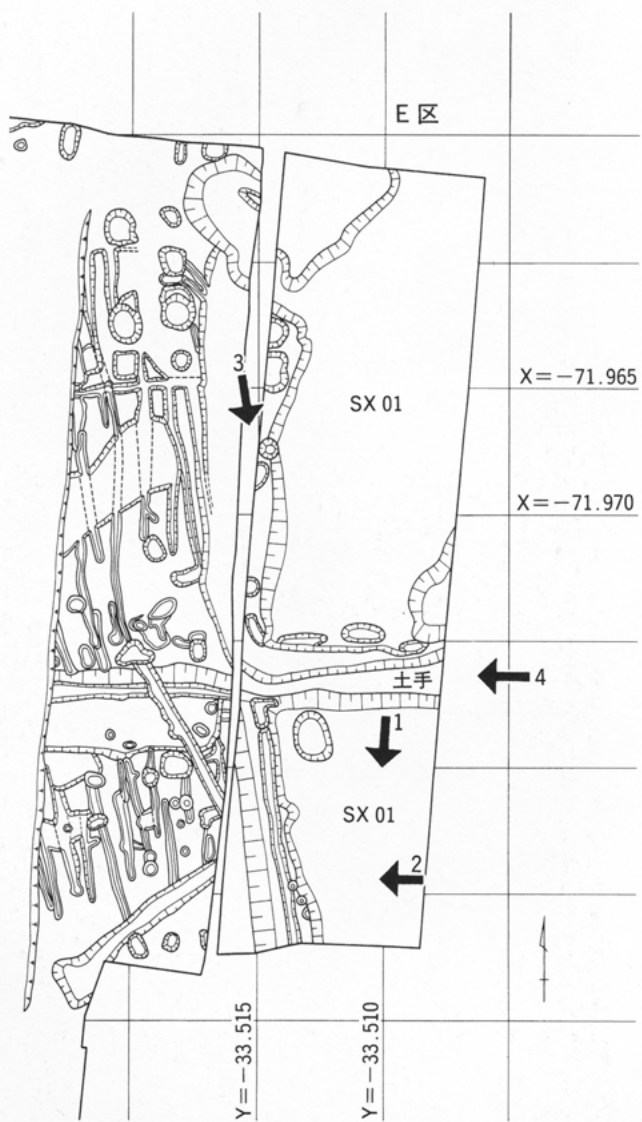


写真図版 6 D (93 Db) 区

- 1 調査区全景 (北から)
- 2 SD 10 (南西から)
- 3 SK 22 遺物出土状況 (北から)
- 4 SD 25 (南から)
- 5 SK 26 遺物出土状況 (北から)
- 6 調査区北東部 (北から)

1	
2	4
3	5
6	



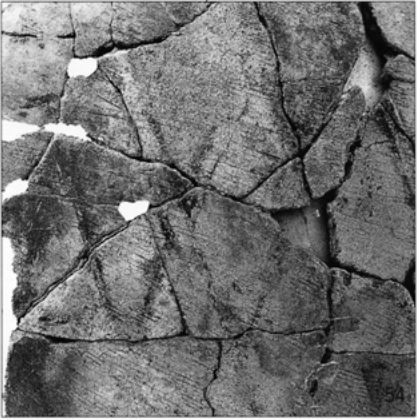
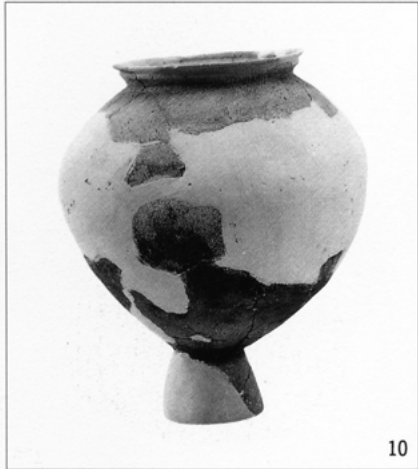
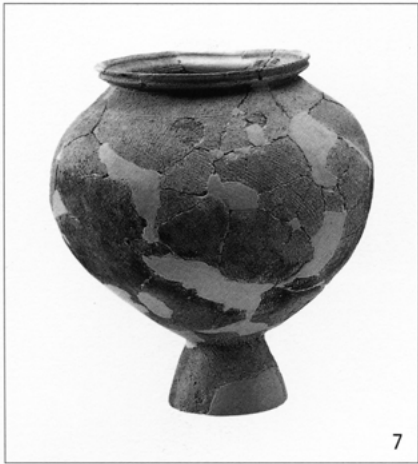


写真図版 7 E (94 E) 区

- 1 SX 01 遺物出土状況（北から）
- 2 SX 01 遺物出土状況（東から）
- 3 調査区南部（北から）
- 4 土手完掘状況（東から）

1	2
3	
4	









210



215



221



225



229



233



239



252



253



256



257



260



261



263



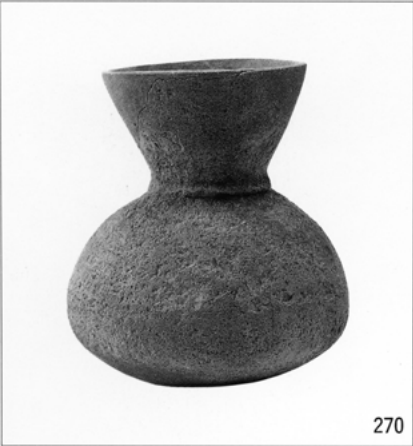
264

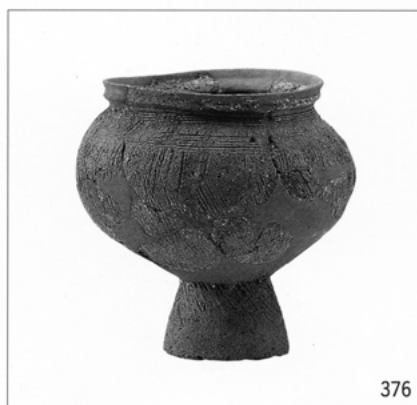
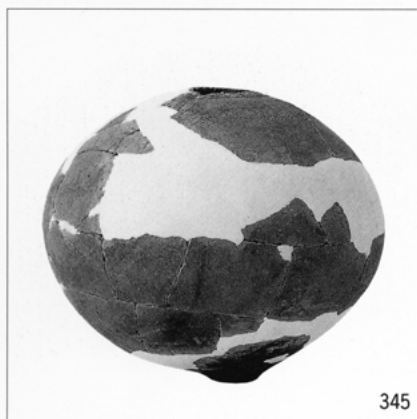


265

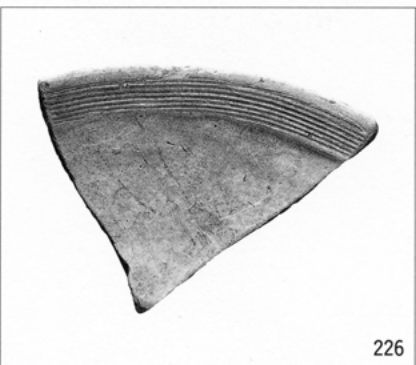
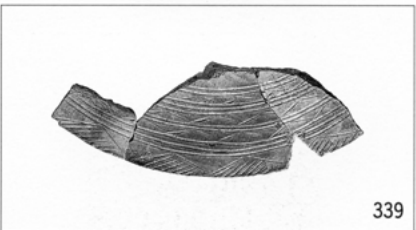
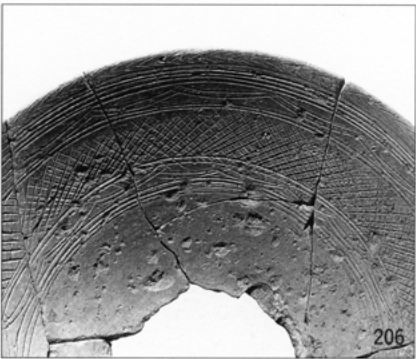
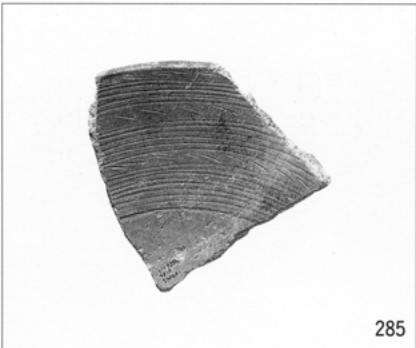


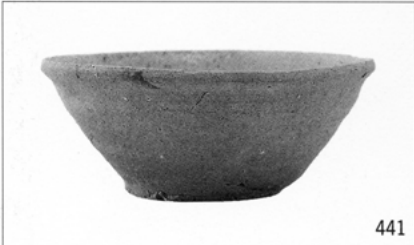
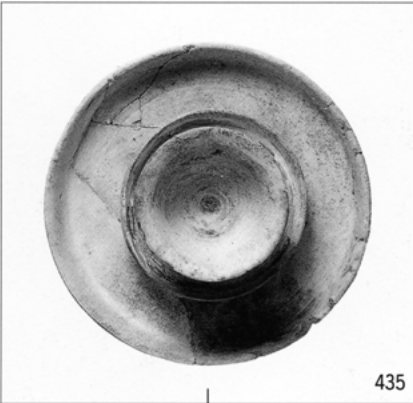
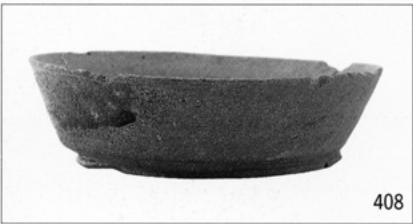
269

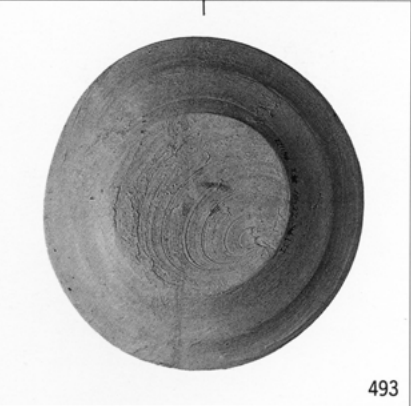
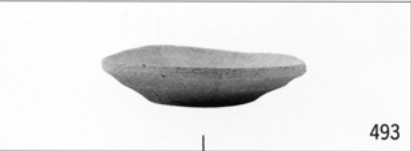




图版 13 出土土器(6)



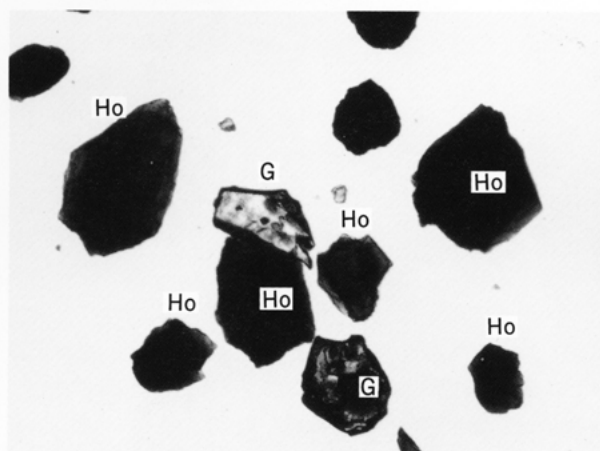




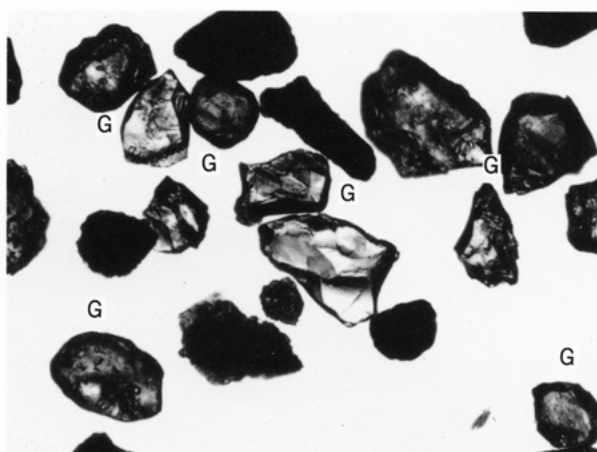




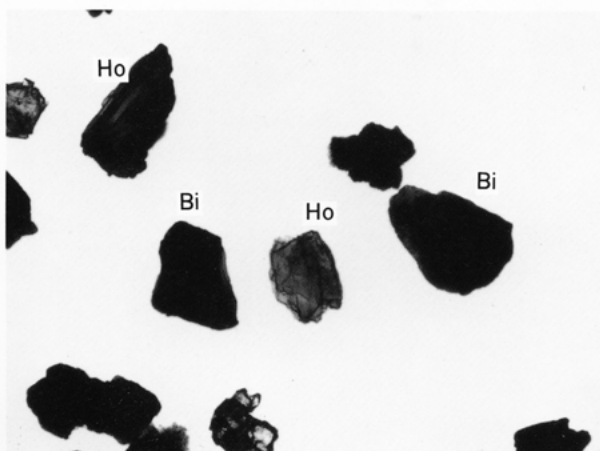
図版 18 胎土中の重鉱物



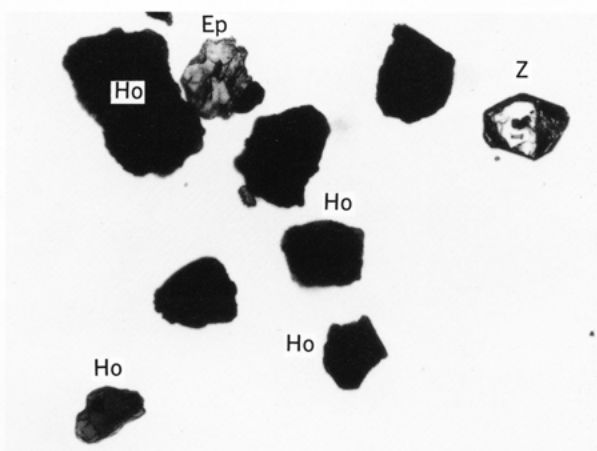
1. I 型 (試料番号 2)



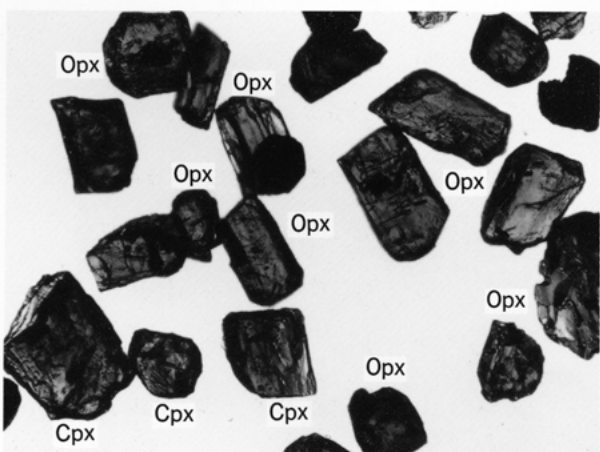
2. III 型 (試料番号 18)



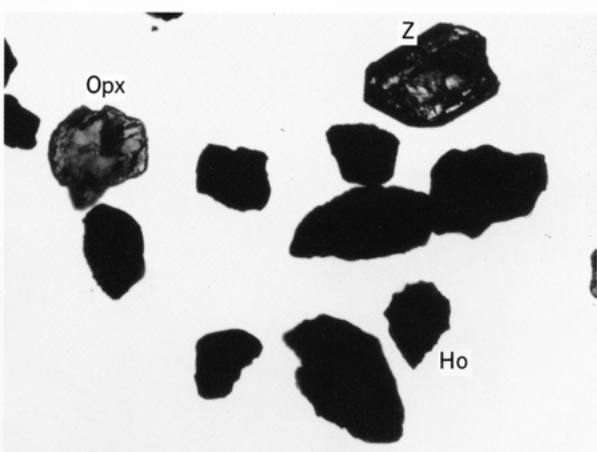
3. IV 型 (試料番号 20)



4. V 型 (試料番号 35)



5. A 型 (試料番号 10)



6. C 型 (試料番号 45)

Opx : 斜方輝石, Cpx : 単斜輝石, Ho : 角閃石, Bi : 黒雲母, Z : ジルコン, G : ザクロ石, Ep : 緑レン石.

0.5 mm

北海道遺跡 1993・94年度

発掘調査に協力された方々

若杉隆治	川上辰男	前田利昇	安藤慶子
岩室一栄	粕谷和美	小播すみ江	上村 栄
伊藤美枝子	沢田綾子	鈴木みえ子	酒井はるえ
小笠原文代	小関真智子	高崎啓治	浜口万里
東 睦子	池田 智	伊藤 隆	伊藤義隆
猪口一彦	岡村三子	加藤美和子	葛谷利幸
五藤 栄	後藤 茂	佐々木清孝	須賀弘之
千田隆之	野垣豊子	丸井芳子	山田清子
広瀬敏雄	水野喜代子	藪下敏治	

(順不同, 敬称略)

報告書抄録（記載様式案）

ふりがな	きたどうていせき
書名	北道手遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第67集
編著者名	高橋信明・服部俊之・鬼頭剛
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL0567-67-4161
発行年月日	愛知県埋蔵文化財センター 西暦 1996年 8 月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °N	東経 °E	調査機関	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたどうて 北道手	あい ち けん い ち の み や し お お 愛知県一宮市大 あ ぎ こ う み よ う じ 字光明寺	23203	— (02095) 田所	35度 21分 00秒	136度 47分 51秒	93年度 19930413～ 19931025 94年度 19941130～ 19941220	5387㎡ 500㎡	東海北陸自 動車道建設 に伴う事前 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
北道手	集落	古墳前期	掘立柱建物1棟 溝・土坑など 畑	土師器・土錘 石製品・木製品	水辺の祭祀に関する 遺跡か
		古代	溝・土坑	須恵器	
		中世	溝など	灰釉系陶器（墨書） 施釉陶器 常滑 中国磁器 土師器皿 他	（古墳時代前期以後 （中世以前）の断層 中世の地震による砂 脈、流動化層濃尾地 震（1891年）による 砂脈）

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第67集

北 道 手 遺 跡

1996年 8 月30日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 株式会社 クイックス